

ダンジョンに転生者が
いるのは間違っている
のだろうか

黒歴史

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何も知らずに気づいたら死んでいた少年が好きな魔法、スキルを2個ずつもらい、ベル・クラネルと共にダンジョンに行く物語です

不定期更新です…本当だよ？

目次

第1話転生	1	感がやばい	96
第2話いざオラリオへ	9	第12話今回は2700字と少なめです	105
第3話忘れていた事	18	第13話色	112
第4話アイズ：なんだっけ？	28	第14話再会	120
第5話ステイタス更新	38	第15話戦闘回だけど「ロキ・ファミリア」を出す絶対に関か感想を書かれま	129
第6話豊穡の女主人	50	す	
第7話ロキ・ファミリア	60	第16話ヤミさん殺されかける	138
第8話喧嘩（一撃KO）	68	第17話サポーター	148
第9話帰ってきた	77	第18話噂	156
第10話今回はベルがほとんどを占めていますね	88	第19話落とした	164
第11話「神の宴」だけど、コレジャナイ		第20話	173

第21話とりあえずダンジョンは休み

182

第22話ピンチ&説教

191

第23話………はい。期待しないでく

ださい(; ω ;)

199

第24話アイアンクロー

207

第25話しよ、証拠隠滅を……

216

第26話…眠い by小説好きな人

225

第27話一週間休んだ後に書いたやつな

ので酷い出来かもしれません。ご了承く

ださい

234

第28話訓練

242

第29話あんばんあんばんあんばんあん

ばんあんばんあんばんあんばんあんばん

あんばんあんばんあんばんあんばんあん

ばんあんばんあんばん

251

第30話バレちった(; ;)

261

第31話

270

第32話次回はオリ主が戦闘します

279

第33話オリ戦闘をやるけど毎日更新に

はめちゃくちゃつらいです。なので23

00字しかありません。すいません、こ

れが限界でした

289

第34話『止まるんじゃねえぞ…』…止ま	375	ているがそれでいいのだろうか	383
りたい。つーか逃げ出したくなったby		第44話甘すぎる果実	
小説好きな人	296	〜外伝〜パンデミック・オラリオ①	
第35話…2700字です	306	392	
第36話期待しないで！今までで最大の		〜外伝〜パンデミック・オラリオ②	
駄作です！	314	402	
第37話『英雄の一撃』と…	322	〜外伝〜パンデミック・オラリオ③	
第38話中層	331	411	
第39話トラブル	340	第45話お仕置きの時間だ	423
第40話zzz…	349	第46話サブタイトルが思いつきません	
第41話目指せ18階層	357		
第42話ふう…	366	第47話覗き	441
第43話Q最近適当にサブタイトル書い		第48話ベル〜今行くぞ〜	451

第49話 決着	461
第50話 ゴライアス	469
第51話 俺はこれでもう…引退…を	477
第52話 決着	486
第53話 させてさ—て。温泉回へGo	495
!	504
第54話 戦闘回じゃない	513
第55話 なんとも言えない回です	523
第56話 やつと新章に来たよ!やる気出	523
てきたー!!	523
第57話 祝いの酒に飲みすぎも何も無い	523

第58話 喧嘩	531
第59話 留守番	538
第60話 ホーム壊滅	546
第61話 地獄の特訓	555
第62話 地獄の特訓開始	564
第63話 戦争遊戯	572
第64話 やつぱり地味	581
第65話 終わり	590
第66話 ……	600
外伝 vs (リトル・ルーキー) ①	609
外伝 vs (リトル・ルーキー) ②	617

第67話新団員	634
第68話追跡	642
第69話R18の世界はベルには早い	
650	
第70話野生児が現れた!	658
第71話ガマガエル	666
第72話腹が減ったby作者	674
第73話エイナさん(修羅)	683
第74話約束	691
第75話襲撃	700
第76話誰かああああ!!!	708
第77話ベル達が多い	716

第78話お礼参りしに行くよ	725
第79話お礼参りするよ	734
第80話イシユタル	742
第81話	750
第82話	759

第1話転生

気がつくくと暗闇の中で座っていた。足元も見えない。そして目の前には大体20代後半のダンディなオツさんが座っていた

俺が目覚めるのを待っていたのかゆつくりとオツさんが口を開き、やはりダンディな声を出した

「まずはおはようだな少年。まだ混乱していると思うがあえて言おう、君は死んだ」

「はいそうですか。それで俺に何の用で？」

軽く流し、すぐに神様に本題を聞くと神様が驚きの表情を浮かべて話し出した

「全然驚かないのだな？」

「驚いてはいますよ？ だけど仮にもし夢なら早めに終わって欲しいと思っています

今日か昨日買ったラノベの小説を早く読みたいし、読みかけの漫画とかまだ見てないアニメも見たいし

テンプレってやつならさつきと転移なり転生なりして欲しいと思っています。ぶっちゃけ後者の方が嬉しいですね」

「何というか…我が道を行くタイプだな。神様に失礼だと思わないのか？」

「今まで表に出ず傍観主義を貫いていた人をどう敬えと?」

少しの沈黙が数秒流れた後、神様はクスリと笑いながら話を再開した

「……そうだな。確かにそうだがフツツでは本題に入ろう。…君は先程不幸に死んでしまった。どうやって死んだかは?」

「聞きたくない。今更知った所でどうにもならないでしょ?なら良いです」

神様の質問にきつぱりと答えるとまた神様はクスリと笑う

「そう言うと思った。さて、君には好きな世界に記憶を無くして転生か好きな世界に記憶を持って転移と言う二つの道がある。好きな方を選びたまえ」

「転移について少し聞いても良いですか?」

俺は神様に手を上げ質問する

「転移をした場合、俺の外見とか強さとかはどうするんですか?俺のことを知っているんならどこ行っても勝てないでしょ?」

「それは大丈夫だ。転移するならば外見を自分の意思で作れるし、自分だけの…とか漫画にある…魔法やスキルといった物を最大2個ずつ作れる。寿命は殺されたりしなければ大体150歳くらいまで生きられる

ただし、最初の身体能力はその世界の人間の平均だし、魔法やスキルを作る代償に作った場合魔法とスキル以外はもう覚えられなくなるから注意しろ」

なるほど、転移の際のデメリットは地味に寿命が長いことと、固有の魔法とスキルを設定したら二度と別のスキルは得られないと…

…決めた

「転移でお願いします」

「そうか。どの世界に転移するか決めているか？」

「『ダンまち』…『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』でお願いします」

「わかった。外見、魔法、スキルを変更するか？」

「全てやらせてください」

そう言うパネルのような物が出てきた。どうやらこれで決めるようだ。まず俺は外見を作る

出来たのがこれだ

見た目：黒髪黒目の身長172cmの原作開始時18歳

…小説だから分らないと思うが、投稿者は挿絵つて言うのが出来ない…つーかやり方分らないから文章でやることになったがこれは酷いな

まあ次は魔法、スキルだ。漫画にあった能力とかをめちゃくちゃ使いたいが、2つず

つまでだ

だからそれなりに有利になりそうな力を入れた

まずは魔法

ダーク・マジック

<闇魔法>

スナッチ

<強奪>

これで○ンピースの○ミ○ミの実とかブラッ○○ローバーのあの人が使ってた魔法
が使えるし、強奪は対人戦闘でも上手くいくはずだ

次はスキル

ブルス・ウルトラ

<さらに向こうへ>

<購入>

うん、ヒ○アカの名言をスキルにして見ました

購入はただ単に日本の本、ご飯が食べたいから…

「決まったな。強すぎる内容はそれなりのものにしよう

始まりは原作三年前くらいでいいか

ああ、文字は自動で翻訳、書く事が出来るからな

では良い人生を…ヤミ・カズヒラ」

足元が光りだした少しずつ目の前が真っ白になり、視界が戻るとそこは森の中だった

「さて、これからどうするか」

まずは服装チェック。浪人のような服装：つーか完全に浪人だ

近くに池があつたため鏡のように使い自分の姿を見た。俺が作つたとうりの外見に変わっている。三年前だからなのか身長は160弱くらいしかない

「とりあえず森から出ないとな」

そう言うわけで一歩一歩適当に歩きだした。歩いて数分すると森を出ることができた。森から出て見たものは小さな村だった

多分、ここはダンまちの主人公ベル・クラネルとその祖父が暮らしている村だと直感で分かった。だが、村に入るとあることに気づいた

「金がない……」

そうお金がない。スキルでどうにかしようと思つたが、あれは神様から力を貰わないと使えないと言う事を忘れていた。つまりは最初から詰んでいるのだ

「ハア……ん？」

「だ、大丈夫ですか？」

己の馬鹿さに呆れていると白い髪に赤い瞳、低い身長。間違えようのないベル・クラ

ネルがそこに立っていた

原作開始の三年前：俺は15歳でベルは11歳か

とりあえず軽く返事を返す事にした

「あー大丈夫大丈夫」

「でも、凄い落ち込んでいましたよ?」

マジか。そんなに顔に出てたか?…出てたからこう言われてんだよな

「あー金が一銭もなくてな。これからどう生きていこうか悩んでたところだ」

「ダメじゃないですか!…付いて来てください!」

そう言つてベルが俺の袖を引つ張るため、俺はしようがなく着いて行く事になった

「おじいちゃん!」

「なんじゃベル?」

ベルが縁側に座っていた気の良さそうなじいちゃんに話しかけている。この流れだと泊まる感じ?

そう考えているとベルのじいちゃん：ゼウスだったか?がこちらに歩み寄つて来たかと思うと「フム…」とこちらを見てくる

「俺の顔に何か着いていますか?」

「おおつすまんすまん。もちろんこの家に泊めてやるがお主、中々面白そうなやつじゃな。どうじゃ？儂の元で修行でもせんか？」

「えつ？ちよ、ちよつと待つてください」

その提案を聞き俺は少し考えた

仮にこのままオラリオへ行つたとして、道は：聞けば分かるか。魔法やスキルのみしか取り柄のない俺は通じるのだろうか？確か今は原作三年前、時間はたつぷりある。しかしオラリオではく購入>で手に入る娯楽が待つている：そうして1分程考え、そして考えがまとまつた

「よろしくお願ひします」

ペこりと頭を下げた。娯楽よりも強さを優先した。無双とは行かなくてもそれなりに強くなるりたい

それを聞いたじいちゃんが笑顔になりベルがこちらに来て自己紹介した

「僕、ベル・クラネルって言います。これからよろしくお願ひします」

「ヤミ・カズヒラだ。ヤミで言ひ。よろしくな『ベル坊』」

「べ、ベル坊？」

「あー俺にとつてはベルつて呼ぶよりベル坊つて呼んだ方がなんかしつくり来るんだよ」

そう言うのとベルは「そうですか」と言い、ベル坊と言う呼び方を受け入れてくれた
じいちゃんにも「よろしくお願いします」と頭を下げようとするとかなり近くの所か
ら突如音がした

グウウウウ…

盛大に俺の腹の虫が鳴いた

「プツ……ハハハハハハ!!」

ベルもじいちゃんもそれを聞いて大声で笑い出し、ひとしきり笑った後

「そうじゃな！もう夕飯の時間じゃ！お主の腹は正直じゃのう！」

そう言うてじいちゃんは家の中に入って行く。それについて行くベルも中に入る直
前で俺に振り向いて笑顔で言った

「行きましよう。ヤミさん！」

「…ああ」

そう言うて俺はこれから世話になるベル坊達の家を歩きだした

第2話 いざオラリオへ

「ほれほれ、遅いぞ」

「クツソ！じいちゃん少しは当たれよ!!」

あれから1年経った、一年間俺は木刀を振り続け中々様になってきた所だ。身長は169〜170くらいになる。そして俺は今、毎日の模擬戦でじいちゃんを打ちのめようとしている。だがじいちゃんはいつもと違いおちよくっているのか何度振ってもじいちゃんは紙一重で躲してくる。そろそろストレスでどうにかなりそうだ

「そいやー！」

「ガッ！」

じいちゃんの木刀が頭に振り下ろされた。最近こんな事ばかりなため、大体の痛みには慣れてしまったが痛いものは痛い

「いつてえ…」

「お主はまだまだ未熟じゃ。そんな物では子供が剣を振るのと大して変わらんぞ？今日稽古はここままでじゃ、自分の部屋で何故未熟なのか考えてみい」

頭を押さえている俺にじいちゃんはそう言い残し家の中に入って行く。入れ替わる

ようにベルがこちらに歩み寄って来た

「大丈夫?」

「大丈夫大丈夫。…ベル坊、俺ってそんなに弱かったか?」

「そんな事ありませんよ! おじいちゃんも凄いですけどヤミさんも十分凄いですよ! 何故勝てないのか不思議なくらい…」

ベルから嬉しい評価を受けた。少し元氣をもらった俺はすぐに立ち上がりベル坊の頭を撫でた

「ありがとよ。んじゃ、部屋でじいちゃんが言ってた『何故未熟なのか』を考えてみるわ」
そう言つて自分の部屋へと足を動かした

部屋で寝転びながら俺は真面目に考えていた

「何故未熟なのか…實力はベル坊から聞いた通り十分だと自分でも思う…何で勝てない?」

(俺とじいちゃんの違いを頭の中で比べてみた)

「太刀筋…は違うのは当たり前だ。避け方は…待てよ? 何で最初じいちゃんは反撃せず、しかも紙一重で避け続けたんだ?」

次にそれをされ続けた事で俺に何が起きたかを考えた結果、答えが出た

「…イライラしてとにかく当たれ当たれと振りまくってたな」

思い返せばあの時の俺は確かに子供みたいな感じだった。そう思うと恥ずかしくなる。子供みたいな振り方もそうだが、それ自体に気づかなかった事が特にだ

「慢心しすぎてたな。確かにこれは未熟者だ。っーか慢心してる事自体ダメじゃねーか」

「ヤミさーん！ご飯出来てるよー！」

最後に呟くとベルの音が廊下から聞こえる。俺は時間を見た。部屋に入ったのは午後14時くらい、今は午後18時だ

「おーもうこんな時間か…わかった！今行くー！」

そう言つて夕飯のある部屋へと足を動かした

翌日、昨日もやったじいちゃんとの模擬戦を始める

「もうどうすれば良いか分かったか？」

「わかった気がするだけだ。とりあえず今からするのは答え合わせだ。んじゃベル坊、

開始の合図をしてくれ」

お互いに少し言葉を交わすとベル坊に開始の合図を促した。それを聞いたベルは右腕を上にあげる。俺とじいちゃんは合図を静かに待った。そしてベル坊は一気に右腕を振り下ろし叫んだ

「始めっ！」

先に動いたのはいつも通り俺、いつも通りじいちゃんに木刀を振るうがじいちゃんは昨日と同じで紙一重で躲して反撃してこない

俺は昨日とは違い冷静に戦いに集中し、隙を伺う。

数分振り続けているとついに昨日と同じタイミングで反撃してきた

だが、反撃のタイミングに少し生じた隙があった。俺はそれを見逃さずカウンターを仕掛けた

(当たる！)

ガンッ！

当たると完全に思っていたが、綺麗に木刀の柄の端で弾かれた。

「正解じゃ」

じいちゃんはそう言つて木刀を振り上げ即座に振り下ろし俺の頭に当たる。だがその一撃はいつも以上に痛かった。つまり：

「今までやつは本気じゃねえのかよおおおお!!」

「なんじゃ？もう儂に追いついたかと思つていたのか。ん？」

俺はこの時に決めた。『この人より絶対強くなつて泣かせる』と

くベル視点く

ヤミさんが最後に放つた一撃は僕もヤミさんが勝つたと思つた。だけどおじいちゃんは柄で防いでヤミさんにまた攻撃を与えた。これには僕も驚いた

しかも今までおじいちゃんは本気ではなく、これからが本番だと言う。だけどヤミさんの目は諦めていない。それどころか目から炎が出たのを幻視した

「プツハハハハハハ!!」

つい僕は笑つてしまった。ヤミさんとおじいちゃんがこちらを見た

「クツ…」

「フツ…」

ついに2人も吹き出しその場にいた全員が笑った

「ハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

その日はみんなして笑い合った。こんな日がいっまでも続来ますようにと心の中で僕は願った

くベル視点終わりく

また一年が経ち、じいちゃんが亡くなった。結局一戦も勝てず泣かせずにあっけなくじいちゃんが逝ってしまった

泣いているベルの頭を無言で撫でた。俺も声を殺して泣いている

そのあと俺はベルと2人で協力して生きていった。修行は毎日の習慣としてやっている

そんな毎日を数ヶ月しているとベル坊にある提案を切り出した

「…なあベル坊、俺はじいちゃんの言っていたオラリオつてとこに行くがお前はこれからどうする？」

答えは分かっているが、一応聞いておく。ベルは俺の目を見て口を開いた

「…僕も…オラリオに行く…!!」

「…そうか。頑張ろうな、ベル」

こうして俺達2人はオラリオへ行く事を決心した

「よし、これで大丈夫。行くか」

支度を終えて俺は右手に木刀を持って家を出るとベルが立つて待っていた

「んじゃ行くか。ベル坊」

「うん!」

ベルが元気な返事を返して俺についてくる

「おっとその前に…」

「?」

俺は足を止めて家に向き直ると頭を下げた

「今までお世話になりました!!」

まるで俺達を祝福しているような心地よい風が吹いた。ベルも頭を下げた。「ありがとうございました!!」と言っている

頭を上げ家を背にすると再び歩き出す。オラリオまで俺達は少しずつ歩を進め始め

た

歩き始めて数時間、俺達はオラリオに入った

「着いたね！見て見て！あの食べ物！美味しそう！」

テンション高いベルが屋台に指差してぴよんぴよん跳ねている。俺はそんなベル坊を横目に感想を述べた

「ああ、初めて来たが。村とは違ってガヤガヤしてるな。おいベル坊。あんま遠くに行くなよ〜この街意外と広いから

…まずはギルドってやつに冒険者について説明聞かないとな」

とりあえずはしやいでいるベルを落ち着かせギルドを探す。まずは街の人にそこらの屋台の女の人に声を掛けた

「すいません。ギルドに行きたいんですけど、ギルドってどこか教えてくれませんか？」
「おや？アンタ達は冒険者になるのかい？ギルドならあつちに…まあ〜可愛い弟をねえ！ほら食べな！」

そう言つて女の人はジャガ丸くんをベルに差し出した

「い、いえ。いいです！その…僕お金ないんで…」

「いや、これくらい買つてや「いいのいいの！おばさんからのサービスだよ！」

女の人がそう言って笑いながら遠慮気味のベルに無理やり渡す。にしても……おばさんつつーより、お姉さんだろ」

「あら、嬉しい事言ってくれるねえ！お兄ちゃんにもサービスしちゃうー！」

どうやら口に出していたようだ。上機嫌になったお姉さんにジャガ丸くんをもらおうと2人で礼を言いながら頭を下げジャガ丸くんを片手にギルドへと歩き出した

「美味しいね！」

「そうだな。結構美味しい、ある程度金貯まったらまたあそこで買うか」

そんな言葉を交わしながら歩き、食べ終えた頃に丁度ギルドに着いた

「んじゃ行くぞ」

「うん！」

そう言つて俺達はドアを開け、初めてギルドに足を踏み入れた

ベルは出会いを、俺はじいちゃんに勝てる強さを求めた話が今始まる

第3話忘れていた事

どうも、ヤミさんです。ベルと共にギルドに来て冒険者について聞いた後、入れてくれる「ファミリア」を探しているのだが：

「うちのファミリアはお前らみたいな田舎者に興味ねーんだよ。オラツ帰った帰った！」

現在俺達はその複数あるファミリアの下つ端の団員の人に門前払いを受けている。ベルはいかにも弱そうだし、俺は約三年間田舎で過ごしていたからか田舎者らしさが出ているようだ。俺は修行しているため、その下つ端くらいなら余裕で叩きのめすことは出来る。そういつらを見た時に確信できた

要するに見た目で判断しているらしい。原作通りに行くのならヘステイア・ファミリアに入るのだが、見た目だけで判断されるとこんなに腹が立つとは思ひもなかった。最初にロキ・ファミリアに行ってみたが、門番に門前払いを受け、そこから数十カ所回っているが、全て同じように門前払いを受けた

「ハア〜…」

さすがのベルも俺とベンチに腰掛けてため息を吐くレベル。二人一緒に落ち込んで

いると

「やあ、少年達。どうしたんだい？ため息なんて吐いて」

俺達は顔を上げ声の主を見るといわゆるロリ巨乳でお馴染みのヘスティアさんがい
た

「黒い髪の君、失礼なこと考えてなかったかい？」

「いや、考えてません」

「嘘だね。ボク達神様には嘘は通用しないよ？」

そう言えばそうだった。神様には嘘が通じないんだった

「んじや言います。これがいわゆる『ロリ巨乳』ってやつか…と思つてました」

「通用しないとは言つたけど、本心言つてなんて言つてないよね?！」

「ロリ巨乳って何?」

あー話が進まない。しかもこのままじゃ純粹無垢なベル坊の心が汚れてしまう

「どうでも良いですけど、ため息の理由はどこのファミリアの人も俺達を入れてく
ない
どころか門前払いを受けて落ち込んでいたところですよ」

「どうでもよくないけど…そうか！君達はファミリアに入りたいたんだね！ムッフッフ
…」

神様がニヤニヤと笑い。提案を切り出した

「ボクの名前はヘスティア。君達ファミリアに入りたいならボクのところに来ないかい？最近下界に降りただけで、まだ眷属が出来ていない…つまり君達がボクの最初の眷属になつて欲しいんだ！」

それを聞いたベルがすぐに俺に話しかけてきた

「や、ヤミさん入ろう！神様から直々に勧誘なんて滅多に無いと思います！」

「そうだな、そろそろ門前払いを受けるのも飽きてきた」

俺達は意思が固まり、立ち上がるとヘスティア様に頭を下げながら返事を返した

「よろしくお願いします!!」

「おっ！いい返事だ！それでは早速ボク達の拠点に行こうか。付いて来て！」

俺達は言われるがままにヘスティア様に付いて行く

少しすると廃墟の教会の前で止まり、ヘスティアが笑顔で言った

「ここがボク達の拠点だよ！」

「なんとまあ、年季の入った…」「凄いです！秘密基地みたいですよ！」

俺と違いベルは目をキラキラさせている。気に入ったようだ

中に入ると外見には負けず劣らず半壊していた。そのまま小部屋に行くと、本の無い

本棚の中を通る

一番奥の棚に着くとヘスティア様は本棚をどけた。するとそこには地下へと伸びる

階段があつた

「本格的な秘密基地になつてんだな」

「友達にもらつてね♪さあこの部屋がボク達の本当の拠点だ！」

階段を降りるとそこにはドアがあり、ヘステイア様がドアを開けると外とはかけ離れた生活臭のする部屋だった。人が暮らして行くには問題ない広さだ

紫色のソファに一人用のベッド、数冊しか入っていない本棚がある

「そう言えば、君達の名前を聞いてなかつたね。改めて自己紹介しようか！ボクはヘステイア！これでもれっきとした神様さ！」

「べ、ベル・クラネルです！これからよろしくお願いします！」

「ヤミ・カズヒラです。ベル坊とは…まあ家族みたいなもんです」

自己紹介が終わり、ヘステイア様は本題を口にした

「さて、君達にはボクの【神フアルナの恩恵】を刻むから上の衣服を脱いで背中をこつちに見せて貰えるかな？」

ヘステイア様がそう言うのとベルが先に上の衣服を脱ぎ、ヘステイアに背中を向けた

ヘステイア様はベルの背中に触れると文字をを刻みだした。俺はその文字を見てみた

それに気づいたヘステイア様は説明した

「ああ。これは【神聖文字】^{ヒエログリフ}」と言って勉強しないと読めないよ?」

それで俺は三年前の事を思い出した

『文字は自動で翻訳、書く事が出来るからな』

あの神様の言葉だ。それがどうしたのかと言うと…読めるのだ。【神聖文字】が、普通に

それに驚き固まっているとベル坊の背中に【神の恩恵】を刻み終え、紙に移されていた

ベル・クラネル

L v l

力 I : 0

耐久 I : 0

器用 I : 0

敏捷 I : 0^{びんしょう}

魔力 I : 0

《魔法》

〔 〕

《スキル》

こんな感じだった。紙を見たベルが喜びでニヤニヤしている

「次はヤミくんだね！」

（おっと、次は俺か、確か上半身の服を脱ぐんだったな）

俺は上半身の服を脱ぐとヘステイア様が声を上げた

「ちよつと君！体！」

「？体がどうかしたんですか？ベル坊、なんかあるか？」

「いや、何も…いつもお風呂で見てる通りの体だよ？」

何かあるのかと思いいベル坊にも聞くがベルにもわからないらしく首を傾げる

「いや、いい体してるなーって…」

「そりゃ、鍛えてますから」

何か変なことでもある？と言った感じで言葉を返す俺を見てヘステイア様は少しため息を吐くと「もういいよ。背中を見せて」と言う

むず痒いがとりあえず背中を見せるとヘステイア様が【神の恩恵】を刻み出した

「な、なんじゃこれはーっ！！！！」

「ど、どうしたんですか！神様!!」

少しするとヘステイア様がまた声を上げた。待っていたベルはそれに驚きヘステイア様に叫んだ

「…話すより見たほうが良い」

そう言つて俺の情報を紙に移すと俺に渡す。ベル坊はそれを後ろから覗き込む

ヤミ・カズヒラ

L v l

力 I : 15

耐久 I : 3

器用 I : 10

敏捷 I : 12

魔力 I : 0

《魔法》

ダーク・マジック
【闇魔法】

想像魔法

使用者のイメージした闇の魔法を発現させる

イメージがハッキリしていればしているほど魔法の強力が増す
無効化する

【強奪】
スナッチ

速攻魔法

半径10M内にいる生き物の中から複数選び、選んだ者から身体能力を奪い自分の物に出来る

奪った身体能力が多いほど体力の消費が激しい

一定の時間が経つと奪った全てが元に戻る

《スキル》

【さらに向こうへ】
ブルス・ウルトラ

早熟する

限界を超える度にステータスに補正

【購入】
バッチャス

ニホンの武器以外の物をお金を払う事で買う事が出来る。ゴミになった物は消える
本などは空間に無限に収納可能

そうだった。これを貰っていたんだった。この三年修行ばかりで完全に購入とかを忘れていた。そうか、これからこれを使えるのか、だらけ過ぎないように頑張らないと……

「ヤミくん、ハッキリ言つてこれは異常だ。身体能力は少ないけれど最初から数値として出て来ているし、魔法もスキルも最初から二個も使える。しかも全てレアなものだ。公になってしまえば娯楽に飢えた神達が君を狙うだろう」

「だから俺の情報に関しては細心の注意を払うように……でしょ？ベル坊も俺のことは……」

「わ、わかつてるよ！」

ベルは嘘も隠し事も下手だ。どちらかと言えばベル坊に細心の注意を払わなくてはならない

「ヤミくん、ニホンつてなんだい？」

ヘスティア様が俺に聞いてくる。嘘を言わず正直に答えた

「それはそれは遠い俺の故郷です。故郷のことは完全に忘れていましたが故郷の物が買えるのは俺としては嬉しいですね」

嘘は言っていない。ヘスティア様は「なるほど……」と言つて納得している。するとベル坊が俺に質問して来た

「そう言えば、ヤミさんの故郷ってどんな所なんですか？」

「そうだな、神様達が大好きな娯楽が沢山ある場所、本に、遊びに：それで美味しい飯が沢山ある場所。ただそこには人間しかおらず、神様はもちろん獣人もエルフも一人としていないアマゾネスに似てる人はいるけど、アマゾネスじゃない」

「へ、そんな場所があるんだ。世界って広いね」

ヘステイア様が興味深そうに聞いている。「さて」と話を切り上げ

「ベル坊！『神の恩恵』も刻んで貰ったし、さっそくギルドに報告してダンジョンに行くぞー！」

そうやって俺はベルを連れてギルドへ向かった

第4話アイズ：なんだっけ？

俺の目の前には数を減らした数匹のゴブリン達がおり、俺に恐怖を覚えたゴブリン達は俺に背を向けて走りだした

「ベル坊！ そっち行ったぞ！」

「わかった！ おりゃああああ！」

待機していたベルが叫びながら残りを一気に片付けた。フーツと息を吐くベルに近づきハイタッチのために手を挙げた

「お疲れ様」

そう言ってお互いハイタッチした

ファミリアに入ってから約1ヶ月が経つ

俺達のステイタスはこんな感じだ

ヤミ・カズヒラ

L v 1

力G：231

耐久H：124

器用G : 209

敏捷H : 150

魔力H : 109

ベル・クラネル

力I : 77

耐久I : 13

器用I : 93

敏捷H : 148

魔力I : 0

1〜4階層までしか行っていないからか早熟するとしても俺の上げ幅は小さかった。

ベル坊はそれを羨ましそうに見ていたが…

ベル坊はナイフ、俺は木刀を片手にダンジョンに挑む

『何故木刀なのか』って？ せっかくだし折れるまで使おうと思いいヶ月間の間、使い続けていたがこれが中々折れない。なにでできてんだこれ？

「ヤミさん！ そろそろ五階層に行きませんか？」

ベルが目キラキラさせてこちらに訪ねてくる。答えはもちろん

振り返るとミノタウロスがもう逃げ場はないと言うように一歩ずつ歩いてきていた
 「…ベル坊、俺があいつの動きを止めるからその瞬間にあいつの脳天にナイフをぶつ
 せ」

そう言つて居合の構えを取り、木刀の柄に手をやる

「む、無理だよ！ 相手はミノタウロスだよ?! 勝てるわけが…」

「無理だなんだと言う暇があるなら体動かせ。勝てなくても無抵抗で死ぬよりかはいく
 らかマシだろ」

そう言つてる間にミノタウロスは空気を読んだのかわからないが突進の準備に入つ
 ている

ベルはさっきの言葉でやる気になったのかナイフを構えている

「ヴヴオオオオオオオオ!!」

スナッチ

「強奪」、やみまじ「闇纏・黒刃」!!!

ミノタウルスが突進した瞬間、俺はミノタウロスから身体能力を奪い取りながらさら
 に「闇魔法」で木刀に闇を付与し、角を狙い木刀を抜いた。これならLv1の俺とLv
 2相当のミノタウロスの力だけは互角…の筈だが…

ガンツ

ピシツバキツ

タイミング悪く攻撃を当てた瞬間、木刀にヒビが入り、刃の部分が砕けた。だが、ミノタウロスの突進は一瞬だけ止まった

「今だっ!!!」

「はああ!!!」

待っていたかのようにベル坊が雄叫びを上げながらナイフをミノタウロスの頭に突き刺した

「ヴヴォオオオオオオオオオオオ!!!??」

ミノタウルスが頭を押さえ痛みにも悶絶している

「やったか?!!」

ベルがフラグを立ててしまった。するとミノタウロスの叫び声は徐々に小さくなり、目は俺達を見据えていた。多分ベルの力じゃ硬い体のミノタウロスの骨は硬過ぎて脳まで達していないのだろう

「ヴヴォオオオオオオ!!!」

「うわあああ!!!」

ミノタウロスは激怒しているのかベルに狙いを定めた。ベルは臀部を地面に落としたり体勢で後ずさりしている。俺はそうはさせまいと走り出す

その時だった。横に凄く早い何か走り抜けたかと思うとミノタウロスは切り刻ま

れた

それをしたのは俺より少し年下くらいの金髪の少女だった。俺はその名を知っている。ロキ・ファミリアに所属する第一級冒険者

【剣姫】アイズ………なんだっけ？ まあアイズさんでいいや

「……大丈夫ですか？」

「……」

アイズさんの目の先には赤い液体、血にまみれているベル坊の姿があった。ベルは無言でいるため、アイズさんが少し慌てて再度安否を確認する

「あの………大丈夫……ですか？」

「だ……」

「だ？」

「だああああああああああ!!!」

脱兎の如くベルは走り去って行った。……俺を置いて
アイズの仲間だろう獣人の男は腹を抱えて笑っていた
とりあえずベルの代わりに俺は頭を下げて礼を言う

「あの………ありがとうございます」

「………はい」

そう一言だけ呟いたのを聞くと「それでは」と言つて帰ろうとするのだが何故か後ろから肩を掴まれた。振り向くと当たり前だがアイズさんが俺の肩を掴んでいた

「あの…痛いんで離してくれませんか？」

「…ダメ。聞きたいことがある。…君、木刀使つてた。木刀でLv1でミノタウロスと互角レベルの力を引き出してた。その秘密について知りたい」

どうやら俺の魔法に興味があるようだ。だがヘステイア様が言つていたことを思い出す

『公になつてしまえば娯楽に飢えた神達が君を狙うだろう』

俺としてはそんなことになつてしまえば面倒くさいことこの上ない

だから…

「お断りします」

そう言つて振りほどこうとするが、さすが第一級冒険者。振りほどけない。そして獣人の男も笑うのをやめて口を開いた

「雑魚は雑魚らしく何もしねえ方がいいぜえ？」

「へー。んじや、雑魚じゃないから何かをして逃げるわ。【強奪】」

魔法を発動させLv5の二人の身体能力を奪った。奪える力は奪う相手の強さによつて変わるらしく。今の俺の身体能力はこの二人分でLv3相当に変わる

「なん…だ…？ 力が入んねえ…」

「…何をしたの？」

獣人からは混乱の表情が見て取れるがアイズさんは無表情だから混乱をしているのかわからない。だが、能力は下がったのは確かだ。しかしアイズさんは肩を掴んでいる手は離してはくれない

「さあ？ 雑魚じゃないから何かをしたとしか…力強いな…あ、ミノタウロス！」

アイズさんの後ろを指差しそう言うときアイズが振り返る。だが、そこは行き止まりの壁。気を取られた隙に俺は手を引き剥がし逃げ出した

「させるかよっ!!!」

もう下がった身体能力に適應したのか獣人が行く手を塞いでくる。俺はあるものを取り出し獣人の目の前に突き出すと思いつき紐を引いた

パンツ！

ただのクラッカーだ。だがこの世界に来てから俺はクラッカーと言う物を見ていないため、この世にはないのだろう

「耳があああ!!!」

大きな音に対して獣人は怯むどころか耳を抑えて転げ回っている。俺はそれを無視して逃げる足を早めた

「目覚めよ!」
テンベスト

風を纏ったアイズさんが風で加速してくる。だが…

「?!」

今度は驚きの表情が現れた。それもそうだ。纏った風が突如として何かに吸い込まれたように消えたのだから

「んじや、また会えたらな! 出来るだけ会いたくはないけど!」

そう言つて俺はその場を走り去つた

なんとか逃げのびた俺はほほ精神疲労マインド・ダウンの状態の上に急激な身体能力の向上、低下のため体がだるい

「ヤミさん。聞きましたよ! ミノタウロスに襲われたつて。大丈夫ですか?」

ギルドに戻るとエイナさんが出迎えてくれた

「大丈夫大丈夫。生きてんなら問題なしでしょ?」

「はい、そうなんですが…あれほど五階層に降りないでくださいって言いましたよね?」

あつ……

この後、精神的にも肉体的にも疲労状態でエイナさんから説教と言う拷問に似た何かを1時間程受けた後、解放された

「逃げずに捕まればよかったよ」

第5話ステイタス更新

疲れた体を引きずってやつと教会まで来た。地下に入ってドアを開けるとヘステイア様とベルが待っていた

「ヤミくん！やつと帰って来た！死にかけたんだろ？大丈夫かい？」

「大丈夫です。ヘステイア様……ベル坊」

「ご、ごめん。つい口が滑って……」

なんでも、ベルはアイズさんに一目惚れってやつをしたらしい。アイズさんから逃げ出したのはそれが理由だ

「まあ、ベルはそう言うの憧れてたもんな。立場が逆なんだけれども」

「うっ……」

「ヤミくん！一時の迷いを抱えているベルくんにもつと言ってやれ！」

ヘステイア様はベルが惚れた女に嫉妬しているようだ。だが俺は右手で頭をかきながら言った

「別に一時の迷いでもいいだろ？好きになったのは仕方ないし、ベル坊があの人をどう思おうが自由だろ？ハーレムハーレム言ってたじいちゃんよりはマシだしな」

「ヤミさん……」「ヤミくん?!」

ベルが安心した表情で、ヘステイア様は焦りの表情を顔に出した。

「ベル坊、あの人に近づける方法を教えてやろうか?」

「え?! あるんですか?!」

「ああ、あるぞ。それはな……」

…強くなればいいんだよ

「…はい?」

「いや、だから強くなればいいんだよ」

「いや、その…当たり前じゃないですか?」

ベルがそう言う。それを聞いた俺は大声で言った

「そう! 『当たり前』だ! なんだベル坊分かってんじゃねえか!!!」

そう褒めるとベルの頭を傾げる。とりあえずその話は終わりにして俺は夕飯を作る事にした

「せいじゃ、夕飯だな。【購入】使って何か買って作る。何が食べたい?」

その言葉に最初に飛びついたのはベルだった

「肉じゃが！肉じゃががいいです！」

「ボクもそれがいいかな？あ、ジャガ丸くんあるよ！」

肉じゃがに決まった。ジャガ丸くんはありがたい。おかげが増える

とりあえず俺は【購入】の空間収納から炊飯器を取り出し、5合の白米を洗う。電気は無くても使えるみたいだ。一通り洗った後早炊きに合わせてスイッチを入れる

メニユーは白米、味噌汁、肉じゃがと定食屋にありそうな内容だ

「さて、始めるか」

くヤミさん料理中く

「できたぞ、運んでくれ」

「はい」

「お！やっとかい！待ちくたびれたよ！」

ベルが返事をして茶碗を持ち机に置いていく。ヘステイア様は箸を持って並べていく。数秒で準備ができた

「いただきます!!!」

「どござで」

両手を合わせて二人とも食べ出した。ああ一ヶ月前：最初に振る舞ったのもこれだったな

「神様！お肉がいっぱいありますよ！このお汁も美味しそうです！」

「これは…ジャガ丸くんかい？この白いつぶつぶは…」

「まあ似たようなもんです。白い方はお米と言つて俺の故郷の主食です」

二人は俺の料理に目をキラキラさせていた。俺とベルは両手を合わせて言った

「いただきます」

「何だい？その詠唱みたいな物は…」

へスティア様が俺達の動作を見て不思議に見ている

「食べる前の挨拶みたいなもんです。まあ感謝して食べるための合言葉って感じですね」

「僕はそれを教えてもらつてからずっとやってます」

「そうかい！それじゃ私も…いただきます！」

そう言つて俺達は肉じゃがを口に運ぶと今と同じように二人揃つて声を上げる

「美味しい!!」

「そりゃあ良かった」

そして笑顔になる二人を見て俺はいつも通りにつこりと微笑んだ

食べ終わった後、ベル坊が皿洗いをやってくれる。その間に俺はヘステイア様にステイタスの更新をしてもらっている

するとヘステイア様が口を開いた

「…ベルくんスキルが発現した」

「おお、やつとですか。それで、どんな物なんです?」

【リアリス・フレイゼ憧憬一途】

内容は

早熟する

懸想おもいが続く限り効果持続

懸想の丈により効果向上だ」

「なるほどねー青春してるなあ」

「なるほどねーじゃないよ!もしかしたらヴァレン何某にベルくんが取られるかもしれないじゃないか!」

俺の背中の文字をなぞっている指に力が入る。あ、そこ気持ちいい…

「ハア…とりあえずスキルの事はベルくんには内緒だよ」

「理由は俺と同じか。ベル坊はすぐ喋るからな」

ハツハツハと笑うとヘステイア様が俺のステイタスを紙に写し終えて俺に渡してくれた。

ヤミ・カズヒラ

Lv1

力G↓E：231↓413

耐久H↓G：124↓210

器用G：209↓299

敏捷H↓F：150↓275

魔力H↓F：109↓304

《魔法》と《スキル》はそのまま

上昇値600越え、他の人が見たら絶句するだろう数値の上がり方を見て俺は眩く

「魔力が上がったのはいいな」

「ベルくんも近々こういう上がり方をするのかな？」

「するだろ。オラリオに来てからあいつかなり努力してるぞ。もしかしたら俺を超えた

りも……」

「フフツそれは楽しみだ。あ、ベルくん終わったのかい？」

ヘスティア様の言葉を聞いてベル坊がいたことに気づく。ベル坊は俺を見て笑顔で言った

「ヤミさん！『僕のヒーローアカデミア』を読ませてください！続きが気になって…」

「あ！ボクも『ノーゲーム・ノーライフ』の続きが見たいな！」

ベル坊につられてヘスティア様も俺に言ってきた。俺は空間収納から注文された本を2冊取り出す

「ベル坊が4巻、ヘスティア様が1巻続きの1巻？だよな？」

そう言つて二人に渡すと二人は熱心に読みだした。結構上機嫌で就寝するまで読んでいた

そう言えば忘れていたがダンまちの原作知識を使おうと思つたんだけど神様に規制されている、購入でもダンまちは買えない。原作知識は三年間の間に少しずつ抜き取られていたらしい

地べたで毛布を腹にかけて寝ていた俺が目を覚ます

俺の朝は早いかかわからないが早い。ベルと共に朝5時に起き、俺が教えたラジオ体操

をやるのだが…

「ベル坊、それなんだ？」

「…え？」

ヘステイア様はベッドで、ベルはソファで寝るのだが、ベッドにはヘステイア様の姿はない。そしてベル坊の毛布が不自然に盛り上がっている

「寝ぼけちゃったん…のかな？」

「…まあそうだろうな」

内心「絶対違う」と思いながら見ているとベルがヘステイア様を抱きしめた

「抱き心地がめっちゃくちゃいい…」

「だろうな。つーかこうして見ると妹ができたみたいで可愛いな」

そう言っておもむろにヘステイア様を撫でると「んっ…」と小さく身じろぎする

「…!!!」

ベル坊は何か危険な物を感じ取ったのか迅速に抜け出すとさっさと出て行く。俺はベル坊の後を追って出て行く直前に「いってきます」とだけ言って出て行った

「ベル坊、ありゃじいちゃんの言ってた『可愛い兵器』つーやつだな」

「う、うん。何かわからないけど、確かに危なかった」

朝の少し寒いメインストリートで歩きながら話し合っていると

グギユルルル……

二人揃って腹が鳴った

「はは……そういえば朝ごはん食べてなかったね」

「……すまん。金は教会において来ちまった」

「ええ……?!じゃあ今朝は抜き?!」

ベル坊がそう言うなかどうしようかと頭を抱えていると

「……………」

バツ!と振り返る。何とどうか、気持ち悪い……誰かに視られている。今のベル坊でも気づくレベルだ。普通じゃない

だが、その犯人は見えない。そろそろ気のせいかと思いは始めていると

「あの……」

後ろからの声にすぐに反転し身構えるとそこには明らかに無害なヒューマンの少女だった。俺達の反応に対し少女は驚き固まっている

「す、すまん」

「ちよつと驚いちゃって……」

「い、いえ、こちらこそ驚かせてしまって……」

慌てて頭を下げるとあっちも頭を下げて来た。申し訳ない
すると少女は魔石を差し出ししてきた

「これ、落としましたよ?」

あれ?と思いい腰につけているいつも魔石を入れている袋を見ると…忘れていた。忘れすぎじゃね?後で一回教会に帰らないと…

「ベル坊、昨日ちゃんと魔石出したか?」

「え?うん。確か全部出したはずなんだけど…残ってたのかな?すみません、ありがとうございます」

「いえ、お気になさらないでください。ダンジョンに行かれるんですか?」

「はい、軽K『グギユルルル…』」

俺の腹が代わりに返事をしてしまった。俺以外の二人が一瞬真顔になるとどちらかが『プツ』と吹き出しそれに合わせて二人とも笑い出した

「アツハハハハハハハハ!!」

「…お前ら…ハハハハハハ!!」

俺もついつられて腹を抱えて笑ってしまふ

「うふふつ、お腹、空いていらっしやるんですか?」

「ハハハツ…はい。フフツ…」

ベルが笑いながらそう返事すると少女は一旦店に戻るとバスケットを持って来た

「これ、よかつたら……まだお店やってなくて、賄いじゃあないんですけど……」

「これ、あんたの飯だろ？ いいのか？」

「このまま見過ごしてしまうと、私の良心が痛んでしまいそうなんです。だから冒険者さん、どうか受け取ってくれませんか？」

ああ、ベル絶対断れないな俺も断れないもん。優しいベル坊が断れるわけない

「冒険者さん。これは利害の一致です。私もちよつと損をしますが、冒険者さんは腹ごしらえができる代わりに……」

「か、代わりに？」

俺もベルもゴクリと唾を飲む。どんな内容をこつちに吹っかけるつもりだ？

「……今日の夜、私の働くあの酒場で、晩御飯を召し上がって頂けなければいけません」

ああ、狸だ。狸がここにいる。『なければいけません』ってほぼほぼ強制じゃねーかするとベルがハツとすると口を開いた

「僕……ベル・クラネルって言います。貴方の名前は？」

「シル・フロヴァアです。ベルさん」

「……」

無言の俺を二人は見つめる。ハア…

「…ヤミ・カズヒラで『グギユルル…』

そしてまた笑いが起こった

第6話豊穡の女主人

もらったものを食べた後あることを思い出し、ベル坊には一人でダンジョンに行つてもらうことになった。教会に戻り忘れた財布を持つとある所に向かった

「ここが「ヘファイストス・ファミリア」の武器屋か」

木刀が砕けたためやつと本物の刀を買う事にした

俺の所持金はコツコツと貯めてやつと3万、武器を一つやつと買えるくらいだ。とりあえず中に入ると

「お！にいちちゃん！何か用かい？」

元氣そうな男が声を張り上げてそう言うてくる

「刀を買いたいんですが…」

「刀ならそこにあるぜ！好きなだけ見ていきな！」

男は刀の置いてある場所を指をさして教えてくれた。それに従い刀を見ると当たり前だがたくさんあった。値札を見ながら良さげな物を探す

すると一つの刀が目についた。値段は28000ヴァリス。刀を鞘から途中まで抜いて刀身を見ると何で出来ているのか分からないが見惚れてしまうほど見事な刃だっ

た。

しばらく見て見ていると男が話しかけてきた

「にいちゃん。そりゃ【妖刀】ってやつだぜ」

「【妖刀】？」

刀を鞘に戻し不思議そうな声を出す

「知らねえのか？ 使い手を選ぶって言われてる刀だ。認められた者にしか抜けないんだとよ。抜けたらどんなことがあっても使い手から離れる事はないらしいが、どう言った能力があるのかも分からずただただ抜かれるのを待つ刀だ。十数年間誰にも抜けたことがないから観賞用として売り出してるのさ」

「なるほど、抜けないだけで刃は見れるのか」

そう言つてまた刃を見ると男から聞こえた

「いや、そんなことはないからね？ 見ることにすら…え？」

男が素つ頓狂な声を上げた。俺が刃を見ていたのだ

「お前さん…抜けるのか…？」

「…うん、そうみたい。おじさんこれ買います。ほら28000ヴァリス」

「いや、いい」

お金を差し出すと男がそれを拒否してお願いしてきた

「代わりにその刀を見せてくれ。どんな物だったのか見てみたい」

「いいよ」

そう言つて抜いた刀を見せる。男は「ほう…これがこの刀の刀身…」と数分鑑賞すると「もういい」と言う。俺は刀を鞘に戻し腰にさすと出入り口に向かった

「それじゃあ、ありがとうございしました」

「その刀…大切にしてやれよ？」

「はいっ！」

男の言葉に返事を返すと俺は店を後にした

ダンジョンに入り3、4階層まで降りるとベルを見つけた

「ベル坊！何してん…だ…」

必死で逃げるベル坊の後ろには6匹のコボルトがいた。ミノタウロスと言い、コボルトと言い。何でベル坊はこんなにモンスターに追われるのが好きなのだろうか？

「ヤミさん!!!」

俺に気づいたベルから何やら俺を心配している声がした。だが俺にとってはただ新しい武器の試し切りが出来てちようどいいくらいだ

「ベル坊！4体やるから2体やれ！」

そう言つて抜刀の構えを取り闇を半径3Mで周りに展開する

『オーバーロード』で見た【領域】を参考にしてみた技だ

まずベルがそれに入り、通り過ぎる。次に先頭から順に4体のコボルトが入った瞬間、刀を抜き首を切り落とす

最後の2匹は隙だらけになった俺に攻撃しようとするが

「プルス・ウルトラアアアア!!!」

『ガッ!?』

ベルが掛け声とともに隙をついて倒した。俺とベル坊の目が合う

「お疲れ様！」

笑顔でハイタッチすると二人で魔石を集める

「サポーターがいればベル坊を一人にしても安心なんだが…」

「そんなお金ウチないから…」

二人で乾いた笑みを浮かべているとまた声がした

『『ガアアアア!!!』』

十数のモンスター達がこちらに向かって威嚇してきていた

「ヤミさん…」

「おかわり来たぞ。まあ、取り敢えずやろうぜ」

ベル・クラネル

L v l

力 I ↓ H : 8 2 ↓ 1 2 0

耐久 I : 1 3 ↓ 4 2

器用 I ↓ H : 9 3 ↓ 1 3 9

敏捷 H ↓ G : 1 7 2 ↓ 2 2 5

魔力 I : 0

《魔法》《スキル》そのまま

ヤミ・カズヒラ

L v l

力 E : 4 1 3 ↓ 4 8 3

耐久 G : 2 1 0 ↓ 2 3 1

器用G↓F：299↓326

敏捷G：301↓351

魔力G：304↓367

《魔法》《スキル》そのまま

「えっ……」

俺はいつも通りに見ている中、ベルだけが間拔けな声を出す

「か、神様、これ、ヤミさんのと間違ってますか?」

「…君はボクが簡単な読み書きもできないなんて、そう思ってるのかい?」

「い、いえっ! そう言うことじゃなくて…ヤミさんもおかしいと思いますよね?!」

「俺はベル坊以上に上がってるんだ。それくらいが普通なんだよ」

「そ、そうなの?」

ベルが頭を抱えているが気づいてない。耐久と敏捷に関しては俺より上がっていることを

へスティア様を見ると機嫌が悪い。目が合うとすぐに背けられたかと思うと立ち上がった

「ボクはバイト先の打ち上げがあるから、それに行ってくる。君達もたまには二人で羽

を伸ばして、寂しく豪華な食事でもしてくれればいいさっ！」

ああ、朝の話をヘステイア様は聞いていたのか。だけどバイトの打ち上げがあるから自分だけ行けないと……

「…いつてらっしやい」

「いつてきます!!!」

俺が出て行くヘステイア様に声をかけるとしつかりと返事を返してボタンとドアを勢いよく閉めた

「さて、ここに来たは良いが、何処にあるのやら」

「朝にシルさんと会ったのはこの辺りのはずなんだけどなあ…」

現在俺達は朝に朝食をくれたシル・フロヴァって人が働いていると言う酒場を探しているのだが、夜のため人が多いため、何処が朝の場所だったのかわからなくなっていた

「ヤミさん。あつた」

「お? やつとか…」

探しているとようやく見つけた、看板には『豊穰の女主人』と書いている

まず外見の感想はやけに広い。中を覗くと人が十数はいる

そして店員さんが全員女、ウエイトレスだ

ベルを見ると女に抵抗力が無いためガチガチに緊張している

「ベルさん！ヤミさん！」

「おっす」

「……」

朝とは違い今度はベルが何も言わない。少しすると観念したのか下手くそな笑みを

浮かべた

「……やってきました」

「はい、いらつしやいませ」

そう言うのと俺達は開きっぱなしの入り口をくぐるとシルさんが澄んだ声を張り上げ

た

「お客様2名入りまーす！」

そう言うシルさんの後に続く。案内されたのはカウンター席だった

席に座るとドワーフの女将さんがやってきた

「アンタ達がシルのお客さんかい？ははっ、冒険者のくせに可愛い顔してるねえ！」

女将さんが豪快に笑う。そして次の言葉を繋いだ

「なんでもアタシ達に悲鳴を上げさせるほど大食漢なんだそうじゃないか! じゃんじゃん料理出すから、じゃんじゃん金を使ってくれよお!」

「ふあ?!」

告げられた言葉に俺は変な言葉が出る

振り返るとシルさんそこにおり、笑顔で言った

「あれだけお腹を鳴らせるんです! 食べられますよね!」

「食べられますよね!!! じゃない!!!」

「この人狸じゃない! 狸に化けてた魔女だ!

「ベル坊、すまん。俺のせいだ」

「違いますよヤミさん。あれを食べていた時点でこうなる事は決まっていたんです」

謝る俺をベルは俺を慰めてくれている。本当にいい奴だ

「ふふ、冗談です。ちよつと奮発してくれるだけでいいんで、ごゆつくりしていただくさー」

ちよつかり『ちよつと』と付け加えて言ってしまうシルさん

とりあえずメニューを見て、ベルはパスタ、俺は女将さんにオススメを聞いて『豊穣定食』にした

女将さんは「酒は?」と聞くとベルは「いりません」と言い、俺は「じゃあ一杯」と

言うと二杯持つてきた

「やっぱ普通じゃねえなこの店」

「…そうですね」

ゆつくりと食べ物を口にしながらそう呟くとシルさんがまたきた

「楽しんでますか?」

「圧倒されています」

シルさんの言葉に俺達はそう返した

第7話ロキ・ファミリア

ある程度飲んで食ってしていると団体の客がやってきたようだ。店の中にいた客達の空気が変わる

気になって見てみると種族が統一されていないファミリアの集団だった

「……ん？」

見ると知っている顔が2名いた。一人は獣人の青年、もう一人は金髪のベルの憧れの人、アイズ・ヴァレンシユタイン。あ、本名言えた

『……おい』

『おお、えれえ上玉ツ』

『馬鹿、ちげえよ。エンブレムを見ろ』

『……げっ』

周りからそんな声が聞こえる。エンブレムを見るとピエロのシンボル、間違いなく「ロキ・ファミリア」だ

「おいベル坊。……ベル坊？」

ベルに話しかけるが返事がない。見るとずっとアイズさんを見続けている。とりあ

えずベルはそつとして置いて飲むことにした

「よつしやあ、ダンジョン遠征みんなごころうさん！今日は宴や！飲めえ!!」

そう胸のない女性が言うと一緒に店は騒がしくなった

「【ロキ・ファミリア】さんはうちのお得意さんなんです。彼等の主神であるロキ様に、私達のお店がいたく気に入られてしまつて」

ベルが全開で「ロキ・ファミリア」を見ているのに気づいたのか教えてくれた

「…そうですか。良かったなベル坊…ダメだこりゃ」

多分シルさんの言葉は耳に入っているだろうが俺の言葉は入っていないのだろう。全く返事を返してくれない

「そうだ、アイズ！お前あの話を聞かせてやれよ！」

「あの話…?」

何やら獣人達から面白い話があるようで、獣人の青年がアイズさんに話をせがんでいくようだ。面白い話ならばと耳をすませる

「あれだつて、帰る途中で何匹か逃したミノタウロス！最後の1匹、お前が5階層で始末しただろ!?!そんで、ほれ、あん時いた二人組の内のトマト野郎の!」

(ほうほう…ん?待てよ。ミノタウロス…5階層…二人組…?)

なんか聞き覚えのある言葉を聞いて物思いにふけつてしていると話は続いた

「ミノタウロスって、17階層で襲いかかってきて返り討ちにしたら、すぐ集団で逃げ出していった？」

「それぞれ！奇跡みてえにどんどん上に上がっていきやがってよつ、俺達が泡食って追いかけていったやつ！こっちは帰りの途中で疲れていたつてのによ〜」

大体この後に出るものがわかってしまった。5階層にいた二人組は…

「それでよ、いたんだよ、いかにも駆け出していうようなひよろくせえガキと貧乏そうな仲間が！

仲間がミノタウロスを足止めしてその隙にガキが武器を頭に突き刺したんだが殺しきれなかったみたいですよ！」

俺達…だな。獣人は笑いながら続ける

「抱腹ほうふくもんだつたぜ、ミノタウロスの狙いがガキに変わった途端に兎みたいに壁際に追いつ込まれちまつてよお！可哀想なくらい震え上がっちゃって、顔を引きつらせてやんの！」

ベルが顔を真っ赤にしながらプルプルと震えている

「ふむう？それで、その冒険者どうしたん？助かったん？」

「アイズが間一髪のところまでミノを細切れにしてやったんだよ、な？」

「……」

そんな話をしながらまだ獣人は笑う

「そんでそいつ、あのくっせー牛の血を浴びて…真っ赤なトマトになっちまったんだよ
！くくくっ、ひーっ、腹痛ええ……！」

「うわあ……」

「アイズ、あれ狙ったんだよな？ そうだよな？ 頼むからそう言ってくれ……！」

「……そんなこと、ないです」

よかった。狙っていてここで笑い者にするためにしていたならばLv5だろうがLv6だろうが男だろうが女だろうが関係なくぶん殴っていた

「それにだぜ？ そのトマト野郎、叫びながら仲間置いてどっか行っちゃまってっ……ぶくくっ！ うちのお姫様、助けた相手に逃げられてやんのおっ！」

「……くっ」

「アハハハハッ！ そりや傑作やあー！ 冒険者怖がらせてしまうアイズたんマジ萌えー
!!」

「ふ、ふふふっ……ご、ごめんさい、アイズっ、流星に我慢できない……！」

「……」

「あああん、ほら、そんな怖い目しないの！ 可愛い顔が台無しだぞー？」

どっと笑いに包まれる。とりあえず静かになってしまっているベルに声をかけた

「おいベル坊、大丈夫か？」

「……」

返事がない。頭に入っていないようだ

「しかしまあ、あんな情けねえヤツを目にしちまって胸糞悪くなったな。野郎のくせに、泣くわ泣くわ」

「…あらあゝ」

「ほんとザマアねえよな。つたく、泣き喚くくらいだったら最初から冒険者になんかなるんじゃねえつての。ドン引きだぜ、なあアイズ？」

「…」

「自分一人も守れねえ、ああいうヤツがいるから俺達の品位が下がるつて言うかよ、勘弁して欲しいぜ」

うーん。そういえばそうだな、明日あたりにベルに修行つけてみるか

「いい加減そのうるさい口を閉じろ、ベート。ミノタウロスを逃したのは我々の不手際だ。巻き混んでしまったその二人組に謝罪することはあれ、酒の肴にする権利などない。恥を知れ」

「おーおー、流石エルフ様、誇り高いこつて。でもよ、そんな救えねえヤツを擁護して何

になるってんだ？それはてめえの失敗をてめえで誤魔化すたもの、ただの自己満足だろ？ゴミをゴミと言って何が悪い」

……ベルの事をゴミだと？

「これ、やめえ。ベートもリヴェリアも。酒が不味くなるわ」

胸のない女性がそう言うもベートと呼ばれた獣人はやめない

「アイズはどう思うよ？自分の目の前で震え上がるだけの情けねえ野郎を。あれが俺達と同じ冒険者を名乗ってるんだぜ？」

別にいいだろ？なりたいたいと思っただからやってんだから

「……あの状況じゃあ、しょうがなかったと思います」

「何だよ、いい子ちゃんぶっちゃまって。……じゃあ質問を変えるぜ？あのガキと俺、つがいにするならどつちがいい？」

「……ベート、君酔ってるの？」

「うるせえ。ほら、アイズ、選べよ。雌のお前はどつちの雄に尻尾振って、どつちの雄に滅茶苦茶にされてえんだ？」

「……私は、そんなことを言うベートさんとだけは、ごめんです」

「無様だな」

「黙れババアツ。じゃあ何か、お前はあのガキに好きだの愛してるだの目の前で抜かさ

れたら、受け入れるってのか？

はっ、そんなわけねえよなあ。自分より弱くて、軟弱で、救えない、気持ちだけが空回りした雑魚野郎に、お前の隣に立つ資格なんてありはしねえ。他ならぬお前がそれを認めねえ

雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシユタインには釣り合わねえ」

ベルが立ち上がり、外へ飛び出してしまった

「ベルさん!？」

シルさんが止めようとするがベルは全く止まらず行ってしまった

「…追いかけて良いのかい?」

「…ああ、ベル坊なら帰ってくる。それよりも、さっきの言葉に撤回して欲しい一文があつたから、言ってくる。ああこれはお題な?」

そう言つて女将さんにお金を渡すと席を立ち上がり、「ロキ・ファミリア」の元へ向かつた

くベル坊く

(畜生、畜生、畜生！)

ベルは走る。その間にもあの青年の様々な言葉が頭をよぎる中、一つだけ特に残っている言葉がある

『自分一人も守れねえ』

そう、オラリオ（オラ）に来る決心がついたのはヤミさんがいたからだ。生きていられたのはいつもこまった時に救ってくれた兄さん（英）がいたからだ

自分は何も出来ていない。青年の言うとうり自分じゃあの人の隣に立つ事なんて出来やしない

『ベル坊、あの人に近づける方法を教えてやろうか？』

それはな……強くなれば良いんだよ』

初めてあの時ヤミさんの言っていたことを理解した。『当たり前』だ。それ以外にあの人に近づく方法などありはしないのだから

強くなければあのところかヤミさんの隣にも立つ資格などない

故に目指すはダンジョン、目指すは高み。釣り上げた瞳に涙を溜め、ベルは闇に屹立する塔に向かってひたすら走った

第8話喧嘩（一撃KO）

「アイズ」

「ベルさん!？」

一人の影が決河の勢いで店外へと消える。瞬く間の出来事に、酒場にいた大半は何が起きたか把握出来ずにいた

困惑したざわめきがあちらこちらから燻り始める

「ああん? 食い逃げか?」

「うっわ、ミア母ちゃんのところでもやらかすなんて……怖いもん知らずやなあ」

周囲と同じ反応をするベート達を尻目に、アイズは一人立ち上がる。鍛え抜かれた動体視力は弾丸のごとく疾走した影の正体を詳細に捉えていた

（あの時の……）

店の出入り口まで進んで、柱に手をつきながら外を見回したが、少年の姿は見えない
かった

（ベル……）

少女が叫んだ名前を小降り唇に乗せる

背中を叩く仲間達の呼び声より、その名前がやけに自分の胸へと響き渡った

「ほいほい、アーズう。何やってるんー？」

「……」

先程の音頭を取っていた女性が背後に立ち、両腕をアーズの腹部に回して来る。息がかかるほど体を密着させ、恥骨をアーズの臀部に押し付けて来た

この神物じんぶつ…同性でなかったら殴り飛ばしているところだが、流石に彼女へ乱暴する事はできない。

…と一瞬の思考が過ぎりつつも、アーズは困った顔で回された手を取ってひねり、肘鉄、相手が後退したところでその頬っ面へ張り手をかました

「ちよ、めっちゃ乱暴しとるやん…!!?表情と行動が全く噛み合っていないよアーズたん
……!?!」

「変なことしないでください」

もみじのできた頬を抑え涙目になる相手はプルプル震えていたかと思うと、すぐに復活して「クーデレなアーズたん萌えー!!」と叫び出した。非常にそれから目を背けたくなった

「まあまあ、そんな顔せんで。ベートと飲みたくなかったんなら、ミア母ちゃんに頼んで店の外に吊るしてもらおうから」

そう言われるがまま中に入るとリヴェリアがベートに何か質問していた

「そういえば、『二人組』と言ったな、もう一人はどうなったのだ？ 話の内容では生きているのは分かるが…」

リヴェリアの言葉にアイズはハツとしたあの少年がいるのならあの木刀持っていた人もいるかもしれないと、あの少年に謝る機会を与えてくれるかも知れないと

「ああそういえば、そのもう一人は何でミノタウロスを相手にしていたと思う？」

「何で相手していたの？」

「…木刀だ」

「………は？」

アイズが探す中、ロキを含め話を聞いていた全員が変な声を出す。ベートが話を続ける

「木刀一つでミノタウロスと張つてた。Lv1の雑魚が…だ。木刀は砕けたが、足止めはしっかりとしてたぜ？ アイズも見てた

「それでアイズがどうやってそれほどの力をつけたか聞いたら断つて、逃げ出しやがった」

「追わなかったの？」

「いや、とっ捕まえる気でいたんだが、力が急に抜けて…それで俺達二人から逃げやがっ

た」

アイズは店の中をしばらくキョロキョロしている

(…いた)

見つけた。黒目黒髪の青年、なんだか雰囲気か怒りを表しており、どんどん「ロキ・ファミリア」に向かって歩いてる。そしてベートに近づくと声をかけた

「ビーも、トマト野郎の仲間です」

全員がその青年には目を向けた。少し沈黙した後、最初に口を開いたのはベートだった

「なんだあ？お前が出てきたって事はさつき出て行ったのはトマト野郎か！はっ、恥ずかしくなつて逃げちまったか！つくづく情けねえ野郎だ！

そんでお前は何しに来た？まさかさつき言葉に文句でも言いに来たか？」

ベートが笑う。それに対して青年は話しだした

「まあそうなんだけど…9割くらいは文句ないな。お前は間違つてない。あいつとは3年くらいの付き合いだが…まあよくドジ踏むし、弱いし、兎だし、臆病だし、今まで甘やかして来たから明日からビシバシ鍛えてやろうと考えてたところだ」

「ハツハツハ」と青年は一人で笑った後、「でもな？」と続ける

「見ての通り俺達は弱小ファミリア、いつも金欠、ダンジョンで稼いでもお前達と比べれ

ば大した金額も稼げてはいない、五千ヴァリス稼げたら喜ぶレベルだ。それでもあいつは毎日めげずにダンジョン潜ってたんだよ。自分の事を弱いと自覚してる奴がだ。お前はそんな俺の弟分家族の事を『ゴミ』と言ったよな？そこを撤回しろ」

「はっ、そんな事か？さつきも言ったがゴミをゴミと言って何が悪い？最終的に悪いのは弱いトマト野郎だろ？」

俺の間違ったところは何処にある？」

ベートがそう言うとき青年は目を冷たくし、言い放った

「いいからさつきと撤回しろよ。ゴミ野郎」

その言葉を聞いてベートの怒りに火がついた

「…今なんつった？」

「うん？怒っているのか？えーと、なんだつたか…」

…そうそう！『ゴミをゴミと言って何が悪い』…だつたな？」

「ちよつと表出ろ!!!」

そう言うときベートが外に足を進め、青年もそれに続く

止まっていたアイズを含めた「ロキ・ファミリア」の全員が慌てだした

「あの人、L.V.1ですよね!?!助けないと!!」

「フィン、あのままじゃあの青年が死ぬぞ」

「…ロキ」

「やめい、男の勝負に水をさすのは野暮ってやつやろ？ベートも殺しはせんやろうし。それに…なんか面白い事が起きそうな気がすんねん」

ベート達の方は準備が整ったらしい

「一発だけ受けてやる!!!その後お前みたいなLv1の雑魚が俺をゴミと言った事を後悔しやがれ!!!」

「おっそうかそうか。んじゃ、お言葉に甘えて…」

くヤミさんく

数日前の事だ。ワンピースを読んでいた俺はある事を思いつき、試したくなつた

「ベル坊、少し試したい事があるから付き合ってくれ」

「うん、良いけど何するの？」

「デコピン」

「…え？」

俺の言葉にベルが頭の上に『?』が付きそうな顔をする

「まあ気持ちは分かるが取りあえずやるぞ？」

「う、うん」

ベルは目を瞑る。俺は何もしていない指でベルにデコピンをした

「…痛いかな？」

「…ちよつと痛いけど大丈夫」

「んじゃ次だ」

「うん」

さっきので安心したのかベルは目を開けた状態で待っている。俺はさっきとは違い、デコピンをする指を闇を纏わせデコピンした。するとどうだろう

「イツツツツタアアアアツツツ!!!」

さっきはなんともないとやっていたベルがおでこを抑えて転げ回っている。数分で治ると涙目になりながら問いかけてきた

「…何したの？」

「ああ、どうやら俺の魔法、冒険者にとって脅威でしかないらしい」

「どう言うこと？」

俺はLv1の拳を握りしめる。ニヤニヤと笑う獣人に許された一撃を喰らわせるた

めに

『無効化する』ってあつたる？あれは魔法も無効化できるが…』

俺は闇を拳に纏わせる。許された『一撃で終わらせる』ために

『ファール+神の恩恵』も例外じゃないらしい』

その拳を引きしぼり、全力で殴りつけた

『闇で触れて一瞬でも触れている間、『神の恩恵』が消えて、それで得た全てが消える。つまり…』

獣人に当たる普通はLv5がLv1の全力の一撃を受けたところでなんともはいはずだが…

『冒険者に対して俺の闇は^{攻撃}防御無視の一撃必殺になる』

そこはピクリとも動かず気絶したLv5の敗者と当然と言った表情のLv1の勝者がいた。辺りがシインと静かになる。俺は『フーツ』と息を吐きだした

「あんまり見下して下ばかり見てると極稀にこうなる事があるかもだから、気をつけて

…聞いてないか…

…【ロキ・ファミリア】の皆さんすいません。団員一人気絶させてしまいました」
そう言う小人族の人が答えてくれた

「いいよ。ベートも悪いところはあつたんだし、気絶しているベートに変わって非礼を詫びよう」

「いやいいですよ。もうスカツとしましたし、俺はこれで失礼します」

そう言つて帰ろうとすると「まてい」と後ろから声がして止められる。振り返ると胸のない女性がいた

「アンタ、名前とどこのファミリアに所属してるか教えてくれるか？」

「…ヤミ・カズヒラ、所属は「ヘステイア・ファミリア」です」

それだけ言つて足早にその場を後にすると後ろから『あのドチビの?! アイツ凄いの拾いよつたな…』と聞こえた

第9話帰ってきた

(うーん。おかしいな?ベルはダンジョンに向かったと思うんだけど…読み間違えたか?)

現在俺はダンジョンの5階層に来ている。数時間モンスターを狩りながら探しているが見つからない。教会に帰ったかもと思いつくかと思うと6階層へと続く道があった。そしてそこから足音がコツコツと聞こえる。俺はゆっくりと覗きこむように見ると

「ベル坊!!」

ベルが体中血だらけになりながら歩いて来ている

「ヤ…ミ…さん…」

弱々しく呟くベルにすぐに近づくと肩を貸して歩き出す

「おいおい、普通に予想外の事してくれんじゃねーか。まさかあのベル坊が俺も行ってなかった6階層に行くとはな〜」

「…ごめん」

「いや、怒っていないから謝らなくていい、むしろ喜んでるぞ?ベル坊一人で行って、生き

て帰ってこれたじゃねーか。今はそれだけで十分だ」

「…ヤミさん」

ベルが小さな声で聞いてきた

「僕…強くなれるかな？ 雑魚じゃない、あの人に釣り合うだけの強さになれるかな…？」

ベルの質問に即答で答えた

「知らん」

「…え？」

ベルから変な声が聞こえたが構わず続ける

「人間諦めも大切だが、それはやってからの話だ。お前はまだ何もやってない。あの人に釣り合うだけの強さになれるかは何かをやった時にしか分からん」

そう言うのとベルは何かを思い出したかのように俺に話しかけて来た

「バレたらエイナさんに怒られますね…」

「…やめてくれ。流石にもう説教は嫌だぞ？」

ベルの言葉に冷や汗をかきながらダンジョンから出た。その時にはちようど朝日が
出ている俺達を優しく照らしてくれていた

「ヤミ君にベル君!! 一体何処に…ベル君?!」

教会に入るとヘスティア様がいたこちらを見るとプンプンと怒っていたが、傷ついたベルを見た途端に血相を変えて迫り寄ってきた

「どうしたんだい、ベル君のその怪我は!?! まさか誰かに襲われたんじゃあ!?!」

「いえ、そういうことは、なかったです……」

「じゃあ一体どうして?!」

「……ダンジョンに潜ってました」

「ヤミ君は!?!」

「ダンジョンでモンスターを狩りながらベル坊を探し回ってました」

俺達の一言にヘスティア様は哑然とすると

「ば、馬鹿っ! 何を考えてるんだよ!?! そんな格好のままダンジョンに行くなんてっ

……しかも、一晩中!?!」

「……すいません」

今思えばベルも俺も防具を着ていない。そんな裸同然の状態で一晩中モンスターと戦い続けたのだ

俺は5階層までしか行ってない上にそこまで大量のモンスターと対峙していなかったためそこまで大した傷はないが6階層、その上ソロでベルが行った結果がこ

れだ

「…ベル君はどうしてそんな無茶をしたんだい？そんな自暴自棄のような真似、君らしくないじゃないか？」

「……」

「…ヘステイア様、聞かないであげてください。色々あったんです」

無言になったベルの代わりに俺が答えた

「…わかったよ。仮にベル君に無理矢理聞いたとしても、意外と頑固だからね。それよりもシャワー浴びておいで。血はもう止まっているみたいだけど、傷の汚れを落とさないと。そのあとすぐに治療しよう」

「……はい、ありがとうございます」

とりあえずベルをシャワー室まで運んでいる間、ヘステイア様が思い出したように口を開いた

「ベル君、君はベッドに寝ること、いいね？」

「いいんですか……？」

今ベルに必要なのは休息だからな。よし俺はダンジョンに出稼ぎ…

「ヤミ君は今日は絶対寝る事!!」

「…え？」

ヘステイア様の衝撃的な一言に今度は俺が唾然とした

「何を驚いているんだい!!そこまで大した傷じゃないとはいえ一晩中、寝ずに探し回ったんだろう?!」

「いや、そうですが…俺は全然大丈…「寝なさい」…はい

…：そういえばヘステイア様は何処で寝るんですか?」

そう言うヘステイア様のツインテールがピクリと動いた。何かイタズラを思いついた顔だ

「ボクもベル君と同じベッドで寝させて貰おうかな?君達を探すために散々駆け回ったんだ、もうヘトヘトだよ。…フフ、まさかあ断つてくれないよかねえ?」

ああ、いつものベルなら断れないなこれは…さて、ベルの反応は…

「ああ、そうですね。神様も疲れてますよね。じゃあ、すぐに一緒に寝ましょう」
「…：…なぬっ?!」

断れないんじゃないやなくて断らなかつたか…もうほとんど頭回ってないな

「神様、ヤミさん…」

「にや、にやんだいっ?」「どうしたベル坊?」

「…僕、強くなりたいです」

まっすぐとした眼差しを俺達に向けて言ってきた。俺はベルに言葉を返す

「…きつと強くなれるさ、ベル坊なら」

ヤミ・カズヒラ

L v l

力：E 4 8 3 ↓ D 5 6 4

耐久：G 2 1 0 ↓ G 2 3 1

器用：F 3 2 6 ↓ E 4 0 4

敏捷：G 3 5 1 ↓ E 4 0 1

魔力：G 3 6 7 ↓ G 3 9 1

《魔法》《スキル》そのまま

丸一日寝たあと、起きたのは翌日の朝

ベルの絶叫で朝を迎え、今はとりあえずベルの「ステイタス」の更新をしている。先に俺からやってもらうと、何やら偉業を成したようでランクアップが出来るらしい。

だがこうなるというでもランクアップ出来るらしい、ヘステイア曰く世界最速でのラ

ンクアツプらしい

だが『もうちよつと鍛えてからがいい』と言って次にベルを見てもらっている
 多分俺と同じくらいかそれ以上の成長をしているだろうベルの数値を見てハステイ
 ア様は固まってしまっている

どれどれと気づつかれないようにそつと【ヒエログリフ神聖文字】を読んでみた

ベル・クラネル

L v I

力：H 1 2 0 ↓ G 2 2 1

耐久：I 4 2 ↓ H 1 0 1

器用：H 1 3 9 ↓ G 2 2 5

敏捷：G 2 2 5 ↓ F 3 1 3

魔力：I 0

《魔法》《スキル》そのまま

更新した俺の数値より上がっている、ベルが6階層であんな血だらけになるまでやつ
 たんだから納得だが…俺、近々ベルに抜かされそうだ…いや、ベル以上に頑張れば…！

「ベル君、口頭で「ステイタス」の内容を伝えていいかい？」

「あ、最初。僕は構いませんけど……」

ヘステイア様がベルに確認を取ると《スキル》の内容を伏せて上がり具合をベルに伝えると質問してきた

「とまあ、熟練度がヤミ君以上に凄い勢いで伸びているわけ。何か心当たりはある？」

「い、いえつ、全然……」「いやあるだろ?」……あ

俺がベルに一言うと気づいたようだ

「何?」

「い、一応……昨日は6階層まで行っただけですけど……」

「ぶっ!? あ、あふおーツ!! 防具もつけないまま到達階層をふやしてるんじゃない! ヤミ君が見つけられなかったのはそれが原因か!!」

「ご、ごめんなさい!!」

ヘステイア様からの説教がベルを襲った。…ベルよ。俺がエイナさんから受ける説教はこんな生温いものじゃないぞ

「……これはボク個人の見解に過ぎないけど、ヤミ君も凄いが君にも才能があると思う。冒険者としての器量も、素質も、君は兼ね備えちゃってる……君はきつと強くなる。そして君自身も今より強くなりたいと望んでいる」

「……はい」

「約束してほしい、無理はしないって、この間のような真似はもうしないと、誓ってくれ。ヤミ君もだ」

「……ぼ、僕は……」「……」

「強くなりたいうっていう君の意思をボクは反対しない、尊重もする。応援も、手伝いも、力も貸そう。……だから」

へステイア様はゆっくりと俺達に願いを伝える

「……お願いだから、ボクを一人にしないでくれ」

ベルは俯いて自己の内面に潜る。長い沈黙が訪れる

「……はいっ」

ベルからいい返事が帰る。その顔は笑顔で、偽りがないと信頼できる笑顔だ

「無茶、しません。頑張つて、必死になって強くなりますけど……絶対、神様を一人にしません。心配、させません」

「その答えが聞ければ、もう安心かな。ヤミ君は……」

へステイア様の視線が俺に向く

「……俺が女泣かせる人間に見えるか?」

「フツツそうだね。そこは信頼できるからね、君は」

『そこは』って何だ『そこは』って…

「…よしっ今日は宴だ!!!ご馳走作るぞ!!!」

「本当!?!」

俺の言葉にベルが目を輝かせる。だが…

「すまないっ!!!ボクは今日の夜…いや何日か部屋を留守にするよっ。構わないかなっ?」

へステイア様がそう謝ってきた。

「えっ?!あ、わかりました、バイトですか?」

「いや、行く気は無かったんだけど、友人の開くパーティーに顔を出そうかと思っただけ。久しぶりにみんなの顔を見たくなったんだ」

それなら仕方ないと俺達はOKを出した

「…ベル君にヤミ君、もしかしてダンジョンに行くのかい?」

「そのつもりなんですけど…やっぱりダメですか?」

「ううん、いいよ、行つてきな。ただし、引き際は考えるんだよ?ヤミ君もちやんとベル君を見ていてくれよっ!」

へステイア様が俺にそう言うが…

「…すいませんその事なんだが…そろそろベル坊も強くなってきたし、ソロで潜ってみ

「たいと思うんだがいいか？」

「…え？」

第10話今回はベルがほとんどを占めていますね

ベルに負けないように一気にソロで7階層まで来た。5階層よりも溢れ出るモンスターを切って切って切りまくった。三十数体目を切るとあることに気づいた

「俺、【妖刀】をずっと持つてるな」

思い返せば【妖刀】は必ず俺の近くにある。酒場の時も、今も…

「そういえば、どんな事があっても使い手から離れる事はないとか言ってたが…」

試しに【妖刀】を置いて行こうとしてみた

「…あれ？」

無意識に勝手に動いて置いた刀を構え手に持ってしまった。これは本物だ

「おいおい、これ呪いの類いじゃねーか…刃こぼれしたらどうすんだよ…直してる近くで寝泊まりとか嫌だぞ?…やべ、もう三十体くらいこれで斬り捨ててた…」

そう言っただけで刀身を見てみると何も変わらず刀身は綺麗だった。三十数体も切ってたから傷くらいについてもおかしくはないのに…

「…もしかして…いやでもなあ…」

ある事を考え実験したくなった。だけでもし失敗したらさっき言ったように直して

る近くで寝泊まりする事となる

「背に腹はかえられない…」

決心した俺は

ギインツ!!!

ダンジョンの壁を切りつけた。金属が放つ嫌な音が耳を通る。壁は多傷ついていない、俺の刀は…

「刃こぼれどころか傷一つなしかよ…」

刀は変形せず、刃こぼれもない。試しに数十回壁を切りつけたがやはり変化はなかった

「認めた奴しか刀は抜けない…傷がつかないと言う事は鍛冶屋に頼んで直す必要もない…絶対に離れない…」

この【妖刀】って主人に一途な刀なのか？

だが変化がないと言う事は砥石で研いでみても切れ味は一定、故に主人の剣の腕によつて強さが増す武器つてところか…

「面白い」そう言おうとするとモンスターが切っていた壁から溢れ出した

「お、丁度いい。出てきていきなりで悪いが切り刻ませてもらうか!!!」
そう言つて新しい刀を持つてまたモンスター狩りだした

くベルく

現在僕はヤミさんに「お金は払つておいたけど勝手に逃げ出したお前をシルさんが仕事そつちのけで探しに行つたんだぞ？礼するなり何なりしてからダンジョンに行け、わかつたか？」と言う訳で『豊穰の女主人』の前に立っていた

「ちよつと気まずいなあ…」

少し悩んでから意を決して酒場に足を踏み入れた。カランカランと、ドアをくぐつた頭の上で鐘が鳴り響く

「まだミヤー達のお店はやってないのニヤー！」

店内でテーブルにクロスをかけていたエルフの定員とキャットピープルの店員が、ベルにすぐ気づいて対応してきた

「すいません、僕はお客じゃなくて……その、シルさん……シル・フローヴァさんはいらつしやいますか？」

僕の言葉に少し目を丸くした二人は、何かに気づいたようにこちらを見る視線を改めた

「あああ！あん時の食い逃げニヤ！シルに貢がせるだけ貢がせといて役に立たなくなつたらポイしていった、あんクソ白髪やろうニヤ!!」

「貴方は黙っていてください」

「ぶニヤ!?!」

「失礼しました。すぐにシルとミア母さんを連れてきます」

「は、はい……」

獣人の少女の襟を掴み、ズルズルと引きずっていくエルフの定員を汗と一緒に見送つた後、手持ち無沙汰になつたベルは店内をぐるりと見る

「ベルさん!?!」

階段を急ぎ足で下りる音がして、すぐに店の奥からシルさんが現れた

「一昨日はすいませんでした。勝手に出て行つて……」

「……いえ、大丈夫ですから。こうして戻ってきてもらえて、私は嬉しいです。…そういうえびヤミさんは?」

「今日から僕達はバラバラでダンジョンで戦うので、先に行つてしまいました」

シルさんは「そうですか」と言うと次に「少し待っていてください」とキッチンの方へと消える

戻つてきたシルさんは大きめのバスケットを抱えていた

「ダンジョンへ行かれるんですよね？よろしかったら、もらっていただけませんか？」
「えっ？」

「今日は私達のシエフが作った賄い料理なので、味は折り紙つきです。その、私が手を付けたのも少々あるんですけど…」

「いえ、でも何で……」

「差し上げたくなったから、では駄目でしょうか？」

少し首を横に傾けたシルさん、照れ臭そうに苦笑する

そのどこか優しい表情を見て、鈍感な僕でも察することができた

元氣付ける……いや、応援してくれているのか

「…すいません。じゃあいただきます」

彼女の気持ちに気付いた僕は相好を崩してバスケットを受け取る

「坊主が来てるって？」

ぬう、とカウンターバーの内側にあるドアから出て来たのは女将さん…ミアさんだった
突如として現れたえもいえない存在感に、僕は少し後退してしまう

「シル、アンタはもう引っ込んでな。仕事ほっぽり出して来たんだろう？」

「あ、はい。わかりました」

シルさんがお辞儀をして戻っていく傍ら、ミアさんは豪傑な笑みを浮かべて僕の旨をどついて来た

曰く、「このまま帰ってこなかったらこっちからけじめをつけに行つてやった」とか、「後一日遅れて来たら久しぶりにアタシのスコップが轟き叫ぶところだった」だとか

ヤミさんありがとう。命を救われた

「シルには改めて礼を言つときな。アンタの仲間が払つたとは言え。ウチはアタシも含めて血の気が多い奴等だから、アレが説得していなかったら、アンタ今頃は湖に沈んでるよ」

「……」

「シルは飛び出したアンタを追いかけて行つたみたいだけど、結局会わなかったんだろ？ 塞ぎ込んで帰ってきたシルを見て、ほれ、あのエルフのリユーが真剣持つて出て行きそうになつてね。止めるのに一苦労したもんさ」

エルフ好きの僕はどうやらエルフの事を誤解していたらしい

「…坊主」

「何ですか？」

「冒険者なんてカッコつけるだけ無駄な職業さ。最初の内は生きる事だけに必死になつていればいい。背伸びしてみたつて碌なことは起きないんだからね」

あの時のミアさんもカウンターにいたから、僕の事情を見通しているのだろうか？ 彼女がニツと笑みを浮かべる

「最後まで二本の足で立っていた奴が一番なのさ。みじめだろうが何だろうがね。すりゃあ、帰ってきたソイツにアタシが盛大に酒を振舞ってやる。ほら、勝ち組だろ？」

ミア、お母さん……っ！

「気持ち悪い顔をしてるんじゃないよ。そら、アンタはもう店の準備の邪魔だ、行った行った」

くるりと回転させられドンと背中を押された。呼吸が半分止まりながらも、僕も感謝の念は尽きなかった

【ロキ・ファミア】のあの獣人の言葉が、今は純粹な燃燒材に変身していた。今できること、最高速度で、無茶なく、後は必死に生きる

「坊主、アタシにここまで言わせたんだ、くたばったら許さないからねえ」

「大丈夫です。ありがとうございます！」

「そうかい。ああそうそう……」

ダンジョンに行くこうとした僕にミアさんがまた話しかける

「アンタの仲間に伝えときな。『今度はある無謀なことはするんじゃないよ』ってさ」

「あの、それはどう言う意味でしょうか？」

「なんだい、聞いてないのかい？ アンタの仲間がアンタの事を話してたアイツに喧嘩売って、それで勝っちまったのさ。今じゃアイツの事はオラリオ中で噂になってるよ。アンタ、いい仲間を持ったね」

僕は耳を疑った。あの「ロキ・ファミア」の人に？ あの獣人の人に？ Lv5に？
もしかしたら殺されていたかもしれない戦いを挑んだ？

「……帰ったらヤミさんにお礼を言わないと」

そう言っつて僕はダンジョンに向かって走り出した

「へくしつ……なんだ？ 誰か俺の噂をしてんのか？ それとも【妖刀】の呪いか何かか？ ……お、モンスター発見！」

第11話【神の宴】だけど、コレジャナイ感がやばい

夜

30Mはくだらない高さの象の頭を持つ巨人像こそ【ガネーシャ・ファミリア】本拠、『アイアム・ガネーシャ』だ

入り口は胡座をかいた股間の中心、趣味の悪い本拠だ

その中はあらゆる【ファミリア】の神々が『神の宴』に参加するために集まっていた『神の宴』とは、つまるところ、下界にそれぞれ降り立った神達が顔を合わせるために設けた会合だ。どの神が主催するか、日程はいつなのか、そのような決まりは一切ない。ただ宴をしたい神が行って、ただ宴に行きたい神が足を運ぶ。神達の気まぐれと奔放さの一面がここに示されていた

【ガネーシャ・ファミリア】はオラリオの中でも指折りの【ファミリア】なので、この迷宮都市内で居を構えている神達にお呼びがかかっていた。ヘステイアもその一人である

「ハグハグツ…ああ、【購入】のあるヤミ君が来てからボクの【ファミリア】は食事には困らないんだよなあ」

ヘステイアは今、小さい体で食べ物パクパク食べていた。ベル、ヤミが来る前ならば日持ちの良さそうなものをタッパーに詰め込んでいたのだが、「購入」があるヤミが料理を振る舞うようになってから食事の量、質、バリエーションが増えたため、食事には困ってはいないが食べられるだけ食べて帰るつもりだ

「元気にしてる？ヘステイア？」

「むぐ？むつ！」

ヘステイアは声をかけて来た神を見る。そこには右眼に眼帯をした友達がいた

「ヘフアイストス！」

「ええ、久しぶりヘステイア。元気そうで何よりよ」

「いやあ良かった、やつぱり来たんだね。ここに来て正解だったよ」

「何よ、言つとくけどもうお金はもう一ヴァリスも貸さないからね」

「失敬な！ボクにはとびきり優秀な眷属が出来たからお金はまだだけど、とびきり美味しい食事くらいは普通にできるさ！」

堂々と、ハッキリと、胸を張ってヘステイアはそう言う。それに対してヘフアイストスは

「それはさつき言っていた【購入】に関係しているのかしら？」

やばい、聞かれていた。とヘステイアは動揺する。それは行動にも現れており

「あ、あれ〜？ボクそんなことを言ったかな？」

明らかに動揺した口調、泳ぐ目でそう言うのとヘファイストスは少し笑う

「まあ、貴方がちゃんとした子を迎えたって言うのは私としても嬉しいわね」

「へ、ヘファイストス……！」

友人からの優しい言葉にヘステイアは涙がこぼれそうだった。そんな中、コツコツと靴を鳴らす楚々とした音が、ヘファイストスの後ろから近づいて来た

「ふふ……相変わらず仲が良いのね」

「え……フ、フレイヤっ？」

現れたその女神は、容姿の優れた神達の中でも群を抜いていた。一線を画してしまっていると言ってもいい

そんな美に魅入られた神、フレイヤが、長い銀髪を揺らしてヘステイアの前までやって来た

「な、なんで君がここに……」

「ああ、すぐそこで会ったのよ。久しぶりー、って話していたら、じゃあ一緒に会場回りましょうかって流れに」

「か、軽いよ、ヘファイストス……」

「お邪魔だったかしら、ヘステイア？」

「そんなことはないけど……僕は君のこと、苦手なんだ」
「うふふ。貴方のそういうところ、私は好きよ?」

そんな話をしてるとまた別の神がそこにやって来た

「おい! ファーイターん、フレイヤー、ドチビー!!」

「あつ、ロキ」

「何しに来たんだよ、君は……!」

「なんや、理由がなきや来ちやあかんのか? 『今宵は宴じゃー!』 っていう乗りやろ? むしろ理由を探す方が無粋っちゅうもんや。はあ、マジで空気読めてへんよ、このドチビ」

「……………!!」

「凄い顔になつてるわよ、ヘスティア」

自分より頭二つたかい神、ロキに馬鹿にされたヘスティアは顔を引きつらせる

彼女に対してもはやヘスティアが語る言葉は何もない。この女は、敵だ

「本当に久しぶりね、ロキ。ヘスティアやフレイヤーにも会えたり、今日は珍しいこと続きだわ」

「あー、確かに久しぶりやなあ。…ま、久しくない顔もここにはおるんやけど」

糸目がちになりやすい瞳を薄く開いて、ロキは銀髪の女神にニヤニヤと視線を送った。フレイヤーは給仕から頂戴したグラスを口元に、目を瞑って微笑を崩さない

「なに、貴方達どこかで会っていたの？」

「先日にもちよつと会ったのよ。と言っても、会話らしい会話はしていないのだけど」

「よく言うわ、話しかけんなつちゆうオーラ、全開で出しとったくせに」

「ふーん。あ、ロキ、貴方の【ファミリア】の名声よく聞くわよ？あと、汚名も」

「ん？汚名？」

フレイヤの一言にヘスティアが反応した

「ええ、聞いてない？最近【ロキ・ファミリア】のLv5、『ベート・ローガ』が一撃で、

それもLv1の冒険者に負けたって言う噂よ」

「それは凄いな…その冒険者…どこの【ファミリア】の子なんだい？」

ヘスティアがフレイヤの話聞いてそう尋ねるとロキが怒った顔で言った

「ドチビの【ファミリア】じゃボケエエエエエエエツ!!!」

「…えっ？」

ロキの反応に対しヘスティアは訳がわからないと言った表情で答える。当たり前だ

ベルにヤミ、どちらからもそんな報告は受けてないのだから

「しらばつくれんな！ヤミ・カズヒラって言う黒髪黒目の男から聞いたるやろ!!」

「ヤミ君が!!聞いてないよそんな報告!!」

「嘘……やないやと?!」

神には嘘が通用しないため、ヘステイアが嘘をついてないのは確かだ。ロキはヘステイアに酒場であつたことを話すと、思い当たる所があつた

もうすでにランクアップ出来る状態であることだ

(ヤミ君、あれほど目立つなど言っておいたのに：説教は確定だね)

「へくしっ」

「ヤミさん風邪？」

「いや、別にそう言う訳じゃないんだが、エイナさんに怒られる時の寒気がした」

「さあドチビ。ヤミ・カズヒラについて話してもらおうか？」

そう言つてロキがヘステイアにずいっと寄る

「ぐ、具体的にはどんな風に勝つたんだい？それを聞かないとどう言う物か？」

そう言うヘステイアだが、大体察している《魔法》の【闇魔法】だろうと考えている。ベルがヤミのデコピンされた箇所が赤くなつてゐるのを見て説明を受けたからだ

「黒い付与魔法っぽいのを腕に纏わせてぶん殴つたら一撃や。：言つとくけど、少なく

ともあれについて教えてくれな許さんし、逃がさんかな？ウチの子がやられたんや、一つくらい聞く権利はあるやろ？」

闇魔法だと確信すると同時にヘスティアは仕方ないと口を開いた

「……よしロキつ!!!ゲームだ!!!」

「……はあ？」

ロキは一瞬意味がわからず止まってしまった。他の神は『なんだなんだ？』と見物する。ヘスティアはフフン！と続ける

「君が勝ったら、ボクの知っている限りのヤミ君の全てを話そう！そのかわりボクが勝ったら……」

「……無条件でヤミ・カズヒラを許せと？」

「そうだ！」

それを聞いてロキは考えるそぶりをすると返事を返す

「……わかった、いいで。それじゃ何で勝負するん？」

「ポーカーさ！」

そう言つてヘスティアはどこからともなくトランプを取り出し見せつけた

「……やる前に何か細工してないか調べさせてもらえるか？」

ロキはトランプを受け取りカードを一枚確認する

「…オーケーや、ファイたんがカード配ってくれるか？」

ヘファイストスはそれを了承するとロキからカードを受け取る。するとヘステイアは右手を上げて言った

「いくよ…【盟約に誓って】!!!」

「…なんやそれ？」

「最近読んでいる書籍に出てくるゲームを始める時の掛け声さ。さあ、ゲームを始めようか！ボクの子供の情報を賭けたゲームを!!」

く数分後く

「なんでやーっ!!!」

「はっはっは!!!」

ロキは膝をつき泣き叫び、ヘステイアは仁王立ちで笑う

勝負は3回。先に2回ヘステイアが勝ったため勝ちは確定していたのだが、ロキの泣きの一回で3回目もやったのだが…

「絶対ズルしてるやろ!!!最初と2回目の連続フルハウスはまだしも、最後にロイヤル・ストレート・フラッシュはないやろ！」

「…証拠はどこにあるんだい？さあ約束は守ってもらおうよ!!!」

「チクシヨーーーーー!!!」
泣き叫びながら走り去るロキをヘステイアはさらに笑った

第12話今回は2700字と少なめです

「フーツフーツ……数が多いと【強奪】が有効なんだが、体力の消費が凄いことになってんな……」

俺の周りにはシルバーバツク、オークなどが周りを囲んでいた

「多対一は俺の得意分野だが、短期決戦型……なんとなく俺の戦い方は勉強できたかな？んじゃ、さっさと離脱う!!!」

【闇纏・無明斬り】!!!」

付与していた闇を逃げ道を塞ぐモンスターに向かって横薙ぎに飛ばす。すると闇の斬撃はモンスターを真っ二つにしながら飛んで行きモンスターは灰になり、魔石が落ちる。だが俺は魔石には目もくれず逃げ出した。モンスター達から奪い取った身体能力を使う逃げの一手は十階層のモンスター達に追いつけるはずなく、俺は余裕で振り切った

「これからはペース配分を考えて動かないと……今までは楽に倒せてきたから問題はなかったけど、数が増えて一人じゃやばくなってきたな……」

そう呟いていると地上とダンジョンとを繋ぐ『始まりの道』に着いた。何も考えず帰るために前だけを見て歩いてみると後ろから聞き覚えのある声がかかった

「あ、ヤミさん」

「ん？ああ、ベル坊か。お前も地上に戻るのか？」

「うん。ところでヤミさんは何階層まで行きましたか？」

「十階層だ。ベル坊は？」

「す、凄いなヤミさん……僕は相変わらず四階層です」

そんな言葉を交わしながら地上に着くと何やら見慣れない光景が目に移る。カーゴの群れだ

「あー、最近聞く『怪物祭』モンスターファイアか？」

「『怪物祭』？」

「よくわからんが『怪物』モンスターとつくんだからモンスターを使った何かの祭り事じゃあないか？」

そう話しているときちょうど一つの檻がガタゴトと揺れる。ベルは少しビクリとしたがカーゴを運んでいる人は何ともなさそうだ

「…確かにモンスターを使ってそうだね」

「だろ？ そうだ、魔石を換金するがベル坊はどうする？」

「僕も行くけどその前にシャワー浴びないと…」

「ああそうだった。忘れた」

そう言つて俺達はシャワー室に足を運び体を洗うと換金所に向かう。途中でエイナさんを見かけたが、なにやら入念に打ち合わせをしているのを見て話しかけるのをやめた

換金した結果、ベルと俺は別々に動いていたおかげか魔石の量が多く、金額はいつもより多い

換金を済ませた俺達はギルド本部を出る

「これで祭りでは遊びまくれるな」

「…どれくらい使う気？」

めちやくちや使う気だと思つていいのかベルがジト目で見てくる

「安心しろベル坊、50000ヴァリスくらいで適当に遊び歩くだけだから。…つーか今までそんなにお金を使ったことないはずだよな？ 刀買った時くらいしかないよな？」

「ははっ冗談だよ。ヤミさんは意外と几帳面だしね」

そう笑うベルが『そういえば…』と話を続け、俺に質問をしてきた

「ヤミさんつて魔法使う時、技の名前を言つてるけど、あれつて何？」

「あー想像魔法つてイメージが重要だろ？ 名前を言いながらだとイメージしやすくてな

…やっぱおかしいか?」

「ううん!むしろかっこいいと思うよ!!!」

ベルが笑顔で答えてくる。マジでいい奴だ…いつまでもその純粋な心をなくさないでほしいな

「ん?おお、ベルにヤミではないか!」

「あ、神様!」

「ミアハ様、おはようございます…:じやなかった…:こんにちは…:あれ?…:こんばんは?」
「ハハハ、どっちかというと今はこんにちはかな?」

俺の悩みに答えてくれた独特の雰囲気をもとつた神様の名前はミアハ様、俺とベルがヘスティアを除いて唯一親交のある神様だ

「そうですか、ありがとうございます。こんにちは、ミアハ様。お買い物ですか?」

「うむ。夕餉のための買い出しだ、神自らな。君達は何を?」

「近々あると言う祭りの話と、ヤミさんが使える魔法について…:イタツ!」

ミアハ様の言葉にベルが答えるが魔法についてまで話そうとしていたためコツンと頭を叩き阻止した

「痛いですよヤミさん…:」

「ベル坊が油断してるとすぐ喋るから…:」

「フハハッ、これは相当な情報を聞いてしまったかな？」

「大丈夫だとは思いますが、言わないでくださると……」

「ははは、安心しなさい。もちろん言う気は無いよ。神身に誓つてね」

「ありがとうございます」

約束してくれるミアハ様にぺこりと頭を下げると次にベルが質問する

「あの、ミアハ様。ヘスティア様のことについて何か知っていませんか？ 2日くらい友人のパーティーに出席されて、その、まだ帰っていないくて……」

「ヘスティアが、か？ ううむ……すまない。私には少しも見当がつかん。力になれそうにない」

神様に謝らせてしまったベルは、滅相もございませんと慌てて手を振った。にしてもあの人ホントとこ行つたんだ？

「パーティーと言うのはガネーシヤの開いた宴で間違いないだろうが……私はその日、宴そのものに出ているなくてな」

「招待はされなかつたんですか？」

「いや、招待はされたんだが、極貧の「ファミリア」を率いる身としては暇がなくてな、先日も酒宴そつちのけで商品調査の助手に勤しんでいたんだ

……おお、そうだ。君達にこれを渡しておこう。できたてのポーシヨンだ」

「えっ!？」

普通に紙袋に入ったポーシオンを差し出してきたミアハ様に俺は耳を疑い、ベルは驚いた

「…いいんですか?」

「なに、良き隣人に胡麻をすつておいて損はあるまい?」

ミアハ様は男前に笑いながらポーシオンを手渡すとすぐ隣をすり抜けていく

「フハハ、それではな、ベル、ヤミ、今後とも我が「ファミアリア」のご鼻屑に頼むぞ?」

「はいっありがとうございます!!」

ミアハ様の後ろ姿に俺達は頭を下げ、見送る。ミアハ様の「ファミアリア」は道具屋、それもポーシオンの専門店だ。俺もベルも日頃お世話になっている

「あっそうだベル坊、俺からもこれを…」

「!?ヤミさん、こんな大金受け取れる訳が…」

そう言つてジャラツと出したのは昨日今日で稼ぎまくった12万ヴァリスのうちの5万ヴァリス。ベルはそれを見ると目を見開いて受け取りを拒否する

「ほら、明日足が治るだろ?六階層とか行くんだろ?これで防具くらいは買ってこい。

俺も5万ヴァリスで俺もマシなの買うから」

残りの2万は祭り用に取っておくと付け足すとベルがゆっくりブルブル手を震わせ

ながら差し出してくるので「遅い」と言って半分無理矢理持たせた

「あ、ありがとう。助けられてばかりだね…」

ははは…とベルは乾いた笑いを浮かべる。

「はあ、助けられてばかりが嫌なら強くなつて俺を助けてくれよ？俺はお前に期待してんだから。ベル」

「……っ！うんっ絶対助けられるくらい強くなるよ！」

俺の言葉に反応してベルは喜んで答えた後、「今日はトンカツ定食だ」と伝えるとベルはまた喜び、早く帰ろうと夕日に照らされていた教会向かって走り出した

第13話色

朝、ベルと共に起きた俺は朝のパンを食べ歯磨きをし、身支度を済ませて外に出る

「…ベル坊どうするよ？朝起きちまったが…防具売つてるとこ開いてないぞ？」

「うーん…少し時間を潰すしか…」

いつも通り起きてしまったため、防具を買うための店は絶対に開いてはない。そのためダンジョンに行こうか悩んでいた

そこに一人の声がかかった

「おいその白黒コンビ〜！」

「白？」「黒？」

見ると見たことある制服を着たキャットピープルの女性が俺達を呼んでいた

「そう言えばここあの酒場か」

「おはようございませす、ニヤ。話し合ってる時に呼び掛けて、悪かったニヤ」

「あ、いえ、大した話ではないので…おはようございませす。…えつと、それで何か僕達に？」

相手もベルも頭を下げると躡けられたようなお辞儀をし、要件を切り出す

「ちよつと面倒ニヤこと頼みたいニヤ。はい、コレ」
「へ？」

そう言つてベルに渡されたのは財布だ。俺もベルも頭の上に『?』を作っていると少女が話す

「黒髪はわからないけど、白髪頭はシルのマブダチニヤ。だからコレをあのおつちよちよに渡して欲しいニヤ」

「あーなるほど分かった。ベル坊、そういう事だ。手伝うぞ」

「え?え?ええ…」

ベルはまだわからないようだ。俺が細かく内容を話そうとするとエルフの人がやつて来た

「アーニヤ。それでは説明不足です。クラネルさんが困っています。カズヒラさんもわかったようなフリをしないでください」

「ん?シルさんが祭りを見に行つたはいいけど財布を忘れて行つたから届けて欲しいと言ふ事かと思つたんだが、違うのか？」

「リユーはアホニヤ、そんなこと話さなくとも黒髪ですらわかる事ニヤア、白髪頭？」

「あ、いえ、今分かりました。…ヤミさん凄いな」

「??」

なぜベルに褒められた？と首を傾げるがベルは無視している。リユーと呼ばれたエルフは話し出す

「それで、どうか頼まれて貰えないでしょうか？私やアーニヤ、他のスタッフ達も店の準備で手が離せないのです。これからダンジョンに向かう貴方には悪いと思うのですが……」

ベルはそれを心良く了承するとそう言えばと俺が口を開いた

「……さつき言つてたけど、怪物祭って今日なのか？」

「はい。興味があるんですか？」

「いや、どんなものなのかと……」

「ニヤら、ニヤーが教えてやるのニヤー！」

まだいたらしいキヤットピープルの女性が怪物祭について話し出した

なんでも、「ガネーシャ・ファミア」のでかい催しらしい、闘技場を丸々使いダンジョンのモンスターを調教するのだそうだ

ちなみにこの祭りで屋台みたいなものがあるのかと聞くとそこそこあるらしい。内心めちやくちや喜んでいた

「闘技場に繋がる東のメインストリートは既に混雑しているはずですから、まずはそこに向かつてください。人波についていけば現地には勞せず辿り着けます」

「シルはさつき出かけたばっかだから、今から行けば追いつけるはずニヤ」
「わかりました」

とりあえずベルはバックパックは邪魔だろうと言われたため預かってもらい、身軽になつたベルとそのままの俺は酒場から出発した

??

祭り一色に染まっている東のメインストリートでは多くの人々が流れていた。そんな光景をただ高い場所からフードを被って見ている神が1人、大通りに面する喫茶店、その二階に美の女神フレイヤがいた

ヒューマン、獣人、ドワーフ、エルフ。色とりどりの異種族の波には、市民に紛れて冒険者と思われるものの姿もちらほらと見える

フレイヤがその顔を一つ一つ確認するかのようには眺めていると、ギシリと。木張りの床が軋む音と共に、こちらに近づいてくる複数の気配があつた

「よおー、待たせたか？」

「いえ、少し前に来たばかり」

手を上げ気軽に声をかけて来た神物^{じんぶつ}、ロキにフレイヤはフードの下で浅く笑った

「なあ、うちまだ朝飯食ってないんや。ここで頼んでもええ？」

「お好きなように」

椅子を引き寄せながらズケズケとそんなことを言うロキに、フレイヤは微笑を浮かべたまま気にしたそぶりも見せない

「宴の後、随分と寝込んでたそうじゃない。一人で自棄酒して、酔い潰れて。ふふ、ヘスティアもやるわね？」

「あのだチビ。次は泣かす……って腐れおっぱい。お前はそういうことどつから聞きつけてくるんや」

「あなたの可愛い団員達^{子ども}が騒いでたそうよ？誰かさんを話の種にして、盛り上がった」

「かーっ、あのヤンチャどもめ、やってくれるわあ」

「ところで、いつになったらその子を紹介してくれるのかしら？」

「なんや、紹介がいるんか？」

「一応、彼女と私は初対面よ」

フレイヤのもとに来たのはロキを除けばもう一人いる。鞘に収めた剣を携え、ロキを護衛するかのような位置で立っているのは金髪金眼の少女

「んじや、うちのアイズや。これで十分やろ？アイズ、こんな奴でも神やから、挨拶だけはしときこ」

「……初めまして」

劍姫、とフレイヤは唇の奥でその名を呟きながら、目の前の少女を見つめる

「可愛いわね。それに……ええ、ロキがこの子に惚れ込む理由、よくわかった。どうしてここに【劍姫】を連れて来たのか聞いても？」

「ぬふふっ……。そらお前、せっかくのフィリア祭や、この後しつかりきつちりアイズたとラブラブデートを堪能するんじやあ！」

下卑た笑いを浮かべ吠えるロキ

「……ま、それに、『遠征』も終わってやつと帰ってきたと思つて放つておくと、まーたすぐダンジョンに潜ろうとするからなあ、このお姫様は」

「……」

「誰かが気を抜いてやらんと一生休みもせん」とロキは隣に手を伸ばし、少女の頭をポンポンと叩く。アイズは非を認めるかのように少しだけ視線を下げて彼女になされるが
ままだった

「それじゃあ、こんなところに呼び出した理由をそろそろ教えてくれない？」

そう言ううとロキは空気を変えて言った

「素直に聞く。何やらかす気や」

「何を言っているのかしら、ロキ？」

「とぼけんな、あほう。最近動き過ぎやろう、自分。興味がないとかほざいておった『宴』に急に顔を出すわ、さっきの口振りからして情報収集に余念がないわ…今度は何企んどの」

「企むだなんて、そんな人聞きの悪いこと言わないで？」

「じゃああしい」

アイズが見守る中、2人は無言になり、おもむろにロキは脱力し確信した口調で声を打つ

「男か」

「……」

「…で？」

「……？」

「どんなやつや、今度自分の目に止まった子供ってのは？いつ見つけた？」
「教える」とロキは口端を釣り上げる

「……」

「そつちのせいでうちは余計な気を使わされたんや、聞く権利くらいはあるやろ」

強引な理由を振りかざすロキに、フレイヤは顔を窓側に向け、あたかも過ぎ去つたいつかの光景を思い出すかのように話し出した

「……私が見たのは2人、1人は強くはないわ。貴方や私の「ファミリア」のこと比べても、今はまだとても頼りない。少しの事で傷ついてしまい、簡単に泣いてしまう……そんな子。でも、綺麗だった透き通っていた。あの子は……いやあの子達は私が見たことない色をしていたわ」

「……もう1人はどんなやつや?」

「もう1人は……そうね。その子を見守る家族よ。頼り甲斐のある、お兄ちゃんみたいな子。その子の色は何者にも変えられない黒……何が入ってこようと変わることはない色をしていたわ」

「あの時もこんな風に……」とフレイヤの動きが止まる。防具をまとった白い髪の少年と黒い髪の少年に釘付けとなった

「ごめんなさい、急用ができたわ」

「はあ?」

「また今度会いましょう」

ほかんとするロキを置いて席を立つ。ローブでしっかりと全身を隠し、店内を後にする。その場にはロキとアイズだけが残された

第14話再会

「おーいつ、ベルくーん！ヤミくーん！」

「え？」

ベルと東のメインストリートを歩いていると声がかかる。振り返れば所在の分からなかったヘステイア様が入混みをかき分けてこちらにやってきた

「ヘステイア様…か？」

「神様！どうしてここに!？」

「おいおい、馬鹿言うなよ、君達に会いたかったからに決まってるじゃないか！」
なるほど…答えになってないですよ？

「ヘステイア様、そう言う事じゃなくてだな…」

「いやあー、それにしても素晴らしいね！会おうと思ったら本当に出くわしちゃうなんてー！」

「神様？」

「やつぱりボク達はただならぬ絆で結ばれているんじゃないかなー、ふふふつ」

ああ、ダメだこれは。完全に自分の世界に入っちゃってるよ…優しいベルも流石に

ちよつと困つてるよ

「機嫌がいいようですが、何かあつたのか？」

「へへつ実はベル君に良い報告がね！」

「え？ 僕!？」

やつと通じたかと思えば次はベルが驚きの声を上げる。もしかして背負っている小包にあるやつか？

「そうさ！ 実はね……うん、せつかくだ。今は教えなーい」

「ええっ!?」「ええ……」

同じ声は出したがベルは『そんな』と言う顔で俺は呆れ顔で答えた。ヘスティア様は「楽しみはある後で取っておくことにしよう」と言う

「デートしようぜ!! 2人共!!」

「デ、デート!？」

ヘスティア様の発言にベルは顔を真っ赤に染める。俺は冷静に話した

「すいません、ヘスティア様。俺とベル坊は財布を届けにやならんので……」

「むっ? そうなのかい? じゃあデートしながら人探しをしようじゃないか。楽しみながら仕事をこなせて一石二鳥だ。あ、おじさーん、そのクレープ3つくださーい」

「神様あー!? ヤ、ヤミさんも何が言つて!!」

「そうだな…ヘステイア様、金はちゃんと持ってたのか?」

「あつ……」

ベルが「ヤミさーん!」と叫ぶ中、ヘステイア様は自分の手持ちが小包しかない事を思い出すとこちらを見てきた。…上目遣いで

「…そんなキラキラした目でこちらを見ないでください死にそうになって来た」

「…ダメかい?」

「…わかつたよ」

「いやつたー!!!」

ヘステイア様はピョンピョン跳ねまわりながら喜んでる。あれはずるい…

するとベルが恐る恐るこちらに話しかけてきた

「ヤミさん、お使いすつぽかしてデートしてるなんて知られたら怒られますよね?」

「最終的に祭りが終わる前にシルさん見つけて財布を渡せば問題ない…と思う。まあ、久しぶり…なのかは分らんが、ヘステイア様と過ごせるんだ。全員で楽しもうぜ」

「そう…だね」

ベルに適当な説得をするとヘステイア様がクレープを持ってきたため、屋台のオツさんにお金を払ってから三人でクレープを食べだした

「ここにもいないね…」

「闘技場に入ったんか？」

今、俺達は闘技場の前までできたがシルさんが見つからない。どこだどこだとキョロキョロしていると声がかかる

「ベル君、ヤミさん」

「あつ、エイナさん」「げっ」

「ヤミさん？ 『げっ』 ってなんですかー？」

しまった。ついうっかり声に出してしまった。エイナさんからどす黒いオーラっぽいのが見える…

「誰だい、このハーフエルフ君は？」

俺の後ろからヘステイア様がヒョコツと出てくる。エイナさんはオーラを消してヘステイア様に会釈した

「わたくし、ベル・クラネル氏とヤミ・カズヒラ氏の迷宮探索アドバイザーを務めさせて

もらっているギルド事務所属、エイナ・チュールです。初めまして、神ヘスティア」

「ああ、そう言うことか。いつも2人が世話になってるね。ヤミ君からよく聞いているよ。『いつも俺だけ鬼みたいに叱ってくるアドバイザー』って」

ヘスティア様がそう言った途端エイナさんにまたあのオーラを醸し出した。しかし今度は後ろに修羅が見える

「…そうですか。大体は彼が悪いんですが…神ヘスティア様からも何か言ってくれと助かります」

「そこは安心してくれ！ 面白いえばヤミ君に説教しないといけない事があつたんだ」

……ヘスティア様？ 俺に説教って言った？ えっ、冗談ですよ？

そんな話をしているヘスティア様とエイナさんにベルが入ってきた

「エイナさんはなぜここに？」

「フィリア祭はギルドも一枚噛んでるから、環境整備を手伝っているの。で、私はお客さんの誘導係。ベル君達はやっぱりこの催しを見にきたの？」

「いえ、僕は人を探しているんですけど…あの、ウエイトレスの格好…は流石にしてないか。こう、お金に困ってそうなヒューマンの女の子、見ませんでしたか？」

「ベル坊、それでわかる人はまずいないだろ。確か、こう…灰色の髪をして…身長はベル坊と同じかそれ以上の女だ」

ベルの説明にちよつとだけ俺の説明を入れるとエイナさんは困った顔で言った

「ヤミさん、それくらいの子ならオラリオにたくさんいます…」

「…すいません」

「まあ、もし見かけたらここで待ってるように呼び止めておきますから。見つからなかつたらまた来てください」

ありがとうございます。と2人そろって頭を下げて行こうとするとヘステイア様が動かずエイナさんをじつと見つめる

少し離れたため聞こえなかったがヘステイア様が何かを伝えるとエイナさんが顔を引きつけてそれに答えた

ヘステイア様はエイナさんの腕をポンポンと軽く叩くところらにやってきて「さあ行こうか！」と俺達の腕を引っ張り走り出した

「ヤミ君！今度からはLv5に喧嘩売るなんて馬鹿な真似はしないように！特に「ロキ・ファミリア」の連中には!!!」

「すいません。でも…」

「でもじゃない!!」

しばらく説教されながら歩くと周りの人々がざわざわとざわめいていた。少し気になった俺はチャンス!とベル達に伝える

「ベル坊、ヘステイア様。ちよつとあっちに何がありそうなんで行ってきます。ベル坊、ヘステイア様守つとけよ」

「ちよ、ヤミさん!?!」

セリフがハモつた2人を置いて俺は走り出した

「何かあるかなとは思っていたけど…街中でモンスターはないんじゃないかなあ!?!」

走つてすぐに複数のトロールなどのモンスターがいたためにそんな愚痴をこぼす。だが、この程度ならダンジョンで数回会つて倒しているため、すぐに目の前までジャンプで飛んで首を掻つ切り、灰にする

「おつと危ない【無明斬り】」

首を切つた後、10M程先に逃げ遅れた人を襲うモンスターを見つけてすぐに空中で斬撃を飛ばすと見事に命中し、そのモンスターも真つ二つになって灰となった

「グオオオオオ!!!」

「うるさ…うお!?!」

着地した瞬間に後ろからモンスターが来ていたため振り向きざまに切ろうとすると急に突風が吹き、その瞬間にモンスターは細切れにされていた

コツツと誰かが俺の後ろで着地した。この人がモンスターを細切れにしたのだとわかった

「……大丈夫……ですか？……あつ」

振り向くと金髪金眼の少女がいた。「劍姫」と呼ばれるアイズ・ヴァレンシュタインだ

「……どうも」

「……」

ペコりと頭を下げるとあちらも無言で頭を下げてくる

「……君つて確か、ミアさんのところでベートさんを殴った人？」

「あの時はすいません」

「……いい、あの時はベートさんが悪いから」

……無言の気まずい雰囲気の流れる。俺もどうしようかと頭を悩ませていると、突如として地面が揺れた

「……」

アイズさんは何かを感じ取ったのか空高く飛ぶと何かを見つけたのかそちらに飛んで行ってしまった

「…………行くか」

俺も俺で先程の地震の正体が気になるため、アイズさんが飛んでいった方向に走り出した

第15話戦闘回だけど【ロキ・ファミア】を出す絶対 に何か感想を書かれます

数分走ると人々が集まっており、中を見るとモンスター死骸があつた。近くには先ほど見た少女の姿がある。どうやらアイズさんがやったらしい

近くには姉妹と思われるアマゾネス、モンスターにやられたのだろう倒れているエルフの少女がいた

「さすが最高派閥の冒険者……」

そこまで言うともたまたま地面が揺れた。だがその揺れは先程の比ではなく、近いのだとわかる。すると地面に亀裂が入り、そこから花を咲かせた植物型モンスターが三体アイズさんを囲むように現れた

それを見た見物人はすぐに逃げ惑う

すぐにアイズさんは立ち向かうように斬りかかろうとすると……

「あつ……」

レイピアが砕けてしまった。植物達はそんなことなど御構い無しに襲いかかった

「【強奪】、からの！ 【無明斬り】 3連！」

すかさずモンスターから身体能力を奪い3つの魔力の斬撃を飛ばすと植物の触手っぽい物に命中する。だが斬撃は触手を弾いただけで切れてもいない

「……!!」

「危ねえ!」

なんと、3匹全てが俺を狙ってくる。闇を足場に避けまくるが何故か俺だけを狙っている

「その人!!そのモンスターは魔力に反応してる!!その魔法を切って!!」

「ありがとう!えーと……胸のない方!!」

何やら胸のないアマゾネスの人はショックを受けている。コンプレックスだったらしい。あとで謝るか……そんなことは今はどうでもいい。魔力に反応する?それはつまり……

「こう言う事だろ!【無明斬り】!」

魔力の斬撃を真上に飛ばす。するとどうだろう、その斬撃を植物達が追っていくため、綺麗に俺は地面に着地した。アイズさんがこちらに駆け寄ってくる

「……君、何しにきたの?」

「いやあ、地震の正体が気になったから見に来てただけなんだが……」

「……あれは新種、君が追われてる隙に切り込んでみたけど切れなかった」

「【劍姫】と呼ばれるあなたさんが…マジですか」
なるほど…それはそれは……………

燃えて来た

植物型モンスターはすでにこちらに攻撃して来ていた。俺達はジャンプで回避

「…ん？」

だがアイズさんは何故か風を纏いあらゆる方向に突っ込みそして捕まってしまった

何故だと思いつ探すと逃げ遅れたのだろう獣人の子がいた。それを見て彼女はその子を守ったのだろうと理解する

植物型モンスターは半ば埋まるような形で押さえつけている彼女に噛み付くが風の球体がそれを守る。残りの2体も押し寄せ噛みつき出した

「やっばいな……………」

剣に闇を纏わせ切り込むがやはり傷がつかない。魔法を発動しているのにこちらを見向きもしないのは俺よりも強力な魔法があるせいだろう

アマゾネスの2人も攻撃しているが触手が多すぎて近寄れない

(今の自分じゃ足手纏いでしかない。せめてこれを切ることができればなんとかかなるんだが…)

そんなことを考え、チツと舌打ちしていると綺麗な声の詠唱がどこからか聞こえた

「ウイーシユの名のもとに願う」

【森の先人よ、誇り高き同胞よ。我が声に応じ草原へと来れ】

先程倒れていたエルフの少女が血反吐を吐きながら魔法の詠唱を始めていた

【繋ぐ絆、楽園の契り。円環を廻し舞い戻れ】

【至れ、妖精の輪】

【どうか、力を貸し与えてほしい】

そして一つの魔法が完成した

「エルフ・リング」

翡翠色の魔法マジックサークル円が現れ、魔力らしき力が包み込む。それに反応したのかモンスタ

達はエルフの少女に目をつけた

【終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風うずを卷け】

詠唱が続く。少女は次の魔法を発動しようとしているのだと分かる

【閉ざされる光、凍てつく大地】

「oooooooooo!!!」

魔力を感知したモンスター三体は急迫する。そのエルフの少女に向けて殺到しだした

「はいはいっとー!」

「大人しくしてろっ!!!」

だがさすが最高派閥の「ロキ・ファミリア」のアマゾネス達、一瞬で追いついたかと思うと殴り蹴りでそれを阻む

すると一本の触手が彼女達の間隙を通り槍の如き速さでエルフの少女に狙い攻撃して来た

「危ねえ!!」

遅れて走った俺はそれをさせまいと刀で斬りつけようとする。だが先程やった通り自分じゃこの触手は切れない。それをわかっていてもこの動きは止まらない

するとベルの祖父との修行の思い出が頭に映し出された

『ヤミ。お主は落ち着いて戦うことを覚えたのは良いが、剣や刀と言うものを全く理解しとらん。いいか、純粋な心を持って物を切ればどんなものでも切れるぞい。ほれ』

そう言ってじいちゃんはナイフを手に取り、そこらに生えていた木を横薙ぎにスパッ

と切った。普通ならきれる訳がない。だが、気はズズツと横にずれたかと思えばそのまま倒れてしまった

『……いつもハーレムハーレム言ってるじいちゃんが純粹ねえ…』

『なんじゃ？文句でもあるのか？』

『まあいいや、じいちゃん。知つての通り俺くらいの歳になったら心は汚れきつてるぞ？純粹なんて程遠いくらいに』

『純粹って言つても色々ある。まあ、自分に合った純粹な心を見つけてみい』

『自分に合った純粹な心ねえ…』

ヒュッ

風を切り裂く綺麗な音がした。その瞬間にボトリツと斬られた触手が地面に落ちる

「……!?!」

魔法もスキルもない。斬る事しか考えてはいない『純粹な心』で振った刀はまるで紙でも切るかのように触手を真つ二つにした

モンスターは切られるとは思ってはいなかったのか驚愕の声のようなものを上げている

「っ！【吹雪け、三度の厳冬、我が名はアールヴ】！」

詠唱が終わったらしい。俺とは比べ物にならない魔法がくると思った俺はすぐに飛び退く

「ウイン・フィンブルヴェトル」

吹雪が舞った。全てが凍りそう…実際凍る風を受けてモンスター三体は絶叫するがそれすらも凍る

魔法が止むとそこには三体の水の像が完成していた

アマゾネスの2人はそれに近づくとかなりイライラしていたのか回し蹴り一撃で水の像は粉碎された

最後の一体はアイズさんがどこから仕入れたのかわからない剣を取り無数の斬撃で粉々にした

さて、俺はベル達を探しに…「ウチの子に近づいとった男は何モンかと思えばアンタか」

振り返り走り出そうとするとそこにいつぞやの胸のない女性がいた

「…前もやけどアンタ、ウチになんか失礼な事考えたやろ」

「はい。正直に思った事を口にした方が？えーと…」

「【ロキ・ファミリア】のロキや。あと言ったらシバく」

少し殺気の籠ったドスの効いた声でそう言われ体が硬直する

「まあ、礼だけしに来たんや。ホラ、エルフの子を攻撃しようとしてた触手を切ってくれたやん？」

「いえいえ、俺なんて普通の駆け出しでしかもLv1、足手纏いでしかなかったじゃねーか」

「Lv5の、しかもアイズたんが切れんかったやつを切つといて普通な訳ないやろがつー！」

「?なんか言いました？」

「い、いや、なんも言うてないで?空耳ちゃう?」

「そうか、疲れてんのかな。俺……」

「そうですか。ではロキ様、ちよつと仲間を置いて来てしまっていますので、失礼します」

「あ、そうやドチビ…ヘスティアに伝えといてや」

「?」

「『次は泣かす』」

怖つ?!何この人、ヘスティア様のライバルか何か?!つーか何したのヘスティア様!!

「……どう言う意味がわかりませんが、まあ伝えておきます」

「そう言うって俺は全力で逃げるように走りだした」

「……ロキ、あの人は？」

すでにいなかった青年を見送った後、アイズがロキに聞いた

「行ってもうたわ、Lv1にしては足早い方やで」

「……どうやって切ったのか知りたかった」

そう呟くアイズを尻目にロキは横目にあるものを見た

「ところでアイズたん、テイオナがめちやくちや機嫌悪いけどどうしたん？」

「……あの人、名前が分からないからってテイオナのことを『胸のない方』って呼んでた」

「……貧乳^{ウチ}達を敵に回したな」

第16話ヤミさん殺されかける

どうも、ヤミさんです。ベルはステイタスを更新したそうです。しかもシルバーバツクを倒してました。いやあ凄い凄い

あ、俺はLv1を卒業してLv2になりました

ステイタスはこちら

ヤミ・カズヒラ

Lv1↓Lv2

力：D564↓SS1009↓I0

耐久：G231↓A813↓I0

器用：E404↓S953↓I0

敏捷：E401↓S930↓I0

魔力：G391↓S999↓I0

純粹：I

《魔法》《スキル》そのまま

この急成長は多分十階層に潜っていたことと、あのモンスターのおかげだと思う

ヘステイア様からは最速でレベルアップしたと喜んでいた。そして、純粹に切るこ
が出来るようになったからなのかレアアビリティとして『純粹』が発現した

そしてベルと共にダンジョン七階層に潜り魔石を集めてエイナさんに報告すると

「ななあかあいそお〜？」

やばいです。殺されます。ベルなんて「は、はひっ！」とか言つて悲鳴を上げてるし

「五階層を超えた上にあまつさえ七階層!」

俺もベルも完全に蛇に睨まれた蛙だ。震えが止まらないもん…あれ？俺Lv2なん
だよね？

「やあ〜みい〜さあ〜ん？」

「なんでございますか!!」

ギギギツと音がした気がする。エイナさんの目は見ただけで人を殺しそうな目をし
ている

「貴方はベル君の保護者みたいなものだよねえ？違いますかあ？」

「は、はい！そうであります!!」

やばい、変な喋り方になってる

「なんで七階層まで降りちゃってるわけ?」

「…その…ベル坊はそれなりに成長しましたと言いますか…その…」

「アビリティ評価Hがやつとなベル君が成長したからと言って危険地帯に連れて行った者の口は縫い合わせましょうか」

やべえ！縫い合わせられる!!!

「ほ、本当です！僕の「ステイタス」、アビリティがいくつかEまで上がったんです!？」

「……E?」

エイナさんがピタリと動きを止めた。ベルを見た後、俺を見る

……なんで俺？

「ベル君は優しいね。でもね、そんな嘘を言ったところでヤミさんの罪は晴れないんだよベル君」

やべえ！また動き出した！助けて！ベル君助けて!!!

「う、嘘じゃありません！本当なんです！なんかこの頃伸び盛りって言うか、とにかく熟練度の上がり方が凄いです!」

「…本当？ヤミさん守る為の嘘じゃない?」

ぶんぶんとベルが頭を縦に降る。エイナさんはベルをじつと見てまた質問する

「……本当に、E?」

「は、はいっ」

フツとエイナさんから放たれていた威圧感?が解かれた。その瞬間に俺は息を吹き

返した。あまりの恐怖に息をするのを忘れていたようだ

俺、マジでLv上がったんだよな？実は上げるのを忘れてたとか言うへスティア様のミスじゃないよな？

エィナさんは指を折って何かを数えているようだ。10本の指で数えていき6本目で止まるとムムツと言う顔になる。それを数分繰り返すとエィナさんがやつと言葉を出した

「…君達に刻まれている【スティタス】、私にも見せてくれないかな？」

「……えっ？」

やばい、ベルの話も信じてない。普通に考えて【スティタス】なんて見せられるわけがないし、終わった……

「あつ、君の言っていることを信じてない訳じゃないんだよ？ただ……証拠がないと」

「で、でも【スティタス】って、一番バラしちゃいけないことですよ……？」

「今から見るものを私は誰にも話さないと約束する。もしベル君達の【スティタス】が明るみになることがあれば、私は責任を負うから。ベル君に絶対服従を誓うよ」

エィナさんなら口が硬いだろうけど……バレたらバレたでへスティア様にも……

「この目で確認させてもらえなかつたら、私、いつまで経つてもベル君に5階層より先に行っちゃダメーって言うし、さっき言った通りヤミさんにも……」

……目がマジだよ。怖いよ

「魔法やスキルのスロットは見ないですから、ね？お願い！」

「……わ、分かりました」

「……すまんベル坊」

ありがとう……ありがとう……ベルがベルじゃなかったら今頃俺は……

部屋を変えて顔を赤くしながらベルは上半身を脱ぐ、エイナさんも顔を赤くしながら

「ステイタス」を見だした。俺もこっそりとベルの「ステイタス」を見る

ベル・クラネル

Lv1

力：E403

耐久：H199

器用：E412

敏捷：D521

魔力：I0

おお、少し前の俺くらいまで上がってる

「あの一、エイナさん……まだですか？」

「あ……も、もういいよ！さて、次はヤミさんだね！」

ナさんと買い物行ったよ

今のところLv2になったから1階層に行ってみたんですが、わんさかモンスターがいたため新しい技の実験台にしようとしています

「グアアアアツ!!!」

「……」

モンスターの鳴き声は聞こえないと言うように静かに狙いを定める

刀を抜き魔法で闇を付与させながら息を止め、イメージを思い浮かべる

浮かんだのは漫画に出てくる『世界一の大剣豪』の放つ一太刀で船を真っ二つにする

斬撃

「ガアツ!!!」

モンスターが一步こちらに踏み出す。その一瞬で研ぎ澄まされた集中は解き放たれ完成した技が放たれた

【黒刀・夜】

一瞬、モンスターの動きは止まる。だがすぐにモンスターは動きだす

左半身と右半身に分かれて

「あつ……」

だが残念なことに中であつた魔石まで切つてしまつたらしく、綺麗な断面を残して魔石も左右に分かれた

「…売れるか、これ…?」

そう思いながら地上に戻りギルドで換金してみると無事換金できた

ちなみに換金金額は6万ヴアリス、大収穫だ

「夢じゃない♪あれもこれm…ん?あれは……」

《購入》で買って聴いて覚えた曲を歌っているとベル坊と『豊穣の女主人』の店員、リユーさん…だっけ?がいた

「おーいべ…おつとごめんよ」

小人族っぽい人とぶつかふ。とりあえず謝りベルの元へ向かう

「ベル坊、どうしたこんなどこで…ああリユーさん、久しぶり」

「ヤミさん!」

「お久しぶりです」

ベルは驚き、リユーさんはお辞儀する

「ベル坊、装備を新調したんだな!似合ってるぞ!」

「ありがとう。ヤミさんはどうですか?」

「俺もバツチリ稼い……で……あれ？」

「ヤミさん？」

懐から財布を取り出そうとするも財布の形がない。腰、尻のポケットに手を突っ込むもやはり見つからない

「は、ははは……すまんベル、財布落としちゃった」

「ええええええええええええ!!？」

「ご愁傷様です」

ははは……マジ？嘘じゃないよね？嘘だと言ってよヘステイア様じゃない方の神様
……

財布だけは返してよ！一週間でお金は結構溜まっているんだからさ!!!

く裏路地く

「逃げるついでにスっておきました、6万ヴァリスも入ってるなんて……しかも、次の獲物も見つけましたし……リリも運が良かったです」

小人族の少女は財布の中の金額を見て白い歯をキラリと輝かせていた

「それにしても、何なんですかこの財布は……容量はいいのですが、字が何と書いているか

わからないのと、この皮膚のない怪物の絵は……」
『進撃の巨人』と日本語で書かれた袋の財布を見て少女はそう呟いた

第17話サポーター

「ヤミさん、また今度僕に稽古してくれないかな？」

「どうした急に……」

ダンジョンに向かう途中、唐突にベルが言いだした事について聞いてしまう

「あの人に……アイズ・ヴァレンシユタインさんに少しでも近くのために……」

「ああ、ベル坊はあの人に惚れてるんだっけか」

「ち、違いますよ！憧れて……」

「はいはい」

そんな話をしてしていると

「白い髪と黒い髪のお二人さん」

後ろから声があった。振り返ってみると誰もいない。確か声は……

「あれ？誰かの声があったと思っただけ……」

「ベル坊、下だ」

「え？」

見えていないベルに教えてやり、改めてその子を見る

身長が1000程度しか無い小人族がいた

「あれ？」

「き、君はっ……」

「初めまして、2人組のお兄さん方。突然ですが、サポーターなんか探していたりしませんか？」

人差し指を指してその子はそう言う。指の指している先を見るとデカイバックパックがあつた

「え……ええっ?」

「混乱しているんですか?でも今の状況は簡単ですよ?冒険者さんのおこぼれにあずかりたい貧乏なサポーターが、自分を売り込みに来ているんです」

それは分かるのだが……はて?

「そ、そうじゃなくて……君、昨日の……?」

「なんだベル坊、知り合いか?」

「ベル……坊……ベル様と言うんですね。リリとお会いしたことがありましたか?リリは覚えてないのですが?」

首を傾げながらリリと言う子はそう言う。周りから『何してんだ?』と言う傍迷惑そうな視線が刺さる

「うーん。俺、めちやくちや最近、どこかで君を見た気がするんだがな……どこだったかな……」

「き、気のせいじゃないですか?」

「いや、絶対に見たんだよ。えーと……」

「そんなことは放っておいて!!お二人様!どうですか、サポーターはいりませんか?」

大声でリリさんがそう言うときさっきの話に戻して来た

「俺は別にサポーターはいても良いと思うぞ。ほら、ベル坊も言ってただろ?サポーター欲しいって」

「本当ですか?!なら、リリを連れて行ってくれませんか?」

俺の言葉にリリさんが食いつくように言う。それだけ貧乏なんだな、可哀想に……
「いや、それはいいんだけど、うーん……?」

「あつ、名前ですか?失敬、リリは自己紹介もしていませんでした

リリの名前はリリルカ・アーデです。お二人様の名前はなんと言うんですか?」

考えているベルに勝手に自己紹介を始めた。…名乗られたし、こつちも名乗っておく
か

「ヤミ・カズヒラだ。最近Lv2になったばかりのヒョッコだが、よろしく頼むよ」

「べ、ベル・クラネルです」

バベル二階、食堂でとりあえずリリさんと話し合う事になった

「じゃあ、君は無所属のサポーターじゃなくて……」

「そうですよ、リリはちゃんと『ファミリア』に入っています」

「『ファミリア』の名前は？」

「ソーマ・ファミリア」ですよ。お兄さん。割と有名な有名な派閥だと思っ

りりから発せられた言葉に俺は無意識にピクリと眉を動かした

エイナさんが教^無え^理て^矢くれた内容に「ソーマ・ファミリア」、その名があつた

確かに有名だ。だが噂話では悪い意味で有名だ

なんでも神酒^{ソーマ}と呼ばれる酒を一滴でも飲むとそれ欲しさに金を買いでし

ほど美味しい酒らしいが簡単に言えば薬物依存みたいなものだ

そんな集団の中にいるリリを信用しても良いのだろうか

「どうしてこんな駆け出しの『ファミリア』の俺達に？有名な『ファミリア』なら、そつ

ちに……」

「……リリは小さいですし、腕っ節もからつきしなので。何をやっても鈍臭いリリに、

『ファミリア』の方々^はは愛想をつかして邪魔者扱いにしているんです」

「やめちやえそんな【ファミリア】」

暗い顔で話すりりりにもっともな意見を口にするとりりりは首を横にブンブン振って

「そんな！こんな鈍臭いりりを拾ってくれた恩があるのに……」

「でも邪魔者扱いなんだろう？」

「……はい、ホームにいても居心地が悪いので宿屋を巡っては寝泊まりを繰り返していません」

……この子も大変なんだな。にしても、宿屋を巡ってるって事は神酒の力ってわけじゃないだろうし。恩があるって言ってたけどどんな恩なんだ？

「今の宿に泊まり込むのも手持ちのお金が心もともなくなってきました。ですから、ぜひひっつけひっつけひっ！りりはお兄さん達とダンジョンに潜りたいんです！」

グイグイと頭を下げながら懇願してくる

「あ、【ファミリア】の関係の話でしたら、それはきつと大丈夫です。りりの主神ソーマ様は他の神様達の事に未来永劫無関心なので、敵になるとかかならないとか以前の問題です。そちらの神がソーマ様を目の敵にしている限り、【ファミリア】の間で争いが勃発する事は無いと思います」

おい、大丈夫かその神様？どう考えても恩なんかないだろ？

内心でそんなことを考えていると先程まで狼狽えていたベルがついに話した

「リリルカさんの事情はわかったけど…最後に一つ、確認させてもらっていいからな？」
「はい、なんでしよう」

「僕達、本当に会ったことない？」

唐突にそう言い出したベルの言葉にリリは

「リリはお兄さんと初対面のはず何ですが…見間違えだったりしませんか？」

「…もしよければ、そのフードを取ってくれないかな？」

ベルがここまで問い詰めるのは珍しい。何かあるのかと思っているとリリは「わかりました」と言っただけでゆっくりとフードを取って顔をさらけ出した

「……へっ?」

「こ、これでいいですか?」

リリの姿を見てベルが硬直した。リリの頭の上には小さな犬の耳があった

「……じゅ、獣人？」

「は、はい、リリは犬人です」

「ベル坊、お前の知ってる昨日見た奴は獣人じゃなかったのか?」

「う、うん。あの子は確かに小人族だった」

「そうか、獣人じゃなくて小人族だったか…ん?小人族?」

「ああ、思い出した。リリさんは昨日ぶつかった小人族に似てたんだ。でもあの子

は獣人じゃなかったから…」

「ヤミさんも見たの?」

「おう、昨日ベル坊とリユーさんに話しかける前にぶつかって…つて、ベル坊が言つてたのはそれか?」

「あのー……リリは…」

「あつ…ごめん。それじゃあひとまず今日一日だけ、サポーターをお願いします」

「ありがとうございます!」

リリはベルからそう言われると笑顔で喜んでいた

「報酬は……俺とベル坊の文が6割程度、リリさんが4割と言つたところか」

「そうだね。リリルカさんはそれで大丈夫かな?」

「はいっ!3割ほどもらえたら嬉しいとばかり思つていたので!」

「決まりだな。よし、行くぞ」

そう言つて俺が立ち上がるとベル、リリもまた立ち上がりダンジョンへ向かった

『『ジギギギギ…』』

現在ダンジョン七階層、虫の十数匹の蛾の大群が押し寄せてきていた。いつもなら自

分のバックバックに魔石が詰まっており、魔石の重さもあって動きが鈍くなってしまうているはずだが

「ベル坊！7、8体体頼んだ！」

「分かった！うおおお!!!」

『『『ジギツ?!』』』』

バックバックを持つことのなくなったこの白黒コンビはいつも以上に動いていた。黒が約半数を切り刻み、残ったもう半数を白がすぐに片付けていた

「ベル坊、お前はナイフ一本で立ち向かうんだから一撃離脱を心がけておけ、一発一発に力を込めろ。ただしペース配分は間違えるな」

「わかった！ありがとう！」

終わった後は黒が白のダメな部分^{ヤミ}を教え、白はそれに礼を言いながら頷く

そしてサポーターの獣人が魔石を拾う…

「なんか一気に冒険者って感じがするな、リリさんには感謝しないと」

第18話噂

「凄いです！ベル様ヤミ様！」

モンスターを倒していく俺達にリリさんがそう褒める

「…あのさ、そのベル様、っていうのは流石にやめてほしいんだけど…」

「あー俺もやめてほしいな、なんつかむず痒い。どうせ呼ぶならベル坊みたいにヤミさんとかの方がいいな」

「すいません。そういうわけにはいかないんです。仮契約とはいえ、上と下の立場はつきりつけなければいけません。冒険者様には、サポーターはへりくだらないといけません」

「めんどくさい。それだけしか頭に思い浮かばなかった。なんでサポーターだからって冒険者を敬わなきゃいかんのだ…」

「いやでもリリルカさん」

「ベル様ヤミ様、リリのごことはリリルカではなくリリと呼んでください。他の呼びかたでもいいですから」

「ベルも俺も「どうして呼び方ぐらいでそんな事…」と言うと「いいですか？」とリリ

がぐいっと顔を近づけた

「サポーター、なんて聞こえはいいですが、蓋を開けてみればリリ達はただの荷物持ちです。命を賭けて直接モンスターと戦っている冒険者様からしてみれば、リリ達は安全な場所に逃げ込んで傍観するだけの臆病者で、何もしないくせに甘い蜜を吸おうとする寄生虫なんです」

サポーターのリリがサポーターについて語っているが少し腑に落ちない部分があった

「…リルカさん」

「リリと呼んでください。何ですか？ヤミ様？」

「…確かにサポーターは蓋を開ければ荷物持ちだ。だが、荷物持ってくれている時点で何もしてないわけじゃないし、臆病者でもないだろ？」

「何を言うんですか！何もせずモンスターに怯えているだけの…何もせず怯えているだけの奴がダンジョンこんなとこ来るか」…痛いです」

リルカさんの言葉を遮り頭にチョップを当て、リルカさんは痛がるが構わず俺は話を続ける

「そう言うわけだ。お前らサポーターは臆病者でも、ただ甘い蜜を吸うだけの奴らじゃない。もっと自分に自信を持って『こちとら命賭けて荷物持ってやってんだから感謝しや

「がれ』って感じでな」

「リリ達がそんな言ったら冒険者様達は怒って分け前など恵んでくれないでしょう!!!」

「……そんなサポーターの大切さもわからない馬鹿共は相手にすんじやねえよ即契約破棄だ破棄」

「……………」

俺の言葉にリリさんは黙ってしまった

「ヤミさん？ちよつと口調変わってる気がしたんだけど」

「あれ？そうか……？」

「うん。なんか……こう……よくわからんな」

「なんだそれ」

ハッハッハと笑うと、とりあえずベルにアドバイスする

「ベル坊、お前は強くなった。さて、ここからどうするか……」

「と思ったが次は何をしようかと頭を悩ませた。するとリリさんが話に割って入ってきて提案してきた」

「ナイフを二本と言うのはどうでしょうか！」

「なるほど、その手を忘れていた。でもナイフが今は……」

「はい、ベル様。ちようどあそこに下半身が埋もれているキラアアントがあります。試し

切りをしてみてくださいはいかがでしょうか？」

用意してくれていたのかりりさんが普通のナイフをベルに差し出しベルは「ありがとう」と言つてナイフは受け取りそのナイフを持ち、少し高い場所に埋もれていたため腕を上にあげてキラアントを倒す

りりさんがベルの後ろでゴソゴソしていたがデカイバックパックが邪魔で見えない

「ヤミ様、ベル様。今日の報酬の話なんですけど……」

「うん。こんなに手伝ってもらつたし、普通に山分けで……ヤミさんも「回収した魔石とドロップアイテムは全てベル様にお渡しします。どうか懐を温めてください」

ベルの言葉を遮り急にそう言いだすりりさんに俺が問う

「なんでだ？ 3割は欲しいとか、宿屋に泊まるお金がなくて困ってるって……」

「やだなあヤミ様、心もとないと言っただけで無一文つてわけじゃないんですよ？」

「あ……そつか。それじゃあ」

そう言う俺は今回の報酬の約3割をりりさんに渡した

「え？ りりはいらないと……」

「うん言つた。だからこれは俺からのお小遣いだ。無一文じゃなくてもお金には困ってるんだからもらつて、つーかももらえ」

そう言つてリリさにお小遣いと言う名の報酬を無理矢理渡す

「まあ、これからもよろしく頼む」

「へ？」

「いやありりさんの働きは凄かつたからなあ。たまに俺はもソロで潜るからその時だけでもベル坊と一緒に潜つてやつてくれないか？」

「リリ、僕からもお願いするよ」

俺もベルもリリにそう言うとりりさんは呟いた

「…いつもバベルにいたので、いつでもいます」

「うーん、他所の「ファミリア」のサポーターかあ……」

「やっぱり、不味いですかね？」

現在エイナさんにリリの事を相談している。流石に勝手に契約してしまつたらまた俺だけに雷が落ちる気がしたからだ

「二口に「ファミリア」の間の問題と言つても、互いの利益を尊重して明るい契約関係を築いている例もあるしね…：ベル君から見てどうなの、そのリルカさんって子は？」

「はい、いい子でしたよ…サポーターとしての腕も悪くはなさそうでしたし」

「初めてサポーターを雇った俺達が言うのもあれですが…」

「その子の所属している【ファミリア】はわかる?」

「確か、【ソーマ・ファミリア】って言ってました」

「【ソーマ・ファミリア】か…んー、また強く反対も賛成もできないところが出てきたなあ」

エイナさんがどうしたものかと言う反応を見せるとベルが聞いてきた

「あの、エイナさん。【ソーマ・ファミリア】って、一体どんな【ファミリア】なんですか?」

エイナさんはそれを聞くと大型のファイルを持ってきてメガネをスチャツとかけた

なんでも、【ソーマ・ファミリア】は典型的な探索系【ファミリア】、他と違うのは市場にお酒を販売しているらしい。味は絶品らしいので需要は高いらしい。【ファミリア】自体の実力は中堅の中堅、飛び抜けた者はいないがみんな平均以上の力を持っており、また団員の数は多い

それだけソーマ様と言う神の信仰が多いと言う事だが、多分噂通りならば酒のせいだろう

「あくまで私の主観なんだけど、【ソーマ・ファミリア】の冒険者達は、普通とは雰囲気

が違い、仲間内でも争っていると言うか、死に物狂いつて言うか……生き急いでるとかそう言うんじゃないんだけど、何て言うのかなあ、アレは……。とにかく必死なんだよね、あの「ファミリア」に所属する人、全員」

エイナさんはギルドの受付、冒険者の顔など親の顔よりも見ているはずだろう。そんな彼女の話ならば信用できる

「二応、私はその彼女をサポート者として雇うのは賛成するよ」

「えっ、いいんですか？」

「うん。ところでヤミさんはどうなんですか？この話を聞いて、貴方がソロで潜る時、その子にベル君を預けられると思いますか」

おっと、ここで話を振ってきた。まあとりあえず約束したんだ。ここは当然

「俺は別に何かトラブルを起こさなければ別に問題はない。さつきベル坊も言ってたけど、普通にいい子だったしな」

「……ロリコン？」

「エイナさん。いつも怒られてばっかの俺だけど、今回は俺が怒るよ？」

「ごめんなさい」

珍しくエイナさんが俺に謝り、その後も少し話し、ギルドから出ようとした

「…あの、エイナさん？肩を掴むのをやめてくれませんかね？」

だがエイナさんが俺の肩を掴み話さない。顔を見てみるといつものニコニコ笑顔でいたがなんだか迫力がある

「ヤミさん。ちよつと聞いてもらいますか？」

最近、12階層に行った冒険者から聞いたのですが…黒髪黒目、刀一本を持った冒険者が十二階層中を暴れまわっていたと聞いたのですが、心当たりは？」

「ありません。たまたまでしょう？」

「目をそらさないでください」

「……………へっ」

……………

「私、いいましたよね？Lv2になったからつて調子に乗つて許可なく到達階層増やしてダメですつて。それなのに…」

何で許可もなく勝手に到達階層増やしているんですかああああ!!!」

今日もギルドにハーフエルフの声が響き渡った。やはり怒られるのは俺のようだ

第19話落とした

「お、落としたあああああああああ!？」

「うおっ!!」

「べ、ベル君?!」

エイナさんが説教を始めて数分、ベルがいきなり叫び出した

「や、ややや…ヤミさん!!!」

「落ち着け! 一体何を落とした!？」

半狂乱になつてしているベルにそう言いながらたずねる

「かつ、《神様のナイフ》が……!」

「……はあああああああああ!!!?」

まさかのヘステイア様からもらったナイフがないと言つたベルの次に俺が叫んだ

「さ、探すぞ!!!」

「はいっ!!!」

「ちよ、ベル君?! ヤミさん?!」

エイナさんの言葉に聞く耳も持たずに俺達は無我夢中で走り出した

「鞘があれば…あの変な財布以上に…」

リルルカことリリはそんな事を呟きながら白髪 of 冒険者が持っていた真つ黒なナイフを見つめる

これはそれなりに信用している鑑定士の爺さんに鑑定してもらおうとたったの30ヴァリス、爺さんによると

『押しても引いても何も切れないし、特殊な力がこもってるわけでもない。それによくわからんが…死んでおるよ、刀身そのものが』

らしい、意味がわからない。これは化け物の硬い殻を苦もなく切り裂くことの出来る業物のはずだ。下手すればあの黒髪の冒険者が持っていた刀以上に…

「すいません、シル。荷物持ちなどさせてしまつて」

「うん、それは平気だけど…リユ、いつもこんな道を通っているの？」

「ええ。道順を把握してしまえば、こちらの方が遥かに時間の短縮になります。シルが危惧しているほど不便ではありません」

「そう言う事じゃないんだけど…」

前から人が来た。エルフとヒューマン。2人して紙袋を抱えている。林檎を初めとした果実や野菜がこぼれ落ちんばかりに袋の口から覗いていた

視線を切り、ナイフを袖の中に隠した。こんな裏道を人が通ることに驚きながらも、自然に彼女達の横を通り：

「待ちなさい。そのパルウム」

過ぎる前に背中合わせに声をかけられた

「袖にしまったナイフ、それを見せて欲しい」

「…何故ですか？」

内心舌打ちしながら質問の意味を問う

「知人の持ち物に似ていたので。もしよろしければ確認させて欲しいのですが」

「生憎ですがこれは私の物です。貴方の勘違いでしょう」

そう言つて動き出すと

「抜かせ」

「……ッ!？」

世界が軋む

【ヒエログリップ神聖文字】が刻まれた武器の持ち主など、私は1人しか知らない」

即座に足に力を入れ駆け出す。だが曲がり角を曲がろうとした瞬間、途轍もない衝撃

が手を襲う。林檎だ、林檎が自分の手に当たり、爆発した

手からナイフを取り落とし、後方を振り向くと足を大きく後ろに反らしたエルフが自分を見下ろしていた

「な、何っ?」

「裏道からだな」

俺達がナイフを探すために来た道を逆走していると打撃音のような音が響いたため、音のした方に顔を向けて足を止めていた

周囲の亜^{デミ・ヒューマン}人も同じ行動をする中、大量の猫が音のした裏道から大量の猫が物凄い勢いで駆け出して来た

中か怪物でも見たのかと言うくらいに必死さで逃げ出している
すると見覚えのある奴が音を立てて倒れこんで来ていた

「リ、リリ!」

「何があつた!」

「そ、その声は……ベル様にヤミ様?」

ふるふると何かに恐怖しているかのように体を痙攣させ、何とか四つん這いになったリリさんは引きつった笑顔で言った

「実は、凶暴な女……じゃなくてっ、野良犬に襲われてしまいました……」

「まさか逃げられるとは……」

リリがそこまで言うのと次はリユーさんが現れた

「どうしたんですかりユーさん？ 食い逃げ？」

「ああ、ちょうど良かった。実はクラネルさんの……」

リユーさんがそこまで言うのとリリさんを見た瞬間、目の色を変え深く被ったフードを剥ぎ取った

「……失礼しました」

だがリリの姿を見てすぐに謝る

「な、何しちやつてるんですか貴方は！ リリ、大丈夫!？」

「は、はい……」

「すいません、人違いでした。少々気が短くなっていたようです」

リユーさんがそう言うってペこりと頭を下げると裏道からシルさんが紙袋を両手に抱えて出て来た

「リュ、リユー！ 食べ物をあんな風に使っちゃダメ！ お母さんに怒られるよ!？」

「落とした……?」

「すいません。本当に。このナイフ、どこにありましたか?」

「あつた、と言うより1人のパルウムが所持していました」

「パルウム?」

パルウムつてあれだよな? 小さいあの小人族パルウムだよな? じゃあ落としたんじゃないくて盗まれた?

「もしかして、さっきのは…」

「ええ、先程までそのパルウムを追いかけ回していたのですが、逃げられてしまい…この場所にいた彼女を疑ってしまいました。すいません、私の早とちりです」

「早とちり、てことは……?」

「はい。彼女は犬人のようですし。それにそのパルウムは男性でした」

「身近に男性のパルウムはいますか? 何か見覚えは?」

「いや、俺はないな。最近見たパルウムは女だったし」

「右に同じです」

ある程度話し込むとリユーさんは表情を変えず会釈し裏路地を進み出した。するとシルさんがリリさんの耳元で何かを呟くと次は俺の耳元で

「その獣人さんには気をつけてください」

「は？」

ただそれだけを言い残して行ってしまった。リリさんを見てみると青ざめ震えていた

「リリ、今シルさんになんて言われたの？」

「べ、別に…あの、ベル様？」

「なに？」

「あの人達は何者なんですか？」

「酒場の店員さんだよ。『豊穰の女主人』ってぼったくりで有名な…」

俺が代わりに応えようとしたが何故か裏路地から林檎が飛んできて頭にぶつかり破裂し、俺は倒れた

『リユー?!どうしたの?!』

『なぜか私達の悪口を言われた気がする』

裏路地からそんな声が聞こえる。…リユーさん強すぎ、リリなんか『ヒイツ!』って悲鳴上げてんじゃん…

「ま、まあ結構有名な酒場なんだけど…」

「……ベル様、ヤミ様」

「へ？」

「絶対に、リリをそこへは連れて行かないでくださいね」

リリの言葉に情けない姿を晒しながら親指をグツと突き出し言った

「安心しろ。リリ……あのバイオレンス女のそこには絶対に連れて行が?!」

また林檎が顔面にぶつかり破裂した。：リユースさんマジで何者？

『シル、どうしたの？』

『なぜかわかりませんが大切な友達の悪口を言われた気がして』

シルさん?!ええ?これシルさんの?!

第20話

翌日。リリさんを正式に雇いダンジョンでモンスターを狩りまくっていた

「…ベル様？」

「ん？」

「あのナイフはどこにしまったんですか……？」

「うん、今度は落とさないようにプロテクターの中へ鞘ごと収納しているんだ。収納スペースがちやうどあつたから」

「そ、そうですか」

なぜかがつくりと項垂れるリリさん。どうもさつきから元気がない。笑つてはいるけど…

「もしかして、いつ俺達がリリさんを解雇するかドキドキしてるんじゃない？」

「え？あ、はい！そうですそうです！いつ見捨てられるか気が気で…」

俺の言葉にリリさんが反応し汗を垂らしながらそう言う

「見捨てるって、そんなことはしないよ。僕はリリ以外にサポーターの当てなんてないし」

「それはいいことを聞きました…：…なあんて、リリもベル様はそんな事をするとは思ってはいませんよ。ベル様はびっくりするくらいお優しいですから」

「ベル坊『は』って…：…まるで俺はやりそうって聞こえるんだが…」

「ふふ、ヤミ様も信用してきますよ。ただやりそうな顔をしているだけです」

「あー…」

「やりそうな顔って何?!あとベル坊、納得すんな?!」

「ベル様、本日の予定を伺ってよろしいですか?」

無視された。酷い…

地味に泣きそうな俺も無視してベルが答える

「えっと、今日も7階層に行つて夕方まで粘ろうと思つてるんだけど。リリは平気?」

「ベル様がお決めになられたのならリリはそれに従いますよ。でもいいんですか?リリはご覧の通りサポーターですから、戦力としてはあまりお役に立てません。ベル様達はずっと連戦することになりますよ?」

「それは大丈夫。たまに別れてソコで潜るし、今日は溜まっていた「ステイタス」も神様に更新してもらつたから」

そう。俺達はヘステイア様に溜まったステイタスの更新をしてもらつた。その結果は

ヤミ・カズヒラ

Lv2

力：I0↓H106

耐久：I0↓I63

器用：I0↓H100

敏捷：I0↓H114

魔力：I0↓I93

純粹I

《魔法》《スキル》そのまま

Lv2になったからかLv1の時よりも上げ幅が低くなった気がする。中層に行くかと迷ったが最近：ていうか昨日エイナさんに叱られたばかりなのでやめた

純粹の方も練習はしているが相手はいつも切っているゴブリン達、いつもと違いが全くわからないため、中層に入るまで練習で我慢することとなった

「そういうえば、リリって【神の恩恵】を授かっているとはいえ、よくそんな自分より数倍でかいバックパックを持てるよな」

「はい、一応リリにはスキルの補助があるので万が一でも運搬作業で足手纏いになるこ

とはありえませんが」

「ええっ！リリ、スキル発現してるの!？」

リリの言葉に反応したベルが凄く羨ましい！とリリさんを褒め称えた。だがリリさんは苦笑しながら答える

「持っているだけまし、というような情けないスキルです。ベル様が考えているような『恩恵』ではありませんよ？」

「それでもいいよ。僕なんてまだ一つもスキル持っていないし……」

「まあ魔法もスキルも早々に手に入るものじゃないしなあ」

「ヤミさんは二つともあるじゃん!?!嫌味!?!」

俺の一言にベルが反応しているとリリが質問してきた

「ヤミ様はもう魔法もスキルも発現しているんですか？」

「うん。しかも魔法とスキル二つず……「ベル坊!!」……あつ今のなし!!」

「無理ですよ……」

やべ、ベル坊がついに口を滑らせた!!!

「……できれば、他の人には他言しないでいただけると助かる」

「ハハハ。リリの口は堅いと自負しているのでそこは安心してください」

「ありがとう。お礼にこれを……」

そう言つて感謝の印としてチロルチョコを手渡した

「これは……？」

「俺の故郷にあるお菓子の一つだ。外の紙をとつて中身を食べるんだ」

「え、えーと……外の紙をとつて……あ、紙が消えました」

そう言つてリリさんの手のひらよりもちっちゃいチョコをリリさんは口にすると目を見開いた

「……美味しいです」

「それはよかつた。万が一口に合わなかつたらどうしようかと……」

「これがヤミ様のスキルの力ですか？」

「……そうだよ。ただこの程度しかできない。ないよりマシなスキルじゃない。あつても変わらないスキルだよ」

ハハハと乾いた笑いを浮かべているとベルが口開いた

「そういうえば、本当に契約金とか前払い金はいいの？」

「あーそういうえばそうだったな。本当に分け前だけでいいののか？」

「ええ、構いません。ベル様ヤミ様の『ファミリア』はお金がないと聞いたので……それに」

「「それに？」」

「……そちらの方がベル様達にも都合がいいでしょう？」

…???と言った感じでリリさんの言葉に首を傾げているとリリさんが明るい雰囲気
身に纏った

「さあ行きましょう。ベル様ヤミ様が頑張つてリリの食いぶちを増やしてくれば、何
も問題はありませんから！」

「う、うん…」

ベルだけがそんな返事をする中、俺はリリさんの言葉の意味を理解するために考えた
が全く理解することができなかつた

「……………」

「おーいお前ら?」

無言になってしまっている2人に声をかけるが返ってくる返事がない。どうしよう
かと頭を悩ませているとベルが呟いた

「ヤミさん。僕達夢を見ているんでしようか?」

「夢じゃないでしょ…ああ、夢だと思つたら頬をつねると痛みで夢かわかるらしいぞ。
引つ張つてやろうか?」

「ヤミさんのは絶対痛いのでやめてください。自分でやります」

そう言つてベルは自分で自分の頬をつねるとめちやくちや痛がつていた
「38000ヴァリス……」

リリさんがそう眩くとつねった頬を抑えていたベルがハツとし、次の瞬間

「やったー！！！！」

「うるさく」

叫んだベル達にそう言う。周りの冒険者達の変な奴を見る目がこちらに刺さつてい
る。にもかかわらずベル達は止まらない

「だって！だって！7階層だけでこれだけお金が手に入るなんて！！」

「そうですよ！ドロップアイテムなんて数えるほどしかなかったのに！魔石だけで36
000ヴァリスですよ！」

「いやそれはそうだけど、できれば声量落としてほしいな。ほら、周り見て。変な奴を見
る目で見てるだろ？」

そう言つと2人は周りを見る。先程と同じように冒険者達がこちらを見ていたこと
に気づいた2人はやつと黙つた

「でも、これはリリのおかげだよね？」

「馬鹿言つちやいけないです、ベル様つ。モンスターの種類やドロップアイテムにもよ
りますけど、Lv1の五人組パーティが1日かけて稼げるのが25000ヴァリスちょ

うどくらいいんです。つまり、ベル様ヤミ様はお二人で彼ら以上の働きをしたことになりますっ！」

えっ、そうなの？それは知らなかった…

「いやあ、ほら、兎もおだてりや木に登るって言うじゃない！それだよそれっ！」

「ベル様が何を言いたいのかわかりませんが、取り敢えず便乗しときます！ベル様 凄いい！まだ上を目指せますよ!!」

「褒めすぎだよリリい！」

ベルにとつての始めて稼いだ金額で2人ともテンションがおかしい。俺は冒険者達にすいませんとぺこりと頭を下げつつ、落ち着くのを待った

「…ではベル様、そろそろ分け前をいただけませんか？」

「うん、はい！」

「……へ？」

ベルがドバツと18000ヴァリスをリリさんの方に渡すとリリさんが変な声を出した

「ああ、これなら普通に神様に美味しいものを食べさせてあげられるかも……！」

「なんだベル坊。俺の料理じゃ不満か？」

「いやそうじゃなくて…」

「冗談だ冗談」

そんな風に話をしているとリリさんが口を開いた

「あの、ベル様、ヤミ様これは……?」

「分け前だよ、決まってるじゃん! あ、そうだ! せっかくだしリリ、良かったらこれから酒場に行かない?」

「おお、いいな! よし、今日は俺の奢りだ!!」

「本当に?! やつと……」べ、ベル様!」

リリさんが話を遮り質問してくる

「ひ、独り占めしようとか……ベル様達は思わないんですか?」

「え、どうして? まさかヤミさんが独り占めしようとか……」

「馬鹿なこと言うなよ。俺がそんなことするわけないだろうが」

だよ。 とベルが言うのとリリさんに向き直り

「ヤミさんは7階層よりも下に行けるからこれくらいは当たり前なんだろうけど、7階層でこの金額はリリがいてくれたからこそ、でしょ?」

笑いながらベルはリリさんにそう言った

第21話とりあえずダンジョンは休み

「ぬあああああ……!?!」

「だ、大丈夫ですか、神様?」

「ほらヘステイア様、水だ」

ヘステイア様が朝に起きて頭痛を訴えていた。ミアハ様に聞いたのだが、どうやら昨日相当飲んだらしい

「す、すまない、ベル君ヤミ君。こんな見苦しいところを……」

水を受け取り軽く飲んだヘステイア様はそう言う。なぜそんなに飲んだのか聞くとそれに関しての記憶もスツパリ途切れ忘れてしまっているらしい

「…2人はダンジョンに行かなくていいのかい?」

「今の神様は放っておけませんから。今日は休むことにしました」

「今のヘステイア様を置いて行ったら生涯鬼畜とか呼ばれそうなので」

「ヤミ君の理由はともかく、ボクはいい子達を持って嬉しいよ…」

笑顔で心からそう言うヘステイア様は本当にいい人だと改めて思う

「ほい。お粥できたが、食べられるか?」

「……ちよ、ちよつと辛いなあ。食べさせてくれるかい？」

そう言うヘステイア様の目からは指示が飛ばされた気がしたため、それに従い実行した

「ベル坊。お前がやってくれ。俺は洗い物が残ってる」

「あ、うんわかった」

お粥の入った小皿を渡して台所に向かう直前にヘステイア様を横目で見ると笑顔でグツと親指を突き出して台所に向かった

「今日行くこうツ!! 今日行くんだ!」

洗い物を済ませた瞬間にヘステイア様の大声が響いた。何ごとかとヘステイア様とベルの場所へ向かうとベッドの上で二日酔いにもかかわらず堂々と立っているヘステイア様の姿があった。ベルはそれを見て目を点にしている

「か、神様、体調は……」

「治った!」

ベルの問いにすぐに反応しヘステイア様はピヨンと飛び降りピシツと決めた

「2人とも6時だ!!」

「は？？」

「6時に南西のメインストリート、アモールの僅かな荷物を持つて集合だ！」

「あの、ヘステイア様。状況が上手く飲み込め：行っちゃったよ」

俺の言葉は耳に入っていないのかヘステイア様はドアを勢いよく開けると荷物を持つてホームを飛び出してしまった。それから数秒で誰かがこける音がした気がしたが気のせいだろう

「ベル坊。どういう事だ？」

「か、神様に今日みんなで豪華な夕食なんかどうですか？つて聞いたら：」
「ああなつてしまったわけだ」

時刻は6時、アモールの広場の噴水で俺達はヘステイア様を待っていた

「ヤ、ヤミさん：僕、なんか変な格好をしてないかな？」

「何恥ずかしがってんだ。いつも通りいつもの自分をさらけ出す程度がちょうどいいんだよ」

「：ヤミさんやっぱり刀は置いていけなかったんだ：」

「…そこには触れるな。面白半分でこれを買った自分を殴りたくなるから…」

2人でそんな話をしてしていると見覚えのある顔立ちの神様がこちらに向かってきていた

「ベル君ヤミ君！」

「あ……………」

「ん？おー、髪が変わるだけでこんな…」

俺の言う通りこちらに駆け寄ってきていたヘステイア様はツインテールから背中まっすぐ髪を流していた。しかも衣服も中々上質なものだど素人目でもわかる

いつも幼い感じの雰囲気を漂わせていたが今は神様らしくなっている

「ど、どうだい、似合っているかい？少し装いを変えて見たんだけど……………」

「……………あ、はいっ！似合ってます！とつても似合っています！えつと、何て言うか、普段の神様より凛々しいって言うか…その、き、綺麗です！」

顔を赤くしながらそう言うベルにヘステイア様は「そうかいそうかい！そうだろう！」と言うとこちらを見た

「ホラホラ、ヤミ君もボクに何か言うことがあるんじゃないのかい？」

俺の目を見ていやらしくそう言うヘステイア様。観念して俺は感想を口にした

「に、似合ってるよ」

「んー聞こえないなー」

「…似合ってるよ!!いつも可愛いって感じだけど今は美しいって感じだよ!!これでいいか!!?」

「ムッフフー♪ヤミ君からも褒めてもらえてボクは満足だよ♪」

顔を赤くしている俺の言葉を聞いてヘスティア様も笑顔でそう言う。そして右手でベルの左手を左手で俺の右手を掴み

「じゃあベル君にヤミ君?今夜はしつかりエスコートしてくれよ?」

「ヘスティア様は逆ハーレムでも望んでんのか?」

「ハツ…それもいいかもしれないね…でもそれは…」

意外とマジな顔で悩みました。ヤバイ、変な事にならなければいいんだが…

「あ、いたーっ!」

「ヘスティアがおったぞ!」

「と言うことは…あのヘスティアと手を繋いでいる2人がっ!」

美女達がこちらを見るなり騒いでいた。ヘスティア様を呼び捨てにしているあたり女神様達なのだろう

「なんだなんだ!?!」

女神様達はこちらに駆け寄り、俺達は女神様の波にすぐに飲み込まれた

「やーん、結構可愛い!？」

「こっちは危険な感じがするけどそれもまた……」

「ヘステイアはこういう子達が好みなのかー」

小さい兎を思わせるベルは女神様に代わる代わる女神様達の胸の中で抱きしめられている

「む、むぶううっ!？」

助けを求める目でこちらを見ているベルを無視して、とりあえず挨拶はする事にした。もちろん相手は神様、俺なりに丁寧になだ

「こんにちは皆さん。ところで何用でこちらに……」

「そんなにかしこまらなくていいわよ。私達どうしてもヘステイアの子達が気になっちゃって、後をつけてここに……あらやだ、本当にこの子、兎みたい」

そう言う女神様の胸にはベルが抱きしめられていた

「んーっ、んんーっ!？」

「べ、ベルくーんーっ!？」

ヘステイア様の悲鳴が炸裂したため流石に助け船を出す事にした

「すいません。そろそろ放してやってくれませんか？ベル坊が窒息しそうになつてます」

「あらそう?ごめんなさいねえ。それじゃあ……」

「…へ?」

ベルを離れた女神様の目はすぐに俺を捉えた。後ろからは複数の視線が俺を捉えていた

「ヤミ君逃げるぞ!ベル君を持って!」

ヘスティア様の言葉にハツとした俺はベルを担いで逃げ出した。女神様達は逃がすまいと追いかけて来ているのが足音でわかる

「ヘスティア様!その裏路地に入れ!!」

「?!わかった!」

俺の指示に従いすぐに裏路地に入ると女神様達も後を追う

「逃がさない!まだ抱きしめてもいない…あれ?」

女神様達は路地裏を見たが誰もいない。影しかない薄暗い世界が広がっていた

「なんて早い逃げ足!?貴方達!探すわよ!!」

「「おおーっ!!」」

女神様達がそこから去った後、影の一部が盛り上がり3人分の人の形を作り出し、黒い部分が剥がれた

「はあ〜初めてやったが、成功したぞ〜……」

「本当になんでもありだねヤミ君の魔法は……」

ヘステイア様の言う通り俺達は路地裏に入ってからすぐに魔法を使用して路地裏に広がる影と同化して隠れた。さしずめ「影隠れ」と言った所か

「かみ、さま……ヤミ、さん……」

「ぶ、無事か、ベル君!？」

「……僕、もう、死んじやってもいいかもしれません……っ!」

ドゴツツとベルの向こう脛にヘステイア様のつま先が叩きこまれた

「全く……ヤミ君はちゃんとボク一筋でいてくれてるのに!!」

「いや、ヘステイア様の言葉がなければ俺も天国見れたかもしれないとか……」

ヘステイア様は裏路地の壁を使い壁キックで俺の上に飛ぶと今度は頭にかかと落としを叩きこまれた

「「すいませんでしたっ……!!」」

あれ?俺だけマジでやられてない?

「全く、せつかくのデートが台無しだよっ!」

「まあまあ、教会で新しい晩御飯を作るから」

「え?! ヤミ君^{さん}本当!?!」

俺の言葉を聞いた2人が俺を見て目をキラキラさせている

「本当だよ。そうと分かればホラ、帰るぞ」

第22話ピンチ&説教

「……………」

ベルが足を止めてダンジョンの地面を確認する様な仕草をする

「どうしたベル坊？」

「…………今、ダンジョンが揺れなかった？」

「気のせいじゃねーか？」

俺は大して何も感じなかった。ためそんなふうに戻した

「それにしても眠いな…………リリ、今何時だ？夜中12時くらい？」

「ヤミさんそれは…「凄いですねヤミ様…丁度今夜中の12時を回りました」…え!」

リリが懐中時計をこちらに見せる。見事に短針と長針が12時ピッタシに重なって
いた

「案外俺の体内時計も捨てたもんじゃないな」

「僕は全然分からなかった…」

「最後の方はモンスターに群がられていましたからね。仕方ありませんよベル様」

そう言うリリの背中のバックパックには多くのドロップアイテム、魔石が詰められて

おり、今すぐにもはちきれそうだ

「……ヤミ様。ベル様はもう少し常識と物欲と言うものを知った方がいいと思いませんか？ありがたく頂戴しているリリが言える立場じゃありませんが……人が良すぎです」
「常識が云々の方は肯定はするが、物欲がないとか人が良すぎとかはベル坊らしさだからなあ」

「そうですが……。リリはベル様が危なつかしくて見ていられないと言うか、知人に預けられた兔にハラハラさせられてつい世話を焼きすぎてしまおうと言うか……」

「まあ実際たまに預けてるしな」

「答えになつてませんよ！うゝ、何だか毒されているような気がしますよっつ」

ベルの後ろ姿を見ながらリリとそんな話をしてしているとダンジョンから外へ出た
「うわあ、すっかり夜になっちゃってる」

そんなことを言つてベルは振り返つてバベルを見た

「バベルつて、なんでこんなに高いんだろう？テナントを貸し出すにしたつて、50階も上まで行くのは大変の様な気がするんだけど……」

「ベル様、ギルドがテナントを貸し出しているのは20階までですよ」

「え……そ、そうなの？」

「なんだベル坊知らなかったのか？20階から上は神様達が住んでんだぞ？」

「神様達が？」

「はい。オラリオの中でも有数と呼ばれる【ファミリア】の主神様達だけですが、バベルの最上階まで彼等が移住しててんです」

リリがそこまで言うときさらに続けた

「もともと、バベルはこれほどまで巨大な塔ではなかったそうです。迷宮から溢れてくるモンスター達を抑える『蓋』として機能しだした頃は、周囲の建物と変わらなかったと聞きます」

「お、それは初耳だな。それでそれで？なんでこんなにかさに……」

「この地に最初に降りられた神様達が塔を壊してしまっただけです。流れ星みたく降ってきた神様達が……」

「……………」

間違いなくわざとだ、笑いながら謝ってた光景が目には浮かんでもん

「それからこの塔は【崩落の塔】……【神塔^{バベル}】と呼ばれるようになりました。神様達がこの塔に住まう理由には、そんな背景があるんですね」

塔を破壊した神達は、お詫びと言つてなんだか塔の再建……と言うよりはダンジョンの抑止に大きく貢献したそうだし

「なんとなくはわかったけど……うーん、そういう神様達の話聞くたびに思うけど、

『天界』ってそんな暇なところなのかな?」

「お仕事が嫌になって逃げ出してきたのかもしれないよ? 天界では神様達がやらなければならぬ、いくつかの義務があると聞きます。その最たる例が下界で眠りについた子供達の処理だそうですね」

子供達の処理、俺を転生させてくれたあの人も仕事でやってたんだよな

「まあ、最終的にはほとんどの者が転生させてもらえるようなのですが、とにかく、そんなこともあつて、天界では激減した神様達の穴を埋め合わせるため、居残り組の神様達が今も不眠不休でお仕事をしていらつしやるらしいです。かなり殺気立つてるようですよ? 次回の下界で行きも血生臭い嚴重な『お話』の上で順番を決めるのだとか」

へー……ん? ああ、神様、俺の寿命を増やしたのつてまさか……

「……でも、リリは死ぬことに憧れていたことがありましたよ」

「……え」「うん?」

「二度、神様達の元に還れば……今度生まれるリリは、今のリリよりちよつとマシになつて居るのかなあ、なんて……」

そう言つて空を見上げるリリの顔はどこか悲しそうな顔だった

「リ、リ r 「馬鹿たれ」

「……痛いです。ヤミ様」

気づけばベルは叫ぼうとし、俺はそれを遮り軽くコツンとリリの頭を小突いていた

「お前がいなくなったら誰がベル坊の面倒見んだ。死ぬぞ？ほつとくとすぐ死ぬぞこいつ」

「さ、さすがにすぐには死なないよ！」

「いや死ぬな。一人じゃ寂しくて死んじまうだろうが！」

「僕は兎じゃありませんよ！」

「プツ…ハハハハハハ！」

「リリ?!」

俺とベルが言い争っているときリリが笑い出した。ひとしきり笑うときリリは笑いによつて出た涙をぬぐいながら言った

「…すいません。ヤミ様、ベル様、変なこと言つて。ですが、昔の事です。真に受け取らないでください。リリはこれでもたくましくなりましたから、今ではちつとも思つていません」

「そうか、それは良かった！悪かったな。勝手に小突いて！」

俺の言葉に「いえいえと返すリリ

俺はとりあえずかがみ、視線を合わせた

「なんですか？」

「一応約束して貰おうと思っつてな」

「何をです?」

「絶対に死ぬなよ? ベル坊のためにも、お前のためにも、もちろん俺のためにも…」

その言葉にリリは少し黙りこ込むと笑顔で答えを返した

「…分かってますよ! 安心してください! リリは死にません!」

（翌日）

「ベル坊、足元」

「えっ?」

現在俺達はいつも通りダンジョンでモンスターを狩っていると「領域」に踏み込んだ
ニードルラビットがいたが気づいていなかったようなのでベルにその存在を知らせる

だがベルはちょうどキラアアントに飛びかかる瞬間だったため反応に遅れが生じた。
避けられないと悟ったのか左足を折り曲げ膝のプレート部分でニードルラビットの角
を防いだ

だが防いだ衝撃でバランスを崩し倒れるベル

『ジャアアアアッ!』

それを待つていたかのようにキラアントがベルに飛びかかった

助けようにも別のキラアントがそれを邪魔する

もうダメかと思われた

「ダメーーーーーっ!」

「っ!?!」

リリが何かをしたかと思うと次の瞬間キラアントの体は炎に包まれた。俺の近くにいたやつも含め周りのキラアントは混乱していた

その隙を逃すはずはなく一気に斬り伏せるとベルの安否を確認する

「ベル様、無事ですか!」

「リリいく。ありがとう、助かったよお」

そう言ってリリが既にベルの安否の確認を済ませていた。ベルはベルで安心したのかへにやへにやとして尻餅をついていた

そして、リリからベルへの説教が始まった。ベルから助けを求める目を向けられだがベルが怒られるなど珍しすぎる光景なので無視してニヤニヤと見ておくことにした

ふはは!ベルよ。いつも俺だけが叱られている苦しみを味わえ…

「……ベル様の説教はこれで終わりです…それでは次はヤミ様ですね」

「……………うん？あれ？リリさん？変な言葉が聞こえた気がしたんだが…」

リリは「気がしたんではありません。事実です」と言つてベルを怒つた時よりもすごいオーラを放ちながらズンズンとこちらに歩み寄つてきた

「…なるほど、もう心の準備はできていると言ふことですか…」

「…え、あれ!!あれえ?!」

なぜか俺の体は動きその場で正座していた。まさか……………怒られすぎて正座が癖になつてる？

「いいですかヤミ様？貴方様も悪いのですよ？口ぶりからしてニードルラビットが来ていたのは分かつていましたよね？」

「いや〜その…ベル坊なら分かつてると信用してですね…」

「それは信用とは言いません。慢心と言います」

この後、30分ほど説教を受けたのだがなぜかモンスター達がここによつてくることはなかった。ベルもニヤニヤとこちらを見ているだけだった

第23話……………はい。期待しないでください。(; ω ;)

「えーと……………リリつて『魔剣』を持つてたんだ？」

説教が終わりベルがリリに聞く

「は、はははははは。ちよ、ちよつと色々ありまして、リリのもとに転がり込んできて……………」

「ほー確か魔剣といやあ、強いが使い過ぎれば壊れるとか言う諸刃の剣だろ？」

「そうですね、リリはここぞと言う時しか使わないようにしています。でも、ベル様のためならリリは出し惜しみなんかしませんよ！」

それは頼りに……………ん？

「あれ？俺は……………」

「Lv2のヤミ様はこの程度じゃ死にませんよね？」

「いやそうだけど……………助けてはくれねえの？」

「…ヤミ様はベル様を気遣いしなさすぎなんです。ヤミ様がちゃんとベル様を見ていれば先程のような事には…何ですか？セクハラですか？」

リリがそう言うなか、俺はリリの頭を撫でていた。リリは別に嫌がっているわけでは

ないが別に良いとは思ってないような表情になる

「いやいや、さつきと言い、今と言い。リリは俺と違つてベル坊の事ちゃん心配考えてくれていて嬉しいからな。まあ、何が言いたいかと言うとな？」

リリをサポーターにして良かった。こんなパーティと契約してくれてありがとうな」

「……それらしい事言つて逃げようとしてませんか？」

ジイーと俺を見るリリに「な、何のことかなー？」と顔をそらす。するとベルが「そういうえば……」と口を開いた

「リリ、昨日「ファミリア」に戻るつて言つてたけど、何があつたの？」

そのベルの質問にリリはぎこちなさそうな笑顔になり、ちよつと雰囲気が変わつた気がする。さつきみたいな怒りの雰囲気じゃないとすると……地雷踏んだか？

「どうしてそんなことを聞くんですか、ベル様？」

「……リリと「ファミリア」の人達の関係が悪そうだったから、その、気になつちやつて……」

「ゴメン」

「……お心づかいありがとうございます、ベル様。でも大丈夫です、ベル様が心配しているようなことは一切起きていませんから」

「本当？」

「本当です。昨日は一ヶ月に一度の、「ソーマ・ファミリア」の集会があつたんです」

「集会？」とベルが聞くとリリがその集会とやらについて説明してくれた

要は定められた金額のお金を稼いでこいつていう布告のようなものらしい。それぞれの構成員に見合つた額を定められるので、みんな集まらないといけないんだそうだ
「めんどくさいな。稼ぎが少なえ奴が大変になるシステムじゃねえか」

「そうですね。リリもそう思います。サポーターや、芽のない冒険者は特に……」

リリがシユンと気分が悪くなったように落ち込む。それを見た瞬間に俺はとりあえずどうするか考えた

「……よし。ベル坊！稼ぐぞ!!!」

「うん!!!」

ベルも同じ考えだったようですぐに反応し、いい返事で返してきた。リリだけはキョトンとした顔でこちらを見ている

「…へ？きゅ、急にどうしたんですか?!」

「決まってるだろ！リリに提示した額を俺達が集めるんだよ!!!」

「リリにはいつもお世話になってるからね！それくらいは手伝わないと!!!」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!」と燃えてきた俺達はモンスターを見つけるために走り出し、リリは「ちよ、ちよつと!?!」と言っていたが構わずモンスターを狩りまくった

そうした結果、前の38000を軽く凌ぐ46000ヴァリスも稼いだため、また二人が叫び声を上げ、俺はまた周りにすいませんと頭を下げることになった

それから二日経ち、俺はベルと共に教会の部屋にいた。ダンジョンはどうしたって？ そりゃあお前、あまりにも勝手に一人で下に降りていくもんだからエイナさんに止められた。それで『一週間は一人でダンジョン探索は許しません！』と言われた

もちろんエイナさんが見ていない隙にダンジョンに潜ろうとしたがエイナさん以外の人に止められ、エイナさんの下まで引きずられ説教を受けた

ベルにダンジョンに行こうと誘っても気が進まないから今日はいいと云われた
そう言うわけで今日は自由気ままに過ごすことになったのだが……

「…暇だな」

「…暇だね」

そう、暇なのだ。一日のほとんどをダンジョン探索に費やしていたため、いざ何もやらなくなると暇すぎて困る

「そうだ。ベル坊、稽古しようぜ？前に約束しただろ？」

「あ！忘れてた……あ」

ベルが一箇所を見て固まる。その一箇所を見るとそこにはからのバスケットが放置されていた

「……あー」

くベルく

「本つ当に、ごめんなさいっつー！」

「あははは……」

ばんつつつ、と両手を合わせて勢いよく頭を下げた。真昼間から『豊穰の女主人』に駆け込みシルさんの前で謝罪を行っていた。返却するのを数日も忘れていた体たらく、申し開きなんてひっくり返してもできっこない

ちなみにこの場にヤミさんはいない。『俺は食ってないんだから俺は行かねーぞ。それに謝罪くらい一人で出来るようになれ。俺はホームの掃除しておくから』と『ゲキオチクン』と言うスポンジのような物を持ちながら言われた

「顔を上げてください、ベルさん。私は気にしていませんから」

「いや、でも……」

「それなら、今度からは気をつけるように頑張ってください。過ぎた事は戻ってきませぬから、これからの行動で誠意を示すと言う事で」

僕はおずおずと上目がちになりながら顔を上げた。微笑しているシンさんは優しくこちらを見つめている

こう言う時、この人が年上だって、しみじみ感じさせられる

「そうですね。音沙汰がなくて私も心配はしていました。お仕事で間違いを起こしてしまいうくらゐ」

「本当にすみませんでした……」

「……一杯からかわれたんですよ？」

少し恨みがましい目つきで、シルさんは口を尖らせた。はっ？と僕が目丸くすると、彼女は頬を染めてわざと過ぎるくらい咳をする仕草をして、なじるのを終わりにする

「そういえば、ヤミさんはどうしたんですか？」

「ああ。ヤミさんなら今ホームの掃除をしています」

「へえ…あの掃除苦手そうないメージがあつたので意外ですね」

「ヤミさんはやるときはやる人ですから」

「ベルさんはヤミさんの事をよく知っていますね」

シルさんの言葉にいええと返した。だがこれでじゃあさようなら、ではなんだかダメなヒューマンに思えたので忘れていた見返りと言う訳ではないが、簡単な注文をする

ことにした

くヤミさんく

「ふーっ『激落ちくん』は学校で使おうが教会で使おうがやっぱり至高。簡単に汚れが取れた」

そう言つて床についていた地味な汚れを全て消し終え、次は台所の汚れを取る作業に移ろうとするとドアが開いた音がし、階段を降りる音がした

「おうベル坊、結構汚れが取れ…何だその本」

「ああ、他の冒険者が店に忘れて置いてあつた魔法に関する本をシルさんが…」

そう言つてベルはこちらに表紙を見せてくれた。「いやいや、ダメだろそんなもんもらつたら」と言いながらとりあえず見てみると

『自伝・鏡よ鏡、世界で一番美しい魔法少女は私ッ』と書いてある

「おーいベル坊、地雷臭が半端ないぞ。大丈夫かそれ」

「ゴ、『ゴブリンでもわかる現代魔法！そのー』て言うのもあるし、多分大丈夫」

「そうかい。それでもなんか胡散臭いけどな。んじゃ俺はまだやり残したトコがあるからゆっくり読んどけ」

そう言つて俺は台所に向かって足を運んだ。だがこの本がベルが魔法を使えるよう

になるきっかけになるとは俺はまだ知らない

第24話アイアンクロー

「たっだいまー!!!元気にしていたかいベル君ヤミ君!!!」

台所の掃除が終わり、晩御飯を作っていると同時にヘステイア様が帰ってきた声が聞こえた。迎えるために台所から出るとベルが寝ていた

「おや?ベル君は寝てたのかい?…わあく綺麗になったねこれ全部ヤミ君が?」

「ははは。結構がんばったぞ?ああ、そろそろ晩御飯作るから今のうちにベル坊を起こしておいてくれ」

「まかせとけ!」

ヘステイア様はグツと俺に親指を立てサインしてくれた。それを見た俺は台所に足を運んだ

「バグっんぐんぐ…ゴクンツまあそう言うわけでベル君がさつき寝てたのは本を読んで眠くなって寝てしまったって言うよくある事だったよ」

「へー、昔のベル坊ならなれてない事をやって寝てたつてのが普通なんだけどな」

「そりゃあ、ヤミさんから借りた本を読んでいますから……あ、福神漬け取ってください」

カレーを食べながら普通に話しているとヘステイア様がベルに質問を投げかけた

「ご馳走さま。そういえば、あの本はどうしたんだい？」

「ご馳走さま。ハイ、ちよつと知り合いの方に借りたんです」

「お粗末さま。ヘステイア様も読んで見たらどうだ？本よく読んでるし」

「そうだね！それじゃあ後で読ませて貰おうかな！」

俺はそう言うのと皿を洗うため皿を重ねて持つて台所に入った

皿洗いも終わり、シャワーに浴びて出ると「ステイタス」を更新しているのかヘステイア様がベルの上に座っているのだが何かおかしい、チクチクと何かを刺してるような……いや刺していた

そのせいでベル泣き叫んでいるのだがヘステイア様は全く聞いていないようだ

「あー、何？この状況……」

「ヤミさん！助けて！神様が！」

「止めるなヤミ君！今ベル君に……痛たたたたたたたたた！」

まあとりあえずベルを守るわな。と言うわけでヘステイア様にアイアンクローを食らわして止めることにした。ベルにくつついてはまだ刺すかもしれないためそのまま持ち上げる事にした。だが

「ヘステイア様！足で僕を捕まえないでください！」

「ぐああああ!!!ヤミ君がこの手を離すまで離さないぞおおお!!」

「離したらまた刺すでしょうが」

そう、あろうことかヘステイア様はベルを足で捕まえて離さないと言う悪あがきをしたのだ

そのためこの茶番は数分にも渡り繰り広げられた

くというわけで数分後く

「いたた……ま、『耐久』とかを除くと、どの基本アビリティもそろそろSに近くなってきたるから、流石に今まで通りというわけではないけど」

「……そうなんですか？」

ベルの目は俺に向けられた。俺が答えて欲しいのだろう

「まあ、エイナさんから受けた^{無理矢理}勉強の内容だと、普通なら5く10あたりしか上がらない

からでて後頭部から頭を打ちそうになったため俺が支える

「かつ、神様あー!?ご、ごめんなさいっ、怪我はないですか!？」

「だ、大丈夫だベル君。ヤミ君もありがとうね」

「どういたしまして。にしても、まさかベル坊が魔法を使えるようになる日が来るとはな…」

「うん。まさかこんな形でさっきの報復されるなんて思わなかったけどね…」

ヘステイア様が起き上がると「ヘステイア・ファミリア」に何故か広まっていた土下座をベルがして平謝りし、「ステイタス」を見た

ベル・クラネル

Lv1

力：B701↓737

耐久：G287↓F355

器用：B715↓749

敏捷：B799↓A817

魔力：I0

《魔法》

【ファイアボルト】

速攻魔法

《スキル》

□

「つつ………！」

「おー良かったなあベル坊！しかもこれ、名前からして攻撃魔法じゃねーか」

そう言つて紙を両手で持つてガン見しているベルの頭に手を置きポンポンと撫でてやるとゆつくりと口を開いた

「ヤ、ヤミさん、神様…魔法つ、魔法ですよ……!?僕、魔法を使えるようになりました……！」

「うん、わかつてる。おめでとうベル君」

へスティア様がそう言った瞬間、ベルは歓喜のあまり握っていた神を握りつぶし蹲つた

「ベル坊、とりあえずその魔法について考察するぞー」

「はいっ！」

「まあとりあえず注目するところは『速攻魔法』」

いつもベル坊が俺の【強奪】 見ている通り詠唱なしで撃てる

まあ百聞は一見にしかず。とりあえず俺に向かって撃つてみる」

「はいっ！」

「はあ!?!ちよ、ちよつと待ったあ!!!」

撃とうとしたベルとそれを受けようとする俺にヘステイア様が止めに入る

「なんだよヘステイア様。俺の魔法を使えばベル坊の魔法を受けた所で…」

「そう言うことはダンジョンでやってくれ!万が一この教会が破壊されちゃったら君達

責任は取れるのかい!?!」

「そ、外でなら……」

「目立つ行動は控えるように!」

「わ、わかりました」

そう言う訳で明日ダンジョンで試し撃ちする事になり、ヘステイア様も疲れがピークになってしまっているようで、さっさと俺の「ステイタス」も更新する事になった

ヤミ・カズヒラ

L v 2

力：H106↓121

耐久：I63↓86

器用：H100↓113

敏捷：H114↓129

魔力：I93↓H106

《魔法》《スキル》そのまま

うん。弱いやつらしく倒してないからベル以上に上がっていない。ソロで中層に行けばすぐに上がりそうなんだけど……

いつも通りヘスティア様はベッド、ベルはソファ、俺は壁に寄りかかると消灯し、俺は深い眠りについた。そして……夢を見た

「いたたたたたたたた!!! 助けてください神様あ!!!」

「ベル君が悪い! 昨日受けたボクの苦しみを味わうがいいさ!」

「だそうだ。腹括つてこの仕置きを受けろベル坊」

「もうとつくに受けてますよお!!!」

今現在、俺は昨日ヘスティア様にやったアイアンクローでベルを苦しめている。何故こうなったかと言うと……俺がいつも通りの時間に起きるとベルがソファにうつ伏せの体勢でクッションに顔を押し付けていたのだ

何事かと聞くと昨日どうしても魔法を撃ちたくて5階層で魔法を乱射しまくっていたら急に意識を失ったらしい。眼が覚めると何故かヴァレン何某さんに膝枕を…それで前回と同様叫んで逃げ出したそうだ

そして今、勝手にダンジョンに行った。下手すれば死んでいた。ヴァレン何某さんに対するヘスティア様の嫉妬により有罪^{ギルティ}

そして現在に至る

「あのな、ベル坊。アイズさんにも礼も言わず逃げたことは情けないが、まあ許そう…何勝手にダンジョン行った挙句死にかけてんだ」

「すいませんすいません！魔法が使いたくて使いたくて…「こんな風にか？」ああ！魔法使わないでください！【神の恩恵】がなくなつてええええええ!!」

第25話しよ、証拠隠滅を…

「そうだ。ベル君、昨日のあの本を見せてくれよ。今日は昼まで暇なんだ」

「いつつ…はい、いいですよ」

俺のアイアンクローから解放されたベルは頭を抑えながらヘステイア様に本を貸した

「ふうん、見れば見るほど変わった本だ、な…あ？」

表紙をじろじろ見て、何ページ目か目を通したヘステイア様は、途中で動きを止めた。
ああまた何かトラブルが出てきたんだなと感覚でわかった

「…コレは、グリモア魔道書じゃないか」

「ぐ、ぐりもあつ？」

「それって確か…」

魔法の強制発現書、『魔導』と『神秘』と言う希少な発展アビリティ二種類を極めた者にしか作成できない著述書

要するにLv3以上であり、発展アビリティを極める…つまりはLvが5、6の者がこれを作ったと言ってもあり得る代物である

それを聞いたベルは固まり、石に変わった

「ベル君が魔法を使えるようになったのはこれが理由だね……。ちなみにベル君、この魔道書は一体どういう経緯でここに存在しているんだい？」

「知り合いの人に、借りました……。誰かの落し物らしい、デス……。ネ、ネダンハ……。」「ヘファイストス・ファミリア」の一級品装備と同等、あるいはそれ以上、つまりは2000万とかそれ以上だ。しかも、一回使ったら効果は消えてただのゴミに変わるんだよ。ハアツハツハツハツ!!!

……笑えねえ」

本当に笑えない。終わった。このファミリアにそんな金などあるわけがない。重苦しい沈黙がホームに落ちる

ヘステイア様はトコトコとベルに近づきポンと手を肩に置き、俺に本を差し出してきた。何をすれば良いか分かった俺は無言で領き本を持つ

「いいかいベル君。今から本は天高く飛ぶ。どこに落ちようが知った事ではない。落ちた時にはボク達の手元には魔道書なんてない。というか、魔道書なんて最初から持ってた。……そういう事にするんだ

というわけでやれえ！ヤミ君！」

「分かったあああああ!!!」

「黒いですよ神様!?!何普通に証拠隠滅しようとしてるんですか!?!ヤミさんもやめてください!!」

地下室からでて行こうとする俺の足をベルが掴み、そのベルの手をヘスティア様が剥がそうとする

「ベル坊!男にはなあ!やらなきやいけねえ時があるんだ!それは今だあ!!」

「証拠隠滅する事が男のやらなきやいけない時なら僕は男じゃなくてもいいです!!!」

「ベル君、下界は綺麗事じゃまかり通らない事がたくさんあるんだ!ボクはこの目で見てきた

住む場所を追い詰められたり、ジャガ丸くんを買えないほどひどい思いをしたり、廃墟の地下室に閉じ込められたり……とんでもない負債を背負わされたり。世界は理不尽で満ち溢れているんだ」

「それはひとえに神様のせいですっ!」

「「うわああああああああああああああ!!」」

……………

ベルの力によって本はベルの手に渡り、三人全員疲れて倒れ伏していると一番最初に回復したベルが口を開いた

「ゼエ、ゼエ……と、とにかくつ、この本を貸してくれちゃった人に、僕、事情を話して

きます…」

「ハア…ハア…べ、ベル君、寄せつ、君は潔癖すぎるっ…世界は神よりも気まぐれなんだぞ…」

「こんな時に名言生まないでください!!隠したっていつかバレるに決まってるじゃないですかーヤミさんも行きますよー!」

「なんでだ?!俺が謝る必要ねえじゃねーか!!借りたのも読んだのもベル坊一人じゃねえか!?!」

そう言うところベルはもじもじとしながら答えた

「その…怒られる時、僕の代わりにヤミさんが怒られるかもしれないなーなんて…」

「ハステイア様!ベル坊が黒いぞ!下手するさっきの俺達以上の黒さがあります!!」

「ヤミ君…頑張つて…ガクツ…」

「ハステイア様ああああ!!!」

「シルさんはいますかっ!」

「おお、少年じゃニヤいか。おっはー、ニヤ?青年はなんでそこまでへばってるニヤ

「？」

「さつきまで一悶着あつてな…とりあえず、シルさん呼んでくれ…」

俺がそう言うときゃツトピープルのクロエさんだったか？その人が尻尾をニョロニョロ振つて笑いかけてくる

「何ニヤ、何ニヤ？挨拶も忘れてシルを呼べだニヤんて、朝つぱらから何をやらかす気「シルさんを呼んでくださいっ!!」ニヤア!?わ、わかつたニヤ!?!」

ベルの剣幕と切羽詰まった叫び声に普通じやないただならぬものを感じたのか、慌てて店の中へ駆け込んで行つた

すぐにクロエさんは扉から顔だけ出してちよいちよいと手招きしてきた。店の中に入るとシルさんが立っていた

「おはようございませす、ベルさんヤミさん。どうかしたんですか?!」

「シルさん!」

ベルがシルさんを見てすぐに詰め寄りあらましの説明をした。だが話が進んでいくうちに瞳を丸くし、顔色を変え、終わる頃には目をそらしていた

「……それは大変な事をしてしまいましたね、ベルさん」

「ちよつとシルさんッ!?何でさも他人事見たいに言つてるんですか?!」

シルさんは手にしているトレイを唇の辺りまで持つていくと、顔の半分を隠し、上目

遣いで見つめた

「やっぱり、ダメですか？」

「すつごく可愛いけどダメッ！」

やっぱり魔女だわこの人。さて、どうしようか大金なんて俺達にあるわけないし…

「うつとおしいよ、坊主共。人様の店で朝っぱらから」

「共ってなんだよ共って…俺は何も言ってるねーぞ女将さん」

騒ぎを聞きつけてかミアさんが姿を現した。無意識に出ているのか威圧感でベル達の動きが止まってしまふ。俺はギリ大丈夫だった

「貸しな」

「アツハイ」

ミアさんに言われ俺は持っていた本を差し出すとミアさんはパラパラと内容を確認する

「確かに魔道書だねえ…でもま、読んじまったもんは仕方ない。坊主、気にするのは止しな」

「ええっ!?で、でもっ……」

「どうか読んでくださいとばかりに店に置いて行った奴が悪い

誰だって貴重な魔道書を見つけたら、自分のものだと嘘をついてまでそこら辺の冒険

者が目を通していたよ

コレはそういうモンさ

手放した時点で持ち主も覚悟はしているさ。坊主だつて金の詰まった財布をなくしたら、そつくりそのまま返ってくるなんて思わないだろう？」

説得力のある言葉にベルが納得したところで「じゃあこの本は空に向けて…」と言つて投げる構えを取つたがミアさんに「物を粗末にするんじゃないよツ!!」と言つてぶん殴られた

ちなみにこの後いつも通りシルさんからサンドイッチの入ったバスケットを貰つた

装備を身に着けていつも通りリリとの集合場所でベルと待つた。だが

「リリ、遅いね」

「ああ、また何か面倒な事に巻き込まれそうな気がしてきた…」

「仮に巻き込まれてもヤミさんなら助けるでしょ？」

「当たり前だろ」

そんな話をしながら待つているとある光景が俺達の目に移つた。見ると大の大人3人が小さなリリを取り囲んでいる

彼等は凄い形相で何かを言い放っており、リリは必死に頭を横に振っていた

「先行くぞー」

「あ！待って！」

見た瞬間に動いていたベルの言葉を無視、自分の言葉だけを残してその騒ぎの中に入って行った

「ヤミ様?!」

「なんだあ。お前?邪魔でもする気か?」

男の一人が俺に問いかけてきた。俺はハアツとため息を吐き

「質問は一つずつにしろよな。まあいいや最初の質問に対してはこのサポーターとパーティを組んでる二人組の一人だ。二つ目の質問は…

『はいそうです』とだけ答えようか」

「は?このチビの……」

「……クツ……ハツハツハ!!!」

急に男三人が笑い出した。なんだあ?と首を捻っていると笑いながら男が喋り出した

「ククク……おいガキ。弱いやつを助けてそこらの英雄気取りですかあ?英雄ごっこならお家に帰ってやりな。今俺達は大人の話をしてんだよ」

「悪いが俺は英雄ごっこしてるんじゃない。パーティのメンバーを助けるために動いてんだ…」

別に戦ってもいいが、冒険者同士の争いは禁じられてるからなあ

それに今戦えば多対一で暴力を振るったってことでお前らの方が嚴重な処罰つてのを受けるんじゃないか？」

「……チツ」

流石に処罰を受けるのは嫌なのか男達は俺に背を向けて歩いて行った

第26話…眠い　by小説好きな人

「……あの、ありがとうございます」

「おう、ハア…よかった戦わなくて…戦ってたらエイナさんにまた説教を受けてたところだったあ〜」

「あの、ベル様は…?」

「ああ、ベル坊ならそこに……」

俺が指差してベルを見ると何やらベルはベルで知らない男一人と睨み合っていた。俺達が近づくとその男は気づいたのか舌打ちをして踵を返し、歩いて行った

「……ベル様?」

「!」

リリが呟くとベルはピクリと動きリリを見た

「リ、リリっ?いつからそこに?」

「ちようど今ですけど……あの冒険者様とは何をお話していらつしやったんですか?」
「えーと…いやあ、ちよつといちやもんつけられちゃつて…」

嘘だ。いちやもんつけられただけの空気じゃなかった。あとで聞き出すか

「そ、そうだつ！何だか絡まれていたみたいだけど、リリは大丈夫だった!？」

「安心してください。ヤミ様が助けてくださったのでリリはこの通り無事ですから」

リリはその場でくるりと回転すると最後に微笑む。本当に無傷で危害を加えられていないことに内心でホツとした

「リリ、あいつらは一体なんなんだ？知り合いつぼかったがお前の「ファミリア」の連中か？」

「い、いえ。ベル様と一緒にいちゃもんをつけられただけです。リリもベル様も、やはり弱っちく見えるんでしょうか？」

「弱っちく見えるだけならまだマシだ。俺なんて貧乏臭い貧乏臭いって…」

「実際そうですもん」

「え？」

「い、いえ！さあ行きましようベル様。リリは二日も探索をサボってしまったので、今日
はベル様のご活躍を期待させてもらいますよ？」

何が酷いことを言われた気がしたが気のせい…なのだろうか？

そう考え混んでいる内にリリはバベルへ足を向け歩き出していた

く探索を終えて夜く

ベルがヘスティア様に事情を話した。ベルと睨み合っていた男の事も全て。その結果

「ベル君。そのサポーター君は、本当に信用に足る人物かい？」

「え……」

その言葉を聞いてベルは身を乗り出すがそれだけ、それ以上の言葉が出ない

「君の話聞く限り、そのサポーター君はどうしてもきな臭いように思える。君が僕のナイフをなくした時も……ああ、別に責めているわけじゃないから恐縮しないでくれ……その日にちょうど行動を共にしたって言う彼女に原因があるようにしか思えてならない」

それを聞いたベルの顔がこちらに向く弁護をしてほしいようだが

「すまんベル。何も考えずに過ごしてはいたが、言われてみればリリは怪しい。リリをサポーターとして雇う前日に助けたリリに容姿が似た小人族の女って言うのも気になる。どうしてもリリと繋がってそうで……」

「ヤミ……さん」

俺がヘスティア様の言葉に頷くとベルが唯一の希望がなくなった時の表情になった

「君の言う冒険者の男に疑われる何かを……いや後ろめたい何かを、彼女は隠している

んじゃないかい？」

「……」

そのヘステイア様からの言葉でベルは無言になると答えを切り出した

「神様。ヤミさん。僕は……」

そこで夢から覚めた

「んあ？……夢か……昨日の話が夢に出るとはな……」

目覚めた俺は周りを見渡す。ベッドにはヘステイア様がぐっすり、いつも通りだ。ソファにはいつも通りベルが……べ……ルが……

「……いないな。ということはあれか俺より早くに起きて出て行った。ベルの行く場所と言えば……ダンジョンしかないよなあ」

ベルの元へ向かうためとりあえず装備を整えて小声で「行ってきます」と言つて教会を出た

店のコツコツと俺の足音が響く。リリと出会った場所を通り過ぎ、リリとお金を分けているところを通り過ぎバベルへ来た

だがベルの姿はない。となると……

「あいつまたあの時みたいにな人で突っ走ってるな…
ぼりぼりと頭を掻きながらベルを探すためにダンジョンへ足を動かした

現在6階層で歌を歌いながら7階層へ降りていると昨日のと男達が走ってきた
「お前は昨日のガキツ!!」

「よお、昨日ぶりだな。どうした?こんな朝早くから…」

相手は気づいていたようで俺を見るなり殺気のようなものを放ってきたため軽く挨拶したのだがあるものが目についた

「その魔剣…お前ら、リリはどうした?」

「ああ?何で教えなきゃなんねーん…:…だ?!」

「いいから答えろ。殺すぞ?」

【闇魔法】で手に闇を纏わせ男ひとりの顔を掴む。男はもちろん抵抗したが魔法で触れている間、「神の恩恵」を無効化、つまりは一般人に戻ってるわけなので俺の力に抗えていない

残りの二人がかかってくると思っっているのだがどういいう訳か震えて動かない

「んで？リリはどこだ？」

「ヒイツ!!」

な、7階層だ！けど、キラアートの囹にしたから生きては…」

「あつそ」

俺は男を壁に投げ、叩きつけたあと、すぐに7階層へ走り出した。男の方は手を離した瞬間に【神の恩恵】は戻るため致命傷にはならないはずだ

7階層に着くと一箇所にキラアメントが大量に集まっていた。多分あれの中心にリがいるのだろう

適当に魔法を使うと巻き込む可能性があるため1匹1匹全力で切り飛ばして行く

ある程度進むと知った声の主がすすり泣く声が聞こえた。キラアメントを掻き分けて見るとそこには涙を流しながら倒れているリリがいた。周りには警戒しつつゆっくと近づく数十匹のキラアメントがいた

【無明斬り】いいいいいいいい!!」

【ファイアボルト】おおおおお!!」

二つの声が重なり、キラアメントの数匹は斬撃により真つ二つに、もう数匹は雷のような炎に焼かれた

『神様。ヤミさん。僕は……それでも、あの子が困っているなら、助けてあげたいです。寂しそうだっただんです、その子。自分でも鈍感になっちゃってるみたいに、自分で気づいていないみたいに、馬鹿みたいに笑うんです。：一人でもへっちゃらだって神様だって、ヤミさんだって僕が寂しそうにすると助けてくれたじゃないですか？間違っていたならそれでいいんです、もし間違っていないかったら：今度は、僕があの子の事を助けたい』

……ヤミさん。僕は面倒事に巻き込まれるかもしれませんが。もし巻き込まれたら：助けてくれる?』

「リリイイイイイイイイツ!!」

男二人の叫び声が木霊する。爆炎に斬撃、突如として始まった挟み撃ちひキラーアント達は慌てふためく

「どおおおおけえええ!!」

そんなことは御構い無しに二人はキラーアントの中を切り裂きながら小さな少女の元へ行く

ベルはリリを抱き上げすぐにポジションを飲ませた。けほっけほつと咳が響く

「……ベルさまに……ヤミさま?」

「おう。こんな面倒事に巻き込まれやがって…帰ったら説教な?」

「ヤミさんは説教される側じゃ…」

…うるせーよベル、アイアンクローくわらずぞ

「まあそれはさておき……ここにくる前に嫌な奴を見てイライラしてんだ。ストレス発散と行くか」

「何を見たのかわからないけど…うん。リリはいつも通り待つてて?」

キラアアントを全滅させリリの元へ戻ると何やらリリは呟いていた。なんだ?と思
い耳を傾けると

「どうしてですか?」

「え?何、リリ?」

リリの呟きにベルが聞くとリリは続ける

「何も知らなかったヤミ様はともかく、ベル様は何でリリを助けたんですか?どうして
リリを見捨てようとしませんですか?」

「……えええ?」

「まさかご自分が騙されていたことに気づいてないんですか?」

ベルも俺も間抜けな顔をしている間にリリはどんだん声を荒げる

「ベル様は何も気づいていらっしやらないでしょう!? リリが換金する際にお金をちよろまかしていました! 二人とリリの分け前は半々などではなく四対六です!」

後から調子に乗って三対七にした時だつてありました!

影でヤミ様の悪口を言った時だつてありました!

ヤミ様にアイテムのお使いを頼まれた時もヤミ様に定価の倍以上の代金を吹っかけました! 合計12品もです! それにヤミ様に……」

リリはそのままどんどん自分が俺達にやった事実を暴露していった。流石のベルも顔をひくつかせる

「これでわかりましたか!? リリは悪い奴です! 盗人です! お二人に嘘ばかりついていたら、サポーターの風上にも置けない最低の『パルウム』です!」

リリの言葉がそこで終わると俺も暴露されていく事実に対して言いたい事をぶちまけた

「ほとんどの被害は俺じゃねえかあああああああああ!!!?」

第27話一週間休んだ後に書いたやつなので酷い出来か
もしれません。ご了承ください

翌日、俺は腑に落ちないところがありません。ベルと共にリリを許し今ではちゃんとしたパーティとして組んでいる。今はオープンカフェの店で話し合いをしていた

「改めてお礼を言わせていただきます。私をまたパーティに入れてくださりありがとうございます。ありがとうございます。ベル様ヤミ様」

「…礼はベル坊だけに言え俺は別に何も「ヤミさんは朝に『リリが待つてんだからいどうぞ』って言うて走って噴水でリリを見つけたら安心した顔で」こらベル坊」

俺の言葉を遮ってベルが真実を打ち明けた

リリは「…ありがとうございます。ヤミ様」と深々と頭を下げる

怒りそうになった俺だがそれで鎮火された

「はあ、そういうえげげリリ。【ソーマ・ファミリア】はいいのか？」

「はい。ヤミ様が助けに行っても【ファミリア】に帰らないリリはもうじき亡くなった事になるでしょうから

死人という扱いになれば【ソーマ・ファミリア】に関わる必要はないですし、あちら

から付け狙われることはないでしょう。何せ、もういないことになっているのですから」

なのでもうご迷惑をかけません、とりりは笑う。前髪がなくなつてあらわになつた瞳には曇りが一切ない。可愛らしい顔がそこにはあつた

そんなリリを見てベルが問いかける

「僕達のごとはどうでもいいんだけど……その、死人だなんて、リリはいいの？」

「お心づかいありがとうございます、ベル様。ですが割り切つた方がいいかと。リリには身寄りはいませんし……ベル様達がリリのことをご存知であるなら、リリは満足です」

「お、おう。ありがとう」

心から言つていると感覚でわかる。気恥ずかしさを隠すため俺はリリの頭を撫でた

「…ヤミ様。間違つてもヤミ様の魔法で私に触れないでくださいね？リリの魔法が解けちゃいますから」

「間違うのか？それ」

そう。リリの言う通り今リリは魔法を使っている

その魔法の名は「シンダー・エラ」、変身魔法と言うらしいがその通り顔と身長以外の全ての外見を変えられるのだ。この魔法の存在を聞いて俺もベルも驚いた

だが俺の【闇魔法】の能力は無効化、その魔法で触れただけでリリの魔法が消し飛ぶのだからリリにとつて俺はかなりの天敵と言えよう

まあ、【神の恩恵】を無効化する時点で冒険者の天敵なのだが…

「まあ、この魔法があるから…」

「はい。ヤミ様の言う面倒なことはありません。あつたとしても、ベル様ヤミ様の手を煩わせる事はさせませんから」

リリが笑顔でそう言うのとベルが安心したようにフーツと息を吐いた。リリに危険が及ぶことがもうほとんどないと考えたからだろう

すると知っている神様の声が聞こえた

「おーいベル君！ヤミ君！」

「あつ、ヘスティア様神様！」

ヘスティア様がこちらに向かって手を振りやってきた。賑わう客の群れを縫って俺達の前に到着する

「おまたせ。すまない、待ったかい？」

「全然待つてませんが…すいません、わざわざバイトを…」

「僕の方は平気さ。それよりも、彼女がそうかい？」

「はい。この…人？…子…が前に話した…」

ヘステイア様とのやりとりを聞いたリリは椅子から立ち上がり頭を下げつつ自己紹介をした

「リ、リリルカ・アーデです。は、初めましてっ」

「あつ……いけない。神様の椅子を用意してもらってないや……」

立ち上がりそう言うベルの言葉を聞きヘステイア様のツインテールがピクリと動いた

「……なあにつ、気にすることはないさ！この数の客だ、代わりの椅子もないだろう！よし、ベル君座るんだっ、ボクは君の膝の上に座らせてもらうよ！ヤミ君でも可あ!!!」
「あはは、神様もそんな冗談を言うんですね。ちよつと待っていてください、店の人に頼んできますから」

「ヘステイア様。そう言うスキンシップはベル坊だけにしてください。流石にこの歳でヘステイア様を膝に乗せたら周りからロリコン認定される」

笑いながら去っていくベルと拒否する俺の言葉が刺さったのかヘステイア様は崩れ落ち、特に俺のが刺さったのか「ロリ……ロリ……」と暗く呟いている

その光景を見ていたリリは苦笑いしかできずにいた

『ヤミさー！ん！人が多すぎて椅子を運ばませー！ん!!手伝ってくださいー!!』

黙っていた俺はベルの声を聞いて椅子から立ち上がるとベルが椅子を取りに行った

方へ歩き出した

「ごめんなさーいつ、遅くなりましたあー！」

少し遠回り椅子を運びやつとヘステイア様達の所に着くとなんだか変な空気が漂っていた。純粹なベルは何も考えずその中に突っ込む

するとヘステイア様が口を開いた

「…パーティーの加入は許可する。あの子達のお守も任せた。けどつ、くれぐれもつ、出過ぎた真似はしないようにッ」

そう言うとヘステイア様は椅子を持っていないベルの腕を自分の元へと引き寄せた

「さてあらためて…初めましてサポーター君、『ボクの』ベル君とヤミ君が世話になっていたようだね」

ヘステイア様が『ボクの』を強調しそう言うとりりはピクピクと顔を痙攣させ、ぱしっ！ベルの反対の腕をとって引き寄せた

「いえいえこちらこそ。『リリにはお優しい』お二方には、いつも良くしてもらっていますから」

側から見れば微笑ましい光景かもしれないが近くで見ている俺には火花を散らして

いるのが見える

ふと見るとベルの目は俺を助けを求める目でみていた。それに気づいた俺はじいちゃんから耳にタコができるほど聞いた言葉で返した

『男なら……ハーレム目指さないとなッ』

「ヤミッコーーん!?!」

リリの今後についての話し合いが終わりヘステイア様達と一旦別れ、「ソーマ・ファミリア」について報告だけでもエイナさんにしようとギルド本部を目指していた

「ハア……ベル、俺なんか悪いことしてないよな?」

ギルド本部を目指している最中にそんなことが口からこぼれた「だ、大丈夫だよ………多分」とベルが苦笑いで返してきた

今は冒険者がダンジョンでモンスターを狩っている頃なのでギルド本部に入るとすぐにエイナさんを見つけることができた

だが俺達の前に先客がいるようだ。白い布に包まれた荷物を持って、カウンターを挟み何かを相談していた

エイナさんと話している人の後ろ姿を見るとなんだか見覚えのある姿だった

「?ヤミさんどうしたんですか?」

「……あーうん。なんでもないな」

ベルは気づいてないのか首を傾げて足を進めていた。あの後ろ姿が誰なのか大体想像できたが言わない方が面白いことが起きると感じた俺は黙っていることにした

やがて間近まで来るとエイナさんが気づいたようで目を見開いている。その反応を追うように、背を向けていた人物がゆっくりと振り返った

アイズ・ヴァレンシユタイン、ベルが懂れているその人が目の前にいた

「……………」

両者無言の時間が流れる

何秒たったのかベルはゆっくりと回れ右して全力疾走の体勢に入った。そしてその体勢から足に力を入れて一気に

ガシッ

駆け出す前にベルの服を掴んで止める

「ちよ?!?ヤミさん?!?」

すぐにベルは掴む手を剥がそうと抵抗するが「強奪」を使いベルの身体能力を低下させ力をいつもより弱くしているため剥がれない

「ベル坊。何当たり前のように逃げようとしてんだ？もはや癖みたいになつてんじゃねーか。しかも三度目だぜ？失礼にもほどがあるだろが

すいませんね。アイズさん」

頭を少し下げて言う俺の最後の言葉を聞いてベルはハツとしてゆつくりとその先を見るアイズさんが少し眉を下げがちに服を掴まれているベルを見ていた

「つっつーす、すいませんっ!？」

そう言つてベルは勢いよく頭を下げた

第28話訓練

「そ、それで、こ、これは一体どういう状況で……………!?!」

「はあ…ヴァレンシユタイン氏が、ベル君に用があるそうなの」

「えっ!?!」

エイナさんの言葉にベルが驚くとヴァレン何某…:…じゃなかったアイズさんは手にしていた荷物の布を解いた。出てきたのはベルがエイナさんに買ってもらったプロテクター

「ダンジョンでこれを拾って、キミに直接返したいからって。ヴァレンシユタイン氏は私に相談しにきてくれたんだよ?」

話によると三日前にベルとリリが10階層に行つて落としたもの、リリを助けようと躍起になって回収ができなかったものらしい

「あー、ベル坊。エイナさんに話す内容は俺が伝えとく。ベル坊はアイズさんとゆっくり話すといい」

「ヤミさん!?!ま、待つて!?!お願いだからっ、お願いだからここにいて!!!僕、死んじゃう……………つ!!!」

ベルが涙目で懇願して来るため心が地味に揺らいだがダメだダメだと自分に鞭を打ちベルに言い放つ

「今まで逃げてきた分のツケが回ってきたんだろうが、自業自得だ馬鹿たれ」

「そんなあ……エ、エイナさん……」

次は唯一の希望になったエイナさんに視線を送るが

「ごめんねベル君今回ばかりはヤミさんと同意かな？ホラ、男の子でしょうつ。言わなきゃいけないことが沢山あるんだから、しつかり一人で伝えるつ。ヤミさんにも頼っちゃダメ！いい？」

そう言つて厳しくベルに言い聞かせると俺と共に席を外した

「……ん。ヤ……さん。ヤミさん」

何やら俺を呼ぶ声が聞こえる。まだ重い目をゆつくりと開けるとそこにはベルが目の前にいた

「んあ？なんだべるぼーかあ……なんだこんな夜n……ふあああ……」

「トイレくらい一人で済ませろよ」

夜明けがまだたつていない頃に起こされ地味に寝ぼけているとベルがヘステイア様を起こさない程度の声で伝えてきた

「ヤミさん。装備を着て僕について来て」

「なんかあんのかあ?」

とりあえずベルに従い装備を着てベルについていく事になった。教会を出て空を見上げるとまだ夜明け前だった

あくびをしながらベルについていくと市壁に到着し、上に行くための階段を登った

階段を登りきり市壁の上に着くとそこには昨日見た人、アイズ・ヴァレンシユタインさんがいた

「ごめんね、こんなところに呼び出して……」

「い、いえっ、大丈夫です!」

ベルとアイズさんは向かい合いそう伝え合う

「え、えつと、ヴァレンシユタインさん、それで、僕は何を……」

「……アイズ」

「はっ?」

「アイズ、でいいよ」

名前の呼び方を指摘されていると気づいたのか一瞬仰け反りかけるベル。まあヴァ

レンシユタインさんって呼ぶよりもアイズさんって呼んだ方が呼びやすいしなあ

「みんな私のことをそう呼ぶから。……それとも、嫌、だった？」

「え、ええつと!?……嫌、じゃないです」

「そう、その人も同じように呼んでもらえると……」

「わかった。それと俺はヤミ・ガズヒラ、ヤミって呼ばれてる。それよりもベル坊、これはどういう事だ? 昨日に何があった」

二人に尋ねるとベルが顔を待つにしながらゆっくりと口を開いた

「その……昨日、ヴァレン……アイズさんと話して……戦い方を教えてくれるって……」

「なるほど、理解したけど、なんで俺まで……」

「ヤミさんは保護者として連れてきて欲しいって……」

また「なるほど」と言うとう度はアイズさんに気になるところを聞くことにした

「アイズさん。確か【ファミアリア】同士でこう言う事はダメ……だった気がするんですが

……」

「……誰にも言わなければ、良いと思う」

「まあそうですねエイナさんにバレたらまたヤバイ事になりそうだな……」

「?」

ドーンと自分の周りの周りの空気を重くして俯いている俺を置いて早速ベルが動いた

「……ア、アイズ、さん。僕は、これから何をすればいいですか？」

「……何を、しようか」

「えっ」

意外な答えにベルが素の反応を示した。アイズさんは何をしようか考え込んでいるのかずつと動かない

「昨日から、ずつと考えて……いたんだけど。ヤミ……さん？はどうすれば良いと、思う？」

「ん？あー……そうだな

今からベル坊と俺が模擬戦するからベル坊を見てどうせればいいのか考えてみればい
いんじゃないか？」

そう言うアイズさんはすぐに手を顎に当て考えるそぶりをすると

「わかった。……じゃあ、お願い」

「つーわけだやるぞベル坊。魔法は無しな」

「えっ、あ、うん」

俺は刀を抜きベルはナイフを取り出した。そのまま静かな時間が流れ先に動いたのはベルだった

「フッ！」

「ほいつ」

ベルなりの最高速で俺の目の前まで走ると右手に持ったナイフを突き出してきた。俺はそれを横に動く事で避けると突き出してきた右腕を掴んだ

「っ！」

すぐにベルはその腕を外そうと押ししたり引いたりするが全く動かない。そうこうしているうちに

「…終わり」

「！僕はまだっ！」

アイズさんから言葉がかかった。ベルはすぐに弁明しようとしたがアイズさんが話す

「君は、ナイフだけしか使わないの？」

「え……？」

「私が知ってるナイフを使う人は蹴りや体術も使うから蹴りとかでも、十分抵抗…できたと思う

確かにベルは掴まれたら押ししたり引いたりするだけで蹴りとか言った抵抗はしていません

何故だ何故だと考えているとベルが答えた

「その…ヤミさんが痛いかなあって…」

「おーいベル坊？模擬戦の最中に俺はお前の優しさを求めてないんだよ。そんな優しきはエイナさんに怒られてる時に発揮してくれ

それよりも、戦いで痛いのは当たり前だぞ」

優しすぎるのもまた問題なんだと再認識しながら説教していると、「貸して」と言つてアイズさんはベルのナイフを受け取る

「……………」

右手でナイフを逆手持ちにして、左膝を軽く真上に上げる。どうやら体術の手本を見せようとしているようだが

「……………」

彼女は首を傾げて足を下ろしもう一度真上に上げてまた首を傾げる。やり方がわからないのか？

「ーんッ」

「うおっ!？」

しばらく見ているとギャリツと石畳を鳴らし、全身を一回転させ回し蹴りを放つてきた

超速で飛んできたそれを俺は後ろに少し飛ぶ事で避けた

「ーん」

がそれでは終わらない。そのままもう片方の足で踏ん張ると後ろ蹴りを放ってきた。避けられないと悟ると刀の鞘で防御を試みるが第一級冒険者の蹴りの威力はその程度で止まるはずもなく。俺はかなりの速さで後ろに吹っ飛んだ

「……今みたいな感じ」

「へ?! あ、はい。ありがとうございます」

…アイズさんの言葉で絶句していたベルが言葉を取り戻し頭を下げていた。俺は刀を杖のように使い立ち上がりヨタヨタと近づくとアイズさんが近づいてきて「ごめん……」と謝ってきた

ベルに教えるためであるため許したが「次からはちゃんと行ってからやってくれ」と付け加えておいた

今はアイズさんがベルに実戦で戦い方を教えていた。俺は今見ているだけだがそれでも学べる事は多かった

空を見るとそろそろ夜明けが近い

『グギョルルル……』

その為腹が鳴り出した。その音を聞いて二人が訓練をやめ、こちらを見て来る

「お腹、空いたね…」

「…はい。何も食べてませんから」

「…ちよーつと待つてろ。腹の足しになりそうなもん取つて来るから」

そう言うのと走つて壁を降りて物陰に隠れ「購入」を開く

「えーと…これ初めて食わせるな。二人はどっちが好みだ？…まあ両方出せばいいか」

そう言つて二種類の物を3個ずつ買つと袋から取り出しついでにバスケットも買ひそれに入れ、市壁の上に戻つた

「ほらよ。腹の足しになるやつ持つてきたぞく水がないのが残念だが…」

「これ、は？」

「俺の故郷にあるパン…」

『あんぱん』だッ!!!」

しあん』派だ。まあ食ってみりやあわかる。あーむツ…むぐむぐ…」

「……ハムツ」

あんぱんを食べる俺達を見てアイズさんもあんぱんを食べ始めた

「ベル様、ヤミ様……どうしてこの頃、ダンジョンに潜る前からぼろぼろなんですか？」

「は、ははっ……ちよつとね」

「男には色々あるんだよ。理不尽な説教を1時間もくらったりとかな」

ダンジョンに潜る最中、リリの質問にズタボロの二人でそう答える

あのアイズさんからの訓練をベルが始めて二日。アイズさんのおかげでベルが着実に強くなってきているのはわかる。しかし俺までついどとしてしごき…訓練に参加させられ、ベルと共にズタボロにされている

なぜ俺までも訓練を受けているのかと言うと初日に「あんぱんを、くれるなら君にも訓練をつける」とのこと

しかし初日からベルがズタボロにされているのを見て断ろうとしたが何故か「お断り

します」と言う言葉が出なかった

アイズさんの目がキラキラしていたためだ。相当あんぱんが気に入ったらしい。多分断ればその場で泣くか下手すればベルの訓練がなくなると思ったため仕方なしにやる事にした

ちなみに「こしあんで、中のあんこ増し増しで」と言われた。絶対じゃが丸くんだと小豆クリーム好きだろうと思う

ちなみにちなみにベルはつぶあん派だと言う。裏切り者め…

「ヤミ様〜?」

「ハッ!どうしたリリ」

「いや、ポーっとしていましたので…」

「ああ、すまんすまん。…てあれ?バツクパツクは?」

「バツクパツクならベル様が持つてくださっています」

リリが指差す場所を見るとベルが中身を使い小さくなったバツクパツクを背負っていた。「そうか」と言って周りに耳を傾けてみると…

『兎と狼と悪魔……』

『デビルとオオカミとウサギ……』

『兎がサポーターだから…身代わり兼生け贄か…哀れな』

『怖え、怖え。狼の方は外見じゃ「ステイタス」なんて反映できねえが悪魔の方は確実に
見た目通りだろ』

「すまんお前ら、周りの奴らぶつ飛ばしていいか?」

「耐えてくださいヤミ様。そんなことをしたら「ファミリア」同士の争いが起きてしま
います」

「そうだよヤミさん。僕なんか哀れに思われてるから…」

「…なんかすまん」

そう言つて周りの囁き声を聴きながら俺は下へ下へと向かった

『ヒィヤアアア!』

『ギィィィィ!』

現在第10階層。俺達の目の前には鳴き声を喚かせる小悪魔のモンスター『インプ』
が大量に押し寄せてきていた

一度第10階層まで来ていた俺は見たことあり。その時でも十分倒せたのだが

「あの時よりも楽に倒せるな！」

あの時と違い今俺のレベルは2、そして久々にやった自分より強い人からのしごき：じやない訓練で技術も地味に上がったため今では【強奪】なしでも簡単に倒せるようになった

「全っ然っ、のろいッ!!」

さらにベルも強くなったためさらに倒す効率が良くなっている。もはやインプでは負ける気が全くなかった

「ベル様ヤミ様、後ろからっ!!!」

リリがそう言っただけで俺達の後ろに敵が来ていることを知らせるがそれはベルも俺もわかってる。ベルは振り向きざまにナイフで斬撃二閃で切り裂き、俺は後ろに向かって刀を刺すことで対処した

だが霧の奥ではまだモンスター達はまだまだいる。それを見るとまた俺達はモンスターを倒すために走り出した

「ねえ二人とも。僕、魔法に依存しちゃってるかな？」

モンスターを全滅させ10階層から9階層に続く階段に腰を下ろしいつものサンド

イッチを片手にベルが聞いて来た

「どうした急に?」

「いや、ヤミさんは魔法を一切使わずにやってたし…」

ベルの言葉に俺が「あーなるほど」と口にするのとリリが答えを返した

「発動条件のハードルが低いので、手軽に使っていると言う点はあるかもしれませんが、依存というより、ベル様の行動の一部になっている、と言う感じでしょうか」

「そのかわり詠唱が無い分、威力が他よりも見劣りする感じだな。…よし、見てろ」

そう言っただけ俺は立ち上がると刀を抜き目を閉じて集中する。すると刀に闇魔法の黒が集まっていき、吸収されるような形で刀に凝縮されていく。やがてそれが収まると刀身が真っ黒になった刀を上に掲げ

「ふんっ!!」

思いつき振り振る。すると刀に溜まっていた力が一気に解き放たれ

ドンツツツツツ!!

巨大な斬撃となりダンジョンの壁にぶつかる。壁は傷つき少々抉られた壁が出来上がる

「まあこんな風に時間をかけて発動されるから魔法は必殺技として機能して…」待ってくださいヤミ様ツ!!今詠唱していましたか!?」…あつ」

やばい。秘密なのにリリに見られた……どうしよう

「……とりあえず。リリは誰にも言わないでもらえるか？」

「分かっていますよ。そのかわり、また今度何か奢ってください」

「……分かっているよ」

そう言い合うと「コホンツ」と咳払いして先程の続きを話す

「まあ普通はさつきみたいに時間かけて魔法を完成させて撃つんだが、ベル坊の場合は魔法は即席で完成させて、それを撃っている形だな」

「簡単に言うとその……僕の魔法は弱い？」

表情が少し暗くなりながらそう呟くベル。そんなベルに「違うぞ」と言って言葉を続ける

「弱いわけじゃない。数か質かの違いだ。相手の攻撃範囲外から魔法を撃つ際、詠唱なんかしていたら前衛がいないとすぐにやられる。だがベル坊の魔法はどうだ？ 連射が効くから前衛なしでも十分戦える

逃げる事すらも難しいしな」

そこまで言うのと暗かったベルの表情が明るくなる。さらにリリが続ける

『『魔法』さえ上がれば、魔法は規模も出力も上昇します。戦闘には直接関係しないリリのこんな魔法でも、「ステイタス」の強化によって少し具合が変わりましたから』

「まあそう言うことだった。希望持って行くこうぜ？魔法には無限の可能性があるって誰かが言ってた気がするしな」

ベルが自分の手のひらをまじまじと見つめる。ある程度見ると拳を握り「ありがとう」と言われた

「午後も、頑張ろうか？」

「言われなくても」

「どこまでも力添えさせていただきます」

？

「あらら…」

「大丈夫…かな？」

ベルがアイズさんの攻撃を受け気絶した。ベルに近づき二人で覗き込むように見る

「こりや少しの間起きねえかもな」

「どう、する？」

「あー…アイズさんはベル坊を見ていてください。俺はタオルか何か濡らして持つてきますから」

「…わかった」

↳ 1、2分後↳

「おーい、持つてきた…ぞ？」

「ん…貸して」

タオルを濡らして持つてきてみればそこには倒れたベルを膝枕していた。アイズさんは何も気にしていないようでタオルを差し出すとそれを受け取りベルにつけた

「……ねえ」

「ん？何？もうあんばん？」

「そう、じゃない」

…これで、ちゃんと謝罪できてる…のかな？」

アイズさんの問いに首を傾げ「どう言うこと？」と聞くとアイズさんは口を開く「ミノタウロスの時も、酒場の時も…悪いことを、したと思うから…」

「ああ、そう言うこと。気にしなくていいんじゃないか？」

「…えっ?」

「ミノタウロスの時だか酒場の時だか知らんがそりやあもう感謝してるぞ?俺もベル坊も

まあ…なんだ。謝罪だのなんだの気にしないでやりたいようにやってくれ。…あつ、やりすぎはやめろよ?」

はははつと笑いながらそう言うとベルがゆっくりと目を開けた

「大丈夫?」

「……ほああ?!」

第30話バレちった（^ ^ ;）

アイズさんが何やら知らないが「昼寝の訓練」と称したただの昼寝をしたあと訓練をまた再開させ市壁から降り、いったん離れ都市に向かっていた

それもこれもいつもなら俺の腹の虫がやっている仕事をベルがしてくれたため食べ物を食べにきたのだ

「あの、今はどこに向かっているんですか？」

「北のメインストリート。ジャガ丸くんのお店があるって、テイオナに教えてもらったから」

口を開いたベルの言葉にアイズさんがそう答える

……あ、あれ？ジャガ丸……くん？

「あ、あのー…ジャガ丸くんはやめない？」

「？なんで？ジャガ丸くん、嫌い？」

「い、いや！嫌いじゃあないんだけどさ…ホラー！またあんぱんかなんか出すからさッ！！」
「ダメ、いつも貰ってばかり。いつものお返し」

やっつっつべえ！！

善意でやってってくれるせいで断りづらくなってる!!

「な、なあベル坊…俺、なんか嫌な予感がするんだけど…」

「奇遇だね。僕もだよ…」

ベルと二人でヤバイヤバイと頭を悩ませているとアイズさんが目印のようなものを発見したようで

そこに向かって駆け出す。慌てて追いかけて見るとジャガ丸くんの屋台があつた。そこには見覚えのあるロリ巨乳神様がいた

その見覚えのある姿を見て俺もベルも固まり、そして

「いらつしやいまあ……せ、え？」

顔を上げた店員さんも俺達の姿を見てかたまる。ロリ巨乳、ツインテール、紛うことなきヘステイア様がそこにいた

「「……」」

「ジャガ丸くんの小豆クリーム味、二つください」

固まっている俺達の気も知らずに淡々とアイズさんは注文をする

別の店員さんがジャガ丸くのを、ヘステイア様はノロノロと包装し、「80ヴァリスです」と言つて差し出した「どうも」と言つてそれを受け取るアイズさん

するとヘステイア様はとてとと露天の裏を回つて俺達の目の前に現れる。着実に

ていた俺には殺意ある目で睨む

「それで、どうして【劍姫】と一緒にいるってえ……?!」

「え、えっと、たつ、たまたま、すぐそこで出会って……?!」

「……神の前では嘘はつけーんツ!!」

両手を振り上げ猛獣のように「うがあーっ!」と叫ぶヘステイア様に「ひいひいつ!!」とベルは半泣きする

「し・か・もツ! ヤミ君だけはボクの味方だと思っていたのになんで君までツ!!」

「ベル坊の保護者です」

嘘は言っていない。ヘステイア様は「む? そ、そうなのかい?」と言いまだ信用できていないのか手を顎に当て考え込んだ

「あの……私が、戦い方を教えています」

見守っていたアイズさんが口を挟む。そのまま正直にやっていることを打ち明けるヘステイア様はハツとする俺達に向き直り

「二人共、まさかこの子に【ステイタス】を見せたんじゃないやあ……」

「み、見せませんよ、見せるはずないじゃないですか?」

「右に同じ」

「ということは、まさか、二人の成長速度に目をつけられた……?!」

小さな独り言は俺を含めた誰にも聞こえてはいなかった

ヘステイア様はまたアイズさんをキツと睨み付けるとベルの胸に両手を伸ばしぎゅうと抱きつき

「ボクのベル君とヤミ君に唾をつけておこうとしたって、そうはいかないぞ！なんてつたってボクの方が先だからな！」

「神様つつ何やってんですか!？」

「えっ……うわああああああ!?!べ、ベル君つ、何て大胆な真似を!？」

ヘステイア様とベルの茶番を見ていると

「ヘステイアちゃん、お店の邪魔だから、痴話喧嘩なら他所でやっておくれよー」

「す、すまない、おぼちゃん！君達、こっちへ来るんだ!」

露天の中にいる獣人の店員さんに注意されヘステイア様はベルを引きずりながら路地裏に足を動かし、俺とアイズさんはそれを追う

「…あの人が、君達の主神?」

「まあ…うん」

「いつも、あんな感じ?」

「そうだな。…なんかすまん」

そう話しながら路地裏に入るとヘステイア様が待っていた

「まずは…詳しい話を聞こうか？」

「…うん、話はわかった。それじゃあ…もう縁を切るんだ」

「はいっ!？」

「ですよー」

「駄目、ですか…?？」

「ああ。ヴァレン何某君、ボクのベル君ヤミ君のために関わらないでくれ。君にだって立場があるだろう。お互いの「ファミリア」のためにも一番むぐぐぐぐぐぐぐぐうううっ!？」

へスティア様の言葉を遮りベルがへスティア様の口を塞ぎにかかるといつもならあり得ないことが起こった

もちろんへスティア様は驚きすぐに解放される

「……………!？」

「……………っ、……………、……………!？」

何やら小声で話し合っているため何も聞こえない。アイズさんも首を傾げて待っている

「あ、アイズさん。ジャガ丸くんくれますか？」

「そうだった。…はい」

ジャガ丸くんの一つを取り出し手渡しで渡される。渡されてすぐに俺は「いただきませす」と言っただけでジャガ丸くんにかぶりつく

「おっ美味しい。小豆クリームって、こしあんに似てんだな」

「…うん。私も、よくこれを食べてる」

こしあん派二人でジャガ丸くんを食べて待っているとやっと話が終わったらしくべルとヘステイア様がこちらを向いた

ヘステイア様は「ロキ・ファミリア」に関係がバレないことを条件に、残り二日の訓練を認めると口約してくれた

「言っておくけど、ベル君達に変な真似をしたらその時点でこの約束はなかったことにする、いいね？」

「はい」

「誘惑なんでもっての他だからなあ……！」

「はい………？」

最後に釘を刺すがベルはそれを慌てて止める

「それじゃあ、今日はボクも君達の訓練を見物させてもらおうかな」

「えっ!？」

「バイトはどうすんだ？」

ヘステイア様の言葉に疑問を持った俺はそう質問するとヘステイア様はとてもキラキラした笑顔で言い放つ

「決まってるじゃ無いか♪」

ヤミ君、任せた」

……………ん？

「……………ん？ちよつと「よーしベル君!!行くぞおおおお!!」

「え？ちよ神様!？」

ヘステイア様はベルを引きずりながらいつも訓練をしている市壁の方へ走って行く

アイズさんは追いかける寸前、俺に言葉を残して走り出す

「……………ドンマイ」

そう言っつて風のように走って行ってしまった。路地裏から出てみると先程の獣人の

おばちゃんがいた

「あんたがヘステイアちゃんの言っていた代わりだね！ヘステイアちゃんの分、たっぷり働いてもらうからねっ!!」

その言葉を聞いてもう諦めた。おばちゃんにビシッと敬礼すると

「わかりましたっ!!残り少ない時間かもしれないかもしれませんが精一杯働かせていただきます!!!」

「おっ、やる気だね！よーしやるよっ!!」

「イエッサーッ！」

第31話

「ハア、めっちゃくちや疲れた…」

現在俺はヘステイア様のバイトを終わらせ、まだ終わりの時間では無いはずなので市壁に向かって歩いてた

「ジャガ丸くんもらったからまあいいか……んあ？」

市壁の近くに来たは良いが何故か登り降りするための出入り口の周辺の明かりがない。薄暗い道が続いている

「……【領域】」

闇を展開し、索敵に長けた魔法を使い歩を進める。ある程度進むと

カンツキンツガンツ

俺の向かう先で鉄と鉄がぶつかる音がした。俺は走り音の発生源が目映った

アイズさんが一人のキャットピープルと四人のパルウムに挟撃されていた

「ベル坊達は!？」

慌てて探すとベルはアイズさんに見惚れているのかその場で立ち尽くしている。するとベルは一步前へ…

「あの馬鹿ッ!!!」

だが俺は【領域】によってベル達の周り、建物の影に四人の敵がいることを感知していた

四人は一斉にベル達に襲いかかり、ベルは反応が遅れ…

バシッッ!

四人のうちの1人が黒いムチのようなもので叩かれ撃ち落とされたためすぐに他の三人は攻撃を中止した

「ヤミさん!」

ベルの顔が向く先には俺がおり剣から伸びたムチのようなものを振り回していた

「おっすベル坊。生きてたな。よし」

このムチは攻撃範囲の広い少量の闇を剣に纏わせたもの。刀身で切っているわけでは無い上に少量なため威力は低いが牽制にはなる

「アイズさん凄えな…5対1だぜ?」

未だ戦い続けるアイズさんを見てそう言うのと視線を戻し叫ぶ

「ベル坊お!!女なアイズさんがあんな頑張ってた!!男として弱い所見せらんねえぞ

!!!」

「…………ッ!はい!」

ベルからの良い返事を聞くと出し惜しみ無しに魔法を発動させた

「【強奪】!!」

「「ツツツツツ!!」」

アイズさんの相手をしている者、俺達の相手をする者。簡単に言えば『敵』全てから身体能力を奪い、自分の物にする。敵はいきなりガクンと落ちた身体能力に驚き自分の腕を見てパチクリさせている。だがアイズさんの方の敵はそれでも戦いをやめてはいない

「さあ……始めようか。言つとくがこれは『戦闘』じゃあねえ……」

一歩、また一歩と敵に歩み寄る。だが相手もまた一歩一歩後ろへ下がる

「ウチの【ファミリア^家族】に手を出したお前らに対する……俺からの一方的な『処刑』だ」
その瞬間に距離を詰め闇を纏った左手で敵1人の肩を掴み右腕を引きしほり力を溜める

「……ツ……ツ……」

敵は暴れ肩の腕を外そうとするが闇のせいと身体能力はLv1以下さらに身体能力を奪われさらに力は下の下、そんな奴に外せるわけがない

「覚悟は出来たか？」

「や、やめ……」

敵の言葉に耳を貸さず殺意MAXの拳を振り下ろし

ギリギリで止めた

それだけで風圧が発生し、風が吹き荒れる。止めた拳をどけて敵を見ると気絶していた

く久々のベル視点く

ヤミさんがいきなり1人を気絶させた。それを見ていた僕は家族であるはずのヤミさんが恐ろしく思えてしまった

昔、おじいちゃんに見せてもらった英雄譚の中、ヤミさんに貸してもらった数冊の本の中にも今のヤミさんにふさわしい呼び名があった

『魔王』

悪魔の頂点に立つと言われる人間達の天敵にして力の王。その姿を見た気がして恐

怖してしまふ。だがその背中はそれ以上に……

「ベル坊ツ！」

固まっている僕の横をヒュツと何かが通り過ぎ

「ぐあつ?!」

後ろから呻き声が聞こえた。ハツと振り返ると後ろから敵が武器を持って迫って来ていた。そしてその右腕にはヤミさんが投げたであろうナイフが突き刺さっていた

「ベル坊！何があつたか知らんが今はヘステイア様を守るぞ！」

「ア、アイズさんは?!」

「あいつがそんな簡単に死ぬかあ!!」

僕の問いにヤミさんはアイズさんのことを無意識だろうがあいつ呼びで叫びながらこちらに向かつて走って来ているヤミさんの後ろから大剣使いが斬りかかろうと振り上げているのが見えた

僕はすぐナイフを抜き振り下ろされた大剣を受け止める

「はああつ!!」

大剣がナイフに受け止められるとは思ってもいなかったのか驚きの表情に染まる大剣使いの男

「ナーイス♪」

ヤミさんがそう言って刀を振る：前に男は大剣から手を離し後ろへ下がると予備武器であろうナイフを抜き、僕達の周りを大きく走り回り始める。続いて気絶した1人を抜いて残りの2人もそれに加わり走り回る

そしてタイミングを合わせ一斉に飛び掛って来た

「神様、ヤミさん！伏せてください!!!」

そう言つて僕は取り残された大剣を持ち、回転斬りを放つた。大斬撃は敵三人を同時に吹き飛ばす

「おおおおおおおっ！ベル君、今すごいカッコ良かったぞ!?惚れ直したよ!」

「お、落ち着いてください神様!」

「でもあれが出来るようになったのはあの人のおかげ…」

「ヤミ君は黙つててくれるかい?」

僕に抱きついた神様はヤミさんを睨み付ける。ヤミさんはエイナさんに怒られる時と同じようにビクリと体を震わせる。そんないつものヤミさんの姿を見ているといつものまにかヤミさんに対する恐怖は無くなっていた

くヤミさんく

「アイズさんっ！」

ヘスティア様に睨まれて固まっているとベルが思い出したかのように叫ぶと右腕を突き出す

ベルの声に反応したアイズさんはベルを見ると僅かに見張り、その場から離脱した
アイズさんの離脱を確認したベルは即座に唯一の魔法を敵に向け発射した

「【ファイアボルト】!!」

6連射ベルだけの魔法が敵に炸裂する。爆発した際の衝撃は闇を展開して盾にすることで防いだ

闇を解くとそこには

まだまだ余裕と言ったキヤットピールの男と気絶した四人を担いだ四人のバルウムがいた

「詠唱を抜いて魔法を撃ちやがった……」

「それに……あの男、Lv1あたりだと踏んでいたのだが、どう考えてもLv2か3はあるぞ? 急激な身体能力の減少に何か関係が……」

「あの方に報告だな。きつと喜ばれる」

ベルが無理な魔法の使用で動けなくなる一方で敵は笑みを浮かべて何か喋りごとをしている

「目立ちすぎだ。火のせいで直に人も集まるぞ」

「分かっている。……もう十分だ、退くぞ」

そう言つて敵はその場を離れた。それを確認すると

「ヤミさん?!」

ドサリツと俺は大地に背をつけた俺を見てベルが声をかける

「大……丈夫だ。筋肉痛だよ……それに心配なのは……」

そこまで言うとは急激な身体能力の低下による反動が返ってきた。脱力感が俺を襲い全くと言つていいほど動けなくなった

「……大丈夫?」

「大丈夫だけど……しんつつつどい!!!」

傷はないが動けなくなった俺に心配の声を掛けてくれるアイズさんにそう伝える

「あの、アイズさんの方は……」

「私も、平気だよ」

「そいつあようございんした。つとベル坊、肩貸してくれ」

ベルに頼むとすぐに肩を貸してくれる。するとベルが疑問を口にした

「あの人達、なんだったんでしよう。いきなり襲つてきて……」

「光まで消して、人払いも済ませていた。計画性がありまくりだな。理由もなく闇討ち

なんて…「よくあるよ」…あるんかい」

だが、ダンジョンの外で仕掛けられるのは珍しいらしい。…中は普通にあるのかよ
「しっかし解せないなあ。ヴァレン何某君が狙われてるならともかく、しっかりベル君
達まで襲われていたじゃないか。まあ、ヤミ君の強さは誤算だったらしいけどねっ!!」
「はっはっはあっ!!」と笑いながら胸を張りそう言うヘステイア様

直後。後ろからくるおぞましい視線にぞっ、と体が震える。だが俺は動けない。だが
ベルも同じようにベルだけはそこを見上げていた

第32話次回はオリ主が戦闘します

ベルが一枚の紙を見てピクリとも動かない。俺は俺で後ろからその紙を興味深そうに見ている

名前：アイズ・ヴァレンシユタイン

所属：ロキ・ファミリア

【劍姫】Lv6

「Lv. 6……」

多くの名前が順に乗る冒険者リスト、その中の一つ「アイズ・ヴァレンシユタイン」の欄を見てベルが呟いた

「本当に、少し前だったかな。ヴァレンシユタイン氏が「ランクアップ」したって公式発表されたのは……」

事の発端はいつもは見ないロビーの掲示板にあの人の「ランクアップ」の情報が淡々と貼りだされたのをベルが目撃し、エイナさんに尋ねると冒険者リストを貸してもらい今に至る

「階層主を、一人で倒しちゃったらしいんだ。下層域よりさらに下の、『深層』のダンジヨ

ンで……」

「へへへ……」

エイナさんの言葉を聞きながら冒険者リストをじつと見る

「ヤミさんもヴァレンシユタイン氏に興味あるの?」

「ん? いや、冒険者リストってこんな風に乗ってんだなあって……」

「興味ないなら見ないでもらえますか? 一応個人情報でもあるので」

エイナさんに冷たく言われ冒険者リストから目を離す。ベルは相変わらず冒険者リストから目を離さない

「あの、ベル君。無理かもしれないけど、今回の事は気にしなくてもいいと思う。階層主を一人で撃破しちゃうなんて、私も聞いた事がないもん。ヴァレンシユタイン氏が特別なんだと思う」

「プツ……」

エイナさんの言葉を聞いて俺は笑いが吹き出してしまった。エイナさんを見ると俺の事を白い目で見てきている

「……なんですかヤミさん?」

「いんや、なあんにも」

「……………」

何も無いと言っているのにエイナさんは俺の事をずっと睨みつける。俺は仕方ないと観念して思つた事を口にする事にした

「……『あいつが特別だから』だとか、『そいつが天才だから』だとか。くだらねえと思つてなあ

そう言つたセリフを吐く奴はいつだつて諦めた奴、負け組が言うもんだ

『努力は必ず報われる』？そんなもん嘘だ。大嘘だ。報われない時もあるさ

それでも諦めずに努力し続けてやつと這い上がつてきた奴がアイズさんみたいな勝ち組なんだと俺は思う。違うか？」

そう言うときエイナさんは目を見開くエイナさんの反応を他所に俺がベルの肩に手をポンつと置くとベルがこちらを見てくる

「ベルはいつも努力してる。いつもベルの側についてる俺が保証するぜ？最終的には『諦めない奴が報われる』んだからな」

……

「ヤミさん。さつきはありがとう」

ギルドを出て歩き出すとベルがいきなりそんな事を言う

「どうしたいいきなり？」

「いや、さつき冒険者リストを見ていた時さ。ちよつと不安になつてたんだ。僕なんかアイズさんに追いつけるのかなって……」

でも、ヤミさんの言葉で決めたよ。僕は強くなつて…アイズさんに追いつくよ!!」

「フツ…ハツハツハア！」

そうだツ！そのいきだ！お前と言う男が決めた事だ。途中で投げ出したりすんじやねえぞ？」

「うんっ！」

ベルの返事にまた笑つて返す。ベルの顔はギルドの中の時のように暗くはなく。明るいものとなつていた

「ベルさん！ヤミさん！」

突如飛んできた呼び声に俺達は周りを見る。先に目に映つたのは『豊穰の女主人』、次に見たのはその出入り口から出てくるシルさんだ

シルさんはベルに近づくと両手でベルの手を握つた

「会いたかつた……！」

一瞬その言葉を聞いて何事かと思つたがシルさんが魔女だと学習している俺は口くでもない事だろうと感じ、即座にその場を後にした

『ヤミさんー?!』」

何か聞こえた気がしたが、気のせいだ気のせいだと自分に言い聞かせ走り続けた。夕方、ベルの話によるとシルさんがやるはずの皿洗いをやらされたらしい。逃げて良かったと思ったがその日ベルはずっと口を聞いてはくれなかった

、 (? π ? ;) ノ || 3 || 3 || 3 (; ∇ ;) Σ (, ● ? ● ')

いつものように金属音が鳴り響く訓練を眺める。ベルがアイズさんの攻撃を受け流し、ついに反撃と呼べる反撃を成功させた

思わず俺の手が動きベルを讃える拍手を送る

「これで、終わりだね……」

太陽が出てくる。一週間の訓練の終了の合図だ。ベルは短刀をしまうと礼儀正しく腰を折り頭を下げた

「今日まで、ありがとうございました」

短い時間だったが、俺もたまにサンドバックだったが、楽しかったため続けて俺も頭を下げる

「私も、ありがとう。……楽し、かったよ

……それじゃあ、頑張ってたね」

「……はい」

少ないがこちらに言葉を送り、ベルが返事すると背を向け遠ざかっていく

「アイズさん。忘れ物」

そう言つて手に持ったものを投げると振り返つたアイズさんがそれをキャッチする。
もちろんあんぱんだ

「そんじゃ、行くぞ。ベル坊」

「…うん」

ヤミ・カズヒラ

L v 2

力：H 1 2 1 ↓ F 3 1 2

耐久：I 8 6 ↓ G 2 7 9

器用：H 1 1 3 ↓ F 3 5 6

敏捷：H 1 2 9 ↓ G 2 4 6

魔力：H106↓H199

純粋I

《魔法》《スキル》そのまま

ホームに戻り久々に更新した俺の【ステイタス】、アイズさんのおサウンドバッグにされたせいかげで耐久が異様にあがっている。ベルは俺以上にしごかれた

しかもLv2の俺でこれだ。ベル君はどこまで成長しているか想像もできない
「うーんと、ベル君？あのサポーター君とは上手くやつてるかい？」

ベルの番になって黙っていると落ち着かなかつたらしいへステイア様が言葉を口にしたが

「神様……前から同じこと聞いてますよ？」

「そ、そうだったかいっ？」

そう、さつきから同じ質問しかしていない。顔を赤くし、コホンツと咳をしながら【神聖文字】を刻んでいく

「それにしても、一週間だったつけ？よくもまああの【剣姫】にしごかれたじゃないか。ベル君もヤミ君も。『耐久』の熟練度が他のアビリティを差し置いて凄まじい事になっているよ？」

「ベル坊はよく気絶してたなあ」

「……は、はははっ」

空笑いするベルの笑い声を聞きながらヘステイア様を見るとやはり機嫌が悪くなっている。ベルの《スキル》による成長速度のせいだろう

「ベル君。ちよつと掘り返すようで悪いんだけど、例の【剣姫】と何か……いかがわしいこと、した？」

「い、いかがわしいことって……」

「例えばそうだなあ……膝枕とか」

「「ぶっつ!!!」」

俺とベルは同時に吹き出しベルは枕に顔を沈め、俺は腹を抱えて盛大に笑った

「な、何があつたんだい?!ベル君……いや、ヤミ君!ボクに教えてくれ!詳しく、鮮明に!」

「か、神様?!」

目から嫉妬の炎を燃やして聞いてくるヘステイア様、神に嘘は通じないため……

「……黙秘します」

「うがぁーっ!!」

ヘステイア様は嫉妬に狂う獣となった。かわいい

だがこのままここにいたら無理矢理聞き出されかねないため逃げる事にした

「ベル坊！俺今日はソロでダンジョン潜るからリリにはよろしくなっ!!」

「まあてえくまあつんだ。やあみい…「行つてくださいヤミさん！」な?!ベル君！離すんだ！」

ベルがヘスティア様を足止めしてる間に俺は先を急ぐ。ドアを開け、一応閉めてから階段を登りダンジョンへ全速力で走った

く9階層く

適当に思い浮かんだ歌を歌いながら9階層から10階層に行くための道を歩いていると妙に見覚えのある姿があった

「ヴヴオオオ…」

「えーと……間違つていなけりやミノタウロス…だよな？」

Lv1の時、初めて敗北したLv2相当のモンスター

人の体を持ち、頭は牛の化け物がそこにいた

「ここにいつまでもいたら死ぬ奴が…いや、もういるか？」

最後まで言う前にミノタウロスが片手で持つ大剣についた血を見て犠牲者はもうい

ると考える

瞬間、ミノタウロスは動きだしその大剣を横に振り攻撃してきた

「おっそい!!」

それをジャンプすることで回避、空中で刀を抜き落ちる勢いでミノタウロスに斬りかかった

「やはり、Lv2かそれ以上…」

刀はミノタウロスに届かず、一本の大剣によって防がれた

第33話オリ戦闘をやるけど毎日更新にはめちやくちやつらいです。なので2300字しかありません。すいません、これが限界でした

攻撃を受け止められた。誰に？

ミノタウロスじゃない。だれ？

声が聞こえた。援軍？

違う。こいつは…

「……誰…だ?!」

別にそいつに何かやられたわけでもない。かといってミノタウロスにも何もやられてはいない。俺はミノタウロスから目を逸らさずずっと見ていた。冒険者だとしても相当な格上じゃない限り…

「いきなりで悪いが、お前は俺と戦ってもらおう」

ミノタウロスから目を逸らし身長2Mはあるその男を見た。いや、見せられた

冒険者になって日が浅い俺でも本能が警告していた

『この男は視界に入れていないと一瞬で死ぬ』

ミノタウロスは野生の本能なのかその男に対して威嚇をする。だが男はそれを物ともせずミノタウロスを見やると一言、たった一言だけ言った

「行け」

その言葉を聞いた瞬間ミノタウロスはすぐにその場から逃げ去った。ミノタウロスが俺の横を通るが俺もミノタウロスもお互いを気にも留めない

「……さて、始めようか」

「……っ」

男の手にはミノタウロスの持っていたものによく似た大剣が握られている。いや、同じなのかもしれない。だが持っている者が違うだけでその大剣から滲み出る覇気がまるで違った

刀を抜き、構えるが小刻みな震えが止まらない。勝つ可能性は……いや、そんな可能性を考える事などおこがましい。そう思えるほどの強者だ

「来ないのか？ではこちらから行くぞ」

男が一步踏み出し踏み出した足に力を加え一気に加速しようとする

「(今だ)【強奪】!!!」

その一瞬について身体能力を奪う。男が足に加えた力は多少抜き取られガクツとバ

ランスが崩れた

すぐさま俺はバランスを崩した男に俺の刀の攻撃範囲まで加速して闇を纏わせた刀で攻撃を……

プシツ……

する前に右肩から左の横腹にかけてデカイ切り傷が開き、膝をついた。傷からは噴水のように血が噴き出した。傷は浅いため致命傷ではない

「どうした？もう終わりか？」

これをやったであろう男は平然と、余裕と言った表情で俺を見下ろしていた。片手には変わらず大剣を持っている。一体どのような筋力をしたらあのようなものを振り回せるのか

「ま……だだあ!!」

そんな戦闘には関係のない思考を捨て、すぐに立ち上がり敵に、前に突進した

〔無明斬り〕じゃ躲される。ならせめて至近距離で当てるしかねえ……!〕

勝算など皆無。逃げる事など許されない。ならばと刀を振るうが当たる気配が全くない

「太刀筋に焦りが見え始めたぞ」

男が不敵な眼差しで見つめながら淡々と俺に言葉を送ってくる。それでも刀を振り

続けた

そして急激な身体能力の低下による疲労が来た。俺の動きに一切のキレがなくなり、立っているのも困難な状態になった

俺は目を閉じ、刀を鞘にしまう事なく俯き、じっとその場に立った

「……想像以上に諦めが早かったな。流石にもう少しは持つとは思っていたのだが、買いかぶりすぎたか？」

「……」

男の言葉に俺は何も反応せず目を閉じてじっとしている

「不意を打つつもりか？ さっきなのでお前の攻撃は当たらないと自覚しただろう？」

「……」

先程と同じ

男はゆっくりと歩み寄りゆっくりと大剣を振り上げた

その瞬間、俺は顔を上げ。笑みを浮かべた

「ありがとよ。わざわざゆっくり、ゆっくり来てくれて。おかげで溜まったぜえ？」

男の目の前に刀が振り抜かれる。ただの足掻きだと思い男は上半身を後ろにそらすことで避けようとした。刀は当たるところか空を切る。それだけのはずだった

「俺のありつたけ……喰らえ……」

刀からこの道を覆い尽くすほどの大量の魔力マジカが勢いよく噴き出した。「魔剣」を思わせる力はそのまま男を飲み込む

そこらのモンスターならば消し炭になることだろうその威力。さらには受けた冒険者にとつては『耐久』と《魔法》による防御関係なしの超特大ダメージ。いくらあの男でもこれにはどうしようも…

「危なかった。そして、中々に効いたぞ」

男は大剣を盾のように使い耐えていた。その大剣はボロボロ、いまにも壊れそうだが。そして男にも多少の傷がついていた

「ふ…ははは…生きていたら離脱しようと思っただが、そんなピンピンしてんなら無理だな。だが…一矢、報いた…か…」

精神枯渇マインド・ゼロ、逃げる事は出来なかったがこれほどの男に一矢報いたと言う事の高揚感に浸りながら地面ダンジョンに倒れ伏した

くオリ戦闘終了のお知らせく

上層にミノタウロスの出現、これを聞いたアイズは遠征にもかかわらず仲間を置いて

ミノタウロスがいると言う9階層に向かっていた

あの二人はLv1…一人はLv1にしては強い気がしたがどちらにせよ一刻を争う事態だ

ドンツ

10階層で霧の中を駆け抜けているとダンジョンの中に音が鳴り響いた。その音を聞きアイズは足をさらに早く動かす

「なに、これ」

9階層に来了。そこにあつたのは階層の一部が何かによつて抉られた地面。強化種かと頭をよぎらせたが。次に見た光景で目を見開いた

ヤミが倒れていた。その前には誰もが知る強者【おうじゃ猛者】オツタルがいた

「……【劍姫】か」

「ツ?!」

オツタルがアイズに気づき振り向くと所々に傷がついたオツタルの姿があり、驚愕した。誰がやったのかは言うまでもない。未だ倒れ伏しているヤミしかない。だが彼はLv1であるはずだ

そんな思いが渦巻いているアイズをよそにオツタルは

「【劍姫】、今の俺はお前達とは手合わせする気は無い」

そうを言うと次は倒れているヤミを指差し

「そいつの事は頼んだぞ。一度敵となった者に施しを受けたくはあるまい」

それだけを言い残しオツタルはアイズに背を向けその場を去った。アイズはただその後ろ姿を見ているだけだった

するとオツタルとは別の道からパルウムの少女が現れ

「冒険者、さまっ……どうかつ、どうかお助けくださいッ!？」

第34話『止まるんじやねえぞ…』…止まりたい。つーか 逃げ出したくなかったby小説好きな人

ギルドに向かう途中でいきなりベルに言葉を送る

「ベル坊、Lv2になったな!!おめでどう!!」

そう、ベルがついにLv2に到達。ランクアップするためには偉業がどうたらこうたらだったか?

まあ偉業を達成すればランクアップするらしいのだが、ベルがやった偉業はあの逃したミノタウロスを単独討伐したとのこと

多分トラウマになっていた者を倒したと言うわけなのだから祝福しないわけがない
「あ、ありがとう。それよりヤミさんはその傷、大丈夫ですか?」

ベルの言う通り俺には大きな傷跡が文字通り残った。あの男は何者なのかわからな
い。あのまま死んだと思っていたのだが次に目覚めたのはベッドの上、包帯を巻かれた
状態だった

「まあそんな事は置いといて…ほれ、ついたぞ」

「あーエイナさん!」

ギルドに入つてすぐにベルがエイナさんを見つけたため声をかける

「おはようございませす。エイナさん！」

「おはようさん」

「おはよう、ベル君、ヤミさん……探索は頑張つてる……なんて聞くまでもないかな？」

「はい、頑張つてます！今は、最後に潜つた日から間が空いちやつてますけど！」

「ふふつ、休息も大事だからね。休むときは休まないといけないから、ちようどいいんじゃないかな？」

顔を綻ばせながら、上機嫌なベルと会話を進める。奥にいる他の人も微笑ましそうに見ている

「それで、何かいいことでもあつたの？」

その俺にとつては恐怖しかない一言が発せられた

ベルを見れば顔がにやけている。そりやあこんな顔してたらバレルわ

「わ、わかりますか？」

「そんな顔してちゃあ、誰でもわかつちやうよ？」

逃げたい。今日のベルにとつての一言は俺にとつてまたエイナさんに理不尽に叱られる内容だからだ

「じ、実はですねっ……」

「うん」

「僕、とうとうLv2になったんです！」

バサバサと奥にいた他の人も書類を落とすし石のように固まっている。エイナさんは相変わらずニコニコと笑っている。守りたい^切、その笑顔^実

「Lv2？」

「はい！」

「三日前？」

「はい！」

「嘘なんかついてないよね？」

「はい！」

「ヤミさんに何かされた？」

「はい！……じゃない!!」

その最後の一言が俺の運命を分けた。エイナさんはいつかのようにギギギツと金属音のような音を鳴らしながらこちらを見てくる

「ヤミさあん？ベル君に何をしましたんですかあ〜？」

「何もしてねえよ!!ベル坊の努力の結晶ですよッ!!」

「努力って言っても、一ヶ月半でLv2なんて!!」

「それ言ったら俺なんか一ヶ月ですよ!!……あ」

熱が入ってつい口を滑らせた。周りを見ると他の職員、冒険者達がみんなこつちを見ていた

「ごめんっつ!」

面談用ボックスに場所を移し中でエイナさんはパンつと両手を鳴らし頭を下げる

「い、いいですよ、エイナさん。Lvはどうせ公開されちゃうんですし……」

「ベル坊、俺がエイナさんに「ステイタス」を見せた時になんて言われたか覚えているか？」

「え?えーと、確か……」

『一ヶ月でLv2到達は異例の最短記録です。言葉で説明するのは馬鹿馬鹿しいほどのそんな事を達成した人がヤミさん、あなたです。もしこれがバレたら間違いなく神々に目をつけられます』

なのでこの話はここだけの話にして隠して置いてください』

「……だった……ね」

「うん。俺の方は完全に自爆だから俺が悪いんだが……」

「ごめん。ヤミさんだけならともかく、まさかベル君までとは思いませんでしたから…
つい」

そう言ってまたエイナさんは頭を下げる。…いつも俺が頭を下げるから新鮮だ
「まあ、ついんです。ベル坊のランクアップの掲示ついでに俺のも掲示してください。
ベル坊と一緒に一ヶ月半で…と言いたるところだけどさつき自分で言っちゃったから
なあ」

自分のした事に頭を抱えてそう呟く。面倒事しか起きそうな気がしないからだ。そ
れに対してどうしたか

「…ま、その場その場で考えていけばなんとかかなるかあ」
投げ出す事にした

ヤミ・カズヒラ

L v 2

力：F 3 1 2 ↓ D 5 3 9

耐久：G 2 7 9 ↓ E 4 1 2

器用：F 3 5 6 ↓ E 4 5 6

敏捷：G 2 4 6 ↓ F 3 1 4

魔力：H 1 9 9 ↓ F 3 2 7

純粹 I

《魔法》《スキル》そのまま

ホームに帰りベルがヘステイア様に「ステイタス」を更新してもらっている。ベルははたから見てもわかるようにまだかまだかと体をウズウズしている

そしてついに

「……終わったよ」

ヘステイア様がベルから降りるとその瞬間にベルが起き上がり自身の体全体を確認する

「……特に何も変わらないですね」

『力が溢れてくる!!』なんてことはないだろ？」

「体の構造が変わるわけじゃないしね、劇的な変化をして期待していたのなら悪かったよ」

「あつ、いえ、そんな風にはっ……」

ベルが慌てて誤解を解こうとしてる間に水の入った小さなコップを持ち、ベルに見せ

る

「いいかベル坊、これがLv1だった時のお前だ」

「は、はい？ヤミさん？」

意味がわかっていないベルを無視して今【購入】で買った先程のコツプの倍デカイ空
のコツプを出して見せる

「それで、これが今の…Lv2になった時のお前だ。それを知った上で聞くぞ？どつち
がより水を多く入れられる？」

「そ、そりゃあそつちのデカイコツプ……」

「そうだ。器コツプに実力水を入れれば一目瞭然、デカイコツプの方が断然いい。ランクアツ
プってのはそう言う事だ」

何故かヘステイア様とベルから拍手が上がった

拍手が止むとヘステイア様が口を開く

「さて、驚かせようと思っただけど、先に言っておこうかな
？」

ヘステイア様からの一言にベルがキョトンとした表情になる。ヘステイア様はその
ままゆつくりと伝えた

「スキル、さ」

「へっ?」

「君の二つ「ハステイア様、魔法と間違えています」あ、ああすまないねヤミ君、ボクと
したことが…うん。ほら、あれだ。君の待望だった、スキルの発現だよ」

数秒ベルはぼーつとするとそのまますぐにベルの「ステイタス」が書かれた紙に視線
を落とした

そこには

【英雄願望】
アルゴノクト

能動的行動によるチャージ実行権

「う、うわああああああああ!」

スキルと言う物は本来自分が心から思っていることから出やすい

ベルが叫ぶ。嬉しさからではなく恥ずかしさからだ。日本で言えば14歳にもなっ
て『仮面ライダーになる!』とか言っている感じだな

「ああ、うん。いいんじゃないの?」

「そうだねえ。ムッフッフ…ベル君は英雄になりたいのかあ」

「そういえば、小さい頃からじいちゃん英雄譚読んで『僕は英雄になる!』とか言っ
たっけか?」

「…可愛いね」

「うわああああああああああ!! 神様のバカああああ!! ヤミさんなんか大っ嫌いだああああ!!」

ベルが拗ねた。いつもならヘステイア様が寝ているはずのベッドの上で毛布にくるまってしまっている

「ヘステイア様。《魔法》もそうだが、ベル坊の《スキル》。こりやあどう言う……チャージはわかるんだが、能動的つてのが」

俺がそう言えばヘステイア様はうーんと頭を悩ませ答えに至つた

「んー、常時発動している類じゃないみたいだけれど……要するにベル君が意識的に動いた時に、何か効果を発揮するんじやないかな?」

「自発的な動きか……そうすれば、チャージ。つまり、強力な攻撃・魔法を発射できると」
「それが妥当じやないかな?」

「……だよ。聞いてるか? ベル坊!」

そう言つてベッドにいるベルに声をかけるが返事がない。寝てるのか?

「ああ、ヘステイア様。もう時間じやね? 大丈夫?」

「は!?! もうこんな時間かい?!」

今日は三ヶ月に一回開かれる『神会』デナトウス。「ランクアップ」した者達に称号二つ名を決めるのだ
「……出来れば、マシなの頼むぞ?」

「……ッ! 当たり前じゃないかッ! ボクは泥水をすする事になっても、必ず無難な二つ名を勝ち取ってくるよ……!」

第35話…2700字です

二第派閥の一つの主神、ロキが最近の情報の報告を済ませ次のお題、命名式を仕切る
「資料は行き渡ってるなー？んじゃ行くでー？んじゃあ、トツプバターは……セトの
とこの冒険者から」

「た、頼む、どうかお手柔らかにつ……!？」

「[[[[断る]]]]」

「ノオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

セトと呼ばれた神は必死に訴えるも全員から断られ発狂する

神々がおかしいのか子が愚かなのか。真偽は定かではないが、ともかく、子供達が目を輝かせる裏で神達は身悶えてしまう『痛恨の名』

「…決定。冒険者。冒険者セティ・セルティ、称号はパーニング・ファイティング・ファイター「**暁の聖竜騎士**」」

「イテエエエエエエエエツ?!」

神会こいではそんな『痛恨の名』が大量に生産される

そんな称号を授かり誇らしげにする子供と、悶絶する神々、彼等はその両名に指をさし、今日もころげまわる

そんな神々を見てヘステイアは呟いた

「酷すぎる…」

「あんたの気持ちはよくわかる……」

ヘステイアの隣にいたヘファイストスも「私も昔はそうだったし」と同調するヘファイストス

（ベル君にヤミ君…すまない。泥水をすすつても普通の二つ名はつきそうにないかも…）

そうだった二人の眷属に対し心の中で謝罪するも今宵の神会は終わらない

俺とベルはギルドにて他の者と待っていた。自分の二つ名が気になるためだ。他の者もまだかまだかと待ちわびている

すると奥のドアが開く音がなり俺とベルを含めたその場にいた全員が一斉に振り向く

扉の前には、息を切らして書類の束を持った職員がいた

「来た、届いたぞっ！神会の結果！」

「やっとか！」

「おい、見せてくれ！」

彼等はすぐにその紙の束に押し寄せる。群がりはやがて縁になり、二つ名の記された何枚もの紙が沢山の手に渡って行く

その際俺も他の人の二つ名はどんなものか見てしまった

セテイ【暁の聖竜騎士】、命【絶†影】、ヤミ【悪魔】…ん？

俺…【悪魔】？人じゃないの？ねえ…いや、確かに最近悪魔だの何だの言われてるよ？見た目が悪いのも知ってるさ。目つきが悪いのも知ってるさ…でも…

「ヤミさんの二つ名、カッコいいですね…」

紙を見ながら『豊穰の女主人』に向かつて歩いているとベルから声をかけられ隣を見るとベルが俺の紙を見ながら羨ましそうに見ていた

「ベル坊はどうだったんだ？」

「……【リトル・ルーキー】」

ベルは小さく、小さく呟いた。ギリギリでそれが聞こえた

「要約すると『未完の新人』か…良いじゃねえか。俺なんか人間扱いされてないんだぜ？」

「でもカッコいい…」

まだそんな事を呟くベルに「ハア」と溜息を吐くと。自分自身で考えた事を口にした

「ベル坊、二つ名つてのは神様達にとつて俺達はどう思っているのかがよく出てんだ。俺の場合は『完全に悪人顔だろw』みたいな感じだろうぜ。きつと」

「じゃ、じゃあ僕の場合は…」

「ベル坊の場合は『未完』つてところに目をつけねえとな。となると…神様達に期待されてると俺は考えるぞ。「完成した時が楽しみだ」つてな」

俺の勝手な説明解釈を聞いてベルはまた「リトル・ルーキー」と書かれた紙をじつと見た
「見つけえええええええええええええええええ!!」

「え」「ん?」

突如として大声が俺達を襲った。なんだなんだと周りを見ると神様達がこちらに向かつて走って来てすぐにババッと囲まれた

【悪魔デーモン】いたのは運がいいな!」

「ロリ神んとこのホームがちつとも見つからなくて苦労したぜええ…」

「近辺を張っていた甲斐があつたというものよ…」

「待ち伏せは狩猟の基本」

「マジで悪魔みたいだな…」

「目つきわりー」

「人間か? 人間なのか?」

「やつと出て来たな小悪魔に子兔ちゃん☆」

こんなことは初めてだ。怒りが一瞬で悪寒に塗り替えられた

ベルなんか兎だから数人からの視線に怯えちやつてるよ

「先手必勝！二人共オレの【ファミリア】に入らな〜い?!今だったら【ファミリア】総出で大歓迎するよ！」

「あつ、てめつ?!必死すぎるだろ、節度持てよ！これだから弱小【ファミリア】は……！」

何故か知らんが【ファミリア】からの勧誘が始まった。今更だ

オラリオに来て全ての【ファミリア】に入れてくれるよう頼んだが全て門前払いを受けた。ヘスティア様に拾われていなければ今頃どうなっていたことか…

だけど、この神様達の相手は面倒だ

「すんません。俺は別にどこの【ファミリア】でもいいんですが、ウチの弟、ベルがどうしても【ヘスティア・ファミリア】にいたいと言っています」

「え?ヤミさん?」

その言葉を聞いた瞬間神様達はぶつぶつと呟きだした

「ということは?」

「ベル君を落とせば?」

「ヤミ君ももれなくついてくる……」

そう、全てベルに任せることにした

「「ベル君！さあ俺の【ファミリア】に入るんだ!!」」

「ヤミさー！ーん?!」

ベルの悲痛な叫びが響く。だが『助けて』とは言わない辺り成長しているな

「真剣な話、お前達の成長速度の正体は体質か？スキルか？それともいかさまなのか？」

「レアスキル、レアスキル？ねえ、ねえ!?!やっぱレアスキル!?!」

「もし良かったら、その服脱いでくれない？ヤミ君でもいいし、上半身でもいいからさ、

お金も奮発しちゃうよ?……むふっ」

やばい。同性愛者ホモがいるだろ。この中に……スキルがバレるのもヤバイ

ベルも鳥肌が立ってしまったているのか肌をさすっている

「……よーし。……逃げるぞ！ベル坊ツ!!」

「うんツ!!」

俺達は全力で逃げ出した

前に私から逃げた罰だと思ってください
シルより』

「サボってないでさっさと洗いなッ!!」

「はいいい!!ミアさん!!」

ガチャガチャと皿を洗いながらふと俺は思った
シルさん、やはり貴方は魔女だ。と

第36話期待しないで!今までの最大の駄作です!

皿洗いを始めて30分、ベル達はワイワイやってんだらうな〜:

ドンツ!

そんなことを考えながらせつせと働いていると客がいる方で爆発音が聞こえた

気になったため厨房から覗くとミアさんがカウンターをVの字に破壊していた。右腕しかそこに乗っていないところを見ると一撃でだ

ミアさんから目を離して周りを見るとベル達とオツさん冒険者が何やら騒ぎを起こしたようだ

オツさん達は金を置いてそのまま逃げて行く

「おい。何サボってるんだい? さっさと皿を洗いなツ!」

「わっかかりましたあ!!」

気づくとすぐそこにミアさんが来ていた。デカイ返事を返し皿洗いに向かった

現在俺はダンジョン12階層で10階層と比べ物にならない数のモンスターと対峙

していた

『ヴァアアアアアアアアアア!!』

「うっせええええええええええええええええッ!!」

例の如く鳴き声を響かせるモンスターどもに吠え返す。その間にモンスターどもの体は微塵切りにされている

「さすがですヤミ様。あの数を一気にとは……」

「おうりり、お前も後ろからの援護は助かったぜ。サンキューな」

落ちた魔石を回収しながらりりがやってきた

「……それにしてもヤミ様。とどころどころモンスターの攻撃を自分から当たりにいつてるように見えるのですが、ヤミ様はもしかしてMなのですか?」

「おーいりり? みんなのヤミさんを勝手にM扱いしないでくれる? あれはあれだよ。

『耐久』 上げのためだよ」

変な勘違いをしているりりにそう行つて誤解を解こうと話すとりりが呆れた顔で俺を見てくる

「……なんだよ」

「ヤミ様は脳筋というやつなのでしょうか? 確かに自分から当たりに行けば楽に『耐久』が上がるのですが、下手すれば死に繋がるやり方ですよ?」

「別にいいだろ?死にはしないんだから」

俺の最後の一言を聴くとリリが何故か怒った時のエイナさんと同じようなオーラを纏い出した

「……確かにヤミ様にとつては別にいい事なんでしょうが…仮にですよ?仮にもし、ヤミ様が死んだらベル様は悲しみます。ヘスティア様も、リリだつてですッ!」

「お、おう」

「だいたいヤミ様は……!!」

その後そこが12階層にも関わらずリリからの説教が始まった。モンスターが来れば多分説教は中断されたはずなのだがどういいうわけかリリの説教までモンスターが寄ってくる事がなかった

ホーム

「ヴェルフ?あのベルの防具を作ってるって言う?」

「うん。ランクアップの手伝いをして欲しいって…ダメかな?」

あ、神様。ごまドレッシング取ってください」

晩御飯。ベルの言う通りヴェルフというLv1の鍛冶師がランクアップのための手伝いをして欲しいと言われたため、俺にも協力して欲しいとのこと

「俺は別にいいが…ヘステイア様はどうだ？大丈夫だと思うか？」

「…ボクがベル君に聞く事は一つだ。女じゃないよね？」

さすが嫉妬のモンスター、ヘステイア様。気になるのはそこだけらしい。もちろん名前からして女ではないのですがすぐにOKをもらうことになった

（翌日）

いつもリリと待ち合わせしている場所、噴水の前で待っている。リリをではない、リリなら隣にいる。昨日言っていたヴェルフと言う男を待っている

「待たせたなベル！そっちにいるのがもしかして【悪魔】^{デーモン}か？」

赤い髪をし、黒衣着流しを着た俺と同じくらいの歳の男がやってきた

「となると、ヴェルフってのはアンタか。俺はヤミ・カズヒラ。ベル坊の兄貴みたいな感じになってる。まあよろしくな」

「リリルカ・アーデ、です。このパーティーのサポーターをやっています」

「おう！ベルから聞いてると思うがヴェルフだ！よろしくなッ！」

元気のいい男だ。とりあえず自己紹介をし、早速ダンジョンに潜ることになり

「やってきたぜ、１階層！」

腰に手を当てたヴェルフが自分の得物を肩に担ぎながら快活に言い放った

「ヴェルフさんの到達階層も1階層なんでしたっけ?」

「ああ、そうだ。それにしても悪いな、ベル。昨日の今日でこんな無茶を聞いてもらって……ヤミさんにチビスケも」

ベルが問うと急にそう言うヴェルフがそんなことを言い出した

「別にいいだろ? いつもベル坊が世話になってんだしこれくらいは当たり前だろ」

「そうですよ。それに『鍛冶』のアビリティのためなら、僕も無関係ってわけじゃないですし……」

「そう言ってもらえると助かるな」

冒険者だから鍛冶師のことなどわかるわけがないがランクアップによって得られる発展アビリティの『鍛冶』があるかないかによつて鍛冶師としての能力はだいぶ変わるらしい

そしてランクアップをする際、普通は「ファミリア」の同僚達の力を借りるのだが……身内の恥なんて晒したくなかったんだが……つたく、あいつ等、いざダンジョンに行くとうとすると俺だけ除け者にするんだぜ。信じられるか?」

こう言うことらしい。ソロでは危険なためそこまで下の階層に潜れない。困り果てたヴェルフは最後の手段として他の「ファミリア」に協力を仰ぐ事にしたらしい「仲間外れにされる何かをやったのか?」

「いや、身に覚えはねえな。俺の隠れた才能に嫉妬しているんじゃないか？」

俺の質問に不貞腐れて言うヴェルフ

そう言えばとリリの方を見るとムスツとした表情で立っていた

「……新しいお仲間が増えたと聞いてみれば、なーんですか、ただベル様は物で釣られて買収されただけではありませんか」

リリから非難と不満の声上がる。確かにはたから見れば買収にしか見えない

「はあー、リリは悲しいです。とてもとても悲しいです。お買い物に行かれただけなのに、見事リリの不安を裏切らず厄介事をお持ち帰りになるなんて……それを許しているヤミ様にも涙が出てしまいます」

ベルを見ればグサグサとリリの言葉が刺さっているのがわかる。防具を新調したにもかかわらず、それを貫通しこの威力……すごいな

「まあこれがベル・クラネルなんだって諦めるしかないからなあ……ベル坊に厄介事と面倒事はよくあるこった」

『『アビリティを獲得するまで』って言う条件の時点でリリ達は都合よく利用されているだけです！ベル様の優しさに漬け込んでいるだけですよ！この方は！』

俺の言葉に凄い剣幕で反論してくるリリ。だがまだまだリリの言葉は続く

「どうしてリリに相談なしに勝手にパーティの編入を決めたんですか、ベル様！」

「だ、駄目だった?」

「駄目ではありません、駄目ではありませんがっ「リリ、もう決まったもんは今更どうこう言っても仕方ねーよ」…ヤミ様」

リリの言葉を遮って先に行こうとする。「あ、そうそう」と俺はそのままベルに尋ねた「そういえば、ヴェルフのフルネームを聞いてなかったな」

「ああ、そうだね。すつごい今更だけど…」

「この人はヴェルフ・クロツゾさん。「ヘファイストス・ファミリア」の鍛冶師なんだ」ベルからのフルネームでの紹介を聞くとリリが「クロツゾ?」と呟いた。なにかを知っているようなので何も知らないベルと一緒に聞くと

変わり者を見る目で見えてきた。なんだよ

「何も知らないんですか、ベル様…ヤミ様も」

「ええつと、その…う、うん」

「…もしかして、知ってて当たり前みたいな感じ?」

ハア…とため息を吐かれるとリリが簡単に説明をしてくれた

『クロツゾ』とは魔剣を打つ事で有名な貴族であつたらしいが、ある日を境に完全に没落したらしいが

「…すまん。魔剣って凄いのか?話は聞いているんだが、リリのやつ以外で実際に見た

ことがなくてな。海を焼き払ったってのは凄いんだが…」

「僕なんて海を見たことが…」

それを聞いたリリは「説明したりリが馬鹿でした」と言ってきた。解せぬ

第37話『英雄の一撃』と…

「しゃオラアツ!!」〔アステロイド〕オ!!」

群れたインプの群れを俺がばら撒いた小さな闇の粒子が撃ち落とす。オークなどの群れはヴェルフとリリが当たっている

ベルは「ランクアツプ」による身体能力の上昇に多少戸惑っていたがすぐに慣れてインプを切り刻んでいる

『『オオオオオツ!!』』

雄叫びをあげながら新しいモンスターが迫ってきた。ベルと同じくらいの体軀。短い二本足で立ち上がり、前足には丈夫そうな爪がある。背中はまるで鎧のような甲羅で覆われていた

このアルマジロこそソー階層に出現する『ハード・アーマード』

上層においての防御力最強モンスターだ

それが目の前に二体いる

『『オオオオオオオオオツ!!』』

二体のアーマードは体を丸め球体に変化するとベルと俺目掛けて転がり突っ込んで

きた

「トドメは任せた」

「わかった!」

そう伝え合うと俺はアーマードに突っ込み、ベルは右手を突き出し魔法を撃つ体制に入る

「ーふっ!」

二体のアーマードとすれ違う一瞬、『純粹』を使いながら二体のアーマードを切る。だが植物モンスターのような偶然完璧にはできていないため背中に切り傷をつけるくらいしかできない

だがそれは想定内、狙いは切る際アーマード2匹を上にかちあげること。痛みを耐えかね球体の変形を解いた二体は空中でジタバタしている

「【ファイアボルト】ツ!」

そこに待ち構えていたベルが渾身の魔法をぶつける。ベルから撃ち出された炎雷は即座にアーマード2匹を焼き払い魔石に変えた

「ツツツツしやあああああ!!」

俺とベルは魔石が落ちる音を聞くと二人揃って勝利の雄叫びを上げた

モンスターの群れを倒し俺達はひとまず小休憩を取ることにした。俺が持ってきた水筒の水を飲みなながらヴェルフとベルの会話を聞く

「やっぱり頭一つ飛び抜けた奴がいると戦闘は楽になるな。頼り切るのはダメなんだが」

「でも、僕も戦つてて、前より負担つていうのが減つたような気がします」

「パーティの利点つて奴だな。体だろうが心だろうが、余裕を持てるようになれば動きも変わってくる。モンスターの対処もな」

そのまま話は盛り上がりいつの間にかここで昼食を食べる話になっていた。リリはまだ魔石集めをせつせとこなしている。とりあえず座りリリが帰ってくるまで待つていることにした

「……おい、ベル。それ、なんだ？」

ヴェルフからそんな声が発せられる。ベルを見ると右手に白い光の粒があった

「……」

俺の魔法とはまるで真逆の純白の光、それが何なのか俺は興味を惹かれた

その手からはリンリンと鐘のような音が聞こえる

「「……………」」

全員が顔を見合わせる。混乱と戸惑いを共有した表情で

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

急にモンスター¹の咆哮が1階層に木霊した。耳を塞ぎ声の主を探すとすぐそこにいた。俺達を含めたこの階層にいる全員がその姿を見て驚愕の眼差しを向けた

視線の先には体高は150C、体長4Mを超える小竜

「初めて見た……『インファイト・ドラゴン』だな」

11、12階層に出現する絶対数の少ない稀少種^{レアモンスター}。エイナさんから教えられた見た目と酷似しているためすぐにピンと来た

だが数あるモンスターの種類の中でも最強と謳われる竜でもある

『ーツツツ!!』

雄叫びとともにインファイト・ドラゴンが動き、近くいたエルフの冒険者を長い尾で殴り飛ばす。間を置かず、周囲一帯から上がる悲鳴が重なる

「リリスケエツ、逃げろっ!？」

ヴェルフが叫ぶ。リリの方を見ると魔石を回収していたリリに向かってドラゴンが突き進んでいる

リリの元へ駆け出すため足に力を込める。間に合うかはわからない。いや、間に合わせる

「ファイヤボルト」!!」

瞬間、閃光が視界を埋め尽くした。ベルが魔法を放ったのだろうかどう考えても今までと威力の桁が違いすぎる

直撃した炎雷はドラゴンを焼き、炎に耐性があるはずのその鱗がぼろぼろと剥がれ落ち、ドラゴンは魔石へと姿を変えた

「……………」

静寂がその場を支配した

「ズズツ……………ふう」

ホームにて夕飯を食べていると味噌汁を啜ったベルが疲労感を吐き出すように息を吐いた

「ベル坊疲れてんのか？」

「うん。『インファイト・ドラゴン』の一件から……………」

「ゴクンツ……………ッ!?!」ドンドンツ

食べながらそんな話をしていっているとおかずのメンチカツをゴクンツ飲み込んだへス

ティア様が飲み込んだ物を喉に詰まらせ胸を叩いている

「ほらへステイア様。お茶」

お茶の入ったコップを差し出すとへステイア様は奪うよう受け取りゴクゴクと一気に飲み干す

「……ぷはーっ……そうか。ベル君は疲れているのか……じゃあ、今日の皿洗いの当番はボクが変わろうか?」

「いえっ、大丈夫です、手伝います!」

そうして話し合い最終的に俺がやる事に……どっから俺が変わった?

……まあそういうわけで皿を洗うため台所に運ぶ。ちなみにベルはシャワー、へステイア様は俺から借りた本を読んでいる

皿を洗い終え、台所から出るとちよつとベルがシャワーから上がったところだった

「……なあ、二人共?ちよつといいかな?」

「何ですか?」

待つていたというようにへステイア様が口を開いた

「フレイヤ……あーいやっ、銀髪の女神と面識があつたりなんか、するかい?」

「銀髪の女神?いや、俺はないな。ベル坊はどうだ?」

「僕も会った事ないと思うけど……」

この都市では銀髪の女神どころか銀髪の女すらあんまり見ない。すれ違った程度じゃ覚えていないだろうが、面識となると絶対ないと言える

「うん、そうだよな。そうだよなあ……」

ヘステイア様はうーんと天井を見上げる。何の話だと聞くと「何でもないよと返される

「そういえば、『インファイト・ドラゴン』を倒す際にベル坊の右手に白い光が纏わり付いてたんだが、昨日見た『英雄願望』って《スキル》となんか関係あるのか？」

「え？発動したのかい？ベル君のスキルが」

「あ、はい。なんか、こう『カツ！』って感じで……」

ベルの話によるとあの時、英雄達のこと、憧憬を思い浮かべたことでスキルが発動し、その影響で一箇所だけ白い光の粒に包まれたらしい

「多分、そのままチャージした分だけ……」

「魔法とかの威力が上がると……」

あれ？なつがい詠唱唱えてるそこいらの奴らより断然強くね？」

「え?!そ、そんなことは……」

ベルはこんな事を言っているが溜めるだけ溜めて撃ち出した時に撃てる。これほど使い勝手がいい攻撃はそうそうない。はず……

そんな考察をしているとヘステイア様も自分の考えを口に出した

「ボクの勝手な見解を言わせてもらうと、ベル君のそのスキルは逆転の力だ」

「逆転？」

俺達の言葉に頷き、ヘステイア様は続ける

「自分より強大な敵を打ち倒すための力……どんな窮地も覆す可能性を持った、言っちゃうなら、資格かな

……馬鹿みたいに英雄に憧れる子供が、英雄になるための切符さ」

その言葉を聞いてベルがよく見ていた英雄譚の絵本を思い出した。そう、確か名前は……アルゴノウト

「その一撃に全てを賭けて、その一撃に全てを注ぎ込む。圧倒的な力の不条理に対して、そのたった一つのちっほけな力で、逆らうんだ

……ベル君が手に入れたものは『英雄の一撃』だ」

その言葉にベルがブルつと身震いする。言い終わるとヘステイア様は次に俺を見た
「となるとヤミ君は……力を奪い、逆らう者には圧倒的不条理な力を持つて押さえつける

『魔王の力』かな？」

「やめてくれよ。ベル坊が俺^{英雄}倒^{魔王}してる姿が目^{英雄}に浮^{魔王}かんだ」

その言葉を聞きヘステイア様は「冗談だよ」と笑いながら言う。時計を見るともう寝

る時間が迫っていたためそのまま就寝した

第38話中層

あれから二日、ベルはミノタウロスのドロップ品、ミノタウロスの角でヴェルフにナイフを作ってもらったようだ

「綺麗な刀身だなく。にしても、危うくこれに『ミノたん』って……」
「うん。あれは危なかった」

ヘステイア様に「ステイタス」の更新をしてもらっているベルがそう呟く。俺はすでに更新は済ませている

ヤミ・ガズヒラ

L v 2

力：D 5 3 9 ↓ B 7 8 4

耐久：E 4 1 2 ↓ D 5 3 9

器用：E 4 5 6 ↓ C 6 1 6

敏捷：F 3 1 4 ↓ E 4 9 9

魔力：F 3 2 7 ↓ E 4 1 8

純粹Ⅰ

《魔法》《スキル》そのまま

「よしっ、終わったよ」

自分の「ステイタス」が書かれた紙を見ているとベルの「ステイタス」の更新が終わったらしい。さて、Lv2に上がってアビリティ0からどれくらい成長したか：

ベル・クラネル

Lv2

力：I0↓G267

耐久：I0↓H114

器用：I0↓G288

敏捷：I0↓F375

魔力：I0↓H189

幸運Ⅰ

《魔法》《スキル》そのまま

凄いとしか言えない。殆どのアビリティの上昇値が俺の上昇値を上回っている。敏捷に至っては俺を超える勢いだ

「ヤミさん。これなら、エイナさんは許してくれるかな？」

「この「ステイタス」に4人1組……メンバーはLv1と2、二人ずつ……うん。多分大丈夫だ。中層に行ける」

そう答えを出すとワクワクと心が踊った。中層、ソロで行っていいかとエイナさんに相談した瞬間その場で雷が落ち、今まで行けなかった12階層から下の階層

そこに明日から行けるのだ。しかも仲間と！

『ルギヤ「邪魔」』

シルバーバックの叫びも聞かず一刀両断。真つ二つになったシルバーバックは魔石に変わる

ベル、リリ、ヴェルフも他のモンスター達を斬り伏せながら走る

「霧、抜けますー！」

10階層とは比べものにならない濃い霧の中でリリの声が聞こえた。煙のような霧から出ると最初に目に映ったのはもはや見慣れたモンスターの群れ、次に13階層へ降りるための道、洞穴のような巨大な穴である

「さっさと片付けんぞー！」

「うんー！」

リリとヴェルフを置いて俺とベルはモンスターの群れに突っ込んだ。俺達の存在に気づき威嚇をするモンスターの群れ

「ホイホイつと【無明斬り】…6連！」

使い慣れた斬撃を6連で飛ばす。それだけでシルバーバック、オークが複数体灰に変わった

『ロオオオオッ!!』

「ふんっつ!!」

ハード・アーマードが転がりながら突進してくるが刀で切る。前は切ることが目的だったため切れてはいなかったが、今回は技術なんて使わず。力いっぱい降ることしか考えていない

「だああああああああ!!!」

とても技なんて呼べないそんな一太刀はハード・アーマードを無理矢理切り裂いた

「では、最後の打ち合わせをします」

モンスターを全滅させ、床に膝をつけて小さな円を作り、リリが小さな絵を描いて説明を始めた

「中層からは定石通り、隊列を組みます。まず、前衛はヤミ様にヴェルフ様」
「俺でいいのかわ？」

「むしろここ以外、ヴェルフ様の務まる場所がありませんヤミ様は……」

リリが俺の顔を見てハア、とため息を吐きながら言う

「……暴れたいでしょうし」

「よく俺の事をご存知で」

ハツハツハと笑う俺をリリがジト目で見つめてくる。なんだよ？めちやくちや楽しみだったんだよ。悪いか

「……すいません、続けます。ベル様は中衛を。御二方の支援です。攻守を両方こなして貰うことになります。負担は一番大きくなってしまいますが……よろしいですか？」

「うん。大丈夫」

頷くベルを見て「リリは消去法で後衛です」と締めくくった

「ヤミ様。わかっているとは思いますが、このパーティはヤミ様を抜いたら火力不足になります。なのでくれぐれも、くれぐれも！勝手にどっか行くとかいう事はないようにしてください」

「わーってるよ。初めての場所に足を踏み入れるんだからそんな馬鹿はしねえよ」

「ヤミさんに全てがかかっているって感じか……厳しいな」

「尻尾を巻いて引き返しますか？今ならまだ間に合いますよ？」

そんな言葉を交わしているとふと気づいた。ベルが笑っている。それにリリとヴェルフも気づいたらしく不信に思う

「何笑ってんだ、お前？」

「え……僕、笑ってた？」

「ニヤニヤしてたな」

「はい、すつごくにやけていました」

ベルは慌ててごめんと謝罪する。なんで笑っていたか聞くと顔を赤らめて口を開いた

「え、えつと…賑やかでいいなあっていうか……凄くパーティーらしくなってきて、嬉しいというか……」

それに、さ。こういうのワクワクしてこない？みんなで力を合わせて、冒険しようって」

………

「……くつ、はははははっ！そうだな、こういうの、ワクワクするよな！ワクワクしなきゃ、男じゃないもんない！」

「俺も昨日からワクワクしてたな。どんなモンスターが来るのか…とか」

「リリは少し賛同しかねますが……でも、ベル様のお気持ちちはわかります」

少しの静かな時間が過ぎるとヴェルフは笑い。俺は同じだと言い、リリは苦笑を浮かべながら微笑ましそうに笑う

「それでは、準備はよろしいですか？」

「ああ、問題ない。行こうぜ」

「心の準備は出来てるな！」

「うんっ」

立ち上がり中層へ行くための大穴へと進む。そのまま意を決して中層への一步を進んだ

「ここが中層か……」

「話には聞いていましたが、今までの階層より光源が乏しいですね」

大刀を装備しているヴェルフと、早速地形へ目を走らせるリリがそれぞれ口にする

「まさかお前ら、これくらいで戦いに支障をきたしたりはしないよな？」

「そんなわけないだろ。天下のヤミさんはどうだ？」

「まさかヤミ様、暗いのが怖いとかはありませんよね？」

冗談に冗談に返された。それに対して「それはないな」と断言した口調で返す。暗いのは見慣れてるからな

「13階層はルームとルームを繋ぐ通路が長いのが特徴です。安全に戦闘を行うためにも、まずリリ達は迅速に最初のルームへ到達しなければなりません」

リリの言う通り13階層の通路横幅は上層よりも広いが基本的にこんな場所で陣取ってモンスターと戦闘をするのは下策だ

「モンスターと出くわさない内に少しでも前進しましょう。ヤミ様、ヴェルフ様、この通路は一本道なので道なりにガンガン進んじやってください」

「わかあかつたいよう」

リリから聞いたのだが、リリは13階層の地図を頭の中へ叩き込んできたらしい。直接的なサポートは少ないがこういったサポートは直接的なものより頼もしい…かも

「…それにしても、やっぱり派手だよな、コレ」

『サラマンダー・ウール』の事ですか？」

「ああ、着心地は文句ないんだがな」

ダンジョンの雰囲気の中張り詰めた空気の中ヴェルフが軽い調子で話題を降る。話すことがないためそれにもちろん乗った

「効果は本物らしいから若干派手でも文句は言えねえよ」

「そうですよ、リリなんてこんな立派な護符を着れるなんて思いもしませんでしたから。ベル様に感謝しないと」

「あははは…割引きしてもらったものだけどね」

『精霊の護符』。精霊が己の魔力を編み込んで作ったとされる一品らしい

「割引してもらったなんていっても、精霊が一枚噛んでる装備だ、とんでもない値段だったろ？4人分でいくらだ？」

「えーと…簡単に0が五つ並んだくらい…」

「ヴェルフ様、ベル様がお払いになったお金はしつかり返してくださいね？」

「ほんと清々しいくらいに現金なパルウムだよ、お前は」

「ハツハツハ。それなら0が五つどころか倍の十個くらい並ぶ額稼ぐ気持ちで行きやあいいだろう」

ヴェルフとリリのやりとりに俺はまた笑いながらそう言った

第39話トラブル

現在俺達は別名『放火魔』と呼ばれている『ヘルハウンド』と対峙している。二体と少ないが油断ならない相手だと聞いている

「すまん。ちょーつと試したいことがある」

倒すついでにあるベルでやり損ねていた実験をやりようと思った『サラマンダー・ウル』があるし大丈夫だろう

「ヤミさん、何する気?」

ベルがそんな事を言ってる間に片方のヘルハウンドが口から炎を放ってきた

「ちようどいい。【闇纏い】」

「【ヤミさん?!】」

待つてましたと俺が前へ出てヘルハウンドが放った炎に向かって闇を纏わせた手を突き出す

もちろん炎は俺を襲ったが

「ふう、実験成功……ヒヤツとしたな。手応えからして、威力は無効化出来ないと……」
熱くない。火傷もしない。まるでそこに壁があるかのように炎は防がれていた

「実験完了つと」

そう言い終わった時には二匹のヘル・ハウンドの頭は斬り落とされていた。ほんの少し遅れて灰に変わり魔石へと姿を変えた

「おーい終わつて……「えい」うおっ?!危ねえな!」

笑顔でベル達のところへ戻ろうとするとりりがハンドボウガンを引きしぼりその矢を放ってきた。ギリギリで避けたものの当たっていたら怪我をしていただろう。ダンジョンで仲間からの攻撃で傷を受けたなどシャレにならない

「ヤミ様?リリはさんさんいいましたよね?勝手に行動しないで欲しいと……なのに何故勝手に行動したのですか?ねえねえ」

ジリジリとリリが俺に向かって歩みを進める。俺は俺で冷や汗を流しながら後ろへ下がる

「リ、リリ?ちよーつと落ち着こうか?ここ中層、中層だから。早く前進しないとダメだから。ベル坊、ヴェルフ!ちよつとリリを落ち着かせてくれ!!」

たまらずそこにいた仲間にsosを送るが

「今のはヤミさんが悪いよ」

「だよな?完つ全にアンタが悪い」

仲間などそこにはいなかった。気づけばリリがもうすぐ目の前まで来ていた

「……ヤミ様。今は説教はしません。地上に戻ったら覚悟しててください」

「す、すいま「ハスティア様やエイナさんにもこの事は報告するので忘れずに」あああああああああああつ!!」

とりあえず地上に出たら処刑される事が決まった。もうダンジョンに住もうかな？
……ん？

「あれは……」

「なんですかヤミさ、ま?!」

俺とリリが驚いた事を不思議そうにこちらを見るベルとヴェルフが俺達の視線の先にいた物を見た

そこには可愛らしい兔の外見をした三匹のモンスターがいた。その兔の名は『アルミラージ』。ツノの生えた兔だ

「あれは……ベル様!」

「違うよっ!」

「ベルが相手か……冗談きついで」

「いや完璧に冗談だから!」

「なんだベル坊、兄弟がいたなら言えば良かったのに……ハスティア様は歓迎してくれるぜ?」

「僕に兄弟なんてヤミさん以外にいないよ!？」

ヴェルフ、リリ、俺の言葉にベルがキレのいいツツコミが入る

「つかベル、俺の事、兄貴だと思ってるくれたのか。ありがとよ

最初のアルミラージを倒して数分。俺達はそのアルミラージの群れに囲まれたため相手にしていた

「息つく暇もない、つてな!」

「無駄口叩く暇もないです!」

「ベル坊が14匹く。ベル坊が15匹く。ベル坊が…」

「ヤミさん!怖いよ!なんでそんな事を言いながらアルミラージ倒してるの!？」

だがヴェルフが大刀を振り回し、リリが矢を放って援護、俺はベルを…じゃないアルミラージを倒した数を数えながら、ベルはツツコミを入れながら倒す。こんな風にワイワイ返り討ちになっていた

すると【領域】に何かが入った。横目にそれを見ると5、6人で構成された。他の【ファミリア】の冒険者が近づいていた。負傷者もいるその一行はわざわざ俺達の戦域付近を掠めていった

「なんださっきの……ッ……おいおいマジか？これ」

その冒険者一行が俺達の戦域から出た瞬間にまた「領域」に何か引つかかった。だが明らかに数がおかしい

リリもそれに気づいたようで声を荒げながら声を出した

「いけません、押し付けられました！」

「え……？」

「さっきの冒険者パーティがモンスターに追いかけてた。それを押し付けて来たんだよ。そらきた」

俺の声にベルとヴェルフが俺の視線の先を見る。そこには今対峙しているモンスターの倍の数のアルミラージとヘルハウンドが走ってきていた

「退却します！ヴェルフ様っ、右手の通路へ、早くッ!!」

「おいおいおいっ、冗談だろ!?!」

全員がリリの声に従い右手の通路に足を動かした。だが進むにつれ追いつかれると本能的な何か語りが掛けてくる

ベル、ヴェルフ、俺なら多分逃げ切れるがリリが危ない。リリを置いていく？馬鹿野郎、やるわけねーだろそんな事

「っ?!?ベル様?!?ヤミ様?!?」

反転してモンスターに向き直すとリリが呼ぶ声が聞こえる。隣を見るとベルも同じ考えだったようでそこにいた。

「先に行つて！」

そういつてベルは左手を突き出し、俺は刀に闇を纏わせ横薙ぎに振るう体制に入る。先に動いたのはベル

「【ファイアボルト】！」

ベルの魔法の三連射。その炎は一本道を埋め尽くし、視界が遮られるが炎の中から断末魔が聞こえる

次に追撃に俺が刀を横に振るった

「【範囲攻撃型・無明斬り】」

威力は多少低くなるが横にでかい斬撃を炎の中に放つ。その瞬間にベルが仕留め損ねた四頭のヘルハウンドが炎の中から現れたがその瞬間に斬られた

「大丈夫ですか!？」

後ろから逃げていなかったリリとヴェルフがやってきた

「二人共、大丈夫？」

「は、はい…ベル様とヤミ様のおかげで」

「畜生め…」

3人が話す中、俺があることに気づいたため割って入った

「あー、みんな？残念な知らせがある

挟み撃ちだ」

そう言った途端に奥からまだ残ったモンスターの大量が、逃げ道から新たなアルミラージがピョンピョンやってきた

「中層つてのは何でこう、モンスターが寄ってくるのが早いんだ。休む暇がないぞ」

「中層だから、でしょう」

「は、ははっ……」

軽口を叩き合いながら、リリがポーシオンを取り出し俺達3人に回す

ポーシオンを一気飲みすると喉に詰まらせ、むせながら問うた

「ゴホッ、ゴホッ……さーて、どうする？戦うか？逃げるか？まあ、逃げるために戦うから両方になるんだが」

「よくわかってるじゃないですか。ヤミ様」

「じゃあ、奥か逃げ道かのどちらか片方を強引に突破？」

「それが最良だな」

意見を出し、最後に頷いた俺達は全力で走り出した

上層でも見た無数の『バッドバット』が天井から産まれていた。天井が黒い影で覆い隠され、そして産まれたせいで穴だらけになった天井は崩落した

第40話 Z Z Z…

崩落した岩の豪雨、それを見た瞬間俺達は地面を蹴った。みんな周りを見ず必死に走った

岩の雨が収まると周りに土煙が立ち込めていた

後ろから負傷したのかヴェルフの呻き声が聞こえ、左にはリリの呼吸音、右にははベルらしき人の影があつた

前には

『ガア……!』

ヘルハウンドの群れが口内を赤くしながらこつちを見ていた

『ガアアアアアアアアアツ!!』

「しゃあねえ!」

一斉に口から炎を吐き出してきた。それと同時に俺は使いたくなくなった魔法をその場で生成する

すると一箇所にポツリと黒い球体が現れた

ブラックホール
【暗黒孔】

ヘルハウンドから放たれた大爆炎はその球体に吸い寄せられ吸収されていく。その光景を見て俺以外の全ての者が動かない

「お前ら！逃げるぞ！あれは長く持たない！」

「ヤミさん！あれは…」

「話は後だ！ヴェルフ、動けるか?!」

「あ、足が…」

「肩貸す！リリは?!」

「リリはまだ走れます！」

その声を聞いて全員が全速力で駆け出した

だがそこで足元を見ることを全員が忘れていた。そこには下の階層に落ちるための落とし穴があった

道具や魔法などをその中に吸収し無効化する魔法「そんな便利な魔法があるなら最初から使え」とか言われそうだが便利であれば便利であるほど魔力が馬鹿みたいに持つてかれるのが【想像魔法】である

そのため

「『精神疲労』……」

朦朧とした意識の状態でヴェルフに肩を貸している俺を見てベルが呟いた

「大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。意識さえ強く持つてたらこの程度どうってことないんだよ。『精神枯渴』じゃない限りは大丈夫だ」

現在13階層から落ちて推定14階層、そんな中4人パーティの内1名^{ヴェルフ}負傷、1名^リ過度な疲労、1名^ヤ精神疲労、どう考えても最悪の状況の真っ只中だ

「三人共……いざとなったら、俺を置いてけ」

「馬鹿たれ……俺が囧になんだよ」

「なに馬鹿なこと言ってるんですか……」

「絶対に、無理」

歩きながら全員が疲れた声、顔でやり取りが交わされる

「……っ。行き、止まり」

「迷ったな」

「声に出さないでくださいヤミ様」

どこへ行っても壁、壁、壁。そのたびに全員の顔に疲れがさらに滲み出る

「一度、落ち着きましよう」

リリがその言葉を告げる。それに従いとりあえず全員がその場に腰を下ろした。まずは、パーティの装備を確認しましょう。治療用のアイテムですが、リリはポーションが四、解毒剤が二。ベル様達は？」

「俺は何も残っちゃいない」

「同じく」

「僕はまだ、レッグホルスターにポーションがいくつつか」

みんなアイテムを取り出し見せる。リリはウンウンと頷き

「わかりました。では次に武器です。リリはボウガンを先の崩落で失いました。ヴェルフ様の大刀は無事で……」

「俺は刀がある。ベル坊は…短剣と小型盾をなくしたな」

「う、うん。でもナイフはどっちも無事」

サラマンダー・ウールも無事なことを確認すると「わかりました」とリリが言い

「…今後の方針ですが、武装もアイテムも限られる中、生きて帰還するためにはできる限りモンスターとの戦闘は避けなければいけません。状況が許すならば、逃げの一択です」

そう言って次にリリが驚きのことを口にした

「…取り乱さず聞いてください。これはリリの主観ですが…今いる階層は15階層に近いかもありません」

「……………」

「…マジ？」

ベルとヴェルフの二人が絶句する中、俺だけがリリに聞いた

「推測なのでマジ…とは言えませんが、縦穴から落ちた時間を顧みるに、2階層分の距離を落下した可能性があります。この階層の特徴、通路の幅や光源、迷宮の難解さなど、13、14階層よりも15階層のそれに近いです」

辺りを見渡してみる。全くと言っていいほど違いが分からなかった。そんな中リリは続ける

「ここからが本番です。上層への帰還が絶望的であるのは間違いありません、ですが、ここであえて上へ登る選択枝を捨て、下の階層、18階層に非難する方法があります」

18階層はダンジョンに数層存在する、モンスターが生まれない安全階層です『下層』の進出を目指す冒険者が間違いなく拠点として利用しているはずですので、そこまで行けば安全は確保されます」

なるほど、と納得しているとベルが入ってきた

「リリッ、待つて。この階層からも生きて帰れるか分からないのに、これ以上下の階層に

向かったら……」

「縦穴を利用します。中層に数え切れないほど点在する落とし穴を発見して、飛び込めば……」

「階層主はどうすんだ？『ゴライアス』……だったか？聞いた話じゃ一步前の17階層で待つてるんだろ？」

俺の問いにリリは確信を持った口調で答えた

「ベル様が『ミノタウロス』を倒した日……約二週間前に『ロキ・ファミリア』が『遠征』へ出発しています。大人数の部隊で向かった彼等は無用な被害を防ぐため、階層主を素通りせず、確実に仕留めているはずですよ」

「ゴライアスの次産感覚は約二週間、時間を考えればまだギリギリ間に合うはずだとリリが言った

「正気か、お前」

「正気じゃなけりゃこんな賭けでしかない馬鹿げたもん考えねえだろ」

ヴェルフの言葉に笑いながらそう言う「だが」と続ける

「悪くない。歩き回って上に行くのは面倒くさいしな」

「これはあくまで選択肢の一つです。ベル様達の言う通り歩き回っていれば、他所のパーティーと会って助けを請うこともできるかもしれませんが」

……リリは、リーダーのベル様のご判断に任せます」

最後のリリの一言でベルが「えっ?」と言う反応をした

「リ、リーダー? ぼ、僕が? ヤミさんじゃなくて?」

「ん? ベル坊だろ? どう考えても。弱いけど臆病さが充分だし。な? ヴェルフ」

「ああ、ずっとベルがリーダーだと……」

「いやいや! 弱いと臆病があつたら充分リーダーじゃないでしょ?!」

俺達の考えをベルが必死で否定する

「……ベル坊、動物が群れて生き物が動く時、ボスに必要な最低限の能力が何か知ってるか?」

「えっ……っ、強い……とか……」

「違う。強さ云々もそうだが、一番重要なのは……臆病さだ

いいか? 例えば……無敗を誇る強さを持つやつがボスをやると、ボスを含めた群れ全体で挑んでも勝てない相手と対峙した時、自分なら勝てると思つて疑わずに突っ込んで自滅する

その点臆病者がボスをやれば勝てないとわかつた途端に逃げだす。群れはそいつがボスだから逃げの一手に従つて生き残る

……さて、ベル坊。このパーティーの中で一番の臆病なお前に聞く。俺達が生き残るため

にはどう動けばいい？」

真剣な目でそう聞くとベルが少しの間、無言になる。そして意を決した顔で答えた
「…進もう」

第41話目指せ18階層

あれから何分経過したか分からない。一時間かもしれないし、まだ三十分も経ってないのかもしれない

ベルが前を、リリが後方を、俺は重症のヴェルフを担ぎながら歩いてた

「なあ、やつぱり俺が前に出た方が…」

「何を言っているんですかヤミ様。左腕の負傷に精神疲労、片足が潰れてしまったヴェルフ様の次に重症なんですよ？」

「無理はしないで僕に任せて、ヤミさん」

ベルとリリが俺の言葉に返してくる

それにしても、本当にベルは成長したと思う。三年前はちよつとの事で泣きじゃくってたベルは背中を預けられるほど強くなった

「すまん…」

今の状況では背中を預けるどころか守られる側だ。自分の不甲斐なさに苛立ちを覚えながらそんな言葉しか出ない

「つ……リリスケ、この臭いはどうにかならないのかっ」

ヴェルフが目だけをやって背後のリリに声を飛ばす。臭い、リリが、ではないが臭い。ダンジョンから出たらハエが止まってきそうな臭いだ。ハエも逃げるかも

リリはその訴えに対し、据わった目をしながら返してきた

「我慢してください……お言葉ですが、リリの方がこの悪臭に悩まされています」

リリが臭いの発生源の袋を見せながら言った

「リリ達にも有害ですが、この臭いはモンスターにとつて毒そのものです。この悪臭が続く限り、よっぽどのがなければモンスター達は近寄ってきません」

確か、『強臭袋』^{モンブル}だったか？その臭い袋があるからモンスターと鉢合わせることがなかった

臭いが、中層で迷ったとなればこれほどありがたいと思えるアイテムはなかった。臭いが

すると前方30M、ギリギリ臭いが届かない場所にヘルハウンド3体がガラガラとした目でこちらを見ていた

「やるしかないな……任せろ」

肩を支えるヴェルフがそう呟く。ヴェルフは右腕を突き出すとヘルハウンドも炎を吐く準備に取り掛かる

「【燃え尽きる、外法の業】」

ヴェルフの口から出たのは超短文詠唱。ヴェルフの右腕から陽炎が飛び出し放火体制に入っていたヘルハウンド達を飲み込んだ

「ウィル・オ・ウイスプ」

その魔法の名を口にした瞬間、ヘルハウンドの自爆が起こった。間違はなく。魔法の行使などに際して、魔力を制御しきれず暴走させてしまう事故現象『魔力暴発』だ

「成功したか……」

「ヴェ、ヴェルフ、今のはっ？」

「俺の魔法は特殊らしくてな。一定の魔力反応を火種にして、爆発させるらしい」

アンチマジック・ファイヤ
対魔力魔法、要するに魔法封じの魔法だ

「モンスターで試した事はなかったんだが……首の皮一枚、繋がったな」

無理矢理笑いながらそう言うヴェルフ。だがある部分が気になった

「モンスターで試した事は……って」

「ああ。同じ「ファミリア」の連中に頼んでな。見事に爆発した」

「お前、その魔法絶対俺に向けてやるなよ？絶対だぞ？」

「わかってるよ。それともフリか？」

俺達が話しているとベルがレッジホルスターから一本のポーションらしきものを取り出した

「ヴェルフ、これ……」

「なんだ、ポーシヨンか？」

ヴェルフはそれを受け取り半分ほど飲むと驚いた顔をした

ベルの説明によればこれは二属性回復薬、デュアル・ポーシヨン体力も精神力もマインド両方回復させるポーシヨンらしい

「いいな、それ。今度売つてるところ、紹介してくれよ」

「帰つたら、いくらでも紹介するよ」

ベルとヴェルフがそんな話をしているのを聞きながら半分になったポーシヨンの半分を俺が飲む。ベルにそれを渡すとベルもそれをちよつと飲んだ

「ベル様、リリともポーシヨンを分け合いましたよ」

「え、今ちよつと飲んだし、大丈夫だよ。もつたいないし」

「ずるい、ずるいです！ヴェルフ様とヤミ様ずるい！」

「何言つてんだお前は」

そんな会話をパーティでしながら歩いていると

「あつた……」

ベルの言葉を聞いた瞬間全員が同じ方向を見た。視線の先には探し求めていた歪な形をした縦穴があつた

全員でその穴に近づき穴の縁まで行き、ひよいと穴を覗き込む。リリによれば深さからして16階層

それを聞いた俺達は顔を合わせると頷きその縦穴に飛び込んだ

「臭い袋が、無くなりました……」

16階層に入り多分数分がたった。リリの緊迫した声がパーティ全体の耳に入る

モンスターから守ってくれていたあの臭いが消えた。それと同時に待っていたかのように奥の道から殺気が溢れ出た

ドンツドンツドンツ……

と何かの足音が近づいてくる。やがてそれは闇の奥から顔を出す。そいつを俺は知っている。いや、ベルもリリも知っている。ヴェルフは……多分これが初めてだろう『ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

2Mを超える体格、頭に生えた立派な角、牛のような体、悪夢を見せているかのような『咆哮』

間違えようのない『ミノタウロス』がそこにいた

「ナイス」

「そつちこそ」

ヤミとベルは互いに拳を叩いた

あれからまた数分、何度目かのヘルハウンドの自爆を見た

「ー」

「ヴェルフ？」

ガクリとヴェルフの首が折れた。伴ってヴェルフの全体重が俺にのしかかる。何度も魔法を行使したことによる『精神疲労』だ

「ヴェルフ?!」

「大丈夫：寝てるだけだ。こつからはおぶつてく。：大刀は捨てることになるが仕方ねえ」

ヴェルフの状態を見て焦るベルにそう言っていると今度は後ろからドサリと倒れる音がした

「リリッ!!」

過度な精神的及び身体的疲労によりリリの倒れた姿を見てベルが叫ぶ

「…ベル坊はリリをおぶってやれ。荷物は…大刀と同じように捨てるしか」
「わかった…」

俺の声に応じてベルがリリの持っていたバックを捨て、最低限必要なものだけを残しベルがリリをおぶり、また歩き出した

そしてついに

「見つけた……」

「ああ、あと17階層に行くための縦穴だ」

少し走り俺達は縦穴の手前に立つ

「……気合い入れろベル坊、階層主がいる部屋だ。着地次第全力で走れ。それで18階層の穴に向けてドンッだ」

「わかってる……」

そう言葉を交わし二人でスウーと息を吸い、一気に吐く

心の準備はできた。顔を合わせると一回頷き

「せーのっのっ!!!」

同時に飛び降りた

少しの間の浮遊感、そして着地したのか足に衝撃が走る

「……っ?!?!」

「うおつとと……尻が痛い」

いつもならどうってことなかったが疲労が溜まっているのだろう。着地した瞬間にバランスを崩し尻餅をついた

第4 2話ふう…

一言で言うと17階層はめちやくちや暗かった。そのせいかモンスターが現れるどころか足音すら聞こえない。いや、気配はある。だが見つからない

「ヤミ…さん…確か17階層って…」

「ああ、リリの言った通りなら歩いてるうちに大広間に出る。そこに出れば18階層はもうすぐ…だったか？」

たまにこうしてベルと言葉を交わしながら重い足を動かしながら歩き続けた。そしてついに

「……！」

「ついたぞ。ここがー！」

ー大広間

その名にふさわしい広さがそこにあった。壁はゴツゴツとはしているが綺麗な形となっていた

「ベル坊、急ぐぞ。多分時間ギリギリだ。さっさと通って18階層だ」

「え？…あ、うん」

「走れ、走れ、走れ、走れ、走れ走れ走れ走れえええええ!!?」

遠かった洞窟が目の前に来た。その瞬間に俺達は最後の穴へと飛び込んだ

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

最後の最後に巨人の鉄槌が落とされた。当たりはしなかったものの、その一撃は衝撃波を発生させ、穴に入った俺達を吹っ飛ばした

そのまま天井、壁、地面とスパーボールのようにバウンドしながら下り坂を下る。痛みを耐えながらズシヤツと出口に吐き出された

「ーっってえ…ベル坊…」

奇跡的に尻を地面につけ座っている形になっていた。また尻が痛いと思いながらベルを探す

「ヤミ…さん…ふた…りは?」

見つけたが横たわった状態で血まみれだ。そんな状態でも仲間の事を考え口にする
「リリとヴェルフは…無事だな」

「そう…か…よかった」

未だ気絶している二人の状態を確認、報告すると安心と緊張感から解放されたせいかわが涙を流しだした

周りを見れば空は太陽が照らしているかのように明るく、草が生え、木が生え、森が

生えていた

そんな中、森の中、ベルの方向からカサツカサツと草を踏む音が聞こえた。その人がベルに近づくとベルはガシツとその人の足を掴み

「仲間をつ、助けてくださいっ……!」

絞り出すようにそう言うついにベルは力尽きた

俺だけは意識を保っていたためその人と俺で残された形になる

「……久しぶりだな」

「……」

とりあえず気まずいたため挨拶をするとペこりとお辞儀で返して来た。そしてついに

その人は口を開いた

「……あんばん」

「人を食べ物の名前で呼ばないで!」

どう言う偶然か目の前のその人はアイズ・ヴァレンシユタインがいた

くベル 視点く

最初に感じたのは、果てしない体のだるさ。泥のような倦怠感に飲み込まれ、覚醒の境界線を行ったり来たりしていた

「おっ、目が開いたぞ」

聞き覚えのある声が聞こえる

まだぼやけている視界の中で黒髪の人と金髪の人を確認できた
瞬きをすると布地の天井が見える。テントの中なのだろうか？

「ベル坊。起きよ」
「リリ、ヴェルフ!!」
「ゴチンツ

「ぐああああッ!!おでこがああああああッ!!」

僕が勢いよく起き上がるとヤミさんのおでこ僕のおでこが勢いに任せてぶつかる。
その衝撃と痛みで二人一緒に悶絶していた

「大丈夫?」

二人揃って悶絶していると綺麗な声音が聞こえた。その声の主も僕は知っている。
まさか、幻聴?と自分の正気を疑った後、ぼつと顔を振り上げた

「え、はっ、ええ……?」

「……平気?」

口を開いて奇声をあげる僕の視線の先には金髪金眼の冒険者、アイス・ヴァレンシユ
タインさんがいた

「ど、どうして……?!」

「今は、『遠征』の帰りで……この18階層に、とどまって……」

現在アイズさんの所属する「ロキ・ファミリア」は、深層域の未到達階層を開拓した後の帰路の途中らしい。安全階層である18階層で野営、つまり休息を取っている

「っ！僕達の仲間は…!?!」

ハツとした僕は「仲間は無事ですか」と尋ねようと、身を乗り出すと地面についた肘が、がくりつと折れた

前のめりに、頭から倒れようとする僕を地面に座っていたアイズさんは身を持ち上げ、両手を伸ばし

ぼふっ

「……」

「……」

「……ベル坊…お前……」

アイズさんの胸元に、顔を突っ込んでる僕。そんな姿を見てヤミさんから変な目で見られている気がした

「スイマセンっツ!?!」

ゴライアスに吹っ飛ばされた時以上の速さで吹っ飛ぶ

当然の如くひっくり返り、後頭部から地面に激突し、また悶絶した

「何してんだよ……」

「す、すいません……」

「ハア、リリとヴェルフならちようどそこで寝てる。あんま騒ぐなよ?」

ヤミさんが僕の後ろを指差し言ったため、振り返るとヤミさんの言った通りヴェルフとリリが寝かされていた

「二人とも、大丈夫……リヴェリア達が、治療してくれたから」

窺つてみると、ヴェルフのあの左足の負傷を始め、リリ達の怪我は治療されているようだった

「ヴェルフの傷もそうだが、ベル坊もヤバかったな」

ヤミさんの言葉を聞いて額に触れると包帯の感触がある

「君も、一人で立てないくらい……酷かった、よ?」

「あーあれは……疲労によるもんだし、何より……ダンジョンが俺を愛しすぎて尻を離さなかったんだよ」

二人の会話を聞いてヤミさんを見ると左腕に包帯をぐるぐるとつけられており、さつきから座ったままだ

「あつ、ありがとう、ごこぎいます……助けて頂いて、本当に……」

くベル 視点終わりく

「もう、動けそう?」

「あ……は、はいっ」

ベルが顔を上げて返事をする。顔がトマトみたくに真っ赤だ

「ヤミさん、は?」

「めちやくちや休んだから自由に動けるぞ」

「そう…フィンに……私達の団長に、連絡するように言われているから、ついてきて?」

そう言つてアイズさんが腰を上げた。俺達も立ち上がる。ベルの方は手を差し出されたが、格好悪いと思つてるのか「大丈夫です」と断るとアイズさんがしゅんとなる

そのまま出口をくぐると

「わ……!?!」

「目があ!目があああ?!」

ベルは大規模な野営風景を見て驚き、俺は急な光に目がやられた

く
く

森の中に設けられた野営地の奥、周囲の天幕よりももう一回り大きな部屋。「ロキ・ファミリア」のエンブレムが入った旗の立つその小屋の中で俺達とはある人達と面会し

ていた

「アイズから報告されていたけれど……よもや君達が、僕達のキャンプに担ぎこまれてくるなんてね」

黄金色の頭髮のパールウム、「ロキ・ファミリア」の団長フィン・デIMUMナ。その人が俺達の目の前にいた

第43話Q最近適当にサブタイトル書いているがそれでいいのだろうか

「ほう、この者がお主達が話しておった例の冒険者か、リヴェリア?」

「ああ、ガレス。彼がベル・クラネルだ」

筋骨隆々のガレスと呼ばれたドワーフと、美人なりヴェリアと呼ばれたエルフがそう話すのを聞いた。いつのまにかベルもベルで顔が知られてるんだよな。すごいすごい

「それで黒い方は確か…」

「ああ、酒場でベートを倒した…あの時はマジですんませんでしたツツツ!!」

酒場の事を思い出したため、頭を勢いよく地面にぶつけて土下座した

目の前にいる三人が一瞬びっくりした感じだったが笑い出し、「気にしていないから」と言われ感謝しながら頭を上げ、そしてまた下げた

「……この度は助けて頂き、本当にありがとうございます。感謝の言葉もありません」「あ、ああありがとうございますごじやつ、ごじやいましたっ……!?!」

俺の言葉に続きベルも噛みながらも頭を下げる

「そう畏まらないで、どうか楽にしてください。冒険者とはいえこんな時くらい助け合おう」

フィン・デームナ：さん？はそう言つて肩を上げる素振りをする

「それに、アイズの知人と聞いておきながら見殺しになんかしたら、僕は彼女に恨まれてしまうからね。夜を安心して過ごせるように、君は何としても助けておかないと」

その言葉を聞いて頭を上げるとフィン・デームナさんは：長いな、フィンさんは少年のような笑みを浮かべた

「君達の事情は概ね把握しているつもりだけど、一応も説明してもらえるかい？」

「あ、はい」

上手いこと話を進められているが嫌な感じはしない。とりあえず俺達は18階層に
来た経緯を包み隠さず話した

「がははっ、中層に進出したその日に18階層か！なるほど、フィン、リヴェリア、確かにこの若造は面白い！」

「ガレス、この場は内輪だけではないんだ。抑えてくれ」

笑うガレスさんにリヴェリアさんが注意する

ガレスさんは俺達の背中を叩きながら「よく階層主から逃げおさせた！」と褒めちぎってくる。高レベルの冒険者だけあって叩く力がめちやくちや強かった。痛い……

「僕等の方は見ての通り、ここで休息をとっている。本来なら、『遠征』の帰りとはいえ18階層にとどまらず、一息に地上へ帰還してしまうんだけど……帰路の途中で、モン

スターから厄介な『毒』をもらつてね

ベート……【ファミリア】の中でも足の速い者に、一度地上へ解毒剤を集めに行つてもらつてゐる。早ければ明日にはくるかもしれないけど、彼が戻るまでは、僕等はここに滞在する予定さ」

悪質な毒を治療する専用のアイテムがあるらしく、それを調達しに向かつた人が俺達が18階層に着く前に発つたらしい

「食料を始めとした物資はもうあまり残つてないんだ。配分できる物には限りがあるから、それだけは理解してほしい」

「いえ、恵んで頂けるだけでも十分です」

むしろこれで文句なんか言つたら即座に追い出すか殺されるだろ。俺だつたらそうするし

「短い間だけど、君達を客人としてもてなそう。周囲と揉め事を起こさなければ、あのテナントは好きに使つて構わない。団員達にも僕の口から伝えておくよ」

「すいません。本当に何から何まで……本当にありがとうございます」

ありつたけの感謝を込めてお礼を告げると「貸しの一つにしておくよ」と笑いながら言つてくれるフィンさんにもう一度お礼の言葉を送り、退出させてもらった

「アイズさん。お疲れ様です」

「お疲れ様……」

周囲に行く人達はみんなアイズさんに挨拶して行く

そしてアイズさんの後ろをついて行く俺達が気にくわいのか挨拶する全員が全員嫌な視線を俺とベルに向けていた。特に魔導師らしきエルフの人に見るだけで殺せそうな視線を送ってくる

「あの、アイズさん？俺達、本当に大丈夫？後ろから刺されたりしない？」

「？大丈夫だよ？」

アイズさんは気づいてないようだ。未だ変わることのない視線から地味に怯えながら歩いていると

「18階層……」

「えっ？」

不意にアイズさんがポツリと口を開いた

「もう、18階層まで来ちゃったんだね……」

「え、えーと……フィンさん達にも話しましたが、その、事故が重なって止むなくというか、くるつもりはなかったというか……い、命からがらに？」

「そうだな。ヘルハウンドに追われるわ、アルミラージュに囲まれるわ、最後の最後にゴライアス来るわで大変だったな」

ベルがたどたどしく俺に話を振るため俺が答えた
するとアイズさんが足を止めてベルに振り返った

「ミノタウロスを倒して、Lv2になったの？」

ジツと見るアイズさんに気圧されながらもベルは頷いた

彼女はしばらくそのままでもいた後、すすすす、と動きベルの背後に回り込もうとする
ベルはそれに対してスススス、と立ち位置を変える。アイズさんもまたすすすす、と
背後に移動しようとする

……ステイタス見ようとしてる？

すすすす、スススス、すすすす、スススス……何してんだこの二人

「…むう」

アイズさんが諦めたようでも動かししていた足を止めて俺を見る

俺は何かもう察したため

ダッ！

…だっ！

走って逃げることにしたが追いかけて来る。背後にピッタリとくっついて来よう

しているため何度も曲がって背後から離す

そんなやりとりをしていると

「わぁー、本当にアルゴノウト君だー!」

ベルの方からベル以外の明るい声が聞こえてきた。俺とアイズさんは足を止めて声の方向を見る。褐色の肌をしたアマゾネスらしき二人がベルの近くにいた

「ティオナ、ティオネ……」

「あれ?どつかであつたような……」

なんつか見覚えのある姿、容姿、胸のある方とない方……

「ごくろうさま、アイズ。団長のところに行ってきたんですって?」

「担ぎ込まれたって聞いてたけど……『怪物祭』の時の人もいるじゃんっ!」

「ああ、あの時の人達だったか。どおりで……」

そんな風に話しているとベルが慌てて口を開いた

「ア、アルゴノウトって、ど、どういう意味で……う?」

「ああ、気にしないでちょうだい。このちやらんぽらんが勝手に言うてるだけだから」

「あたし達、君がミノタウロスと戦つてたのをずっと見てたんだ!それであたし、昔好きだったお伽話を思いだちやってきーっ、うん、すごかったよ!」

なんでも、9階層でベルとミノタウロスが戦つていたところを見ていたらしい

それからとりあえず自己紹介は済ませた。やっぱり「ヤミさん」と呼ばれた
その後、女にほとんど慣れていないため顔が赤くなっているベルは姉妹からいじられ
ているのを見ていると

((ー調子ニ乗ルナヨ))

なんか幻聴が聞こえ、寒気もしたため「仲間の様子を見て来る」と言う。「じゃ、じゃあ僕もっ!」とベルもついてきた

く夜く

「んっ……」

未だ寝ているリリとヴェルフの様子を見てみるとピクリと動く。ベルがハツとして二人の顔を覗き込む

「……どこだ、ここは」

「ベル様……?」

瞼を開けた二人を見るや否や安心したのかまた涙を少々流す

「リリ、ヴェルフ、大丈夫? 僕のこと、わかる?」

「……リリが、ベル様のお顔をわからないなんてこと、ありえせん」

「あー……リリスケの減らず口が聞こえて来るなら、俺も問題ないな。よつ、ベル」

微笑むリリリに変わらない調子で返事をするヴェルフ

「ところでヤミ様はどこですか？顔、忘れてしまいました」

「あー……わかる。すまん、ヤミさんはどこだ？」

「お前ら酷くね?! ヴェルフも納得すんな?!

こらベル! 何笑ってんだ!？」

リリとヴェルフも「冗談冗談ですよ」と言いながら大笑いを始め、最終的に俺も混ざって

全員で笑いあっていた

第44話甘すぎる果実

「げっ、あいつ等……」

テントから出ると結構な人が輪になって座り込んでいた。その中にヴェルフの所属する「ヘファイストス・ファミリア」の上級鍛冶師が紛れているらしい

「おい、なんか注目されてんぞ」

「仕方ないですよ。リリ達は他所者なんですし」

「まあそうなんだが、ベル坊が……」

そう言つてベルを見るとガチガチに緊張し、その上様々な視線にビクビクしている姿があつた。締まらねえ……

そんなベルの姿を見たアイズさんに人気の無い場所を勧められた。失礼しますと

左から

ヤミ、ヴェルフ、リリ、ベル、アイズ

の順でそこに座る

「みんな、聞いてくれ。もう話は回つていると思うけど、今夜は客人を迎えている。彼等はお互いのために身命をなげうち、この18階層まで辿り着いた勇気ある冒険者達だ。

仲良くしろとまで言うつもりはない。けれど同じ冒険者として、欠片でもいい、敬意を持って接してくれ。……それじゃあ、仕切り直そう」

フィンさんが一人で立ち上がって俺達の紹介をしてくれた。揉め事を防ぐため、冒険者の自尊心に訴えるような彼の口上にリリが感心していた

「ん？どうしたベル坊」

「ヤミさん……これ、なんとかできない？」

配られた食料、18階層で採った琥珀色の果実、『雲菓子』ハニークラウドをなんか変な顔になりながら差し出して相談してきた。とりあえず俺も貰った物を一口食べる

「甘っ!?何これ!?!」

「うん……めちやくちや甘いんだよ、これ……」

濃厚な甘みが口の中全体に広がる……のはいいのだがこれは甘すぎる。「ロキ・ファミア」の女性達はそれを普通に食べていた。女子つて凄え……

「よしっ、ちよつと待ってる。アイズさん、水ってありますか?」

「ある、けど何するの?」

「ハツハツハツ、ちよつとした料理?をな」

「ヤミさん、それ俺も頼む」

「リリもお願ひします!」

結局ベル、アイズさん、リリ、ヴェルフの分を作ることになった

く ヤミさん調理中 く

「ほらできた。雲葉子ハニークラウドを絞って水で割ったジュースみたいなやつだ」

要するに『○○ピス』の下位互換だ

そう言っただけで差し出したのは琥珀色の飲み物、味は大丈夫。…多分！

「『頂きます』」

全員でそれを飲むとちゃんとした甘さが口に広がった

だが少し酸味的なアレが足りないな…

また18階層来たらこれ作ってレモン入れるのもいいかもな。人の前だから【購入】

使えないけど

「美味しいです！ヤミ様！」

「これ本当にさっきの実か?!めっちゃくちゃうめじゃねえか！」

「……美味しい」

リリ、ヴェルフ、アイズからの評価は最高だった。ベルは……

「うーん……」

「どうしたんですかベル様？」

「ああ、うん。なんだか少し足りない感じがして……こう、酸味が欲しいって言うか」

いつも種類豊富な俺の料理を食べているベルはそう言う。そして足りないものが分かっていて。さすが俺の弟分……

「あんぱんくーん！」

明るい声が近くで聞こえる

なんだ。『あんぱん』とか言うふざけた名前のやつがこの世界にいたのか。凄い名前だな

そう思いながらジュースを飲んでいると背中をバンツと叩かれ衝撃で口のジュースを吹き出した

「ちよつとティオナ！」

「あ、ごめんごめん！あんぱん君！」

口についているジュースをぬぐいながら振り返ると双子のアマゾネスがいた。胸のある方がティオナと呼ばれる胸のない方に注意すると軽く謝ってきた

つーか「あんぱん君」は俺かよ…

『あんぱん君』じゃない。『ヤミ・カズヒラ』だ。つーかなんであんぱん？！

「えー？アイズが君の事を『あんぱん』って呼んでたから…まあいいや！ヤミさん…だつたよね！アイズ達に作つたつて言うジューズ、まだ作れる？」

アイズさんがか…あの人の、俺の名前忘れてないよね？

あんぱん〱俺

じゃないよね？

「あー、あれか？『雲菓子』さえあれば作れるぞ」

「本当に?!じゃあ作つてくれる？」

「いいぞ。…えーと?胸n」テイオナだよ。んで、こつちがテイオネ」…あ、ハイ」

テイオナさん。なんか一瞬、凄く怖かった…

ついでにテイオネさんにも頼まれたため作る事にした

数分後…

「私にも一杯!」「俺にも!」

「はいよ、ちよつくら待つてろ」

どうやら噂と言う物は広がるのが早いようで…

今現在俺は「ロキ・ファミリア」の団員さんの方々にジューズを作つてくれと頼まれ

ている

最初は数人に作る予定だったのだが、時間が経てば一人二人と増えていき、最終的に引き返せないくらいまで増えていた

女性を見れば雲菓子をつまみに飲んでいて、やっぱり女子は凄えよ、甘いやつをつまみに甘いやつ飲めるんだから…

「頑張ってるようだね、ヤミ君」

「フィンさん？どうしたんですか？」

やっと人がいなくなり、休んでいるとフィンさんが話しかけてきた

「いや、君の作っているジュースが絶品だと聞いたんだけど、人が多かったからいなくなるのを待っていたんだ。ところでジュースはまだ作れるかい？」

さすがに『団長殿の要望には答えなきやな』と思うのとなんかテイオネさんが凄いちらを睨んでいたため「一杯だけなら」と作る

「…ところで君は、どうして冒険者になつたんだい？」

作っている最中にフィンさんがいきなり聞いてきた

「どうしたんです？藪から棒に…」

「出来るまでの暇つぶしさ」

「そうか、暇つぶしか…」

…ベルは『出会いを求めて』とか、『英雄になりたい』とか馬鹿げた夢だよなあ。本人の前で笑つちまつたし…なら俺はじいちゃんよりも…

「強いて言うなら、強くなりたいたいから…ですかね？」

「じゃあ、どこまで強くなりたいたいんだい？」

フィンさんがそう聞いてくる。…どこまでつて？

じいちゃんより…いやそれじゃあ、じいちゃんがいないからどこまでかわからない
確実にじいちゃんより強いとわかるのは…

「そりゃ、一番でしょ？」

「フツ…」

あ、笑つたな？

まあ別にいいけど、馬鹿げた夢だし

「……フィンさんはどうなんですか？」

「僕は…一族の再興さ。十数年と言う昔つから変わらない夢さ…笑つてもいいよ？僕も君の夢を少しとはいえ笑つたんだし」

「なら遠慮なく。ワツハツハツハア！」

フィンさんの許可を受け盛大に笑う

テイオネさんから睨まれているが知るもんか。笑い通す

「いやーお互い馬鹿げた夢を持ってますね。

あ、すいません。できましたよ」

「ありがとう」

出来たジューズを渡すとフィンさんが受け取り。俺が口を開く

「まあでも、夢つてのは馬鹿げた物ほど人生楽しめるもんですよ。周りはそう言った夢を笑う奴ばかりだけど、わかる人はわかってくれる。フィンさんが良い例ですね」

「そうだね。昔も僕はそうだった。僕の夢を笑う人ばかり、無理だ何だと言ってきた」

そう言つてフィンさんが周りを見渡す。そこには「ロキ・ファミリア」の面々がどんちやん騒いでいる

「それでも続けていたら気づけばこんなについてくる人達仲間がいる。昔は辛かった事が多かったが、今はいい思い出さ」

俺も仲間達ペル達を見る。慣れない女性達を前に顔を真っ赤にし座っているベル、それを嫉妬しながら見ているリリ、それを笑いながら見ているヴェルフ

みんな大事な仲間だ

「…それじゃ」

「…ああ」

こちらに向き直つたフィンさんがコップをこちらに向けてくる

何か察した俺はジュースの入ったコップを持ち

「馬鹿げた夢を持つ同士に：乾杯」

静かにコップを打ち鳴らすと同時にぐびつと飲み干し

『ーぐぬああっ?!』

いきなり聞き覚えのある叫び声が聞こえてきた

それを聞いた瞬間ベルが立ち上がり駆け出す

「…俺も行つてきます」

「ああ、行つておいで」

俺もベルの後を追うように走り出した

～外伝～パンデミック・オラリオ①

はい、ヤミさんです

今一人ホームにいる

なぜって？

ベルはシルさんに頼まれ地下水路の掃除を手伝いに行つた

リリは買い物

ヴェルフはベルの防具の修復

ヘステイア様はいつものようにバイト

俺は…前に教会は掃除したから掃除は数日の間はやらなくていい。ダンジョンは貯金があるから大丈夫。というわけでゾンビホラー系の本を読んでいた

『……………ッ!!』

「外がうるさいな……………ああ、そうかハロウインか」

……………そうだよ。外はお祭りなのに俺だけポツチだよ!!! 悪いか?!

「…『トリック・オア・トリート』…だったか? 『お菓子をくれないと悪戯しちゃうぞ』

……………菓子作るか」

そうだそうだ。ボツチならボツチらしく言ってくるやつに菓子をあげればいい
そう思い台所に向かいクツキーを数袋分作ることにした

〜数時間後〜

「ふー、できたできた。とりあえず5個入りを10袋作れば十分だろ」

完成したクツキーの袋を眺めつつ時計を見ると丁度五時、空が夕焼けになる時間だ
ドンドンツッ！

(ドアが叩かれてる？へスティア様…なら勝手に開ければいい、ベルも同じ…お菓子
を…いや、この教会の地下を知っている時点でおかしい。たまたまなんてないだろうし
…)

刀を持ちドアを叩く者を警戒する

ドンドンツッ

ドンドンツッ！

ドンドンツッ！！

ドンドンツッ！！！！

ドンドンツッ！！！！！！

ドアを叩く音は次第に大きくなっていく。そして……

……………

不気味なくらい急に静かになった

そして気づいた。外から聞こえていた祭りによる活気溢れる騒ぎが聞こえてこない
ドガシャツツ!!!

ドアが破壊された音がする。そのままコツコツと誰かが歩く音が降りてくる

「ヴアアアアアア…」

「ヴアアアアア…」

【領域】を発動させる。敵人数…：二人

足が見えてきた。二人共大人の足だ

体が見えた。男の体だ

顔が…『ウガアアアアアアア!!!』

男二人は俺を見た瞬間に意味不明な言葉を発しながら襲ってきた

「よっ…と…」

だが油断をしていなかった俺は鞘に収めた状態の刀で一人の腹を突き、もう一人は闇
を使い拘束する

闇を纏わせた状態で突いたから冒険者でも気絶したはず

『ヴアアアアア!!』

「うおつ?! あ、やべっ気が緩んだせいで拘束が!!」

拘束が解かれ襲ってくる敵を背にそのまま逃げ出した。…でかい袋に入ったクツキーを持って

く外へく

外を見るとそこは地獄だった

屋台は壊され、都市も荒れに荒れはてていた

「ヴアアアアア…」

「そんで、ゾンビみたいなのがウジャウジャ……とりあえずバベルまで走るか。時間と情報は命!」

そう言つてバベルに向かって走り出した

久々の【影隠れ】、便利。影さえあれば隠れられるからゾンビに見つかつても影に入つた瞬間に完全に隠れられる

お陰でバベルに難なく近づけた

「ん? おお! 生存者か?! さっさと入れ!

…と言いたいがお前さん。奴らに嘯まれたり、引つかかれたりしたか?」

生存者らしきオツさんが中にいた。そしてゾンビホラーみたいな質問を投げかけてくる

「?いや、全くないぞ」

「そうか、なら早く入れ!」

許可が入り中に入ると、中には生き残った人がいた

「あ、エイナさん」

「ヤミさん?!生きていたんですか?!」

「俺が簡単に死ぬわけじゃないでしょ…って言いたいが、ただホームで夢中でお菓子作ってたら外にあげがいた」

そう言うとエイナさんが呆れた視線を俺に向けてくる

「あ、あの…クツキーいります?」

ハ、ハッピーハロウイーン?」

「なんで疑問系何ですか……」

なんやかんやでエイナさんは普通に受け取ってくれた

(9/10)

「その黒髪の人!バリケードを補強するの手伝ってもらえないっすか?!」

「……俺か」

周りを見渡すと黒髪がない……いやいたわ目の前に

とりあえず手伝ってバリケードを補強していき……

「助かったつす！自分、『ロキ・ファミリア』のラウル・ノールドって言うつす！」

「俺は『ヘスティア・ファミリア』のヤミ・カズヒラだ。周りからはヤミさんとかで呼ばれてる。よろしくラウル……さん」

「あはは、ラウルでいいつすよ」

それを聞いたラウルはあれ？と言った感じで聞いてきた

「『ヘスティア・ファミリア』……もしかして、18階層で……」

「ああ、その時同席してた」

やっぱり！とラウルのテンションが少し上がる

「あ、今回のハロウィンでクツキー配ろうと思ったんだが、今回の騒動でやる奴がいなくてな、クツキー貰ってくれるか？」

「ええ?!いいんすか!貰っちゃって?!」

いいのいいの。とクツキー1袋を渡す(8/10)

残りの8袋どうしよう……

「ヤミさん……でしたっけ?傷はありませんか?」

「ありませんよ。えーと……」

「アミッドです」

傷ついた人はオラリオ最高の治癒師と呼ばれるアミッドさんが回復魔法で直しているらしい

まあとりあえずバリケードの補強を手伝うか

「バリケードを補強する！材料をくれ！」

「は、はい！お願いしまーす！」

夜になり生存者全員の手伝いによりバリケードはかなり補強された

「ヤミさん！裏口のバリケードも補強するから、手伝って欲しいっす！」

「はいよ。材料持ってそっち行く」

ラウルに呼ばれたため材料をもって裏口へ向かう。裏口に着いて二人でトン・チン・カンやっているとラウルさんが口を開く

「それにしても、何でいきなりこんな事になったんすかね？」

「誰かが意図的にやったんならそいつはシバくけどな」

「その前にギルドやら神々からポコポコにされそうっすけどね…」

あ、クツキー美味かったっす！」

「お、そう言ってくれると作ったこっちとしても嬉しいぞ」

そう言うところのラウルの顔が驚きに染まり口を動かす

「あれ手作りなんすか?! ていうか、料理できたんすか?!」

以外っす!」

「よく言われるよ」

はははっつと遠い目をしながらそう呟くと「ん? ということは…」とラウルが続ける

「もしかして、18階層での時ジューズ作ってたのって…」

「俺だな。ていうか、その時顔見てるはずなんだが…」

「人が多すぎて頼めなかつたんすよ。おかげで俺は飲めなくて…」

「じゃあ材料あつたらまた作ってやるよ」

「マジっすか?! 嘘じゃないっすよね? これは生き残らないとダメっすね!」

俺が提案を出すとラウルのテンションが上がる

「どんだけ飲みたかつたんだよ…」

裏口のバリケードを補強し、表口にくるとなんだか人が増えていた

…【ロキ・ファミリア】の面々だな

「あれ!? 皆さん!? どっから入ってきたんですか!?!」

「ラウルさんが驚き疑問を口にするのと断崖絶壁の神様でお馴染み、ロキ様が返事を返す
「えっ、ここの最高戦力がラウル?! しょぼ?!」

うん。酷い。何が酷いって?

冗談なしのガチでそう思ってる顔で言ってくる所だ

「ちよつと?! いきなり酷くないっすか?!」

ラウルが全力でそう言うが…

「立派なバリケードやと思っただけ、ラウルが作ったとわかった途端にアカン感じする
わー。こりやそろそろ壊されてゾンビが押し寄せてくるで!

そのこのドチビの眷属が作ったんやったら話が別やけど…」

「やめて! 本当に傷つくからやめて!!」

いやラウル、お前「ファミリア」でどんな扱い受けてんだ? 別に普通だろどこからど
う見ても…

「いやだつて」

ゾンビものやったら真つ先に死ぬタイプやろ? ラウルは」

「ああ! なるほど!」

「ヤミさんそこで納得しないで?!」

ポンつと拳で手を叩き納得するとラウルが涙目になりながらツツコミを入れてきた

「あ、ロキ様。クッキーいります?」

「おー! いるいる! いるで! ちょうど小腹が空いてきてたんや! ナイスやで!」
そう言つて差し出したクッキーをロキ様はすぐにその場で食べた

(7 / 10)

く外伝くパンデミック・オラリオ②

『改宗』……しようかなあ」

「まあまあ、人間生きてりや良いことも悪いこともあるもんさ」

めちやくちや落ち込むラウルの肩を叩きながら慰めているとロキ様がやってきた

「そういうえばヤミ……ちゆうたか？うちが『ゾンビものやったら』って言うたら納得したけど、ゾンビ知つとるんか？」

「まあ、はい。似たようなもん……ていうか、ゾンビもののやつとかも読みましたから」

「案外下界でもゾンビもんなんかあつたんか……」

ロキ様が何か呟いた気がしたが聞こえなかった。ま、俺には関係ないだろ

そんなことを考えながらラウルを慰めているとパタパタとエイナさんがやってくる

「皆さん！関係ありそうな手記を見つけました!!」

その声を聞いた途端に周りがざわざわとなる。エイナさんはその場でゆつくりと読み始める

『……ついに完成した。意識も恐怖も持たぬ『生きる死人』、いわゆるゾンビを生成する秘薬が

「きゃああああああああああ!!」

ゾンビになり、呼びかけていた人を襲う…てヤバイヤバイ!!!

「ゾンビ?! ここには噛まれた奴はいないって聞いてたんだが?!」

「馬鹿な! 確かにここには噛まれた人はいないはずです!! 私達が徹底して調べました! なのに、どうして?!」

間一髪でゾンビから離れアミッドさんに聞くと訳がわからない様子で答える

その間にもゾンビによる被害が増える

冒険者もゾンビになってしまった

「恐れてた事態が起こったか……!」

今までより10倍はタフになったと思うんや!」

そういつた「ロキ・ファミリア」の面々は逃げようとしたが、バリケードが邪魔をす
る

「とっておきの城が檻に! 変わってしまおうた……!」

やっぱりラウルが作ったバリケードじゃこんなもんやー!」

「これ以上、自分の胸を挟らないでほしいっす?」

ロキ・ファミリアの面々が騒ぐ中、エイナさん…は最初から感染していたらしい

「ヤミー! 早よ逃げな置いてくで!!!」

「ロキ様危ないぞ」

「え……」

ロキ様がなんか騒いでいる間にロキ様の後ろからゾンビが来ていた。俺は迷わずゾンビの元へ走り

「しゃオラア!!!」

「「え……」」

元人間、元仲間のゾンビを殴った

殴られたゾンビは吹っ飛びそこらの壁にぶつかり止まる

「さ、最低っす……」

ラウルはそれを見て口から零し

「さっきまで人間だった…仲間だったんだぞ!?!」

酒場の時の獣人…ロキ様曰くベートがそう言い

「あんな凶悪な男がアイズさんと訓練なんか……」

ロキ様曰くレフィーヤは……なぜ知ってるその情報？

「……………」

リヴェリアさんは無言の圧力。怖え、怖えよ……

「助けてくれたんはありがとうやけど、最低やな……」

助けた神にすらこう言われる始末、泣いていいよね？

「「ヴァア……」」

「オイコラゾンビ共、若干引くな」

「説……教……」

「エイナさん、あんた本当は自我あるでしょ？」

この後、周りからの精神攻撃に耐えながらもゾンビを殴り飛ばしながら建物の屋根の上へ逃げ切った

「ギ、ギルド本部が落ちた……ここからどうするつすか!？」

ラウルが慌てながらそう言うのと

「それより……ヤミ、お前が殴ったゾンビはなんか動かんってたけど、殺してへんよな？」

「当たり前だ。殴って脳を揺らして一時的に動けなくしたただけだ」

ロキ様が質問してきたため正直に……って殺したと思われてたの？

「そうか。悪魔みたいな雰囲気してるからなあ自分。人なんか当たり前みたいに殺してそうなの……」

「どんな雰囲気!？」

「まあ汚れ仕事は任せたーん？」

なんか酷いこと言われそうになり、ロキ様が口を止めた。視線の先を見るとシルさんがそこにいた

「あれは……酒場の店員か？」

「あ……【ロキ・ファミリア】の皆さん……とヤミさん!？」

ベートがそう言ってる間に向こうは気づいたらしい

「なんと！シルちゃんやないかー！」

「こんな屋根の上でどうしたん？」

「えーっと……実は助けしてくれた方々がいるんですけど……今は離れ離れに……つてヤミさん!!ベルさんが！ベルさんか！」

「？ベル坊がどうかしたのか？」

そういえば、ベル坊ってシルさんと地下水路の掃除に行つたんだつたな……

くシルさん説明中く

「ああ？兎野郎もおかしくなつただと!？」

「はい、地下水路の掃除中に……実は、私を助けてくれた人達にもお願いして、探してもらっているんですけど……」

シルさんによるとベルまでゾンビになってしまったらしいが、シルさんに聞いた話にちよつと気になるところがあったために聞いてみる

「ベル坊はゾンビに襲われたのか？」

「え……ゾンビ？」

ベルさんは誰にも襲われていないですけど……？」

「どう言うことですか？」

俺の質問に答えたシルさんの発言にレフイーヤが多少驚きながら聞く

「えつと……地下水路を掃除中、ベルさんが急に唸りだして……」

「……いつ頃？」

「昼に地下水路に入って……その時にです」

するとリヴェリアさんがぼそりと呟いた

「昼頃、まだ街は平和だった……」

……

「ちよつとベル坊シバいてきます」

「ちよつと待てえ！本では単独行動したやつが死にやすいのを忘れたんかあ!!」

勝手に地下水路へ行こうとする俺をロキ様が止めたところでそれは聞こえた

バギバギバギイ！

「なっ……何や!？」

謎の破壊音が俺達を襲う

ドオオオオン!!

それも一つ二つじゃない。あらゆるところから音が聞こえ、悲鳴も続いて聞こえてくる

「……!!お前は逃げろ!ここから離れるんだ、早く!!」

「は、はい!」

リヴェリアさんがシルさんをその場から逃す。ロキ様はベートの後ろに下がり待機する

そしてそれは来た

「……ああああああ!!」

「う、うそつす……」

ラウルから絶望に染まった声が漏れる

「ははは、夢だよな?悪い夢だよな?」

「ああ……悪夢の域だ。お前まで、とはな」

俺が乾いた笑いを零しながら聞くとリヴェリアさんが親切に答えてくれた

俺達の目の前には金髪金眼のゾンビ、アイズ・ヴァレンシユタインがそこにいた

「……ジャガまる、くうううん……あんばあああああん」

謎の言葉？を発しながら歩いてくる。怖い、めちゃくちゃ怖い
それを見ているとアイズさんと俺の目が合った

「ああああああんばああああああん!!!」

「うおっ!!来んな来んなあああああ!!」

明らかにあんぱんと言いながら追いかけてくる。全力で屋根に飛び逃げようとするが……さすが元はLv6、すぐに追いつかれる

「そ、そうだ!ほらアイズさん!」

アイズさんの目の前にあるものを突き出した

それは何か?クツキーだ

案外クツキーに興味があるようでそれに釘付けになった

「取ってこーい!!」

「あああああああ!」

空高くクツキーを投げるとアイズさんはクツキーを追いかけて走り去って行った

「あんぱんは無理だからあれで我慢してくれ……」

く外伝くパンデミック・オラリオ③

(6/10)

「あんな最強ゾンビがおるなんて……」

「終わりや！オラリオの終わりや！」

「馬鹿な事を言うな、と言いたいところだが……いよいよ後が無くなってきたな」
屋根から降りるとロキ様が叫んでおり、リヴェリアさんも頭を悩ませていた
「訓練でも喧嘩でもねえ、全力のアイズ……」

あの覇気のねえ面を見た時は、殺意すら湧いたが……

今のあいつは、手加減をしらねえんだな……」

ベートを見ると口元が笑っていた

「ベートさん、何を笑っているんですか！アイズさんがゾンビになってしまったのに！
不謹慎ですつ、最低です！」

それを見たレフイーヤが注意するが

「ああ……う？笑ってたか？悪いな、許せよ

それにそこの外道よりマシだろ？」

ベートはやはり笑ってそう返す。つーか誰が外道だコラ

「確かにそうですがっ!？」

認めんな。否定しろよ

「ひとまず、この場所から離れるで」

ロキ様の一言には全員が賛成し、近くの隠れられる場所に走り出した

「はあ……はあ……もう大丈夫っすかね？」

周囲にゾンビはいないらしいっすけど……」

「そうやとええんやけどな……」

アイズたんがゾンビになつとる今、時間はないで」

一息ついているとレフィーヤが興奮した様子で話し出す

「そもそもです!どうしてアイズさんがゾンビになつてしまったんですか？」

もし気持ち悪い人に噛み付かれたのだとしたら……

神様とか、ヤミ・カズヒラとか、ベル・クラネルとか!そんなの耐えられませんか!」

「さりげなく俺をゾンビの仲間に加えるな」

なんかもう俺、散々じゃね?自分が悪いところもあるけどさ……」

するとロキ様が「実はな」と語り出した

「アイズさんの部屋に、食いかけのジャガ丸くんが落ちてたんや」

「……!あのアイズさんがジャガ丸くんを食べ残す筈はない……という事は!」

「……ジャガ丸くんを食べて落とすとしたという事か？」

その拍子にジャガ丸くんを落とした？」

……

「……馬鹿か？」

「訳がわからない上に間抜けすぎるっす……」

ラウルとともに呆れ返っているとベートが口を開いた

「感染経路なんかどうでもいい」

「で、でも、アイズさんや神様だってゾンビになっちゃうんですよ?いつ私達もそうなっ

てしまうか……」

レフィーヤさんが心配事を口にするがベートは単純な事を口にする

「怪しいもんには触れんな、浴びるな、食うな

間抜けに成り下りたくなかったらな」

小腹がすいたな……あ、あるじゃんクッキー。いただきます

(5/10)

食べているとロキ様が真剣な顔で口を開いた

「……皆、ええか。こつからは二手に分かれるで」

「ど、どう言う事っすか？」

「周りを見ろ、ラウル」

リヴェリアさんがラウルにそう促す。俺もついでにサクサク食べながら周りを見る
と

あるところでは…

「助けてくれえ！走りすぎてもう動けない！」

またあるところでは

「あ、足が挟まった！」

誰かー！誰かー！」

またまたあるところでは

「放せよ！放せええええええ！」

「そんな！一緒に逃げろって言ったじゃない！」

またまたまたあるところでは

「うー、ああー！」

ドオオオオン

「……もう生存者を数えた方が早い」

「状況はずつと悪化しとる。つまり、同時に対処せなあかん

ベート、リヴェリア、〔Zバスターズ〕最強の二人でアイズたんを止めるんや」

ロキ様が背中に『バンツ！』と文字が出そうな感じでそう言う

作戦は至極単純。ベート、リヴェリアさんがアイズさんを足止め…ベートは倒す気満々らしいが

その間に残ったやつはベルの搜索、捕獲である

「ヤミ、アンタにも手伝ってもらおうで！」

「ていうか、手伝わねえと外に投げ出されるだろ」

「せやな」

ロキ様が俺の言葉を否定せず肯定しているとレフィーヤが騒ぎ出した

「まつ、待つてください！いくらベートさんでもつ、本気のアイズさんに敵う筈が……！」

「……覚えとけ、ノロマ。あとはラウル、てめえもだ。敵がいくら強くても、どれだけでかくても……」

『冒険者』を名乗るなら、そこに限界はねえ。吠えるんだよ、てめえを必ず『狩る』つてな。

「じゃなきや、『雑魚』は一生『雑魚』のままだ」

「おー、なんかすげえ。なんかよくわからんがとにかくすげえ」

「おい黒野郎、何拍手してんだ」

「黒野郎つて……これは無意識だ」

「気づいたら拍手してた。ベートは「チツ」と舌打ちしながら行ってしまった
アミッドさんはすでに製薬道具一式揃えているようで、すぐに出発した

く地下水路く

「よし……さっさとドチビンとこのガキとっ捕まえるでー!」

「しかし、不気味ですね……」

「孤児院の付近はともかく……近くにはモンスターがいるのでしょうか?」

「ロキ様が張り切る中、アミッドさんがそう呟く」

「怯えている暇はありません! 私達もオラリオを救うために尽くさなきや……!」

「ベートさん達はアイズさんの相手をして……!」

「リトル・ルーキー」くらい、簡単に捕まえなきや不甲斐ないつす!」

だが先程のベートの発言に感化されたのかレフイーヤ、ラウルがそう発言する

……【リトル・ルーキー】くらいって言っても、ベルは簡単に捕まるほど弱くはない
筈なんだからなあ…

「…おやお」

どこからか声が聞こえた

「今の音…いえ、呻き声は…」

「はああ…」ギンツ

呻き声とともにもう一つ、金属がぶつかる音が聞こえた

「誰かと、戦ってる…？まさか、【リトル・ルーキー】？」

音の反響からして…こっちつす！

前衛は…俺とヤミさん。後衛はレフイーヤ！

狭いので魔法は控えて、周囲の警戒に注力つす！

「は、はい！」「はいよ」

「ロキとアミッドさんは自分達の間に来てください！間違っても最後尾にいちやダメつすよ！」

ラウルがリーダーシップみたいなものをフルに發揮して指示を出す

「なんででしょうか…ものすごくラウルさんが…」

「か、カッコよく見えますね…」

「つーか誰？」

「これがベートの発破の成果か……！」

アカン、ウチ泣きそう！ラウル、大きくなったなあ！

俺達が色々言う中ロキ様だけは自分の子の成長に感動していた

「そこだああああ…」

歩いているとベルらしき声が近づいてきた。が、進む先にモンスターの群れがそこにいた

「モンスター……！」

隊列を維持！一気に突っ切るつすよ！

「よしっ、やるか」

ラウルの声とともにモンスターの群れに衝突した

「ハッハアツツ!!! たあのしいねえ!!!」

『グオオオオオ?!』

笑い声を上げながらモンスターを叩き斬り、殲滅していくヤミ。それを見ていたロキは

「アイツがモンスターじゃうん？」とロキ様

「あれが噂に聞く【悪魔】ですか…敵であつたらどうなつていたことか…。」とアミツドさん

「俺、あの人からクツキーもらつて食べたんすけど、大丈夫つすよね？」とラウル

「…吐き出した方がいいかもしれません」とレフィーヤ

散々な言われようだった。涙出そう…いや恐怖を紛らわせるために笑つてたんだよ？

心で涙しながら進むとそこには

「ううう…こおいくもんすたあ〜」

ベルがいた。だが様子がおかしい、一人で剣を振り回して彷徨っている

「まさか…ダンジョンへの中毒症状!？」

「そんなんあるんか!？」

ロキ様の言葉を聞き、アミツドさんはゆっくりと説明を始める

「おそらく、毎日ダンジョンにこもつてるが故、体に染み付いた習慣が、ゾンビになつてもなお……!？」

「……なんか、すいません。ウチの身内が…」

なんだかいたたまれない気持ちになった。とりあえず数日はベルにダンジョン行かせない。今決めた

「オラ、ベル坊。さっさと帰んぞ」

「ヤミ……さん……ああああああ……」

ベルが俺を見た途端に嘔み付こうとしてきた

ガシツ

がベルの頭を掴み。アイアンクローの準備に入る

「ほーう。ベル坊の癖に俺に襲いかかってくるとは、強くなったな」

「やめ……て……ごめん……なさい……」

「……ゾンビって恐怖心ないはずなのに震えてんで!?」

「きつと、ヤミさんの恐怖を体が覚えてるんでしよう……」

「あの人が『ロキ・ファミリア』にいたらどうなってるんでしようか……」

「……ロキがアイアンクローされてる光景が目に見えただつす……」

「このように言われながらもベルはあっさり捕まえ……」

「血清が出来ました！リトル・ルーキーに打ちます！」

アミッドさんが血清を作りベルに打った

……

「…ウガアアア!？」

「なっ……失敗!？」

「ア、アミッドさん!？」

ゾンビのベルは一番近くにいたアミッドさんに噛みつき…

「あ、あれ?」

アミッドさんは無事だった。周りが混乱、ベルも混乱していると、ある答えが浮かんだ

く翌日く

アミッドさんが第一感染者だったらしい。アミッドさんが感染者であるため、アミッドさんが人に回復魔法を使えば使うほど、感染者が増えていた

「ヤミさん! 血清持つてきました!」

「おう。…にしても、ヘステイア様…」

ベルから血清を受け取り、ヘステイア様を見ると…

「ぐああああ…べええるううくうくうん」

拘束されたゾンビ・ヘステイアがベルを見るなり暴れていた

「なんちゅう間抜け面してんだこの人……」
血清を打ちつつ俺はそう口からこぼした

第45話お仕置きの時間だ

「おおおお……!?あ、あんな巨大なモンスターがいるなんて聞いてないぞ!」

「あつははははっ!?死ぬかと思ったー!」

四つん這いになってゼエーハアアと息を乱すヘステイア様と、地面に座り込んで大笑いしていると男神がおり、それ以外にも肩で息をしている冒険者達がいた

「……あ」

ヘステイア様がキョロキョロ周りを見渡すとその視線はベルのところまで止まり

「ベル君!!」

「おふう!?!」

目にも止まらぬ速さでベルに飛びついた。その勢いに耐えきれずベルはそのまま押し倒される形で倒れた

「ベル君、ベル君っ!本物かい!?!」

「か、かみひやま……!?!」

ヘステイア様はベルの体をくまなくペタペタと触り、最後に頬を引っ張る

「何してんだヘステイア様……!」

「ヤミ君！いたのかい!？」

「ハツハツハ。シバいていいですか?」

いつもならヘステイア様は「や、やめるんだ!ヤミ君!」とか言うのだが、今回ばかりは違った

「……良かったあ」

ヘステイア様から安心した声上がる。顔を見ると涙を目尻に溜めていた

「いい加減にしてください、ヘステイア様」

「あ、コラツ、感動の再会を邪魔するんじゃない!?は、離せーっ!？」

リリが割って入り、ベルに馬乗りになっていたヘステイア様を引き剥がす。ヘステイア様は抵抗するが『恩恵』のあるリリの方が力が強い、幼女が幼女に引きずられていく「クラネルさん、ヤミさん、無事でしたか」

「え……リユースさん!？」

え……なぜぼつたくり酒場のバイオレンス女が…

ガスッ

リユースさんの肘が俺の腹に直撃し、腹の痛み悶え苦しむ

「痛い…なぜ俺だけ殴られた?」

「なんだかカズヒラさんは失礼な事を考えていると思ったので…」

この人、エスパーか？そんでこの一撃、ただ者ではないのは知ってたけどこれ程とは……

「どうして、リユースさんまで……」

「とある神に、冒険者依頼を申し込まれました。貴方達の搜索部隊に加わってほしい、と」

彼女が視線をずらす、その視線を追えば先ほど愉快に笑っていた男神がいた。その神は神を揺らしながら周囲を見回し、ぼんぼんと土を払って立ち上がる

「オーケー、状況はわかった」

いつの間にか集まっていた【ロキ・ファミリア】の人達の顔を見て、得心の笑みを浮かべる

そうしてこちらにも気づき、笑みを纏ったまま寄ってくる

「君が、ベル・クラネルかい？」

「はっ、はい」

その神の問いに立ち上がったベルが答えると次に俺に向いて

「そして君が、ヤミ・カズヒラ……と」

「そうですか、アンタは？」

問いに答えを返し、問い返すと「ああ、すまない」と謝り、自己紹介を始めた

「オレの名はヘルメス。どうかお見知りおきを」

「ヘルメス、様……?」

「ああ。よろしく、ベル君。ヤミ君も」

「……よろしく」

なんだろうか、信用できない感じが拭えない

「ヘルメス様、なぜ見ず知らずの俺達を助けに来たんですか？」

「なあに、オレはヘステイアのマブダチだから協力したまでさ。君達を助けたいと言っていた彼女の望みにね」

リリと口論しているヘステイア様を見ながらヘルメス様は笑いかける。「あ、ありがとうございます」とベルが感謝の言葉を送る

まあダンジョンの中層までヘステイア様が来れたのも、この神のおかげなのだろうし……

「また今度差し入れ持ってきていきます」

「おつ！君の料理は絶品なんだとヘステイアから聞いているからね。楽しみにしているよ」

あと、感謝ならオレ以外の子達にしてやってくれ。その覆面の冒険者や、彼等のおかげで、ここまで来れたようなものだからね」

ヘルメス様の視線を辿ると、冒険者達と目があつた

その中の統一した装備の三人の冒険者には見覚えがあつた

「……おい、ベル。ヤミさん」

「わかつてる」

後ろからヴェルフに言われるがそう返す。なんかまた面倒事が起きそうな気がする

「申し訳ありませんでした」

貸し与えられているテント内

中にはリユーさん、ヘルメス様とその眷属のアスフィさんはこの場にいらない

目の前では一人の少女が綺麗な土下座をしていた

どうやらこの人達、桜花さん、千草さん、命さんは極東の出身らしい。この世界では本家の土下座だ

「おおっ……!?!?」

「いや『おおっ』じゃねえよ」

ベルとヘステイア様が本家の土下座を見て戦慄しているためツツコミを入れる

「いやだって！本家の土下座だよ!?!」

「いやそれでも今じゃねえだろ。確かに綺麗？な土下座だったけども」

そう話している光景を見てリリとヴェルフが呆れた顔をしながらも話す

「……いくら謝られても、簡単には許せません。リリ達は死にかけたのですから」

「まあ、確かにそう割り切れるものじゃないな」

喉を鳴らしていた馬鹿二人を他所に、土下座を物ともしないもう二人は険のある声を崩さない

生真面目かつ先走った命さんに困り果てていた桜花さんと千草さんは顔をあげ、リリ達を見る。命さんも土下座を解除してリリ達を見る

「あの、その、本当にごめん、なさい……」

「リリ殿達の怒りはもつともです。いくらでも糾弾してください」

モンスタアの押し付けはダンジョン内では日常茶飯事だと聞くが、今回は、リリの言った通り死にかけたので、嫌悪な空気が続いている

許せるかもしれないある方法があるが、何も知らないリリとヴェルフは許すか？

「あれは俺が出した指示だ。そして俺は、今でもあの指示が間違ったとは思っていない」

巨漢の男、桜花さんが言い切った。その言葉には絶対に曲げないと言う感じの信念が入っている気がした

「……それをよく俺等の目の前で口にできるな、大男？」

それを聞いたヴェルフが口を釣り上げ対峙する。もう睨み合つてると過言でもない感じに発展している

…しやあない、ちよつと手加減無しになるが、やるか

「ヴェルフ、ちよつと待つてくれ」

「なんだよヤミさ…アンタ結構悪い顔してるぞ」

「そ、そうか？…コホンツ。まあベル坊とヘステイア様にもやつてる軽いお仕置きをこの三人にやる。それでどうだ？」

それを聞いた瞬間、ベルとヘステイア様がガタガタ震えだし、二人ともおでこを抑え出した

「そ、それは何をするつもりですか？」^だ

それに気づいたリリとヴェルフは冷や汗を流しながら聞いてくる。俺はそれに笑顔で答えた

「デコピン」

「「「「…はっ」「」」」」

俺のお仕置きの内容にリリ、ヴェルフ、桜花、千草、命が一斉に口を揃える

「いやいや、ヤミ様。子供じゃないんですし…」

「おう、こんな時に冗談は笑えないぞ？」

当たり前だがそう反対するリリとヴェルフ、だがベルとヘスティア様は

「…そ、それでいいんじゃないかな？ベル君は、どう思う？」

「あ、あれ以上の罰を受けるのは可哀想だし、僕もそれで良いと思う」

「ベル!？」^{機特}

「よし、決まりだな。桜花…さんはもういいや、デコ出せ」

驚きの声を上げる二人を他所にそう言う俺に対し、何もわかっていない桜花は素直におでこを突き出す

俺は中指を親指で引き絞り……

中指に闇を纏わせた

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!？」

「桜花っ!？」

『耐久』無視のLv2のデコピンが直撃し、苦痛に悶える桜花

それを見て心配する残りの二人

「さあて、次はどつちが受ける？」

「ヒツ…」

あ、やばい。今悪い顔してるのを自覚できる。後ろからリリらしき声で「あ、悪魔…」
と言う声が聞こえるが気にしない、気にしない

おしおきだ、お仕置きだ、O★S I★O★K I★D A

余談だが、この後千草と命に顔を合わせるたびに逃げられるようになった上、数日の間リリから最低な男を見る目で見られる羽目になった

第46話サブタイトルが思いつきません

「やあ帰ったよ。〔ロキ・ファミリア〕には話をつけてきた……これはどう言う状況だい、ヘステイア？」

フィンさん達に滞在の許可をもらって来たヘルメス様とアスフィさんが戻ってきた瞬間に出た言葉はこれだった

彼らの目の前にはおでこを抑え苦痛に悶え苦しむ三人の姿があったためにこれが出てきたのだ

「ちよーつとヤミ君がね……」

明後日の方向を見ながらそう返すヘステイア様を見てヘルメス様は「そうかい」と軽く笑う

「だ、大丈夫……ですか？」

「り、りり殿……」

「もういいですから。その、罪滅ぼしとかはもう良いので……」

あと、ヤミ様にもきつく言っておきますので、今は休んでください」
りりを見ればりりが命を助け起こしており

「大丈夫か？」

「お、おう…助かる」

「なあに、困った時はお互い様だ」

ヴェルフを見ればリリと同じく桜花を助け起こしつつ、友情が芽生え

「だ、大丈夫？痛かったよね？」

「は、はい…」

ベルを見ればベルらしくおどおどしながら千草を助けていた

……あれ？俺、側から見たら悪人じゃね？

「それじゃあ、今後の予定について話し合おう！」

何事もなかったように笑いかけるヘルメス様

アスフィ、と声を掛けてヘルメス様は一度道を開ける

「まずは地上への帰還ですが……【ロキ・ファミリア】にゴライアスを倒してもらった後で、我々はこの18階層を出発しましょう。回避できるのなら、危険な橋を渡る必要はありません」

そして、【ロキ・ファミリア】が移動を再開するのは早くても二日後だそうです」

「つまり一日は暇がある……せつかくだし明日一杯は18階層を観光でもしようじゃないか！」

アスファイさんの説明が終わると同時に出てきたヘルメス様の提案は受け入れられたのだがここはダンジョン、全員集団行動が課せられ、いつの間にかやっていたのかベルはアイズさんと約束していると言う事で明日は『街』へ向かうことが決まった

そのまま話はサクサク進み、後は就寝だけとなった

ヴェルフはヘステイア様から何か預かり物を受け取ったようだが俺には関係ないな「ヤミ君・リリ君から聞いたんだけど、ジュースを作ったそうじゃないか！明日、飲ませてくださいっ！」

「…はいはいわかりましたよ」

明日にジュースを作ると約束するとヘステイア様は「イヤッホーウ！」と夜にもかかわらず大声で叫ぶためチョップを入れた

く夜から昼へく

朝食が終わり、ジュースを渡し、ベルの約束通りアイズさんに街を案内してもらおう事になった

他にも暇を持て余していたらしい……えー、テイオネさんとテイオナさんも同行している

「わあ……!」

「でっかいな」

街に入る俺達を出迎えたのは木の柱と旗で作られた巨大なアーチ門。上部には共通語で『ようこそ同業者、リヴィラの街へ!』と書かれている

「見てくれに騙されない方がいいわよ。気持ち良くして、懐を暖めようって腹だから」
テイオネさんに忠告を受けながらアーチ門をくぐる

街の人達の腹の中は真っ黒って事か。なるほど、ベルを見てないとやばい事になりそうだ

「この街を経営するのは、他ならない冒険者達です。細かいルールや領主などは存在せず、各々が好き勝手に商売を営んでいます」

ベル、ヘスティア様、リリ、ヴェルフと並んで辺りを見回しながらアスフィさんの説明を聞く

18階層以下の階層を攻略するため冒険者が度々利用するこの根拠地では、宿泊、探索、宿泊、と体力と物資が続く限り繰り返し返すの定例らしい

「でもこの街って、モンスターに襲われたりしないんですか?」

ふと思ったのかベルが口を開き聞くと

「勿論されるわ。つい一ヶ月前だって、モンスターに好き放題やられて壊滅しかけたもの」

「あれ危なかったよね?! あたし達もその時ここにいたけどさ〜!」

アマゾネスの姉妹は軽く答える

……大丈夫かこの街? 明日明後日に襲われたりしないよな? ……あるわけないよな! アツハツハ! ……不安だ

「あの、アスフィ様、この街にも沢山の水晶がありますが……」

「ええ、地上でなら、18階層に生えているクリスタルは全て換金できますよ」

「ベル様つ、ヤミ様つ! ……ここから帰る際にはぜひ水晶を山ほど採取していきましよう!」

話を聞いた途端に目を輝かせたりりに苦笑しながら見晴らしのいい広場へと出る

「流石にこの人数で移動するのは周りに迷惑だ。ここからは自由行動、各自行きたい場所へちらばろうじゃないか」

ヘルメス様が前で両手を広げそう勧めてくる。もちろん全員が賛成した

「よしベル君、ボクと一緒に街を回ろうぜ! ……ヤミ君はヴァレン何某君を任せたあ!!!」

ベルを引きずり俺に言いつけて街の奥へと姿を消したへスティア様

「……………」

「……………」

…気まずい

(なんで連れてきたんだヤミ君!?)

(気まずいんだよ。話す内容がないし!!)

結局ベル達の所へ連れてきた。ヘステイア様に色々言われるが知ったことか。あんなやりづらい空気になるよりかは幾分マシだ

「あの、さつきから並んでいる品物の値段……た、高くないですか?」

「それが、リヴィラの街の特徴だから……」

そうこう話しているうちにベルとアイズの話が耳に入った。店の商品を見てから価格を見ると地上と比べて桁が1、2個違う

「ここでは武器や道具、食料などを、通常価格の何倍もの値段で販売しています」

「ダンジョンでは物資が簡単に確保できないから、いくら金を吹っかけても捌けてしま
うんだよ」

付いてきていたヘルメス様達の言った通り、この地下のダンジョンではただの水でも
貴重なものだ

「だからってこの値段は……」

「砂漠で買う水の価値と一緒さ」

「信じられません！バックバックが二万ヴァリスだなんて……法外もいいところですよ！」

「砥石がこの値段はありえねえ……」

購入したばかりの大型バックバックを背負いながら怒るリリと店にある砥石を持って呻き声を上げるヴェルフ

クツソク「購入」使えば一発で終わりなんだが……人目がつくどころか人の前にいるし……

「こうしてリリ達見ると【ロキ・ファミリア】がキャンプしてる理由がわかりやすいな」「ええ。ここで『遠征』をするほどの大人数が止まれば、とんでもない金額を請求されるからキャンプを「わっ!!!」」

アマゾネスの姉妹の……えー、ティオネさん？が話している途中で俺の後ろからティオナさん？が大声で驚かしにきた

突然の事でリアクションは取れなかったがビクツとはした

「アハハー！ビクツってした！今ビクツてした！」

「……何しにきたんだ？」

「ん？何もないよ？強いて言うなら、驚いた時の反応が見ただけ。それよりどうだった？ビククリした？」

「まあビククリはしたな。こういうのはベル坊…ベル・クラネルにやったら良いぞ。面白い反応見せてくるから」

「本当に!?よーし行つてくる!!」

俺の言葉に従いティオナさんはベルの方に行つてしまった

さて、次は換金所だったか？

ある程度街を巡り歩いていっているとハスティア、ヘルメス様が「ファミリア」のエンブレムについて話をしていた

…自分達のエンブレムのデザインを考えてみたけど無理だ。想像もつかない

ふとベルを見るとベルも同じように想像の世界に入っているが、こちらは楽しい世界に入っているようだ。こういう時、純粋なベルが羨ましい…

そんな事を考えているとドンツとベルに何が当たる。すれ違おうとしていた冒険者と肩がぶつかっていた

もちろんすぐにベルは謝るがその後すぐに「あつ」と言葉が出る

「てめえ、まさか……!」

「間違いねえ! モルド、こいつ、あの酒場のガキだ!」

モルドを含めた冒険者達が驚く。なんだ? ベルの知り合いか?

第47話覗き

ベル曰くどうやらこの男達は俺が『豊穰の女主人』で皿洗いをやらされていた時にリユーさん達に叩き伏せられ追い出された奴らしい

「何でてめえがここにっ……」

その時のことを根に持っているのか、ベルに掴みかかろうとするモルド……さんでいいのか？ だったが側にいたアもうさんつけなくていいやイズの姿を見るなり足を止め、俺の姿を見るなり

「ヒイイ!!」と後ずさる。そのまま走ってどこかへ行ってしまった

「おいおい、ベル君。また冒険者に因縁をつけられているんじゃないだろうね？」

「えつと、そういうわけじゃあ、ないんですけど」

「気をつけとけよ？ 人間なんてちよつとしたことで妬み嫉みをするからな」

「マジですか…」

ベルは頭を抱え「うーん」悩みだした

「ねえねえ、みんな水浴びしに行こう！」

そのテイオナの言葉が始まりだった。それに全員が賛成し、今キャンプ地ではほとんど男しかない

「……頃合いだな」

女達の水浴びに行つて数分後、ベルと大地に横たわり昼寝に入ろうとしているとヘルメス様がそう呟く

「えっ？」

「ヘルメス様どうした。トイレ？」

「いやいや、違うとも。それよりもベル君にヤミ君……」

オレに付き合つてくれないか？」

真剣な眼差しで、潜めた声で言ってくる

「オレはこの時を待つていたんだ。いや、この時のためにここまで来たと言つても過言じゃない……オレ達、男三人だけになれるこの時をね」

なんだろう。嫌な予感がする

だが声を潜めると言うことはよっぽど大事な話なのだろう。受けるしかない……のか？

ヘルメス様は「ついてきてくれ」と静かに、誰にも悟られることなくその場から離れ

る

野営地から離れ森の中へ、奥へと進む

「……よし、これがいいな」

歩きの前で足を止めるヘルメス様。幹が太く、丈夫そうな大樹だ

ヘルメス様は慣れた動きで気をよじ登る「さあ二人とも、早く登ってくるんだ」と言われ、俺もベルも気を登る

「ヘルメス様、なんか話があると思ってたんだが」

「おや？オレはそんなことを一言も言っていないぜ？」

「帰っていいか？ベル坊、ヘルメス様、頼んだぞ」

なんだよ話はないのかよ

ならもう俺は関係ないだろ

そう思いながら帰ろうと足を動かそうとしているとガシリと肩腕を掴まれる

「ヤミ君、残念だがここまで来たらもう引き返すよりやってしまった方が得なんだぜ？」

「いや、何する気だよ。嫌な予感がピンピン感じるんだが？」

ヘルメス様にそう聞かす「すぐにわかる」と先に進み出すヘルメス様

「ど、どうするっ？」

「どうするもこうするも、もう近くらしいし……ついて行って、くだらないもんだつたらす

ぐ帰るぞ」

ヘルメス様についていくと段々とドドドド…という大量の水が落ちる音が聞こえ、進むほどにその音は大きくなっていく

「なあヘルメス様。もしかして…」

「うん？ ヤミ君は今更気づいたのかい？ 君って案外鈍感なんだねえ」

ハツハツハと笑うヘルメス様の言葉の後に女の声がワイワイ聞こえてきた

「……覗きだよ」

「!?」「帰るわ」

目を見開き驚くベルと即座に方向転換し帰ろうとする俺を見てヘルメス様は言葉を続ける

「まあ待て待て、女の子達が水浴びをしているんだぜ？ そりゃ覗くに決まっているだろう？」

「決まっちゃいませんよ!?!」

「バレたら弁明の余地なしで重罪は確定だろうが」

俺達の言葉を聞きウンウンと頷くヘルメス様

「二人共、ここで騒いだら、第一級冒険者に簡単にバレてしまう」

ヘルメス様の言葉を聞き、今乗っている枝の下を見る。「ロキ・ファミリア」の女性団員達が辺りを哨戒し、いつの間にか真下には水浴びを楽しんでいる女達の声が響いていた

ヘルメス様を見るとニコリと清々しいゲスな笑みを浴びせてくる

「まだ俺達は無罪だな。よし帰るぞベル坊」

「そうですね」

「情けないなあ、二人とも。『覗きは男の浪漫』だぜ？ベル君ならともかく、ヤミ君ならわかってくれそうな気がしたのに…あつ、もしかして童…「それ以上行ったら神である」と全力で潰しに行きます」…それにしても、君達の親は一体何を教えてきたんだ」

ヘルメス様が一瞬ビクツツとしながらそう言う

まったく。子に覗きを男の浪漫とか教える親なんて……

「三年前のある日の朝」

「おーいじいちゃん。鍛錬の時間だぞー！」

家の廊下を歩きながらじいちゃんを探す。廊下で呼んでも出てこなかったため外の縁側の方へ行くとまだ幼いベルとじいちゃんがそこにいた。何かを話しているようで「なんだなんだ」と思いその声に耳を傾けると

「ベルよ。覗きは男の浪漫じゃ…」

「おじいちゃん？」

「□ r r r r r r マンじゃああああ!!!」

「おじいちゃん!？」

「孫に何吹き込んでんだクソジジイツツツ!!!」「フガア!？」

強烈な右ストレートがジジイを襲う。二、三M吹き飛ぶがそこで体制を立て直しすぐに立ち上がる

「コレツ!!! 師匠に何してるんじや!!!」

「うるせえよ! 純粋無垢な孫に汚い事教えてんじやねえよ! 一瞬耳を疑ったわ!」

思えばこの出来事がじいちゃんに一撃入れた最初の思い出だったなあ……忘れよう

「か、帰りましょう、ヘルメス様っ!？」

気づけばベルが腰を上げ、前のめりになってヘルメス様を引き戻そうとしていた
ボキッ

何かが折れる音が聞こえた。見ればヘルメスの足場から先が折れていた。枝の上の位置はヘルメス、ベル、ヤミという感じであり、ヘルメス様の足場から先…ということ
は

「俺とベル坊が落ちるな」

「ヤミさん!? 冷静に考えている暇はないよ!？」

枝葉を突き破りそのままの勢いで落下していく俺とベルはそのまま真下の水へ…

「いくかあッッ!」

「ヤミさん!」

ベルの腕を掴み離そうとしても離れない刀を抜き、いつややった鞭を作り枝に引っ掛ける

おかげで勢いが落下の勢いが止まり、安心する。一瞬だが

ボキッ

「あっ……」

枝が折れた。当たり前だ。二人分の体重に落下の勢いが全て枝に来ているのだから
間抜けな声を出しながらやはり水の中へ入ることになった

「ガホッ、グホッ」

水から顔を出し、咳き込む。隣を見るとベルも同じように咳き込んでいた

「……アルゴノウト君に……悪魔？」

荒い息を吐きながら下を見ているが聞き覚えのある声が聞こえる。顔は見えないが
近くに気配が……

「なになにつ、二人共水浴びに来たの？」

「片方はわかるけど、大人しそうな顔をして……やるわねえ、あんたも」

「う、うわあああああああああああああああ!?!」

多分顔を上げたベルの叫びが木霊する

…片方はわかるって何!?!俺なら納得ってか!?!そんなに信用なかったか俺!?!

「な、ななななっ……!?!」

「え、ええええっ……!?!」

「まさか……ヘルメス様？」

俺達の登場に慌てているのか周りから水が跳ねる音が聞こえる

『顔を上げれば桃源郷が見えるんだぞ？ホラホラ、顔を上げな』

もう一人の俺がそう囁く、危うく顔を上げそうになったところで…

「ベル君、君ってやつは……！」

「ヤミ様…見損ないました……」

ヘスティア様の後のリリの声で正気に戻る

リリい!!? 誤解だあ!!俺達は騙されたんだあ!!

「ズ……ごめんなさああああああああああああいつ!!」

ベルが走り出したため男も目を瞑りながら走る

え? 『見えてないだろ?』 って?

【領域】 使えば一瞬だ

「【解き放つ】一条の光聖木の弓幹何時弓の名手なり狙撃せよ妖精の射手穿て必中の矢」

!!

「駄目っ、レフィーヤ流石にそれはだめー!!」

詠唱が聞こえ、それを止める声も聞こえてきた

っーか詠唱はや!?

「【アルクス・レイ】!!!」

「ああああッ!!!」

【領域】に凄い速さで飛んでくる物体が感知された。これが魔法なのだろう

「ベル坊ツ、お前だけでも逃げろツツ!!」

「ヤミさん!?!」

動きを止めて魔法の方を向き、闇を両腕に纏わせ、腕を突き出す

ドンツと両腕に衝撃が走り数M地面を削りながら後退する

どういう魔法なのかは知らないが、熱などは無効にできるため普通に触れる

「うらあああああああ!!」.

そのため魔法を掴み、上に上げると地面に叩き潰した

第48話ベルく今行くぞく

『あの白髪と黒髪の野郎がアイズさんの水浴びを覗きやがっただとおおお!』

『あ・の・クソガキイイイイイイイイツ!!』

俺達の覗きの一件は瞬く間に広がった。「ロキ・ファミリア」の団員達は男女問わず武器を取り、モンスターのように吠えている

『せめて、あの黒髪だけでもツツ!!』

『アイツはやめとけツ!何かレフィーヤの魔法を簡単に叩き潰したって話だ!並のやつじゃまず無理な可能性が高い』

俺は何故か安心が約束されていた。ベルが殺されそうになったら一緒に土下座して謝ろう

「マジですいませんでした」

安心な俺はと言えば初めての土下座を覗いてしまった人達にしてまわっていた。

アイズ達に「レフィーヤの魔法を潰したアレは何?」と口を揃えて聞かれるが、ヘスティア様が「そ、それはダメだ!」と庇ってくれた

ヘルメス様が捕まり、事情を吐いたおかげで俺達がヘルメス様の企てによって連れてこられたと言うのはわかってくれた

だがこうでもしないと何か落ち着かなかった

ヘルメス様が女性陣は最初こそはめちやくちやに罵ってきたがヘルメス様が吐いた情報を聞くと、すぐに許してくれた。俺は一切見てないしね

「ベル君遅いなあ、ボクはヤミ君と一緒にいるのも中々いいけど、ここにベル君もいれば最高なんだけど…」

「ベル坊ならそのうち帰ってくるだろ。いつもなんやかんやで生き残って帰ってくるし」

現在テント内でベルを待つついでにヘステイア様に「ステイタス」の更新をしてもらっている。ぶつぶつ何かを言いながらヘステイア様は俺の「ステイタス」を「購入」で買った紙を見せてくれる

ヤミ・カズヒラ

L v 2

力：B784↓S912

耐久：D 5 3 9 ↓ C 6 7 1

器用：C 6 1 6 ↓ B 7 3 9

敏捷：E 4 9 9 ↓ C 5 2 1

魔力：E 4 1 8 ↓ B 6 0 9

純粹：I

《魔法》《スキル》そのまま

結構上がったな。だがヘステイア様曰く、Lv1の時と違いまだランクアップは出来ないらしい

まあそれが当たり前なのだが…

「でも、あと一歩つてところだったから、そのうちすぐにランクアップはできる筈だよ

！」

「そうか…もうLv3か…長いような短いような…」

「短いよ!？」

おー、ベルがないからヘステイア様がツツコミを入れてきた。これもこれでいいな
ベルは問題なく帰ってきて、すぐに寝て、翌朝…

ベル・クラネル

Lv2

力：G 2 6 7 ↓ F 3 6 5

耐久：H 1 4 4 ↓ G 2 7 1

器用：G 2 8 8 ↓ F 3 4 9

敏捷：F 3 7 5 ↓ E 4 6 9

魔力：H 1 8 9 ↓ G 2 7 0

幸運：I

《魔法》《スキル》そのまま

ベルも「ステイタス」の更新をしてもらってからテントから外へ出た

「ロキ・ファミリア」の人達を見送り、数分後：ヘステイア様がいらない。荷物をまとめた
はいいのだが、途中から急に姿を見なくなった

そして…

「おい、いたか!？」

「いえ、ベル様もヘステイア様も、どこにも見当たりません! ヤミ様は!？」

「いなかった。マジでどこ行ったあの二人…」

俺、リリ、ヴェルフが一度集まり報告し合っていると桜花、命も戻ってきた

「不味いぞ、このまま見つからないようじゃ、【ロキ・ファミリア】の部隊に置いてかれ

る」

「もう、時間がありません」

【ロキ・ファミリア】についていく気だった俺達はやばいやばいと頭を悩ませる

「こんな時に迷子になるってのは普通じゃない。となるとまた面倒事に巻き込まれたか？面倒事の種になりそうなのは…」

「み、みんなー！」

野営地の外れの北東側、大木の下で手を振っている千草がいた。すぐに俺達はそこに駆け寄り、何が合ったかを聞くとポジションが散乱した場所に案内された

「これは『ミアハ・ファミリア』のポジションだな」

「あ、あとね、さつき、クラネルさんが凄い慌てながら森の外に…」

「…もう事件に巻き込まれたと考えた方が、良さそうですね」

リリがそう言つて、何か手がかりがないか散らばったポジションを物色し始める

「モンスターがヘスティア様に何かやらかしたとは考えにくいな。やつぱり人の仕業か？」

「まあどちらにせよ、俺の家族に手を出した以上、ただでは済まず気は微塵もないけどな」

ハツハツハと笑いながらそう言うのと何故か周りから『ヒッ！』と怯えのこもった声

が聞こえた

一方でベルはモルドに一方的な戦いを繰り広げていた。それを見て興奮の雄叫びを上げる冒険者の輪、それを外から見つめる二つの視線があった

「悪趣味ですね……面白いですか、こんなものを見て？」

「きついなあ、アスファイ」

木の上に立ち、枝葉の影に隠れながら眼下の光景を眺めるヘルメスは眷属である子供に非難と嫌悪の視線を送られ、肩を上げる

「ベル・クラネルとヤミ・カズヒラの力を自分の目で確かめたい……そうおっしゃっていましたが、こんなものを見るためにわざわざダンジョンへ？それにヤミ・カズヒラがないじゃないですか？」

「本当は階層主あたりと戦うところを期待していたんだが、流石にそう上手くはいかない」

「そっちの方が馬鹿げていますよ」

無然とした面持ちで言い返すアスファイ

「わざわざ私の兜まで預け、あんな冒険者達をけしかけて……私はヘルメス様があの二

人に恨みでもあるのかと思いました」

「んー、むしろオレなりの愛かな？」

「こんな愛、堪ったものじゃありません」

「そう言うなって。遅かれ早かれ、彼らの洗礼はベル君に訪れたんだ。他の冒険者達が面白く思っていないって、アスファイも言っていただろう？」

ヤミ君ならともかく、ベル君は人間の綺麗じやない部分を知らなすぎる、将来はもつと酷い場面に遭うかもしれない

悪趣味でもなんでも、知って欲しかったのさ、彼に。人の一面を…

ま、娯楽が入っている事は否定しないよ。ヘステイアにも悪いことをしてしまった」

「……もしここで、彼の牙が折れてしまえば？」

「器じゃなかった、つてことかな」

淡々と答えていったヘルメスはやがて。ある方向を見て、呟いた

「さーて、来たぞ。仲間思い、家族思いの【悪魔】が……！」

くベルく

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!』

「また入ったあ!!!」

「いいぞモルド!!!そのままやっちゃまえ!!!」

凄まじい殴打の嵐を受けるベルを見て回りが歓喜し、喝采し、熱狂する。そこにあるのは激しい悪意。これまでの楽しく、優しい僕の世界とはかけ離れたものだった

「グッ……」

息も絶え絶えになるベルに容赦なく突き刺さる拳。それを見てまた回りが歓喜する

(もう……意識が……)

ドゴオツツ!!

(!?)

飛び、自分の大事な家族、仲間を思い浮かげた時に、見ている冒険者達の奥の方から何かが爆発したような音がした

「ベエエエエエエエエルウウウウウウツツツ!!!」

その冒険者達を吹き飛ばし、前の方の冒険者達の上を飛んで現れたのは

「ヤミさん!?!」

いつも助けてくれる兄のような存在が僕の目の前に綺麗に着地する。そして次にポロボロの僕を見て

「どうした! その傷、こいつらにやられたのか!?!」

その声を聞いて僕はハツとした。まだ、あの男がここにいる

それを伝えようと口を開こうとするがもう遅い、どこからかジャリツと音がして風を切る音が聞こえた

多分蹴りを入れようとしているのだろう

「ヤミさん危な 「よっ…と」 …ええ？」

ヤミさんは見えない敵の攻撃を片腕で軽々と防いだ。まるで位置がわかっていたかのように

「は？…なんで…」

「ああ、なるほど。こいつかあ」

ヤミさんはそのまま何かをガシツと掴むと拳を引きしぼり、一気に突き出した

「ガツ!？」

拳に何かが当たる音がすると数M先で土煙が上がる

「さて、ここから一気にやるぞ。魔法なんぞ使うまでもねえ」

指ををコキコキ鳴らしてそう言うヤミさんの言葉を聞いて僕の中にいる何かが僕に囁いた

『このままいつも通り、助けてもらうだけでいいの?』

「ツツ！ヤミさんツ！」

そうだ、ここでこの人に助けられたら…いつも通り、弱い自分じゃないか。弱いままじゃダメなんだ…アイズあさん人に追いつくためにも
「ここは、僕一人でやらせて…ください…！」

第49話決着

「ヤミさんッ!!」

ベルをボロボロにした姿が見えない敵をボコボコにしようとして歩を進める直前にベルに呼ばれた

敵を警戒しつつベルを見るとボロボロの状態のまま立ち上がるベルの姿があった

「ここは、僕一人でやらせて…ください…!」

そう言うベルの目は死んでいるどころか燃え上がっているように思えた

「…勝算はあるのか? お前に」

「わからない。けど、ここで助けられたら…昔の僕に戻ってしまう…気がした…か…ら…」

だんだんと小さくなっていったベルの言葉を聞いて俺は

「ハアツハツハツハ!!」

盛大に笑う。ベルはいきなり笑いだす俺に驚き目を見開く

「いやあ、昔のベル坊は可愛い感じだったが、男らしくなっちゃったなあ!!…いいぜ、お前が戦いたいんだったら俺は止めねえよ」

だが、俺の助けを断ったんだ。負けたらシバくからな？」

俺の許可が出たのを聞いたベルはすぐに笑顔になり、「はいっ！」と大きな声で返事を返してくる

「それじゃあ、俺はうるさい観客共を黙らせておくかあ」

そう言つてベルに背を向け先程まで騒いでいたが俺が来てから敵意丸出しの冒険者達に向かつて突っ込んだ

「ベル？ベル……ベル！」

またモルドと僕の一騎打ちが始まった。だが変わらず不可視の攻撃が僕を襲う。周りの観客はヤミさんが蹂躪しているため、大歓声がなくなり、多少は防げるようになってきた

（ヤミさんは普通にこの攻撃を防いで、迷わず反撃した……魔法を使った気配もなかった。本人も魔法を使うまでもないって……どうやって……？）

頭を回転させながら一瞬遅れた防御を取り続ける。するとある感覚がつかめてきた
「……っ？」

不可視の攻撃。太い腕から繰り出される痛烈な拳。ベルはそれを細腕で防御する

ヤミが防いでいた時と同じ同様の気配がした。見えない相手から漂う、確かなたじろ

ぐ気配。モルドの攻撃は一度止み、仕切り直すように、再び別の角度から苛烈に殴りかかってくる

防ぐ。防ぐ。防ぐ

ヤミほどのものではないが、敵のタイミングを読んで、そして正しく相手のいる位置を見極め、ひたすら防御するを重ねていく

「てっ、てめえっ、見えてんのかあああああああああああ!」

全く見えていない。多分ヤミも同じだっただろう

しかしベルは眈を吊り上げモルドを正視していた。いや正確には彼の『視線』、『気配』を感じ取っていた

まるで値踏みされているような、二ヶ月の何者かによる無遠慮すぎる視線、最近感じた悪魔のような威圧感、気配

それらの出来事が人一倍臆病であった少年の感覚を鋭敏にさせた。その結果、モルドの視線の出どころと気配により、モルドの位置を完璧に補足していた

「くそが、くそが、くそがああっ!」

抜剣の音がした。拳や蹴りなど愉悦のままいたぶるにとどまっていたモルドが本気になり、とうとう剣を抜いた

くヤミく

「ぐ…ぐぞが…」

「ふースツキリ。リリらはちゃんとやったか？」

現在、俺は峰打ちで倒れた冒険者達の上に座りベルの戦いを見届けていた

途中から感覚をつかんだのかベルが見えない攻撃を防いでいき、最終的にしっかりと敵の位置を見るまでになっていた

「こいつでぶった切ってやるツ!？」

剣を抜いた音がした後、ベルが前転すると同時に剣で風を切り裂く音がする

再び一直線に突き進む敵。その瞬間にベルは先程取ったのか粉々にした水晶を投げつけた

「なっ!？」

見えない敵はそれを頭から被り、付着した水晶が光り輝く

「ふツツ!」

「う、うおおおおおおああああああつ!？」

《牛若丸》を装備し突貫するベルと長剣を持つ敵。ベルは迫る剣を左に持つナイフ1つで打ち払うと敵は後退し固まる

だがベルは止まらず。振り切った左手の勢いをそのままに左足を軸足にし、回転
「あれは……」

俺はそれを見たことがあった。ていうか、コレの実験台にされてた
アイズ直伝の回し蹴りだ

「あああああああああああああああああッッ!!」

右踵が敵の側頭部に当たる。コレは勝負あつた

その瞬間、バキツと破砕音が響く。そのままごとりと兜のような物が崩れ落ち、それ
に伴って見えていなかった敵の姿が現れた

「あれは確か、昨日ベルが言ってたやつか……」

モルドは頭を押さえ、ふらついた体を起こすと血走った目でベルを睨みつける。ボロ
ボロのベルも、息を切らしながら再び構える

次で決着がつく。その時だった

「やーーーーーめーーーーろーーーーろーーーーーッ!!」

ピタリとその場にいた全ての人の動きが止まり、声の方向を見た

そこにいたのは傷一つない状態のヘステイア様だった。隣を見るとリリがいた
助けることに成功したようだ

「ベル君達……ヤミ君はもう済ませちゃってるけど、ボクはもうこの通り無事だ！無駄な

喧嘩は止せ！君達も、これ以上いがみ合うんじゃない！」

君達、という言葉に疑問を持ち近くを見るとヴェルフ達が近くまで来ており、ヘステイア様を見て剣を下ろしていた

つてリユーさんいるじゃん。いつの間に…

「ヘステイア様は無事だとよ。ほらベル坊、目的は達成したんだし行くぞ」

「うん」

座つて見ていた状態から立ち上がり帰るようベルに促すと正直に頷き俺達の方へと足を…

「神の指図なんざに構う必要ねえ!?やれ、やっちまえ!!」

まだ諦めていなかったモルドの叫び声を聞いた瞬間、満身創痍だった冒険者達がある程度回復していたのか立ち上がる

ここまで来たならもう引き返せない言った感じだ。モルドの方も眼前のベルに飛びかかるうとした

「諦めの悪い男は嫌われるぞ〜」

そう言つて満身創痍の敵にはコレで十分だと俺は拳を握る

「ー止めるんだ」

その言葉を聞き、また全員が動きを止めた。声の主は間違いなくヘステイア様だろう

が、その声にはいつもの明るい感じのものではなく、神としての威圧感が込められていた

「コレが神々が持つって言う『神威』ってやつか？鳥肌が止まらない

「剣を引きなさい」

「う、あ……」

今まで見ていたヘステイア様とは違う口調、顔で、ヘステイア様が諭すように告げるモルド達は呻き、神秘的な青みがかかったその瞳に押されるように後退った

「……うわああああああ!!」

一人の冒険者が逃げ出す。すると周りの冒険者もそれにつられ一目散に逃げ出す。最後にモルドも退散していき、森は先程までとは違い静かになった

「ーベル君、無事かい!」

「ほわあつ!!」

すぐにヘステイア様が俺の横を通りベルに飛びつき体当たりをかます。そのままポーチからミアハ印のハイ・ポーションを取り出し、栓を抜いて顔に浴びせた

「ヤミ君ツ!!」

「……ん?」

てつきりいつも通りベルの胸の中で泣きべそをかくのかと思っていたが違うようだ

「そいつー！」

「ぶっ!!」

トテトテと俺の前まで来ると変な掛け声を上げながら何かを俺にかけてきた

「ポーシヨンだよ。まったく、少しとはいえ傷ついてはいるんだから小さすぎる傷でもちやんと直さないと…」

「この程度なら別にポーシヨンなんか使わなくても…「わかったかい？」…はい」
渋々ヘスティア様の言葉に返事を返す

「大丈夫か、ベル？」

「ご事情はわかりますが、お一人で行ってしまわないでください！リリ達に相談するだけでもやりようはいくらでもあった筈です！」

ベルがリリから説教を受けているのを見て、ヴェルフは苦笑し、俺は内心笑う

「ヤミ様もですツ!!ヤミ様はいつになったら勝手な行動を控えて下さるんですかツ!!?聞いてくださいヘスティア様!ヤミ様は中層で『ヘルハウンド』に遭遇した時に…:…」

リリのその言葉を聞いて「あ、やばい終わった」と悟りかけると

ダンジョンが揺れだした

第50話ゴライアス

足場が揺れる。いや、階層全体が揺らめいている

「じ、地震っ?」

「いえ、これは……」

「ダンジョンが、震えているのか?」

千草、命、桜花が足元を見下ろしながらうろたえる

揺れは次第に大きくなっていき、周囲の木々も左右に揺れざあざあと音を立てる

「これは……嫌な揺れだ」

リユーがそう口にすると次の瞬間、フツと頭上の水晶から注ぐ光に影が混ざり、薄暗くなる

「……おい。なんだ、あれ」

天井を見上げたヴェルフがそう呟いた

それにつられ、上を見上げると頭上の水晶の眩しい光の中で巨大な中かがもぞもぞと動いていた

不気味なそれを見て全員が固まっていると、一際大きな揺れが俺達を襲った。その威

力に危うく転倒しかける者か、転倒した者しかいなかった

するとバキリッと蠢いているそれが入った水晶に亀裂が入る

「亀裂……!? モンスター!?」

「ありえませんが、ここは安全階層セーフティポイントです!?」

亀裂からポロポロ落ちる水晶が落下していく

命の言葉にリリが悲鳴のように叫ぶ

その間にも亀裂は広がり、黒い何かはその身を徐々に大きくしていく

「おいおい……まさかボクのせいだって言うのかよ」

それを聞き、誰もがヘステイア様のもとに振り返った

「たったあれっぽっちの神威で……冗談だろ？」

「バレた……!?」

水晶を破ったそのモンスターは、まず頭部から姿を晒した

18階層の天井から生えた頭部はギョロリと目玉を動かし、すぐに肩と腕も出現させる

上半身半ばまでむき出しになったところで、その口を開いた

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

階層全土をわななかなせる凄烈な産声を上げ、巨人のモンスター『ゴライアス』は17

階層を飛び越え、この安全階層に現れた

ゴライアスが水晶を割りながら腰まで姿を表すと、重力に従い落下した
『は、はひゃあああああああああああつ?!』

ゴライアスが落ちたあたりから叫び声が聞こえた。見ると先程までベルと戦っていたモルド達が叫び逃げ惑っている

「……は、早く助けないと?!」

それを見たベルはモルド達の阿鼻叫喚を前に、飛び出そうとする

「待ちなさい」「まあ待てベル坊」

「っ?!」

そんなベルの手を俺が呼びかけると同時にリユーが掴む

「本当に、彼等を助けにいくつもりですか?このパーティで?」

「そもそも、あいつらは俺達を…ベルをボロボロにした連中だ。助ける価値はあるか?」

二人の冷徹で無情な至極当然な問いをベルは受け、一瞬迷い

「助けましょう」

間髪入れず決断したベルに、リユーは目を細める

「貴方はパーティのリーダー失格だ」

リユーから非難の言葉をぶつけるが、次に彼女は笑う

「だが、間違っていない」

目を見開くベルに微笑を残し、リユーはとどまっている森から飛び出し、モルド達の元へ向かっていった

「ハア、ベル坊ならそう言うとは思っていたが、それを手伝う側の気持ちも考えて欲しいもんだ」

俺がそう言うのとベルがビクリと震える

「ご、ごめ「だが、そんなお前だからこそ俺達はついてくる…だろう？」

「「おうっ!!」」

ベルの謝罪の言葉を遮り周りに聞くと全員が大きな返事を返した

それを聞いて安心した表情になったベルは叫ぶ

「行こう！」

【強奪】

スナッチ

襲われていた冒険者を離脱させた後、リユーに向かって振るわれる攻撃の瞬間に魔法を使い、一瞬だけ動きを鈍らせるとリユーはその一瞬で攻撃範囲から離脱し、俺の隣に

立つ

その瞬間に追撃にとゴライアスが『咆哮^{ハウル}』を放とうとするが

「燃え尽きろ、外法の業」

ヴェルフの魔法によってそれを失敗させられ、爆発する

それに怯んだ間に桜花、命が斧と刀で斬りつける

俺は少しできた時間に隣にいるリユーに尋ねる

「ゴライアスってこんな強かったのか？ 確か、Lv4相当…だったか？」

「はい。ですが固さ、速さ、色、それらにおいて通常とは違います。このゴライアスはLv5に届きます」

リユーの判断による推定の強さを聞き「マジですか」と声が出る

『ウウーオオオオオオアアアアアアアアッ!!』

先程の攻撃に対しほとんど効いた様子はないゴライアスは吠え、再攻撃に移る

ヴェルフ達はすでに離れたため狙いの対象は俺達だろう

振り下ろされる剛腕から俺は後ろに、リユーは横に飛ぶことで避け、リユーはそのまま

ま旋回し俺はその地面に突き刺さる腕に乗り、顔面に向かって走り出す

もちろんゴライアスは振り落とそうと腕を動かし出す

その時、ゴライアスの顔面に向かって何かが投擲され、投擲物が頬に命中した瞬間、大

爆発した

『オオオオオオオオオオッ!?』

ゴライアスは爆発による火傷、俺は爆発による耳のダメージに叫ぶ。だがまだ目は生きていたため構わず突き進む

そのまま苦しんでいるゴライアスの右目に刀を突き立てた

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!?』

片目の痛みについてのうちまわるゴライアス。俺はすぐに刀を抜き、地面に着地する

「……キンキンするが、鼓膜は無事だな。よし」

「ヤミさんッ！これから援軍が一斉射撃の準備に入ります！私と、アスファイさんと、ヤミさんで敵の意識を分断させましょう!!」

「え、いや、待っ—」

耳の無事を確認すると同時、リユウから作戦を聞く。アスファイは「何故自分も!?!」みたいな表情をしているがリユウは構わず飛んで行ってしまった

ゴライアスを見るとがっつり両目でこちらをロックオンし、『咆哮』を撃とうとしている

「チクシヨオオオオオオッ!!あのバイオレンス女あああッ!!」

叫びながら闇を纏わせた剣を構える俺

そんな俺に向かって容赦なく『咆哮』を撃ってくるゴライアス

俺は撃ってきた刀の峰の部分で受け止め

「フルカウンター【全反撃】 ああああ!!!」

叫びながら野球のように打ち返した

【フルカウンター全反撃】とは言っているがたいしたものではない。ただ刀で受けた魔法を力技で打ち返すだけの脳筋技だ。倍以上の力かつ、弱い力で返すものでは断じてない

『囲めーッ 囲めえーッ!!』

その声を聞き周りを見れば他の冒険者達の援軍が到着していた。先程の声に従い数十人の冒険者達がゴライアスを取り巻いていく

その中にベルの姿があったが囿の役割があったため今は話しかけずにいることにした

ゴライアスの攻撃を避けるか打ち返すかの動きを続けているとゴライアスが別の何かに気づき、後ろを見る

俺もつられてそちらを見れば危険と感じ退避する冒険者4名と…

「ええ……ベル坊？」

ほとんど取り残された状態のベルだった。見れば退避した4名を見て驚いた表情をしながら突き進んでいた

ゴライアスの巨腕が迫ると前傾し、加速を始め、前へ突き進み攻撃の通過点をギリギリ回避し、持っていた大剣を叩きつけた

その攻撃はゴライアスは確かにダメージを与え、それを見た冒険者達が沸く

そのままベルは股下を通ると俺の前へやってきた。ゴライアスがそれにつられてこちらを見るためすぐにベルを抱え離脱する

「何やってんだベルb」「クラネルさん、今のは危なかった」うおっ!!」

「リュ、リューさん……」

「あんなことを繰り返しては、命がいくらあっても足りません」

ベルを抱える俺の隣に急に現れたリューがベルに戒める

「合図を出します、攻撃の際のみ私の後に続きなさい。貴方の敏捷あしならついてこれる」

「……！はい！」

「おっし頑張れば」「カズヒラさん。貴方もですよ」ですよー

顔を明るく返事するベルと逆に暗くする俺であった

第51話俺はこれでもう……引退……を

階層主の攻撃を止めようと、あるいはその巨体を地に落としてやろうと、執拗なまでに二本の足が狙われていく。想像を絶する固さによって歩みは止められないものの、前衛の波状攻撃によってゴライアスの動きは確実に鈍っていた

彼等が奮闘する中、とうとう魔導師達の詠唱が完了する

「前衛、引けええっ！でかいのぶち込むぞ！」

前衛全体に号令が飛ぶと同時に、リユウ、ベル、ヤミ、アスフィや他の前衛達はただちにゴライアスのもとから離れた

『……………ツツ!?!』

連続で見舞われる多属性の攻撃魔法。火炎弾が着弾すれば雷の槍が突き刺さり、氷柱の雨と風の渦が炸裂する

一斉射撃が止み、聴覚を麻痺させる爆音が途切れ、全ての冒険者が砲撃の中心地を守る中。立ち込めた煙が薄れると共にドンッとゴライアスが片膝をついた

顔面部分を始めとした黒い体皮は傷付き、抉れ、赤い血肉を晒している。口からは蒸気のような白い呼気が、消耗の深さを物語るように吐き出されていた

「ケリをつけろてめえ等あ!! たたみかけろおおおっ!!」

前衛が一斉に前に出る。巨人の息の根を止めようと四方八方から躍り出る。ヤミもその中の一人だった

「……………?」

ヤミがある程度近づくとおかしなことに気づく。先程まで滴り落ちていたはずの血が今は一滴も落ちていない

『……フウウウ』

気づいたとほぼ同時に、沈黙していたはずのゴライアスが顔を上げた。顔面に負った傷がどこにもない

損傷した体皮からは赤い光の粒子が発散されていた。光の粒子が立ち上る側から傷は見る見る内に癒えていき、完全になかったものとなる

ゴライアスは勢いよく立ち上がった

『自己再生!?!』

どこにいるのかわからないが、アスフィの信じられないと言う感じの叫びが上がる
「…………ああそういえば、突き刺したはずの目玉。復活してたなあ」

今更気づいてももう遅い。ゴライアスは接近した前衛、呆然とする魔導師達に対し、その巨大な両腕を振り上げた

「【障壁】×3ツ!!」

ヤミがその行動を見た瞬間に闇で3つの壁を両腕の通る空中に想像する

創造

そしてゴライアスは握り締められた二つの大拳を足元へ振り下ろし、壁と激突する
「お前等あーさっさと退避しろやあああツツ!!」

「「ツツツ!!」」

1枚目の壁が激突と共に割れ、2枚目にもぶつかりそれにヒビが入る

それを呆然と見ていた冒険者にヤミが叫ぶと冒険者達はハツとし、全力で退避を回避した

その間に2枚目が割れ、残り1枚となる

「カズヒラさんッ!退避が完了しました!ヤミさんも退避を!」

ピシッ

「え、ちよ…」

リユーの声が耳に入ると同時、ヤミが動くより一瞬早く壁が破られ、巨人の拳がそのまま地面にぶつかる

凄まじい大爆発を引き起こし、地割れと、衝撃波が発生する。その破壊の津波は一瞬でヤミを呑み込み、吹き飛ばした

「ヤミさんく／＼(´ω´)／

「いつてえ……」

ゴライアスの位置から数十M、木々をなぎ倒しながら巨大岩にめり込んだ俺はそこから吐く

闇で全身に薄い膜のようなものを張り、衝撃波はほとんどダメージはなかったが、吹き飛ばされた後が問題だったため、かなりの重症だ

「よっ……と……と……」

岩から抜け出し地面に着地するとバランスが崩れ、危うく倒れそうになってしまった。気を抜いたらすぐにでも倒れ伏してしまいそうだ

『オオオオオオオオオオオオオッ!!』

遠くにいるゴライアスが咆哮するとそれに答えるようにミノタウロスなどのモンスターが現れた

「ヤミさああああああああああああん!!」

朦朧とする意識の中、いつも聞いているベルの声が聞こえたかと思うとベルが体術と魔法を駆使して俺の周りにいるモンスターを一瞬のうちに殲滅した

「ヤミさん！大丈夫!？」

「ああ、大丈夫。…多分」

額から血をダラダラ流しながらグツと親指を立てて返事する俺に「大丈夫じゃないじゃん!？」と言いながらハイ・ポーションを半分かけ、半分は俺に渡してきた「ベル坊、さっきので負傷者はどれくらいだ?」

ポーションの残りをグイツと飲んでベルに尋ねる

「衝撃は魔導師達のところまで届いてたっほいけど、ほとんどの人は無事だよ」

「そうか、それは良かった。…おーし、傷は治ったな」

ベルの話の聞いてから自分の傷の確認をすると

「無事でしたか」

上からきたリユーがそう言っただ俺達の近くに着地してきた

「……二人は周囲の人達と協力して他のモンスター達の討伐に当たってください」

「リユーさんはどうする気だ?」

「アンドロメダとともに、ゴライアスを押さえます」

あのモンスターを止めておかなければ、このまま蹂躪されます。もう一度一斉射撃を行うにせよ、出来るだけ時間を稼がなくては

…ヤミさんは先程の傷は消えてはいますが、ダメージは残っているはず。無理はしないでください」

時間が惜しい、と言うようにリユーは話を切り上げ駆け出した

「さて、あの人はああ言っているが…まあお前ならそうするわな」

リユーの後ろ姿を見送った後、ベルを見ればいつか聞いた鐘の音を鳴らしながら蓄積チャージを開始しているベルがいた

「ヤミさんは…僕を助けてくれる？」

「こんなボロ雑巾で良ければ♪」

真剣な眼差しで問いかけてくるベルに対し軽い気持ちで答える。ついでに「あんま期待はすんなよ？」とも付け加えておき、刀を構え直した

『ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

「邪魔すんなあああああああああああつっ!!」

ダメージの残った体を無理矢理にでも動かし、ベルに近づくとモンスターを切り裂く。すると

「溜まった…!!」

「やっとか!!よしっ!行ってこい!!」

「うんっ!!」

俺の言葉に大きな返事を返すとベルは巨人に向かって走り出す

「クラネルさん!?!」

リユーがベルの接近に気づき、伴ってアスファイや、モンスターと争う冒険者達との視線も集まる。

鼓動を爆発寸前まで高めるベルは敵の眼光を一身に受け止め、真正面へと躍り出た

「まさかーリオン、離れますー!」

アスファイは発光するベルの右手を確認し、大声でリユーに退避を勧告する。リユーは一瞬ためらうそぶりを見せた後、すぐに少年の射線上から離脱した

『——————オオッ!!』

強烈な『咆哮』を放つゴライアス、それと同時に右腕を振り上げ、射撃体勢に入りました咆哮する

「【ファイアボルト】!!」

発光する右手から放たれた大炎雷は『咆哮』とぶつかり、突き破る

白い稲妻と共に凄まじい轟音をまき散らしながら、ぶつかり合った魔力魂を粉碎し、

その先にあつたゴライアスの頭部を撃ち貫いた

間を置いて巨大空間である階層の果てに魔法は炸裂し、絶壁を爆砕する

右腕を突き出したまま目を見開いているベルは、立ったまま硬直する巨人の体をただ見つめる。鉄壁を誇る体皮をいとも容易く突破した破壊力に、周囲も一瞬静まり返った頭部を失つて活動を続けられる生物はいない

勝つた。そう冒険者が信じ込もうとした、その直後

夥しい赤い粒子が巨人の首元から発生した

「ベル坊ツ!!」

おぞましい勢いで失われた巨人の顔が修復される中、「英雄願望」の反動によって動けないベルをヤミが担ぎ、走り出す

「頭なくして生きてる生物がいるとはなあ!! 全く、世界は広い…ダンジョンか」

「ヤミさんっ!! そんなこと言ってる場合じゃないよ!!」

後ろにはゴライアスがすでにこちらをロックオンし、『咆哮』を撃つ準備に入っていた「……! 桜花つつつたかあ!?! 受け取れえ!!」

「え?…待って! ヤミさん!!」

ヤミはベルの言葉を無視し誰よりも近くいた人物に向かってベルを投げ飛ばし

その場に残ったヤミは『咆哮』の直撃を受けた

第52話決着

「ヤミさん!? ヤミさん!？」

「カズヒラさん、カズヒラさんっ！返事をしなさい！」

血だらけで倒れたまま動かない男の体を揺する。息はある、心臓も動いている、ベルとリユウの持っていたポーシヨンを使ったおかげで体には傷がない。それでも起きないのは体内に残ったダメージのせいだろう

『ヤミさんは……僕を助けてくれる?』

『こんなボロ雑巾でよければ♪』

なぜあの時にまでヤミさんに頼ってしまったのか

答えは分かっている。自分が弱いからだ。弱ければ、誰かに助けを求めることしか出来ない。弱ければ、助けられても助ける事が出来ない。弱ければ……あの人に追いつくことが出来ない

「ベル君様！ヤミ君様は!？」

「……神様……リリ」

振り返れば自分達の主神とサポーターが息を切らしながらそこにいた

「覆面君、いやエルフ君っ、ヤミ君の状態は!?」

「息はありますし、心臓も動いています。ですが、体に蓄積されたダメージと疲労が尋常じゃありません」

Lv5の咆哮にLv2が撃たれて普通は無事なはずがない。下手をすれば死んでいたかもしれないが、運が良かったと言ったところだ

全員が無言でヤミを見ていると

「リオン、早く戻って来なさい!」

たった一人でゴライアスを相手取るアスフィの叫び声が響いた。直後に咆哮が放たれ、瞳目する彼女は純白のマントで守るように己の全身を包んだ

自製の対衝撃布の上から砲撃を浴び、「ぐっ!」とその細身の体が吹き飛ぶ

「……エルフ君、行ってくれ。少しでも長く、時間を稼いでくれ」

振り返るリユーに、ヘスティアは張り詰めた表情で告げた

するとベルはスツと立ち上がり、彼もまたリユーに言う

「リユーさん。お願いします。僕なら、【英雄願望^{僕の一撃}】なら、ゴライアスを倒せ……るかもしれません」

「……確証はないのですか?」

真剣な目で言うものだがズッコケそうになったリユーだったが、そうはせず。問う

「さつきみたいに外したら……だけど成功させます！させてみせます!!」

少年の目は本気、一歩間違えば横で横たわる男と同じかそれ以上の事になる。少年もそれを分かっているのか体が若干震えている

「……分かりました。貴方の最後の一撃に賭けましょう。では、私は他の人達にこの事を伝えて来ます」

そう言った返事で了承するとサツとリユーはゴライアスの方へ走り去っていった

「ベル君なら出来る。僕はちゃんと信じてるぜッ！」

ヤミ君は僕に任せて、あのモンスターを倒して、目覚めたヤミ君に自慢してやろうじゃあないか!!」

ベルが振り向けばそこには親指をグツと立て笑顔で信じてくれる神様がいた

「ベル様、これを……」

小人族の少女を見れば黒大剣を差し出してこちらを見ていた。「ありがとう」とそれを受け取り巨人を見据える

怖い、失敗したら……そんな感情がベルの中に渦巻く

『ベル坊、危険な時ほど重く考えるな。まあ、いつも通りやればいいんだよ。』

ん? 「いつも通りってどのくらい?」

知るか。適当で良いんだよ適当で』

聞き覚えのある声がした気がしたため、ベルは勢いよく振り返れば変わらず意識のないヤミがそこにいた

(ありがとう)

心の中で感謝し、巨人を改めて見る

『もし、英雄と呼ばれる資格があるとするならばー』

昔に聞いた祖父の言葉が頭に響きながら、ベルから鐘の音が鳴り出した

気づけば暗い場所にいた。暗過ぎて数M先も見えない

『俺は…何してたんだっけ?』

そう言つて辺りを見回してみるのがやはり何も見えない

『久しぶりじやのう、ヤミ』

『うお?!?!じいちゃん?!?』

急に声をかけられビクツとしながら振り返ると三年前に死んだはずのじいちゃんが立っていた。…木刀を持った状態で

『ふむ、ヤミ。お主は昔と違いかかなり強くなったと見える。どれ、一つ立合せんか?』

じいちゃんはそう言ってるで返答が分かっているかのように木刀を構える。まあ間違っていないのだが

『魔法はなしか？刀は？』

『なしじゃが…もしや魔法がないと勝てる自信がないとかじゃないよな？』

『当然。じいちゃんには魔法とかなしで勝つから意味がある』

『そうか、武器は刀を使うがええ。この木刀はそんなに簡単に折れる事がないのは知っておるじゃろ？』

『そういえば、そうだったな』

そう言ってる俺も刀を構える

………

少しの間お互いが睨み合い、先に動いたのは俺だった

『ツシヤア!!』

『むんっ!!』

間合いを詰め、横に薙ぎ払うが木刀で止められ、弾かれる。反撃とばかりに切り上げてくるが俺はそれを後ろに飛ぶ事で避けた

着地するとその瞬間に足に力を込め爆発させ、刺突を繰り返す

『ほう…』

『やべっ』

木刀を上には振り上げた状態のじいちゃんは手首を回転させ、刃の向きを変えるとそのまま振り下ろす

俺は前に進む勢いを足で無理矢理止め、ギリギリのところでは躲すが鼻先に掠る

『成長したのう…欠伸が出るような戦い方じゃが、剣の鋭さがましとる』

『褒めてんのか貶してんのかどっちだ!』

『どっちもじゃよ』

『上等だジジイツ!!老い先短い命の幕を下ろしたらあツ!!』

『儂はもう死んでいるんじゃないか?』

昔と変わらない様子で目から炎を出していると『む?』とじいちゃんが何かに反応する

『…:すまん、ヤミ。もう少しやれると思っていたのじゃが、もう時間がない』

『あ?なんの話を『儂はお主らを見守っておるからな。ベルの事を、頼んだぞ』

俺が聞こうとするも一方的に話を進めてきた。するとじいちゃんの体が透け出し、暗

い世界は光がポツポツと現れ出した

『それじゃあの、ヤミ。ベルによろしくな』

『あ、こら待てじいちゃん!!おい!!』

俺の叫びを無視してじいちゃんやんは消え、光が俺も覆い尽くした

「ヤミ君!!」

少しすると俺の意識は覚醒し、目を開けば目を赤くしたヘステイア様とリリがいた。耳を澄ませば聞いたことのある鐘の音がする

その音の正体に俺はすぐにわかった。ならば、行かなくてはならない。そう考えると動かない体を無理矢理動かし立ち上がった

「[[[[ツツツツツツ!!?!]]]]」

その瞬間、誰もが一瞬だけ動きを停止した

今もなおゴライアスの攻撃を実行しながら平行詠唱を進めるリユーム

平行詠唱とはいかないが全身全霊の魔法の詠唱を唱え続ける命も、それを守る桜花や千草も

時間稼ぎをしていたアスファイも

さらには、現在足止めの攻撃を受けている最中のゴライアスも

『英雄願望』でチャージしているベルも

いきなり現れた濃い魔力、気配に反応し動きを止めた

だがそれも一瞬、すぐに全員が行動を再開するのだが、ベルだけは違った

ザツ、ザツとベルから鐘の音が鳴る中誰かがこちらに歩を進める音が確かに聞こえ、気配と魔力がそれと同時に進む

ベルはそれが誰だか知っている。故に、その者の名を呼んだ

「ヤミさんっ!？」

「おう。ベル坊、楽しそうなことやってんなあ。俺も混ぜろよ」

そこには最大出力の闇を刀に纏わせた【悪魔】がそこにいた

「なんだあベル坊、俺がそんな簡単に死ぬと思ってたか？」

「…いや、ヤミさんならこれが当たり前だよな」

「いやーホント俺の事を分かってらっしやる。さすが昔からの付き合いってやつ？」

ハツハツハといつも通り笑うヤミ

それと同時に鳴り響く鐘の音がピタリとやむ

「…やるぞ、ベル坊。準備はいいか？」

ヤミはそれが何を意味するのかを悟るとそうベルに問う

ベルはそれに対して頷くことで答え、二人揃って構える

「行くぞベルッ!!」

「うんっ!!」

白い光と黒い闇が巨人に向かって走り出す

巨人はリユール、アスファイ、命の時間稼ぎにより動けない

これが最後のチャンス、外すことは許されない

「あああああああああああああああああッッ!!」

たった二人の英雄と悪魔が放った一撃は巨人を貫き、その場には一つの巨大な魔石が残っていた

第53話さてさてきーて。温泉回へGO!

その光景に、誰もが何も言わず、しばし立ち尽くした

「……消し飛ばし、やがった」

呆然とこぼれ落ちたヴェルフの眩きが契機だったかのように、全ての時が動き出す。固まっていたベルは片膝をつき、同じように固まっていたヤミはバタリと地面に横たわる

(そういえば、あの猪野郎にこれをやった後も精神マインド・ゼロ枯渇になったな)

横たわる直前、ヤミはそう考えながら意識を手放した

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!』

ヤミが意識を手放した瞬間、大歓声が巻き起こる

周囲の冒険者達が諸手を突き上げ、あるいは隣の者と肩を組み、涙さえ浮かべながら喉が張り裂けんばかりに声を上げる。彼等の持つ刃の毀れた剣が、槍が、斧が、盾が、まるで自ら凱歌を挙げるように銀の光を散らす

言葉になっていない音の津波が轟き渡り、大草原を震わせた

先程まで続いていた自身が嘘だったかのように沈黙するダンジョンからは新たなモンスターが生まれてくる気配はない。終わりが告げられた戦いにリヴィラの冒険者達は、モルド達は、興奮の赴くまま顔を赤く染め、歓喜を分かち合った

「二人共!!」

涙ぐむヘスティアが最初に駆け出し、ヴェルフ、リリ、リユ、命と続々と力尽きた二人の元へ走り出す。一部の他の者も彼等の元へ殺到した

騒ぎながら走ってくる者にベルは人差し指を口元にやり、『シート』と静かにするように促す

近づいた全員がそれに従い静かにすると次にベルがヤミを指差す。なんだなんだと全員がヤミを見ると

「……寝てますね」

「ヤミ君の寝顔はしょっちゅう見ているけど、これは……」

「か、可愛いですね」

「つーか、こんな顔できたのか……」

リリ、ヘスティア、命、ヴェルフの順でヤミの寝顔を見た感想がそれだ

その時のヤミの寝顔はどことなく安心しきっている。少年を思わせる顔であつたらしい

（翌日）

「あく眠い。なんであんな暴れた後に…精神枯渴を起こした次の日に地上に戻るのになつてゐるんですかねえ。鬼かあんな等」

俺がそう愚痴をこぼすとヘルメス様が口を開いた

「本当は18階層でもう少し休んでいきたくはあったが…」

オレとヘステイアがいる以上、そうもいかないからなあ」

そう言うとその隣にいるアスフイさんが口を開く

「つべこべ言つてないで、早く地上に戻りますよ！カズヒラさんも、愚痴言わないでくだ

やう」

そう言われ「はい…」としか答えられない。今思えばヘルメス様もこの人の説教とか受けてそうだよな…

「本当です。ヘステイア様さえいなければ、ベル様にはリリとゆうーつくり休んでいただくのに！」

「何言つてゐるんだいサポーター君！ベル君は早く帰つてボクと一緒に休みたいに決まっ

てるっ！」

俺の後ろにはベルの左腕を掴むリリとベルの右腕を掴むヘステイア様がくだらない口喧嘩をしていた

「ヘステイア様じゃ、疲れは取れませんか！」

ベル様はリリがいたわってねぎらって尽くして差し上げます！」

「何を言っているんだっ！ベル君は三度の飯よりボクといるのが好きなタイプなんだっ！」

そう言つてヘステイア様とリリがベルの互いの腕を引つ張り合う

「それならベル坊に聞きゃあ良いだろ。ベル坊はどっちが良いんだ？」

面白そうな話に俺が割つて入つて聞いてみる。ベルは一瞬だけ戸惑いの表情を作つたがすぐに戻し口開く

「そうだね。僕はホームに帰つて……」

「ベル君……！」「ベル様……」

その言葉を聞くや否やヘステイア様の目がキラキラとし、リリの目が死んでいく「ヤミさんの作つたご飯を食べたいです！」

「三度の飯に負けた……!!」

ベルの最後の言葉に二人仲良くうなだれた

「ハツハツハ、嬉しい事を言ってくれるなあ。それじゃあ帰ったら腹一杯になるくらいの量作ってやるよ」

「本当!?!」

「ああ、本当だ。その前に……」

ベルがキラキラとした眼差しで聞いてきたため肯定し、そのまま前を見る

『グルル……』

「……ヘルハウンド!」

18階層に行く前に何度も見たヘルハウンドがそこにいた

するとガラガラと壁が崩れだし、そこからハードアーマードが生まれる

「あ……」

「大丈夫です神様」

おののくヘスティアの前にベルが立ち、言う

「神様は……僕が守ります!」

「ハッ!」

『ギャッ!?!』

最後のモンスターを俺が切り、そのモンスターは灰となり、魔石に変わる

「…つたく。昨日深手を負った奴に戦闘なんかやらすなよなあ」

「ヤミさんなら大丈夫でしょ？」

「それはそうなんだが…なんだかなあ」

信頼されているのは良いのだが、それでも…

「凄いいじゃないか、ベルk「すっごいです！ベル様あつ！」な!?!」

へステイア様から何か聞こえた気がしたが、それと同時にリリがベルに抱きつく

「お見事でした二人共」

「私達の出る幕はありませんでしたね」

「普通は俺が出る幕はないんだけどな!?!」

リユーとアスファイが称賛してくるが俺がツツコミを入れる

すると視界の端にへステイア様が頬を膨らませてこちらを見ていた

「ぬぬぬぬ……!?!」

「どうしたへステイア様？」

輪になっていた皆から外れ、へステイア様に聞くと機嫌が悪そうに言う

「なんだい二人共、デレデレしちゃってみつともない…」

「いや別にデレデレしてないだろ？」

ヘスティア様にそう説得するがまだ機嫌が悪いのかそこらにあつた小石をダンジョンの壁に向かつて蹴り飛ばす

カコンツと小石は壁にぶつかり跳ね返る

ゴゴゴ……

「むあ？」

小石がぶつかった壁に亀裂が入り、一気に崩れ落ちる。少しの間その場一帯は砂埃に溢れ、視界が見えなくなる

「神様っ!? ヤミさん!？」

気づいたベル達がこちらに走ってくる音がする。ある程度音が近づくと砂埃が晴れ、そこには

「これは……っ!」

「未開拓領域……」

リユーとアスファイが少々驚きながら言う

「未開拓つてまだマツピングされていない場所ですか？」

「ええ、間違いないでしょう」

二人の言葉を聞いて千草が聞くとアスファイが頷きながら肯定の言葉を口にした上で続ける

「私の記憶でも、この階層にこんな地形はなかったはずですよ。縦穴とは構造も違います」
「つまり新発見ってわけだ」

桜花が簡単にどう言うことかを話すとベルがキラキラした目で俺とヘステイア様を見る

「凄いですね、神様！ヤミさん！」

「あ、うん？ま、まあね！ボクにかかればこの程度のこととは……」

少しおどおどしながらも胸を張るヘステイア様に小声で話す

（偶々だとは言わねえの？）

（む、無理だ……！ベル君はボクに眩しいくらい尊敬の目を向けてくる……！！ベル君の思いを無下にするなど……ボクはできない！！）

ヘステイア様がベルをチラッと見るため俺もそれを追ってベルを見る

「神様はなんでもお見通しなんですわね！」

（ああ、うん。これは無理だわ）

（だろ？）

キラキラした笑顔のベルを見てそんな事を囁き合っていると

「……はっ！」

「ん？どうした命さ……」

急に何かに驚く仕草をする命に俺が聞こうとすると彼女は物凄い速さで崩れた壁の入り口に行くのと犬のように臭いを嗅ぐ

「お、おい。どうかしたのか？」

「こつちが聞きてえよ」

ヴェルフが変な者を見る目でその奇怪な行動をする命を見ながら訪ねてくる

すると命が「まさかつ……！」と歓喜の声を出し

次に「はあああつ……！」とまた歓喜の息を吐き出すと一気に穴の中へ走り出す

それを見て慌てて全員が命の後を追う

走り走り、走り続け数分後……

カコンツ……

カコンツ……

そこには綺麗な水の溜まり場があった。その水からは湯気が出ており、水に触れれば

丁度良い暖かさが感じられた

「これは……」

「温泉……？」

第54話戦闘回じゃない

「これは……」

「温泉……?」

「はいいっつ、間違はなく温泉ですっ！自分、温泉のことだけは自信あるんです！」

命が興奮した様子でテンション上がり気味にそう言う

温泉が好きだからって…犬みたいに臭いでわかるもんかね？

「他には何もありません」

「モンスターの気配ありませんね」

「ここはダンジョンの作った癒しの空間ということなのでしょう」

「なるほど、少しのんびり出来るってわけか。助かるな」

リユー、アスファイ、ヴェルフがそう言う中、命はと言えば

ゴクツゴクツゴクツ…

顔を温泉につけてお湯を飲んでいた…いやマジで何してんだ

そんな風に命の行動に恐怖を覚えていると「ぶはあっつ！」と一気に顔を上げる

「湯加減、塩加減申し分なし！」

最高の逸品です！是非入っていきましよう！」

命のその言葉に全員が反応し

「18階層以来疲れが溜まる一方ですし……」

「うん、諸君、ここはひとつ……」

温泉リゾートとしゃれこもうじやないか！」

リリとヘスティア様の言葉で全員が賛成した……が

「あ……」

「ん？なんだい？」

女性陣がヘルメス様を一斉に見る。汚物を見るような視線で

「なんだじゃありません。水浴びの件、忘れたんですかっ？」

「ああ、ベル君がいい思いをして結局ヤミ君は見る事がなかったあれかあ」

その言葉でベルはあの時のことを思い出したのか顔を真っ赤にして「と、とにかくす

みません!!」と余計に誤解を生みそうな言葉で謝っている

「ヘルメス様だけ遠くで縛り付けておくってのはどうだ？」

「ヤミ君!?それじゃあオレだけ桃源郷は拝めないじゃないか！」

「それ、人によっちゃあ覗くって宣言してるようなもんだからな?で、どうだ?」

そう言ってアスフィに投げかけると首を横に振り否定する

「……無理です。ヘルメス様の事ですし、たとえ鎖で縛ろうが何らかの方法で抜け出してきます」

「そうか、じゃあ温泉は惜しいが……」

後ろから「そんなあ〜！」と1人の女の絶望の声が上がるがこればかりは…

「水着を着ればいい」

リユーが一つの提案を切り出す

「水着を着れば、混浴し放題です」

「それ名案ですっ！」

命が絶望から復活し、希望を見出す

だがこの案には根本的な問題がある。それは

「んで、その水着はどこにある？」

俺の一言に全員が静まり返る。するとザツとヘルメス様が立ち

「こんなこともあろうかと！」

勢いよくアスファイのマントを広げる。その中には男用のものも含めた数種類の水着があった

その勢いによる風でマントと一緒にスカートが…

先程までアスファイと喋っていたため俺がアスファイの1番近く、つか目の前にいたわ

けで

「アハハツ!!見たぞ!見たぞオレはツ!アスファイがスカートを抑える一瞬、ヤミ君が見たのを!!」

「うるせえええええええええええええええええ!!」

顔を真っ赤にしているのがわかる。単純に怒りのせいなのか、恥ずかしさなのかはわからないがとりあえずやることは一つ、この神に水浴びの時の分も含めた報復を

そんな俺をアスファイが止める

「カズヒラさん!良いですから!私は気にしてませんからっ!後はやつときますから!?!」

「そうそう。下着を見たくらいでそんな反応を見せてたら童貞臭いつて:「うおおおとおおおおお死ねえええええええええ!!」

「水着は俺が見立てた特別品だ。遠慮はいらない、もらってくれよ」

結局ポコポコにしたのはアスファイだった。俺は:何だろうか、ヘルメス様がポコポコにやられている様子を見ていて:ていうか、アスファイさんの容赦のなさを見ていて

感情が収まった

こうしてみればエイナさんからは説教しか受けていない俺はまだマシな方…なのかな？

今は女性陣が岩の陰で水に着替えている最中だ。俺達男性陣はリユーに見張られながらゆつくりと待っていた

するとヘルメス様が見ながらいきなり口を開いた

「…今頃あの岩の向こうでは、美の共演が繰り広げられているんだろぅねえ」

「「ツ！」」

その言葉にベル、ヴェルフ、桜花が反応する。ヘルメス様はニヤリと笑いながら熱く語る

「リリちゃんは、まだ幼さが残る中にも、ダンジョンを生き抜く強さを纏った、しなやかな姿を

命ちゃんは生真面目さに似合わぬ不埒な体のラインを、千草ちゃんは可憐な腰つきをクリスタルのもとに晒し…

ウチのアスフィだって、本来はおひめ…おつとお

ああ見えてかなりのもんだ。オレが保証するよ

きわめつけはヘステイアだ。天界屈指のあの胸…

それがナマであるの岩の向こうにあるかと思うと……

3人が喉を鳴らす。ゴクリと鳴る3つの音を聞き、ヘルメス様が俺を見てくる

「……なんだよ?」

「いやあ、ヤミ君って意外と小心者なんだなあとね」

「確かにそうだな。ヘルメス様の話に全然反応してなかったし……」

「もしかして、あれか?男が好みとか……」

最後のヴェルフの言葉を聞いてヘルメス様、ヴェルフ、桜花が後ずさる

「おいそんなんじゃないやねーから。帰ってこーい」

「じゃあなんでそんなに……」

俺が呼び戻すと3人がゆっくり近づいてくる

「あれだ。いつも俺がエイナさん……ギルドの受け付けの人に叱られてるんだけどよ?」

「知ってるよ。冒険者の間ではかなり有名だよ?ヤミ君は」

「マジか……まあ悪いことやると怒られるって考えると自然とエイナさんに怒られる風景

が浮かぶんだよ」

「……ああ、それがトラウマで……」

説明を聞いた3人が納得する。ヘルメス様は「君も中々辛いんだね……」と同情してくる

すると……

『ほわああっ?!』

へステイア様の悲鳴が聞こえた

「神様、どうしました!？」

『な、なんでもないんだベル君!』

「まさか胸がデカくて水着着れないとかかあ!」

『ヤ、ヤミ君なんでそれを!?!…てか、セクハラだぞ!!』

当たり前かよ……9割冗談だったんだが……

「…見るのはダメで、セクハラ発言はするんだね」

「ん? まあ発言くらいは…まあ…あと、両者合意の上なら多分……」

全員が「複雑だな」と言ってくる。あれ? 見張りのリユーも言っていない?

「ヴェルフ殿、ヴェルフ殿。お願い出来ますか、ヴェルフ殿」

「あん? 俺……が?」

岩の後ろから命とアスファイがヒョッコリと顔を出して手招きをしている。それを見た当の本人は困惑している

「ふっ……悪いなベル、大男。ご指名、なんでな」

だがすぐにドヤ顔でこっちを見ながら岩の向こうへ向かう

それを見た桜花は嫉妬の念を燃やしていた

「ぐぬぬ……なんでやつだけ……」

「大した事じゃねーだろ。多分……あれだ、水着を作れって感じじゃないか？」

「え？作れるの？水着？」

「不可能じゃねーだろそれなりに大きな葉があれば……」

「やー、助かったよヴェルフ君！やっぱり持つべき者は、鍛冶師の友人だね！さすがに手先が器用だつてヘファイストスに伝えておくよ！」

そこには葉で補強した水着を着たヘステイア様の姿があった。ついでに何かに落ち込むヴェルフの姿も

「な？言つた通りだろ？」

「凄いな、お前……」

「今回は諸般の事情により、やむを得ず全裸は断念しましたが……温泉に入るには、それなりの作法があるのです!!」

皆さん！本日は、僭越ながら自分、ヤマト・命がその一部をお教えしたくございます
！」

命が仁王立ちして叫ぶ中、ベルとヘステイア様が聞いてくる

「ヤミ君も一応極東出身なんだよね？」

「作法ってあるの？」

「いんや、知らねえな。つーかそんなもんあったのか」

「「ええ……」」

2人が変な目でこちらを見てくる。いや、知らないもんは知らないだししゃあねー
だろ？

「すみません。『極東』ではなく、『あいつだけ』の風習でして……」

「すみません、すみません……」

仲間の桜花と千草は謝りながら命の様子を見ていた。なんでも、こうなると誰にも手
がつけられないそうだ

第55話なんとも言えない回です

「後は手首足首をよおく回して……いぎつ、おんせえんつ！」

さばーん

水飛沫を上げながら命が温泉に飛び込んだ

「かけ湯はしないんですね」

「いやそれ以前に飛び込みはダメだろ」

俺とアスファイが2人で突っ込む

「すみません、すみません……」

見てて恥ずかしかつたのか桜花と千草が顔を抑えてそれしか言わない

キヤツキヤとはしやぐ女性陣、それをじっと見ている男4人

「………終わっただな」

「ああ、俺達は生きている」

「ああ、いい湯だ」

「本当にいい湯加減だね」

4人仲良く湯に浸かっていると大きな岩に乗ってヘステイア様がベルを呼んでいた

「ベルくん！この奥、まだ先がありそうなんだ。一緒に行ってみよう！」

「あ、は、はい神様！……ヤミさんは？」

「俺はここらでゆつくりしてる。行ってこい」

「わかった。ちよつと行ってきます」

そう言っただけでベルはヘステイア様のところへ行ってしまった

「……役得ってやつか」

「なんせ、「リトル・ルーキー」だからな」

「ウチじゃあよく見る光景だ」

ベルを見送り3人でそう話していると次に同じ所から千草が出てきて

「桜花……」

「ん……？」

「命が、温泉の吹き出し口を見つけたの。そこに寝た方が、傷の治りが早いかもしれないって……」

「一緒に……い……い……？」

「お、おう……」

というわけで、俺とヴェルフの2人が残ってしまった

「…あの2人、付き合ってたのかねえ?」

「…その前に、ヤミさんまで行かねえよな?」

「ないだろ。つーかも呼ぶ奴がいねえよ」

「それもそうか」

H A H A H A ……と笑う寸前…先程の岩の上に誰かが来た。命だ

「ヤミ殿ー! 貴方も重傷だったはずです。こちらに来ませんか?」

「ん? いいのか?」

「はい! 大丈夫です!」

ちらつとヴェルフを見る。嫉妬の目を…してはおらず、それはもう爽やかな笑顔で

「行つてこいヤミさん」

「ヴェルフ……ありがとう」

ヴェルフに感謝しながら命の後についていく。少し進むと後ろから「裏切り者ー

!!!」と聞こえた気がしたが、気のせいだろ

グツグツと煮えたぎる温泉に浸かる。それほど広くはないが、2人入るくらいなら十分な広さだ

「ああ、いい湯だな」

「カズヒラさんは熱い湯が好きですか。納得です」

「地獄に住んでそうですもんね。ヤミ殿」

「熱くない、桜花……？熱かったら、無理しないで、出てね？」

「お、おう……（出れん……この状況で出れるわけがない……というか、ヤミはなぜ大丈夫なのだ!?無意識か、無意識のうちに見ないようにしてるのか!?と、とにかく気を紛らわす為の話題を……）」

がつつりそこでくつろぐ俺

足湯に浸かるアスフィ、命、千草

股間を抑えて我慢している桜花

命がなんか言った気がしたが温泉の気持ち良さで綺麗さっぱり消えてしまった

「す、住んでいそうといえ……ヤミは極東出身だとかなんとか話してるのが聞こえたんだが……」

「なんと、ヤミ殿も極東出身だったのですか！一体どの辺りに住んでいたのですか？」

桜花が顔を赤くしながら話題を振ってきた。命がそれに食いつき、俺に質問を投げか

ける

にしても、どの辺？俺の極東は日本だし……まあ「聞いた事ないくらい小さな村」って
感じで収まるだろう

「日本つてところだ」

それを聞いた瞬間ピシリと桜花、千草、命の動きが止まり、一斉にこちらを見る

「ヤ、ヤミ殿。冗談が過ぎますよ？ねえ？」

「そうだな。さすがにそれは……」

「嘘……ですよね……？」

いや、何？俺そんな辺なこと言った？

「皆さん。ニホン……とは、なんなのですか？」

「……ニホンとは、極東に伝わる伝説の樂園の地……その地を踏めるのはそこで生まれた者
だけ……神々ですらその地に踏み入る事が出来ないと言われております」

ふあ!?!日本つてこの世界じゃそんな感じなの!?!

伝説だったの!?!俺の故郷!?!

「あつ……」

「あ」

内心混乱しているとザブンと桜花が倒れた。のぼせたな

ってやばいやばい!!!

「桜花—————!!!」

「なんかうちわになりそうなもん持ってこい!!!」

「は、はい!!!」

急いで担ぎ上げ、桜花を温泉からあげると千草が泣き出し、俺の指示でアスフィと命が巨大な葉を持ってきた

後は全力でそれを煽ぎ、なんとかか一命を取り留めた

「こいつは見とくから、入ってくるか?」

「いいのですか?」

一つ提案するとアスフィが聞いてくる

「おう」

「では、お言葉に甘えて……」

「お、桜花の事をよろしくお願いします……!」

そう言って三人は温泉の方へ向かっていった

さて、これで起きてまた興奮して倒れるとかは無くなつたな

にしても、全員焦りすぎてさっきの話忘れてるな…これからは気をつけないと…

「ヤミ様く水はありませんか〜!」

どこからかりりの声が聞こえてきた。確かりりはベルのところに行つたはずだが……
また倒れたとかじやないよな？

「リリか。おう！確か服を置いたところに……」皆さん、温泉から上がつてくたさいつ
！」リユースさんの声？」

リユースの声が聞こえてきたが、その声は若干焦っているような声だ

一体何が……と疑問に思っている

「きやあああつー！」

「どうしたっ!？」

すぐ近く、岩の向こうからリリの叫び声が聞こえた。すぐにそちらに向かつて駆け寄
ろうとするが次に聞こえた言葉に足を止めた

「ヤ、ヤミ様はこちらに來ないでください!!」

「なんで!?!てか、何があつた!？」

「み、水着が溶けてなくなつてしまいました!!」

……マジか。水着だけ？温泉が赤くなつてな……これのせい

となる、岩の向こうには……その……桃源郷？つてやつが広がつて……

(ヤミよつ!!!行くのじゃああああああああああ!!!)

(うおっ!?!じいちゃん!?)

俺の心の中のじいちゃん悪魔が囁きかけてくる

（桃源郷が目の前にあるのなら、行く以外の道はないじゃろうが!!お主それでも男か!!?股間に付いている男の証は偽物か!!?)

（うるせえよ!!男にも色々あるんだよ!!)

そんな風に心のじいちゃんと喧嘩をしていると…

「ん…?俺は…」

「お?起きたか」

(ちっ)

桜花が起きたため喧嘩は終わり、じいちゃんは舌打ちしながら消えていった

「どうしたんだ?」

「いや、実は「緊急事態です。早く2人も着替えてください」

何が起こったのか話そうとするところリユーがやってきて服を渡してくる

「クラネルさんや神ヘスティアの身が危険かもしれません」

「…急ごう!!!」

リリに案内してもらい奥へ進むとドドドツと何かが走る音が聞こえる。途中からその音を頼りに走り、着くとベルとヘステイア様がチョウチンアンコウみたいな三体のモンスターにやられそうになっていた

それを見た瞬間、走る勢いそのままに一匹にドロップキックをくらわせる

「だっしやあああああああ!!」

「ヤミさん!」^君

一匹が吹っ飛び、その近くにいた二匹にぶつかりまとめて吹っ飛ぶ、後は【無明斬り】で固まっているところをいっぺんに切った

「無事か!? つか、ヘステイア様服を着てくれ!」

「そんな事を言ってもボクの水着は……」

安否を確認しようとしたが、ヘステイア様を見かけた瞬間脳がフル稼働して首を真逆に向けた

すると少し遅れてやってきたリユー達がやってきて、アスファイがマントをヘステイアに貸すという形でなんとかなった

ゴオンツ…ゴオン…

鐘の音が鳴り響く。ベルの手を見てみると【英雄願望】が発動していた

「っ!? まさか……」

それを見たベルが何かに気づくとその場が揺れ出す。ガラガラとダンジョンの天井が崩れ、モンスターが姿を現した

「でっか……」

「温泉の主……」

先程のモンスターの数倍でかいモンスターがそこにいた。モンスターはチョウチンアッコウの触覚みたいなのを振り上げるとこちらに振り下ろしてくる

「危ないっ!？」

リユウのその声で全員が避ける。避けた中、ベルがモンスターに向かって走り出した

「ヤミさん！援護お願い!!」

「あいよっ!」

突き進むベルの邪魔をするように触手を振り回す。それを俺が遠距離の斬撃で切り刻む

邪魔をされる事なく近づくと事に成功したベルは敵の口元に飛び込み

「【ファイア……ボルト】 オオツ!!」

そのまま口の中に魔法を撃ち込んだ

魔法を飲み込んだモンスターは破裂し、魔石ごと吹き飛んだ

第56話 やつと新章に来たよ！やる気出てきたー！！

ベルが着地すると【英雄願望】の反動でよろけるが、踏ん張って倒れる事はなかった
「ナーイス、ベル坊」

「ヤミさんは大丈夫？怪我してるのに…」

「今更すぎるわ」

そんな言葉を交わしているとボフツと俺達にハスティア様が突っ込んできた

「やったね、ベル君！ヤミ君！」

「はい、神様！」

仲良くしてる2人を見て、リユース達はどうしてるんだ？と思いきちらを見ると、女性陣が顔を赤くしながら一箇所を見ていた

リユースは両手で両目を隠すが時折指を開きチラッと、アスフィは若干顔を赤くしながら目を背け、命と千草はお互いの顔を見てこちらを見ないように、リリに至っては顔を赤くしながらも凝視し、鼻血まで出ていた

わかりやすいリリの視線を追うと……ああ…なるほど

「リユースさんもアスフィさんも、助けてくださってありがとうございます」

「「……………」」

まだ気づいていないベルが笑顔で例を言うが全員が黙り込む

「……………? 皆さん、顔が赤いような……………」

「ベル坊、下」

「下? 何の?」

一応教えてやるが言葉が足らなかつたらしい、質問が帰ってきた

「その、なんだ……………お前、色々と丸出しだぞ」

「え?」

『下』、『丸出し』それで気づいたのかベルは自分の下……………下半身を見下ろす。そこには多分着地した時にお湯がかかったのだろう、下半身の衣服が消えかかっており、ちょうどベルが下を向いた瞬間にポロリと……………

「ーっ!? う、うわああああああああああっ!」

「おおー……………っ!」

ベルからは恥ずかしさからの叫び、ヘスティア様からは歓喜の叫びが飛び出た

「み、見ないでください神様……………」

「いいじゃないか、ベル君♪ボク達の中じゃないかあ」

「そんなあ……………ちよ……………っ!」

「ほらヘステイア様、退いてください」

さすがにこのままじゃアレなのでとりあえずヘステイア様をひっぺがし、闇でベルの下半身を隠してやった。ヘステイア様から文句を言われたが、ベルに泣いて感謝された……なんだか締まらない最後になったが全員無事にそこから出ることができた事に感謝しつつ温泉のあつた洞窟から出た

「しかし、この温泉全体がモンスターの罠だったとはな」

「これまでここを見つけた冒険者は皆やつらの餌になっていたのでしよう。道理でマツピングされてはいけません」

「帰ったらギルドに報告か……」

ヴェルフ、アスファイ、俺で話していると命が土下座をしながら謝る。うん、やつぱり綺麗な土下座だ

「本つ当に申し訳ございません……自分が、温泉に目が眩んだばつかりに……!」

「気にする事はないさ。のんびり出来たのは、事実なんだから」
「ええ」

「そうそう……みんな無事で……何より……」

「桜花、しつかり!」

……まあそんなわけで、全員が無事にダンジョンから帰還した

戻った瞬間エイナさんが半泣きで駆け寄ってきて、大丈夫?など色々聞かれたのだが、疲労も溜まっていたため、ある程度答えるとすぐに返してくれた

：リリがダンジョンでの事をエイナさんに報告すると、エイナさんの目がギロリと俺を捉えた

「ヤミさん。リリさんから聞きましたよー?中層に入った途端に勝手に行動したそうじゃあないですかあ〜?」

「あ、あの…エイナさん?俺…ダンジョンから帰ったばかりか「正座しなさい」あ、はい」
言い訳をしようとしたがエイナさんの一言を聞くと正座せざるを得なくなり、そのまま説教を受けた

こら、何ベル達も笑ってんだ。オイツ!?

ベルとヘステイア様は説教が終わるまで待っていてくれたため、暗い道を3人仲良く歩いていった

「いやあ、いつもの光景って感じで微笑ましかったよ」

「いやヘステイア様、こつちとしては地獄でしかねえよ」

「アハハ…あ、二人共!見えてきたよ!」

笑うヘステイア様にツツコミを入れてベルの言葉を聞き、見るとホームである協会が

見えてきた

「ヤミさん！約束通りご馳走だよ！」

「お！そういえば、そうだったねえ…ヤミ君にはとびきり豪華なものを作ってもらおうか。ムツフツフ…」

「ああ、そういえばそうだったな。まあ約束は約束だ」

「やったあつ!!」

ダンジョン帰りにもかかわらずホームに向かって元気に走る二人を見て思わず俺は笑ってしまった

く二日後く

地上に戻って二日が立つ

その間、俺とベルは休んだ。ミアハ様とナーザの治療を受け、その二日で怪我、体力、精神^{マインド}力が全回復し、退院

「ベルさん達が無事に帰ってきて良かったです」

「その、ご心配おかけしました…あと、ありがとうございます」

今は無事帰ってきましたと言う連絡をして回っている。今は『豊穡の女主人』のシルさんの元へ来ている

「ヤミさんは…大丈夫なんですか?精神枯渇マインドゼロになったって聞いています…」

ボーツとしていた俺をシルさんが心配そうに見てくる。それに対して俺は元気にポーズをとる

「おう。仲のいい『ファミリア』の奴に治療してもらったからベルも俺もこの通り!!」
「そ、そうですか…」

「……すいません。謝るんでそんな目で見ないでください。泣きたくなってきました」

ほんと、なんであんなポーズとったんだ俺…自分でも訳がわからなくなってきた

「シル、店を開けるとまたミア母さんに…ああ、クラネルさんにカズヒラさん、いらっしやっただんですか」

「リユーさん」「えーと…久しぶり?」

酒場からシルさん呼びに、リユーさんが出てきた。ベルとリユーさんが律儀に「おはようございます」とお互いに挨拶を交わす

「壮健そうで何よりです。ダンジョンから来てする際、貴方はずっと死人のような顔をしていたので、心配していました」

「ああ、その後一日中ずっと顔抑えて恥ずかしがってたぞ」

そう言うとう温泉で起きた事を思い出したのかまた顔を抑えてうずくまりだした

「ああああ…せつかく忘れてたのにい……」

「ベルさん…覗きの事ですか？その…下半身を…」

「あああああああああつ!!やめてええええつ!!」

覗きと下半身、その二つのキーワードが…って、覗きの時、声的にリユーさんはいなかったような…うまあどつかにいたのだろう

「リユーに話を聞いたんですけど、すごいモンスターと戦ったんですよね?」

「あ、は、はい」

シルさんが不意に尋ねてきたが、ベルは羞恥心から立ち直りすぐに答える

「二人が倒されたと聞きましたが、本当ですか?」

「えっ、いや、あれは「そうだぞ」ヤミさん!」

「わあ、すごい!二人共、一人前の冒険者になってしまったんですね!」

ベルの否定の言葉を遮り、俺が答える

それを聞いたシルさんは興奮で頬を染める

「ヤミさん…なんで…僕だけじゃアレは…」

「ベル坊、あんまり謙遜はするなよ?男はカッコつける時くらいビシツとカッコつけかねえと

自分だけじゃ…がなんだ?勝ったもんは『勝った』でいいんだよ何一つ間違っていないんだから」

「そう…なのかな?」

「そうだそう。それでいいんだよ。ハッハッハ」

この後、二人から「またお祝いしませんか?」と聞かれたが、二人揃ってそれを断つた。リリとヴェルフとの先約がある

それに、俺は前のお祝いはシルさんに騙されたため。また騙されないかがすごい心配だし、怖い

そういう訳で俺達は『豊穰の女主人』を後にし、約束の酒場へ歩を進めた

第57話 祝いの酒に飲みすぎも何もない

夜を迎えたオラリオは騒がしさを増していた

酒場や広場から流れてくる陽気な歌声と弾奏。街のあちこちで魔石街灯が発光し、迷宮帰りの冒険者を加えた通りは人込みで溢れかえっている

そんなオラリオの中でも一層騒々しいのは南のメインストリート。目抜き通りに軒を連ねる店は全て高く、大きく、外館は豪華で派手派手しい。貴族が利用するような高級酒場や賭博場、大劇場など、都市の他の場所ではお目にかかれない施設まで数多く建っている

そんな大通りから折れた、路地裏の一角

「……そんじやまあ、ヴェルフの「ランクアップ」を祝して……」

鳥や獅子など、様々な動物を象った看板が立ち並ぶ酒場の一つで、ヤミ、ベル、リリ、ヴェルフはジョッキとグラスを掲げて重ね合った

「「乾杯……」」

ガチンと音がすると同時にエールの泡が弾け、ジョッキからお酒が溢れ落ちる

「ファミリア」のエンブレムとも似た、真つ赤な蜂の看板を飾る酒場『ひばち亭焰蜂亭』。繁華街

の裏の道に佇んでいるこの店は、ヴェルフ行きつけの酒場らしく、一部の鍛冶師には人氣があるようだ

路地裏の店だけあり、『豊稔の女主人』よりは少々狭苦しいだろうが、移動に苦労するほどの沢山の丸テーブルや、小汚い店の内装、そしてドワーフを始めとした男達が笑い合う大声でさえも妙に心を浮き立たせる

小人族の給仕がちよろちよろ動き回る中、ヤミとベルとリリは対面のヴェルフに笑いかける

「[ランクアップ] おめでどう、ヴェルフ！」

「これで晴れて上級鍛冶師、ですね」

「ああ……ありがとうな」

「美味しいなこの酒」

鍛冶師と上級鍛冶師とは中々に違う。一番違うのは主神様と幹部連中に認められた物だけだが「ファミリア」の名を使えると言うこと、これは日本で言うブランド物だ。しかも、ギルドで「ランクアップ」が発表されるため、ヴェルフの鍛冶師としての名は一気に広がるのだ

「でもこれで……パーティ解消、だよな？」

ベルが寂しげな声を出す

ヴェルフが俺達のパーティに入ったのは『鍛冶』のアビリティを手に入れるため、上級鍛冶師になった時点でその約束は終わってしまったている

「そんな捨てられた兎みたいな顔するな」

ジョッキを手で軽く回しながら、ヴェルフは言葉が続ける

「お前達は恩人だ。用が済んで、じゃあサヨナラ、なんて言わないぞ」

「えっ……」「おお、マジか」

「マジだ。呼びかけてくれればいつでも飛んで行って、これからもダンジョンにもぐつてやる」

だから心配するな、とヴェルフは快活に笑う

それについて俺も笑い出し、目を丸くしていたベルも笑い、目を細めていたりりもまた笑う

「それにしても、ヴェルフがパーティに入って……どれくらいだったか？」

「二週間ですよ。でも、確かに『ランクアップ』するのもあつという間でしたね。もうちよつと時間がかかると思っていました」

「お前達と組むまで、それなりに修羅場はくぐってきたつもりだからな確かにここまでくるとは俺も思っていなかったが……『中層』で5回は死にかけたし、な」

「あはは……」

話している間に料理はどんどん運ばれてくる。ハムステーキ、鯛の蒸し焼き……それらをパクパク食べて酒を飲む

うん、やっぱ美味しい『豊穡の女主人』に勝るとも劣らない……代金はあちらが上だし、俺もここを通うか？

「ベルは『ランクアップ』しなかったのか？」

「うん、僕はまだ」

「Lv1と2じゃ強さが違う。その代わりに必要な【経験値】^{エクセリア}も違うからな」

「最後の戦闘に限っては、ほぼリユー様の総取りでしょうからね」

最後の戦闘……ゴライアスとの決戦

直接ゴライアスと戦闘した者、召喚されたモンスターの大量を受け持ってくれた人達の数の合計は五百人に登る

集団戦の法則により、手に入れる【経験値】は分配される

その中でもゴライアスを食い止めるため命懸けで近接戦闘を仕掛け続けていたアスフィさんとリユーさん……とりわけリユーさんの活躍は著しく評価されたはずだ

俺は途中気絶したり、吹っ飛ばされたり……まあでも

「俺はr……結局、なんだったんだ、あのゴライアスは？」

俺が口を開いた瞬間にヴェルフが言及する。例の事件を振り返るためにベル達は自

然と顔を寄せ合い始めた

……大事なことから話すのをやめにして俺もそれに加わる

「異常事態イレギュラーとしか言いようがありませんが……間違いなく前代未聞でしょう、安全階層セーフティポイントに階層主が生まれ落ちるなんて」

「能力も普通の階層主より上だったんだろう？ 上級冒険者が虫みたいに吹っ飛んでたぞ。あんな事がこれからも続くようなら、命がいくつあつても足りない」

「そう、だよね……」

「大丈夫。あんな異常事態なんてそうそうないって……多分」

うーん。中層で死にかけてた事とゴライアスの件があるから完全にはないと否定しきれないのが怖いところだ

「ま、これ以上話してもしょうがないか……世間の方は今どうなっているんだ？」

空気を入れ替えるようにヴェルフが言葉を投げかける

事件の後始末や現在の状況について、情報交換を始めた

「ギルドが真つ先に箝口令を敷きましたから、都市や冒険者の間で目立った混乱はないみたいですね。詳細を知っているのは、当事者であるりり達だけでしょう」

「絶対口外するな、って徹底されたし……」

『ペナルティ』
「罰則も厭わない」、おお怖え怖え」

「18階層の『リヴィラの街』は既に機能を取り戻しているそうです。ダンジョンもあれから変わった動きはなく、平常通りだと」

盗賊業をやっていたこともあり情報には敏感なのか、リリがほとんどの現状報告をし
ていく

「そういえば、お二人は大丈夫なのですか？ギルドに言いがかりをつけられて、罰則を課せられたと聞きましたか？」

「あー、うん……」

「つーかその情報まで持つてゐるって凄いな

まあ簡単に罰則の内容を言うと、罰金だ」

本当に簡単にそう言うとりりが質問を一つ

「罰金の額はおいくらだったんですか？」

「ファミリア」の資産の半分だ。ヘルメス様達には同情しかないな」

数十万ほどで済んだ俺達の「ヘスティア・ファミリア」と違い、「ヘルメス・ファミリア」には蓄えがあったらしく、俺達とは桁が違いすぎる金額を請求された。真っ白になつて燃え尽きていたヘルメス様の顔が全然頭から離れない

「リリ……大丈夫？」

ベルの声を聞きハッと戻つてくるとリリを見る

…様子がおかしい？なんかこう…心ここに在らずみたいな…

指摘されたリリは「すいません。ぼーっとしていました」とすぐに明るく元気に笑う
「ベル様も、ヤミ様も、先日の事件で随分株が上がったことだと思えます。少なくともあの階層主攻略に参加した冒険者達には、認めてもらったのではないのでしょうか？」

「う、うん……」

話題をそらされた。それはベルもヴェルフも気づいており、リリの顔を凝視している
何かがあつたのだろうか…今探しても何も出ないだろう

そう思つて酒をまた飲むと大声が上がる

「……何だ何だ、どこぞの『兎』が一丁前に有名になつたなんて聞こえてくるぞー！」

声の主は真横に陣取つていた冒険者の方から、六人がけのテーブルに座っているうちの小人族バルウムが杯を片手に叫んでいる

「新人は怖い者なしでいいご身分だなあ！嘘もインチキもやりたい放題だ、オイラは恥ルーキずかしくて真似できねえよ！」

騒々しかった酒場はその幼い少年のような声に響き渡る

第58話喧嘩

金の弓矢に燃える球体…太陽を刻んだエンブレム

小人族バルッムの冒険者も含めた六人の冒険者の肩には、服の上から「ファミリア」の徽章が貼り付けられている。他派閥の構成員達だ

小人族の男性は、ぐいっと酒をあおり、俺達を見てせせら笑う

「ああ、でも逃げ足だけは本物らしいな。昇格ランクアップできたのも、ちびりながらミノタウロスから逃げて、強そうな奴に助けてもらったからだろう？流石、弱い『兎』だ、立派な才能だぜ！」

デカイ目の特徴の小人族の冒険者はわざと聞こえるように嘲りの言葉を連ねる。彼の仲間に目をやれば誰も彼の言葉を止めず、むしろニヤニヤとこちらを見ている

シバいても良いのだが、喧嘩と言う物は『先に手を出した方』が悪い。ならば、手は出さない

ベル達も手を出さずしていると小人族は続ける

「オイラ、知ってるぜ！『兎』は他派閥よその連中とつるんでるんだ！売れない下っ端の鍛治師スミスにガキのサポーター、寄せ集めの凸凹パーティーだ！」

ベルに反応がないとわかると矛先はヴェルフとリリに向けられる。調子に乗っていいく男の言葉に、くつくつくと仲間が喉を鳴らす

仲間を馬鹿にした言葉にベルがピクリと反応する

「よせ、構うな。気が済むまで言わせてやれ」

「ベル様、無視してください」

ベルを二人が止める。するとベルは気持ちを落ち着かせたのかフーツと息を吐き出す

無視を貫く俺達が癪に障ったのか、小人族の男から大きな舌打ちの音が響く

次には、彼は声を荒げた

「威厳も尊厳もない女神が率いる「ファミア」なんてたかが知れているだろうな！きつと主神が落ちこぼれだから、眷属も腰抜けなんだ!!」

それを聞いた瞬間、ベルは椅子を勢いよく飛ばして立ち上がる

「取り消「アーツハツハツハツ!!腹が痛え……!!」…ヤミさん?」

ベルの叫び声を遮り俺が笑う。俺のいきなりの大笑いにベルが困惑の表情を向けてくる

そんなベルに大声で話しかける

「おいベル坊、よかったじゃねえか！俺達は有名じゃねーかやつぱ!!」

「えっ?」

笑いながら先ほどの言葉に喜ぶ俺にベルは間抜けな声を上げた

「悪評も好評も広がれば有名の内だろ? 何を怒る必要がある?」

「で、でもこの人達は神様を…」

「ハスティア様がポンコツだなんていつもの事だろう? 威厳も尊厳もないのと馬鹿や無能と言った言葉は違うぜ?」

小人族の冒険者達を見れば「何言ってるんだこいつ?」みたいな顔でこちらを見ていた俺は続ける

『『子は親に似る』』って言うが…まったくその通りだ! 俺もお前もあの人に似てる! ポンコツだ!

…となるとあちらさんの主神様もたかが知れる。自分より下のやつを見下す、最低最悪の神って事だな! ハツハツハ!!」

笑いながら相手を馬鹿にする。すると小人族の男の仲間の一人がピクリと反応した「なあお前等! 自分より下のやつを見下すやつはお前等にとつて、どう言うやつだ!」

先に手を出してきたのは向こうだ。ならこちらも拳ではなく手で喧嘩するしかないそれを察したのか俺の言葉を聞いたヴェルフとリリの動きは早かった

「最っ低ですね!」

「ああ、最低だ。そこら辺に落ちている犬の糞にも劣る」

ヴェルフとリリの言葉を聞いて小人族の男を含めた全員がピクリと反応する

最後にベルが口を開いた

「……本当に良かったです。そんな神様の眷属にならなくて……」

「確かに俺もそう思う……あちらさんはなんで平気なんだろうなあ？」

ヒュッ

最初に反応した男が動いた。男はベルの頭目掛けてハイキックを喰らわせようとす
る。それにベルは反応できていなかったが俺はギリギリ反応出来ていたため間に入り、
腕でそれを防御する

「……取り消せ」

「ああ？」

「今すぐあのお方を……アポロン様を貶した事を取り消せ……」

その男は俺に対し怒りの視線を向ける。それに対して俺は「ふんっ」と鼻で笑うと口
を開く

「先に俺達の主神を貶したのはアンタらだ。やり返されて嫌なら最初からするなよ？」

それとも何か？他人の主神は貶していいが、自分はダメってか？なんともわがままな
やつだなあおい」

「貴様……!」

反省の色がこれっぽっちもない俺を見てさらに男は苛立つ
すると周りの他の冒険者達が眩きだした

『あいつ……ヒュアキントスだ』

『ポエブス・アポロ【太陽の光寵童】……』

『Lv3の第二級冒険者かよ』

『ポエブ……?』

「よそ見してていいのか?」

周りの眩き声を聞いて『誰?』と考えているとまたヒユツと攻撃してきた。それに反応が遅れた俺はそのまま壁の方まで吹っ飛ばされる

「ヤミさん!」

「どうした? まだ、撫でただけだぞ?」

吹っ飛ばされた俺を見てベルは叫び、ヒュアキントスはニヤリと笑う

それを見た小人族の男は笑う

「ハツハツハ!! なんだアイツ!?! 口だけの雑魚「んなわけないでしょうよつと」ギャンツ
!?!」

「あつすまん」

即座に立ち上がり、ヒュアキントスに向かってドロップキックを喰らわせようとしたが、うまく反応し躲かれちようど笑っていた男に直撃し、男は気絶する

「なるほど、俺とは年季が違う」

「…我々の仲間を傷つけた罪は重いぞ？」

「お前が避けなけりやあんなことにはならなかつたよ」

指をコキコキと鳴らす俺と未だ怒りの形相のヒュアキントスが互いを睨み合い、見ていた周りがゴクリと喉を鳴らす。その時、木を蹴り砕く音が高々と鳴り響いた

『！』

酒場にいた人達が一齐に振り返る

視線の先にいたのは……いつぞやの狼ウエアウルフ人、ベートだった

「揃いも揃って、雑魚が騒いでんじゃねえよ」

表情……つーか全体的に見て明らかに機嫌が悪い

そんな機嫌が悪い様子で彼は続ける

「てめえらのせいで不味い酒が糞不味くなるだろうが。うるせえし目障りだ、消えやがれ」

鋭い目付きと剣呑な威圧感に、周囲の人間は顔色を悪くする

「ふん………がさつな。やはり【ロキ・ファミリア】は粗雑と見える。飼い犬の首に鎖もつ

けられないとは」

「おいコリアー！酒を不味くしたのは謝るけどなあ！その酒は美味いだろうが!!もう一度味わってみやがれ!!」

周りが静かな中ヒュアキントスは鼻を鳴らし、俺は先程の言葉に対して反論する。この店の酒は美味しい、間違いない

「……ああ、蹴り殺すぞ、変態野郎?」

三人…俺は中に入れてもらってないな、二人の視線が交差する

張り詰める場の雰囲気。しばらく見据え合っていた二人の内、先に視線を切ったのはヒュアキントスの方だった

「興が削がれた」

そう言っ身を翻す

仲間に「行くぞ」と声をかけ、一人酒場の出入り口に向かった。仲間の冒険者達は気を失っている小人族の男を抱え、店の外へ消えていく

最後の男がいなくなった後、酒場には静寂が残された

「お前等」

そんな中ベートは止まっているベルと俺に順番に人差し指を向け言う

「調子に乗ってんじゃねーぞ」

それだけを言うとすぐに杯に残っていた酒をしつかり飲み干してから酒場の外へ向かう

慌てる仲間の団員達は代金をカウンターに投げ入れ、彼の背を追いかけた

「大丈夫ですかつ、ヤミ様？」

「おー、平気平気。あの程度じゃ俺はビクともせんよ」

「何がしたかったんだアイツは……」

「……」

無言のベルに目を向けるとベートの姿を目で追っていたらしいが、そこに彼の姿はない

「あ、すいません。片付け手伝います」

「いえいえ、大丈夫ですよ。先程『酒が美味しい』と言っていたいただきありがとうございます。また来てください♪」

打ち壊されたテーブルと椅子が散乱する店内で、給仕達が片付けを始めていたため、とりあえず俺はその片付けを手伝おうとしたが機嫌が良い感じで断られた

またここに来るか

第59話留守番

「ふうん、なるほどね、喧嘩か！しかもヤミ君が！」

「すいませ「まあ納得だね」なんで!？」

へステイア様の言葉を聞き謝ろうとするが勝手に納得される

とりあえず俺達は「へステイア・ファミリア」のホーム、教会の隠し部屋で酒場であった件を報告していた

「ベル君はあと少してヤミ君と同じような事をしそうになったんだらう？ボクは嬉しいような悲しいような……」

「きつとヤミ様とヴェルフ様の影響です！ヤミ様の時はまだ抑えられていましたがヴェルフ様が追加されてから、どんどんベル様は冒険者^ら気質^{ぽう}になっていきます！」

「おいおいリリスケ、それほとんど俺のせいって事じゃねーか」

言い争うリリとヴェルフとそれを止めようとするベルを見守っているとへステイア様が俺に話しかけてきた

「いやあ、ヤミ君。ベル君を止めてくれてありがとうね」

「まあ俺は見ての通り、悪人面だからな。悪役が似合ってるよ」

「でも、やつぱり喧嘩は良くないぜ？怪我はしていいとはいえ…」

「うぐ……それはさつき謝ったでしょうが。それに、ヘステイア様のことを馬鹿にしたから…」

「それでもだ。万が一君が、君達が、ボコボコになって帰ってきたら泣きたくなるからね」

そう言うへとヘステイア様は笑顔で言う

「今度は馬鹿に仕返すんじゃないかと、笑い飛ばしてやってくれよ？」

「…考えておく」

「そこはちゃんと肯定して欲しかったなあ」

俺の返す言葉を聞きヘステイア様はハハハツと笑う。すると騒いでいたベル、リリ、ヴェルフが落ち着いたため、話し出す

「しかし、相手方の反応は気になります。逆恨みをして、ベル様達にちよつかいをかけて来なければいいのですが」

「向こうから先に手を出したんだ。向こうが悪いだろう？」

悪びれない様子で返答すると

「それはそうかもしれないませんが、被害があるのは相手方だけですし、プライドが高い冒険者、とりわけ面子を気にする「ファミリア」であるなら、面倒な事になりかねません」

「うーん、確かになあ」

リリの意見にヘステイア様も顔を上げて同調する

「後々面倒くさい事にならないように、主神同士で話をつけておくか」

「…すいませんヘステイア様」

また謝ると「平気だよ」と笑ってくれる

それから訪ねてきた

「相手の【ファミア】はどこかわかるかい？」

「確か…弓矢に丸のエンブレムだったな」

うろ覚えの記憶を頼りにエンブレムの特徴を口にするとうるぐが「違うよ」と口を開く

「確か、太陽のエンブレムでした」

ヤミ・カズヒラ

L v 2 ↓ 3

力 : S 9 1 2 ↓ S S 1 2 0 9 ↓ I O

耐久 : C 6 7 1 ↓ S S 1 1 9 3 ↓ I O ↓ I 1

器用 : B 7 3 9 ↓ S S 1 0 0 0 ↓ I O

敏捷：C521↓S999↓I0

魔力：B609↓SS1148↓I0

純粹I↓H 付与I

《魔法》

【闇魔法】
ダークマジック

想像魔法

使用者のイメージした魔法を発現させる

イメージがハッキリしていればいるほど魔法の威力が増す

無効化する

同時展開可能（2つ）

【強奪】
スナッチ

速攻魔法

15M内にいる生き物の中から複数選び、選んだ者から身体能力を奪い自分のものにできる

奪った身体能力が多いほど体力の消耗が激しい

一定の時間が経つと全てが元に戻る

魔力吸収も可

《スキル》

ブルス・ウルトラ
【さらに向こうへ】

早熟する

限界を超える度にステイタスに補正

パルチヤス
【購入】

ニホンの武器以外の物をお金を払う事で買うことができる。ゴミになった物は消える

本などは空間に無限収納可能

翌日、バイト帰りのヘステイア様に更新してもらった俺の「ステイタス」。酒場で「ランスアツプ」した事を公開しようとしたのだが、リリに遮られた

ベルは知っていたはずなのだが、多分あの真剣な空気に呑まれたな

「これは…多分【さらに向こうへ】が発動したかな？上がり方が凄まじい事になってるよ」

「補正ってだけでこんな上がるもんなのか？…てか、魔法が成長してるってどういう事？」

俺の疑問にヘステイア様は「さあ？」と答える。なんでも、魔法が強くなる事はよく聞くが、魔法自体が成長すると言うのは聞いたことがないそうだ

そろそろベルがエイナさんとの勉強から帰ってくるか?……【ランクアップ】の報告をしに行けばよかった

く夜く

「はふつはふつ……『神の宴』の招待状か……」

「ヘステイア様、おでん食うか手紙読むかどっちかにしてください」

手紙を片手に熱々の大根を口にしながら読むヘステイア様に注意する。ベルが無言になっていたためそちらを見ると鼻を抑えていた

「……（涙目）」

「からし付けすぎたな。ベル坊、ほら水」

水の入ったコップを差し出すとベルは一気にそれを飲み干し、口を開く

「どうしますか?」

「揉め事があつたばっかりだし、無視はできないなあ……」

困った顔をするヘステイア様に対して土下座したくなつたが、今の今まで土下座したことが無い。そのせいか変なプライドが出来たため、やりづらい

「すいません」

故に、頭だけを下げた。反省はしているがプライドが邪魔をするのが悪い。
うん

「ああ、大丈夫だよ、変な責任は感じないでくれ。…というか、実はボクもアポロンが嫌いなんだ」

「え、そうなんですか？」

「ああ……天界で色々あつてね」

もによもよと言葉を濁すヘステイア様に俺とベルは同時に首を傾げる

「まあ、それは置いておいて……今回の宴は普通の宴と違って、趣向が凝らされてる」

そんな事を言つて、神様は招待状を見ながら一笑した

中身を見ていない俺達は面白そうに笑うヘステイア様を不思議そうに見る

「参加しなきゃいけないのは決まっているようなものなんだ。ミアハ達にも届くだろうし、せっかくだ、一緒に参加して出席してみよう」

「一緒？」

く翌日の夕方く

「どうだいヤミ君？似合ってるかい？」

「ヤ、ヤミさんどうかなの？」

くると回りながら綺麗なドレスの全体を見せるヘステイア様と初めて着る燕尾服をぎこちない感じで見せるベル

「おう、二人とも、似合ってるぞ」

笑顔で感想を述べる。するとヘステイア様は心配した様子で問いかけてくる

「それにしても、大丈夫かい？こんな立派な服を《スキル》で買ってもらっても……財布の中身は大丈夫かい？」

「まあ、金はかなりしたが払えるだけは持ってたから大丈夫だ。ダンジョンで稼げば財布の中は普通に元どおりだよ（だが数日の間は食費は減る）」

そう言うヘステイア様は「なんだか嫌な予感がしたんだけど……」と言いつつ納得してくれた

「ヤミさんは本当に行かなくてよかったの？」

『眷属一名』を引き連れて……だからな。一人留守番って事になる。ベルは一人じゃ寂しくて死んじゃうだろう？」

「だから僕は兎じゃないよ!？」

ベルのツツコミが入る。うん、この様子ならちゃんと『神の宴』で楽しんでくれるだろうな

「…と、ベル君。そろそろ時間だ早く行こうぜ！」

「あ、待ってくださいい神様！…行つてきますす！」

「おう、行つてらっしゃい」

そう言つて馬車に乗つていくベルとヘステイア様を見送つてから教会の中へ戻つていく

「さて、これからどうしようか…」

…あれ読むか？ R18のやつ。ダメだな、バレたらヘステイア様に殺される上にベルからゴミ見る目で見られる

ダンジョンは時間的に…」

一通りどうするかを考える

「…よし、とりあえず掃除して…寝るか」

最終的にそういう答えに行き着いた

第60話ホーム壊滅

翌日

ヘステイア様は帰ってきてから物凄い機嫌が悪い。どうしたのか聞くと、どうやらあの酒場の一件はアポロン様（でいいの？）に完全に仕組まれた物らしい

曰く『主神を馬鹿にされた』、『文句を言う』と団員のルアンがやられた』など完全な被害者面で話すが、そんな被害妄想をこちら側が認めるわけがない

ならば仕方ないとアポロン様は「アポロン・ファミリア」から「ヘステイア・ファミリア」に戦争遊戯ウォーゲームを挑んだ

「アポロン・ファミリア」が勝てば「ヘステイア・ファミリア」のベル・クラネル、及びヤミ・カズヒラをもらうという。なんでベルまで？

戦争遊戯は「ファミリア」同士の大規模戦。団員がたった2名しかいないこちらが受ける義理はない。もちろん断ったのだが

「流石に昨日今日で何かしてくるって事は無いだろうけど、アポロン達はこじつけてちよつかいを出してくるかもしれない」

そういうわけでヘステイア様はベルにステイタスの更新を念のためやっていた

ベル・クラネル

L v 2

力：C 6 3 5

耐久：D 5 9 0

器用：C 6 2 7

敏捷：B 7 4 1

魔力：D 5 2 9

幸運：I

《魔法》《スキル》そのまま

「……こんな面倒な事をしでかして、すいません」

プライドをへし折り土下座する勢いで頭を下げようとしたが、ヘステイア様がそれを止める

「いいんだよ。悪いのはアポロンさ、寧ろヤミ君がやり返してくれていた事に感謝してしまつたくらいさ」

「ありがとうございます」

ヘステイア様の言葉に心から感謝する

ヘステイア様はニコツと笑いながら続けて俺達に注意を促した

「二人共、何があつたらすぐに逃げるんだぞ。移動する時も一人にならないように、人が大勢いるところに行くんだ」

「わかりました」

「ダンジョンへもぐる時も、しばらく命君達と行動を共にした方がいいかもしれない。タケも事情をわかつてくれているはずだから、パーティの申請も受け入れてくれるだろう」

ヘステイア様の言葉に頷くと支度をすぐに済ませ、立ち上がる

「二人共、出るのが一緒なんだし、どうせだからバベルまで一緒に行こうぜ？」

「はい、いいですよ」

「そういえば、ヘステイア様も一緒に出るのって初めてな気がするぞ」

ベルと快諾するとヘステイア様も笑う。俺、ベル、ヘステイア様の順で階段を上がり、狭い地下室を出ると違和感があつた

(これは……魔力?)

魔導師つて訳ではないが、魔法なら馬鹿みたいに使い込んでいるため、その違和感に気づく事ができた

「ヤミさん?」

「お、おお。すまんすまん」

足を止めている俺に後ろのベル達がつつかえていたため足を再び動かす。ベルも地下から出た瞬間にこの違和感に気づいたようで表情を変える

「……ヤミさん。これ」

「ああ、多分そうだな」

「へ？ど、どうしたんだい？二人共……」

俺とベルの謎の話し合いに疑問を持つヘステイア様をよそに、扉のない教会玄関口をくぐる

「……奥へ逃げろッ!!」

朝日を浴びた瞬間。周囲の建物の屋根や屋上にたたずむ、無数の人影が飛び込む

見れば全員が玄関を包囲するように配置されており、弓、杖をそれぞれ装備している敵を確認した瞬間、ベルはヘステイア様を抱えて奥へ飛び込み。俺は念のため敵の持つエンブレムを見てから続いて飛び込んだ

弓矢と太陽のエンブレム、「アポロン・ファミリア」だった

飛び込むと同時に、一人のエルフの手が振り下ろされ……大爆発が起こった

爆発音の後、教会が崩壊した。爆薬も塗られていたのだろう矢も爆発していた。崩れる教会の裏の木製の扉を開けて俺達はある

「……ホームなくなっちゃった「撃てッ!!」クソがッ!!」

出た先にも弓矢と杖を持った冒険者達が待ち構えていた。一斉に放たれるそれをベルとヘステイア様を背に抜いた刀と鞘で弾き、切る

「走れっ!!」

俺の言葉を合図にベルもヘステイア様も走り出す。そのまま幅3Mほどの裏路地を進む

「ヤミ君、襲ってきたあの子達は……!?!」

「アポロン・ファミリア」だっ!ヘステイア様の予想は外れたな!!おまけに家まで潰されたぞ!!ハッハッハ、笑えねえ!」

「えっ!?!」

笑いながらそう言う俺にベルが驚愕の表情を露わにしたベルが教会を見る。帰る家がなくなくなった事が衝撃を与えているようだ

「曲がれっ!!」

安心する間も無く、前を見れば獲物を手に突っ込んでくる冒険者。いちいち相手をしていられないためすぐさま右に曲がる

『行つたぞー!』『そつちだ!』と冒険者の声が響いてくる。無数の気配が俺達を追いかけてくる

「影に隠れるやつはできない!」

「無理だつ!こんなかに囲まれてるんじや隠れる瞬間を見られる!!」

ベルの提案に俺は否定する

土地勘があるこちらに有利があるにもかかわらず、相手の目も振り切れない。数という物はここまで厄介なのかと実感するが、それも一瞬

大きな民家の壁が目の前にある

「飛ぶぞつ!!ベル坊!!」

「うん!神様、掴まってください!!」

「えっ?」

壁を前に減速するどころか加速する。見る見る内に壁は近づいてきたところで一気に踏み切る

「わあああああああああああああああああつ!」

8Mもある民家を身体能力で飛び越える

ヘスティア様が絶叫を上げる中、放物線を描いた跳躍はギリギリ壁を飛び越え、屋根の上に着地する

「諦めた方がいいよ」

「…誰だアンタ？」

「ウチはダフネだよ」

着地した先にいたのは数名の団員を率いた女性だった

「ヤミさん。あの人は僕に手紙を渡した時の…」

「ああ、アイツがか」

ベルの話を聞き「なるほど」と口にしてしているとダフネが哀れむような目でこちらを見
てくる

「アポロン様は気に入った子供を地の果てまで追いかける。手に入れるまでね

ウチやカサンドラも、見初められてずっと追われ続けたんだから。都市から都市、国
から国……観念するまで、ずっとね。逃げて遅いか早いかの違いだけだって」

忠告と同時に似たような境遇だったと告白してくる。同情の眼差しで

「投降しない？仲間になっちゃう子にできれば手荒なことはしたくないんだけど」

「……できません」

「だとよ。俺も無理だバーカ、わかったらさっさと帰ってくれないか？こっちは忙しい
んだよ」

ダフネの言葉に拒否すると彼女は溜息をついた

「そうなるよね、じゃあーかかれ！」

「かかってこ……い？」

ダフネが抜剣し、切っ先をこちらに向けてくる。俺も臨戦態勢に入るのだが相手は弓を取り、矢を射ると一斉に撃ち放ってくる

「ベル坊!!ギルドへ逃げろツ!!」

「ヤミさんは!!」

「あとで行く!!」

先程と同じように刀と鞘で防ぐ。ベルに指示を出すとベルは戸惑いながらもヘスティア様を抱えて走り出した

「相手は一人とはいえ、【ロキ・ファミリア】のベート・ローガを一撃で倒したと聞く!!絶対近づけさせな!!」

「その話はあるまり広がってないはずなんだけどなあ!!」

前からくる矢の雨を捌きながら反撃の隙を伺う。するとほんの一瞬、敵全体が矢を射る時間ができた

それを見逃さず【強奪】を

ヒュッ

使う前にダフネの短刃ダガーが飛んできた。間一髪で避けたが魔法はキャンセルされる

「反撃なんてさせるわけがないじゃん？」

「……ああ、忘れてた」

ある事を思い出し、ニヤリと笑うダフネにそんな事を呟く。その瞬間に俺がとつた行動は…

「「なっ!?!」」

後ろへ飛んだ。ここは屋根の上、後ろに飛べば地面がない。即ち落下する

落下する一瞬で【領域】を発動させ、周りを確認する。誰もいない、ベルの方へ向かったのだろう

「よし」

気合いを入れて、魔法を発動させた

第61話地獄の特訓

ヤミ・カズヒラが落ちた。それを見た瞬間ダフネは急いで落ちた先を見る。だが、そこにはいたのは

「やつほー元氣？」

「な!？」

壁に綺麗な垂直で立ち、ダフネを笑顔で迎え入れたヤミだった

驚き、体を硬直させるダフネ。その隙を見逃さず顎に一発拳を叩き込む。そのままの勢いで屋根の上に復帰して敵を見る

「ダフネちゃん!？」

「は、早く撃「たせねーよ」

ちよつとの助走をつけて弓を持つ一人の顔に蹴りを叩き込む

Lv3のヒュアキントスが最高戦力だったりしたら低くてLv2、高くてLv3が相手かと考えていたのだが、低い方だったらしい

「1、2…残り6人」

近づかれた事で弓を捨てて5人が抜剣して俺に襲いかかるために足に力を入れる

「強奪」

踏み込む寸前で身体能力を奪えばガクツと崩れる者が3人、飛んだはいいが距離が足りない者が2人に別れた

飛んでくる二人の頭を右手、左手で掴み一気に屋根に叩きつける。Lv3の身体能力がさらに上がってそれを受けた二人は気絶する

気絶を確認して顔を上げるともう一度力を入れて踏み込んできた3人が剣を振りかぶって俺を襲う

「障壁」

だが、18階層で使った三枚の壁がそれを阻む。そして全力で振り下ろした剣が硬い壁に阻まれたせいでスパーボールのように跳ね返り、大きすぎる隙を作り出した

「もがりぶえ虎落笛・峰打ちバージョン」

居合の構えをし、一瞬で敵の背後に回る。その瞬間に3人も気絶し、残るは目の前の女ただ一人になった

「……」

「まだ、やるか?」

震えて何もしない女にそう聞くとフルフルと首を横に振る。「そうか」と言つて女を置いてそのままベルの逃げた方向へと足を動かした

「カサンドラ、ウチを起こしてくれない?」

「ダフネちゃん!?生きてたの!?!」

「意識だけはあった、気絶はしていない」

「ていうか、殺すな」と付け加えながらダフネは起こされる。するとカサンドラは回復魔法をかけながら口を開いた

「ダフネちゃん。やつぱりあの子達を刺激……追い詰めちゃいけない」

「また夢?……今度はどんなの?」

いつもはカサンドラの妄言など聞く気にもならないが、ヤミにやられたせいか珍しく聞き入れる

「うんと……傷ついた兎さんが、月を飛び越えて、太陽を飲み込んで、黒い化け物が太陽を守る星々を砕く夢……」

それを聞いてダフネは真面目に聞いた自分が馬鹿らしくなり鼻で笑う

「……夢はそれくらい荒唐無稽じゃないとね」

「ダフネちゃ~~~~んっ!」

ギルドに到着、ベル達はいないかキヨロキヨロと探すとエイナさんが慌てた様子で駆け寄ってきた

「エイナさん！ベル坊は来てないか!？」

「え、あ、き、来てませんが。ヤミさんは大丈夫ですか!?ベル君も追われているって街中で騒ぎになっていますよ!？」

俺とエイナさんで騒ぎになっているとまた別の場所でも方向を受けて騒ぎになった

『「ヘステイア・ファミリア」が「アポロン・ファミリア」の戦争遊戯を受けたあ!？」

「えっ?」

俺とエイナさんは揃いも揃って間抜けな声を出した

「…というわけ…です」

「なるほど」

ベルを見つつけどういことかを聞くと、要するにあのしつこい「アポロン・ファミリア」から逃げる方法は戦争遊戯にて打ち倒すこと

期限は一週間、それまでに「アポロン・ファミリア」以上に強くなってくれとの事

「んで、強くなるために行き着いたのがここ…と」

「う、うん」

そうやって近くにある巨大な建物を見る。『黄昏の館』、『ロキ・ファミリア』のホーム。門を見れば門番らしき人達がこちらを警戒して見ている

「どうやって話を聞いてもらおうつもりだ？」

「…あんばんで」

「あんばんにそんな需要ねえよ。一応出しといたけども」

ベルに「ほれ」とあんばんを見せてそう言う

「…入れてもらえるように頼み込んでくる」

そうやってテクテクと歩いていき、何かを喋る。邸宅から二十人ほどの集団が出てきて門番が何かを伝える

すると俺とベルを取り囲むように半円を作り、すぐに罵り始めた

『悪魔め…』

『出て行け悪霊!!』

『人の皮を被った化け物め!!』

『おいゴラア!!全つ部俺じゃねえか!!』

「ヤミさん抑えて!!」

「何の騒ぎ?」

ウガアアアアア!!と吠えて騒いでいると声を通る

団員が静まり返り、俺の口を押さえたベルも動きを止める

館から出てきたのはアマゾネスの冒険者、ティオネ・ヒリュテだった

彼女をみた団員達が道を開け、俺達の前にティオネが現れる

隣にいる者から事情を耳打ちされると彼女はスツと瞳を細めた

「ここから消えなさい。そんなふざけた真似、許すわけにはいかないわ」

そう言う二人揃って二の腕を掴まれ問答無用で正門から引き剥がされた

「まっ、待つてくください、ティオネさん!?!お願いします、話を……!」

ベルの言葉も耳に入った様子はなく、強引に門から遠ざけられていく。すると自然な動きで、ティオネの顔が近づく

「ここから右にいった、二つ先の路地裏へ向かいなさい」

「!」「えっちょ……」

それだけ言う俺がまず投げ捨てられ、その上にベルを投げ捨ててきた。何で俺だけ……

やがてその場を離れ、周囲の団員の厳しい視線に晒されながら来た道を引き返し、館が見えなくなったところで言われた場所へ向かう

「あ、アイズ、アルゴノウト君達が来たよー!」

「アイズさん!?!それにーティオナさん!?!」

そこにいたのはサーベルを帯剣するアイズと、大型の武器を携えたティオナだった。ベルは驚いていると、アイズと一緒にいたティオナが人懐っこい笑みで近づいてくる。「アルゴノウト君達がやって来たの、窓から見えてさ。それでアイズがピーンと来たらしくて、ティオネに一芝居打って貰ったんだ」

……この顛末を簡潔に話すティオナ

……感謝しかできない自分が情けない。何か、恩返しみたいなことはできないだろうか

そんなことを考えているとティオナが「あ、あと」と続ける

「ヤミさんがアルゴノウト君と話している時に見せたあれにも凄い反応してたなー」

「えっ」

ティオナに言われ、アイズを見ると目をキラキラ輝かせてこちらを見てくるアイズがいた

「…あんぱん」

「ああ、はい……もしかして、これが目的で?」

持ってきたこしあんぱんを渡し、そう尋ねるとアイズは首を横に振る

「…確かに、これも欲しかったけど、協力したいのは…本心

でも、私は、直接力を貸すわけじゃないから…君達が頑張って、それから」

「ウンウン、あくまで戦うのはアルゴノウト君達、だつて！」

通訳のようにティオナが喋り、ビシィツ！とこちらに指を向ける

…18階層の時から思ってたけど、テンション高いな

「それに、見捨てるのは…違うと思う」

そう言つて幸せそうにあんぱんを口に始めるアイズをティオナが興味津々に見つめる

「それがアイズがたまに呟いてた『あんぱん』？ヤミさん！アタシにもちようだい!!」

「あ、ああ。はい、『つぶあん』と『こしあん』どっちがいい？」

ティオネはある程度悩み、つぶあんに決めて「美味しい」と喜んでくれた。作ったのは俺ではないが嬉しいな

このあと、一ヶ月前と同じ市壁上部で訓練をするのだが前と違うのは訓練をつけてくれる第一級冒険者が2名と言うこと

要するにもうすぐ地獄が来るのだ

第62話地獄の特訓開始

～1日目～

この日は単純に今の实力を知るために一日中の模擬戦

アイズがベルを、ティオナが俺を相手するのだが、ティオナはアイズと違って訓練しつうれんはしたことがない

結果、加減を間違えて何度も吹っ飛ばされた

防御はしなかったのかって？あの大剣ブンブン振りまわす力とか防げるわけねーじゃん

ベルはアイズの加減を間違えた蹴りを受けて吹っ飛ばされてた

…どっち行っても変わらねーな

～2日目～

実力がある程度わかったところで訓練は開始した

感想から言おう。死ぬ

「どんな攻撃にも反応して防御ができるように」と受けの訓練。Lv6の第一級冒険者

の速さでの攻撃を防げとのこと

俺とベルのLvは2と3、当然の如くその速さに翻弄された。ボコボコにされた

ある程度傷ついたらポーションで回復してまたやる。ある程度疲れたら数分休んでまたやる。その繰り返し

やめたくなつた、逃げたくなつた。だけど俺より弱いはずのベルが根性出して頑張つてるんだから俺も負けずに攻撃を受け続けた

昨日と同じようにアイズにこしあんを渡す、ティオナは「つぶあんは昨日食べたから」と言つたため、こしあんを渡した。俺はこしあん、ベルはつぶあんを食べた

く3日目く

昨日と同じ受けの訓練、初めて一撃を防げた。何度も殴られているとなんだか次の一手が読めるようになった。読めるからと言つて完全に防げるわけではないが、やつと一撃を防げたのだ

それに対して内心歓喜していると、次の攻撃が来ていたため直撃した

流石にあんぱんだけじゃ飽きるだろうと今回はこの2次創作の主の大好物、『●●キックス』というグミを出した

粉のようなものが付いているグミ一粒を全員に生きたわらせると「なにこれ？」とい

う疑問の声上がるが「とりあえず食べよう」とそれを口に入れる

「「●#@a☆・%○*?!」」

あまりのすっぱさに俺を含めた全員の顔がしぼんだ。ホント、なんでこれ食べて平気なんだ？ここの主は……

く4日目く

何とか反応できたら大体防げるようになってきた。こうなると「あとは見なくても反応できるようにしろ！」という訳で、Lv2、3程度では見えないレベルでの速さに変わった。もちろんポロポロになった

「もうあのグミはやめて」と言われたため、今回はメロンパンにした。あんぱんじやないことにアイズはがっかりしていたが、食べたら機嫌が戻った

く5日目く

だいぶ荒削りだが、何とか防げるようになってきた。アイズもテイオナも俺とベルの成長速度に驚いていた

「何でそんなに覚えるのが早いの？」と聞いてきたが、「さあ？」ととぼけるといつかの時のようにススツ……と背中に回られるため全力で逃げた

テイオナに聞くと戦争遊戯まで今から4日後らしい、だが戦場はオラリオではないため戦場に行くための時間を考慮するとあと2日くらいしかないらしい。ピツタシー1週間だったな

〈6日目〉

じいちゃんとの修行中に言われた事を思い出した

『ボールが何故跳ねるか知ってるか？ボールが落ちる力に抗うから反発するのじゃよ』

いや何の話？と当時は返したが、今やった事をやって何となくだがわかった

防いだ瞬間、疲れていたせいかわ腕に力が入らなかつた。そのせいでテイオナの攻撃は防いでも、力が足りずそのまま……上にそれた

そのまま続けると何となくだが、攻撃の逸らす方がわかつた

タイミングが重要、力で防ぐべき攻撃か力なく逸らすべき攻撃か一撃一撃見極めなければならぬ

それができなかつたため、何度も打ちのめされた

〈最終日〉

最後の日という訳で、初日と同じように模擬戦をする事になった

「いっくよ〜」

「……」

笑顔で大剣を構えるティオナに対し、静かに構える俺。この人の強さはこの一週間で嫌という程わかった

だからこそ、油断はできない

先に動いたのは…ティオナだ

横薙ぎに大剣を振るってきたため、マトリックス避けをする

そのままでは地面に倒れてしまったため地面に後頭部で頭突きをして起き上がり、そのままの勢いで刀を縦に振りおろす

だが縦に切る場合、攻撃の範囲は狭いため横にスツと動いて避けられた。俺はこの隙にとティオナとは逆の横に飛んで距離を取る

「ヤミさんの戦い方は面白いね〜」

「…そうですかい。頭痛え…」

まだヒリヒリと痛い頭を無視して今度は俺から攻める。勢いに乗ってバツトのように振るとやはり大剣で防がれる。だがそのまま休む間も無く数十回振ると

「隙あり!」

そう言つて刀を振る一瞬の隙を突いて最初の攻撃以上の速さで大剣を振るうティオ

ナ

を見て俺はニヤリと口角を上げて笑う

「待ってました」

予測さえしていれば隙が出来たからといって防げないわけではない。迫る大剣に反応して刀で大剣を防ぎ…逸らす

「うわつとと……」

「隙ありい!!」

勢の乗った攻撃を逸らされバランスを崩したティオナに俺の刀が迫る。勝ったあ!!!

「…と、思うでしょ?」

ティオナは大剣から手を離して回し蹴りを放ってきた。勝ったと思っていた俺は防げず

「あれだね、ヤミさんは武器に最後の最後で目が行き過ぎてるね。でも、それまでは良かったよ?」

「ちくしょう!!一週間ありがとうございましたあ!!」

「こうして、俺の一週間に渡る訓練は終わった」

夜明け前の街、肌寒い冷気が漂っている

街の活気は嘘のようになくなり、静寂が辺りを漂っていた。そんな中、街の中を走る3人の影が東のメインストリートを走っていた

「急ぐんだ、二人共！隊商キャラバンがもう出発してしまう！」

「はい！」

走っているのはベルとヘステイア、そしてヤミだ。彼らは喋りながらメインストリートの先、都市の東門前へ向かっている

「隊商にはもう話をつけてある、馬車に乗って古城の近くにあるアグリスという町で降りるんだ！そこからはギルドが臨時の支部を作っているはずだから、彼らの指示を仰いでくれ！」

「わかりました！」

戦争遊戯まであと2日、アイズ達との修行、そしてヘステイアとの「ステイタス」の更新を済ませたベルとヤミは都市を発とうとしていた。費やされる移動時間は丸1日、戦争遊戯の舞台となる『古城跡地』へ隊商の馬車に乗り案内してもらう手筈だ

「ヴェルフ君達はもう行っている、現地で合流してくれ！あと、これがギルドの通行許可

証、隊商と門番に見せるんだ！」

ヘスティアから渡されるカードのような物を「ありがとうございます」と二人揃って頭を下げながら受け取る

走っている三人はやがて広場に到着した

「…君達が凱旋してくるのを、ここで待っているよ」

「おう、待つてる待つてる。「アポロン・ファミリア」の奴ら全員ぶっ飛ばして「ヘスティア・ファミリア」の全員で宴だ！」

「…行つてきます」

笑いかけるヘスティアにヤミは大笑い、それに合わせてベルも笑う

そして別れ、通行許可証を見せて馬車に乗った

中に入ると思ったより広い箱馬車だった。二人の他にも数人の同乗者がおり、旅人か、又は隊商の用心棒など、格好は様々だ

「……おい、あんた、「ヘスティア・ファミリア」の「リトル・ルーキー」か？」

「あ、は、はい」

「じゃあ、その怖いにいちやんが【悪魔^{デモン}】か！応援してるぜ！お二人さん!」

馬車の座席に腰を下ろすとベルの隣にいた獣人の青年が声をかけてきて、それから歓声を上げた。旅人っぽい服を着ているその人は尻尾を振って笑いかけてくる

それを皮切りに周囲の乗客も集まってきた

「相手はヤバイが頑張んな!」「お近付きのしるしだ、食べてくれ!」

そう言つて次々と甘味を渡してくる

そして、馬車が動き出すと不意に外から声がかけられた

「ベルさん、ヤミさん!」

「ん?え?ちよ、シルさん!」

「危ないですよ!」

窓から覗くと馬車の隣を走るシルさんの姿があつた。彼女は走る馬車と並走し、右手をグツと伸ばした

「これをつ……」

伸ばされた手の中にあつたにあつた物を受け取る。首飾りだ、緑の宝石が埋め込まれたものと、青の宝石が埋め込まれたものだ

「頑張ってください!また、私達のお店に来てください!」

お、お弁当を作つて待っています!」

第63話 戦争遊戯

夜、俺とベルがそこに着くと、コンピュータジョン 改宗したりり、ヴェルフ、命の三人と助っ人のリユーさんがそこにいた

「遅かったな」

「(ごめん)」

「もう、準備はいいのか？」

「うん、神様にも「ステイタス」を見てもらった」

「そうか。じゃあ、ほら、約束していた短刀ナイフだ。一台目より切れ味は抜群だ、保証する」

「ありがとう」

「ヴェルフ殿……例のものは？」

「用意してある。ただ、やっぱり時間がなかった、悪いがふた振りだけだ」

「……その、ヴェルフ、良かったの？」

「ああ。……意地と仲間を秤にかけるのももう止めた。それよりも、ヤミさん。そっちの実験はどうなった」

「バッチリ……だが、成功したのは一本だけだ。ついでに言うと、もう二度とやりたくない

な」

「一本でも充分だよ。つーか、量産出来たら俺の存在意義がほとんどなくなるだろうが」

「ハツハツハ、まあとりあえずは…」

「はい、ヘステイア様達の手筈通りに」

「おお。明日中に、城を落とすぞ」

「うん……勝とう」

vs【アポロン・ファミア】

カテゴリー
戦闘形式——攻城戦

勝利条件は、敵大将の撃破

長い夜があげようとしていた

く朝く

古城跡地

開始を告げる銅鑼の音から遠方の丘から響き渡る

小人族のルアンは碌に戦えないが目が良かったため、見張りをしろと命じられた

平野にはほとんど物陰がなかった。時折思い出したように岩の塊が存在するが、まず何人も隠れられない。北から東にかけて僅かな緑と荒野が続き、南の彼方には川、西の方角には林が見える

目を細める彼が風で煽られる短い髪を押さえていると、話し声が聞こえてくる

『魔法』の詠唱だけには注意しとけよ。特に、ヤミ・カズヒラの魔法は得体が知れないからな」

「なあに、姿を現したらコイツをお見舞いしてやる。それにカサンドラの報告でヤミ・カズヒラは弓が有効だと聞いている」

得意げに交わされる二人の会話に、雑用を押し付けられたルアンは「けっ」とグレる。その時、振り返った彼の目に、ある光景が飛び込んでくる

北側、城砦正面、荒野の中央を静かに歩んでくる全身をマントで覆った、謎の人物

「お、おいっ」

「なんだ……っ？」

奇怪な格好をした人物に弓兵達も気づく

魔法を詠唱しているわけでもなく近づいてくるその者を百Mまで接近を許した瞬間、動いた

ぱつと両手を広げ、弾みでマントが宙を舞い、その隠れていた全身があらわになる。

細い両手が握りしめていたのは、紅と紫に染まった二振りの『魔剣』だった
「は？」

ルアンが目を丸くした瞬間、二振りの長剣が同時に振り下ろされる
城壁の上にはいた者達の前で、凄まじい砲撃が炸裂した

「…そろそろですかね」

覆面の人物、リユーは長剣を振るいながら呟く。それと同時に三十人ほどの冒険者が
やってくる。相手の一軍は『魔剣』を警戒してバラバラになりながら接近してくる

近づいてくる敵を変わず『魔剣』を振る事で攻撃していると

「っー！」

「今だ!? 突撃しろー！」

持っていた『魔剣』が弾けた。それを見た好機と見て声を上げて全隊で攻めかかった
「ー待っていました」

「ッ！ 回避!!」

リユーは壊れた剣の残骸を捨て、隠していた刃が黒く変色した『第三の魔剣』を取り
出す。これは『クロッゾ』ではなく、【悪魔】から譲り受けた『魔剣』だ

エルフの男がそれを見た途端に退避を命じたがもう遅い。リユーはそれを振り上げ、自分に近づいた事で塊になった敵に振り下ろした

『リユーさん。これは城を破壊するような威力はないが、人に向けてやれば絶対の威力を期待できる

簡単に言えばヴェルフのは「対モンスター」、「対城壁」の魔剣とするなら俺の作ったこの魔剣は……』

「……『対冒険者』の魔剣ですか」

『闇』が晴れ、目の前にいた冒険者の山を見てリユーはこれを作ったという男の言葉の続きを呟いた

くヤミく

「ヤミ殿、準備は出来ていますか？」

「こつちは大丈夫だけど、えーと……そつちは？」

「無論、準備は出来ていません。それと、命と呼んでもらって構いません」

大地の色と同じ隠蔽布カムフラージュを纏い、混乱の隙に乗じて城砦へ侵入することに成功した

敵の注意を一時的に引きつけるリユウの影で、破られた北側城壁から城内へ。破壊された砦の正面入り口、砂塵が舞う瓦礫の山を飛び越えたと行動を開始した

「【掛け幕も畏きー】」

命が走行しながら詠唱を始める

『奇襲だー！ツ！北から敵が…ツ！ヤミ・カズヒラが来たぞおー！』

「…あいつ、酒場の時にいたやつか？」

あの時の小人族の叫び声で団員達の視線が俺達を見つめた

段差が激しい砦の石屋根に躍り出て、敵大将ヒュアキントスが腰を据える玉座の塔へ真つ直ぐ突き

進んだ

「【いかなるものも打ち破る我が武神かみよ、尊き天の導きよ。卑小のこの身に巍然たる御身の神力を】」

『つー女の方は詠唱をしているぞー！』

バレた。男の声を聞いた瞬間、一斉に準備されていた弓を射る。狙いは……

「【無明斬り】」

『ギヤアアアアアアアアッ!? 痛え!!』

一斉に声の上があった方を見た。弓兵の一人が血を流して苦しんでいる。それを見た

周りはこれをやったであろうヤミを見た

その瞬間に弓を持つ者は全員ヤミが危険と判断し、そちらを狙う

「救え浄化の光、破邪の刃

払え平定の太刀、征伐の靈劍れいおう」

『待て!?女の詠唱が!?!』

『うるせえッ!!女を狙ってたらこつちがやられちまうだろうが!?!』

男が「女を狙え」と呼びかけるが弓兵達は混乱し、蔓延していく

「今ここに、我が名において招来する」

「天より降り、地を統べよ」

そうこうしているうちに命は中庭に辿り着き、詠唱を進める。それを見た者は武器や

弓矢を使い撃ち出したがもう遅い

「【神武闘征】!!

【フツノミタマ】!!」

魔力が解放された

半径五十M、命の最大範囲

命の直上に一振りの光剣が召喚され、魔法を激発される

特大の重圧魔法が発動し、投擲された武器を、冒険者を地に叩き落とす

『がっ、がああああああつ……!?!』

ドーム状の深紫の檻に囚われた者達は、重圧によって歪んだ絶叫を上げた。重力領域内にいる全ての者が膝を、手について重圧に耐えようとすると

自爆攻撃——そう思ったのだが、これを起こした者と一緒に来た男を見て驚く

「凄……本当にこんな事が……」

「ハツハツハ。凄えだろ。言うなよ？誰にも」

余裕と言った感じでその場に立つ二人。よく見れば二人には何か、黒い幕のような物が付いていた

「さーて、命の魔力が続く限りここは重力の檻のままだが……さっさとお前らを気絶させて楽になってもらわねえとな

俺もこの後暴れるし……」

そう言う男は黒く染まった手刀を倒れている者の首元に当て、気絶させていく

「抵抗しようとするなよ？ミスったら帰って苦しいからな」

……これは我慢比べだと思つたが違った

動けない状態の者にとどめを刺す。悪魔……いや、魔王からの処刑だった

「これで全員…か？命、もう魔法は解いて良いぞ」
「わかりました」

闇を纏わせた手刀で気絶した「アポロン・ファミリア」の連中を確認してそう言う
命は即座に魔法を解除する

「驚きです。まさか魔法の効果が無効化…受けなくなるとは…：…本当に私に教えてよ
かったのですか？」

命が心配そうに俺に話しかける

『敵を知り己を知れば百戦危うからず』だ。要するにこんな大事な時にそんな事気にし
てたら負けちまう可能性がある

それより、もう行っていいか？」

「あ、はい。大丈夫です。自分はリユー殿と合流して遊撃をしています。ヤミ殿は存分
に暴れてください！」

そう言って命はリユーのいるであろう東の方へ行ってしまった

「…：…俺も遊撃って事なんだけどなあ。なんで『暴れる』って表現するかなあ、リリのや
つ」

第64話やっぱり地味

ヤミと命の行動は宙に浮かぶ鏡を通してオラリオにいる者達に見られていた

『おーつと!? 鬼か悪魔か?! いや悪魔だ!! 動けない「アポロン・ファミリア」の冒険者達に容赦のない手刀が振り下ろされるう!』

実況の男が叫ぶとそれに合わせてオラリオの者も興奮に震える

「あれ? 俺、一瞬あそこに断頭台が見えたぞ?」

「俺もだ。…何これ処刑シーン?」

「怖え…死んでないよな」

「仲間の魔法を受けてもピンピンしてたのはいいのかよ」

「え? そういう魔法じゃないの?」

「発動させた本人だけならまだしも、仲間は巻き込まない魔法?」

「何それ強い」

「魔法と言え、【悪魔】から出たあの斬撃は凄いな」

「なんか、黒い膜みたいなのが見える?」

戦争遊戯の最中でもオラリオはいつでもオラリオだった

「あ。【悪魔】が一人で行動しだしたぞ」

どこからか聞こえた声を聞き、話していた者達は一斉に鏡を見た

「止めろッ！何としても【悪魔】だけは止めるんだ!!?」

その言葉で一斉に俺に攻撃してくる。俺は加速し、まず一番近くにいる敵の頭を掴み大地に叩きつける

敵は弓を構え俺に向けたが掴んでいた敵を盾にしようとすると腕を止める

「クソッ！正々堂々と勝負しろッ！そんな事をして恥ずかしくないのか【悪魔】!!」

「多対一で挑んでくる時点で正々堂々もクソもないだろうに……まあいいや」

そう言うのと全力で掴んでいた者を敵に向かって投げ飛ばす。【アポロン・ファミリア】の一人の男はそれを受け止め、前を見た

「いない?」

「上だあ!!?」

男は何故前にいないのか疑問に感じているとすぐに周りの仲間が居場所を伝えたため、居場所である上を見た

そこにはヤミがおり、落下してくる最中だった

「馬鹿め、良いマトだ！」

一斉に弓を構え発射する

「【熾^ロ天覆^アう七^イつの円環^ス】」

だがその瞬間に黒い壁に阻まれ矢はヤミに当たらなかった

結果、無傷でヤミの着地を許してしまった。この距離では弓は使えないため剣に変える

その間にヤミは右手に持った刀をブンブン振り回していた。一振りする毎に風が巻き起こり、最後の一振りで呟いた

「【黒縄・大竜巻】!!」

『何だあれ!?!』

「黒い……竜巻?」

「え? 【悪魔】ってあんな事出来んの? つーか、いつまで続くのあの竜巻」

「……地獄の果てまで?」

「詠唱なし? 詠唱なしだよなあれ!?!」

ヤミのやった事に神々が驚き戦慄する者も居れば、「凄い凄い!」とただ笑う者もいた。だがみんな共通で口にした言葉がある

『あの子、欲しい!!!』

城壁の扉に着くとそこには残った一人の「アポロン・ファミリア」の小人族がおり。ヤミと目を合わせる

オラリオの者達は戦いが始まるとゴクリと唾を飲む

ヤミとルアンは目を合わせたままコクリとお互いに頷くと

『「アポロン・ファミリア」の団員が裏切ったぞ!』

『【悪魔】と一緒にお城の中に入れてる!』

そう、二人で仲良く。一緒に扉を開け、「ヘステイア・ファミリア」のベル・クラネルとヴェルフ・クロツゾを城壁の中へ入れたのだ

まさかの寝返り、小人族の手引きによって、易々と場内に入ったベル達。東側で今も交戦を続けるリユーと後から来た援軍の命によって数を割かれ、現在位置では全く人が存在しない

破壊された北側城壁は警戒されているが、無傷である西城壁は完璧な死角となつていた

不意に彼らに遭遇した敵団員が声を張り上げようとするが、悪魔によつて投げ飛ばされた白兔によつて一瞬で斬り伏せられた

(「(リトル・ルーキー」が可哀想すぎる))

悪魔の手で容赦なく投げ飛ばされたベルを見てその場にいたほとんどが思った鏡には涙目でヤミに怒るベルに、片手で「すまん」と笑って伝えるヤミの姿が映っていた

「上手く化けたな？」

古城跡地、「アポロン・ファミリア」城内。走りながらヴェルフは小人族のルアンへ囁いた

「リリはこれくらいしか取り柄がありませんから」

声は男のまま、口調が女性のものに変わるルアン

裏切ったルアンの正体は、『魔法』で変身したりリリだ

本人は四日前、この古城跡地で昏倒させ、街外れの倉庫に閉じ込めてある。今頃は男神に見張られながらこの戦争遊戯を見ている事だろう

「それにしても、結局はこのメンバーになるんだよな」

「そういえば…」

「そうだな」

俺に、ベルに、リリに、ヴェルフ。ダンジョンに潜り、酒場で一緒に祝ったメンバー

が全員揃った事に全員が苦笑した

「昨日伝えたけど、ここから先の敵大将ヒュアキントスがいる塔は変な作りなんだ。砦の三階から伸びる長い空中廊下わたりを通らないといけない」

ルアンの口調で語るリリに、俺達は相槌を打つ

「外から塔に入れないんだな？」

「ああ。入り口もないし、綺麗な外見だけど結構硬い。手間取ってる内にきつと周りから群がられる。でも、一回中に入っちゃえば……」

「後は、玉座だけ？」

ベルの言葉にリリは笑って頷いた

「敵は絶対魔導師を置いて空中廊下で待ち構える筈だ。頼んだぜ？」

「ああ、任せろ」

ベルを頼む、というリリの言葉にヴェルフは答える

それを聞いて彼女はそこで別れた

「ベル坊は、一人で良かったのか？相手はLv3に対してお前は2だろ？俺が言った方が」

俺はベルに心配しながら問いかける。するとベルは笑って答えた

「ヤミさんにずっと頼ってたらダメだからさっ！それに、僕はもう弱くないっ！」

それを聞いて思わず涙が出てきたため顔を抑える

「そうか……ああ、あの弱かったベル坊がこんなに立派になって…」

「あんたは親か」

「失礼だな!? 兄貴だ!」

「突っ込むところが違う気がするぞ」

リリとヴェルフからツツコミを受けながら走っているとリリの言う通り、魔導師と弓兵…そして

「弓矢は前に! 逃げ場はないわ、狙い放題よ! ウチの合図で魔導師達も斉射!」

それを指示するダフネの姿があった。遮るものがない長大な空中廊下は近づかれる前に狙撃できる絶好の環境だ。広範囲の魔法ならなおさら逃げる場所もない

迎撃部隊を眼前に展開させたダフネは短剣を抜いて真っ直ぐ突き進んでくる俺達を指す。弓使いが弓を引き絞り、魔導師達が詠唱を終了させた

「……行け!」

俺とヴェルフが前に出て叫ぶ

ベルは前傾し、並走する俺達の隣から疾走した

「放て!!」

ダフネの号令により矢が発射され、続いて魔法が発動しようとする。その瞬間、ヴェ

ルフは左腕を、俺は右腕を突き出し唱えた

「【燃え尽きろ、外法の業】」「【熾天覆う七つの円環】」

かたや超短文詠唱。かたや無詠唱

ヴェルフから陽炎が現れ、ベルを通り過ぎてダフネ達を包み込む

次の瞬間、彼女達の体が内側から炎の色に輝き自爆する

咲き乱れる爆破の華

魔導師達が魔法の発動失敗。魔力暴発イグニス・ファトゥウスに追いやられた

迎撃部隊の中心で巻き起こった爆発は弓使いを左右に吹き飛ばす。魔導師達は言う

までもなく再起不能

弓から発射された矢は黒い壁に阻まれベルには届かない

咄嗟に身を屈めて衝撃に耐えたダフネの目の前で獰猛な爆風がうねりを上げる

彼女が息を呑み戦慄していると、間髪入れず、ベルが爆煙から飛び出す

「おつす。ダフネ……だったか？まあなんでもいいか。俺達の仕事はベルとあの野郎の戦

いの邪魔が入らないようにする事だ。よしなに頼むぞ？」

「冒険者なら武器ウェポンで戦わないとな」

不敵に笑う二人の男にダフネは瞳を揺らした

オラリオにある鏡にはまだダフネと意識のあつた弓使いと戦う二人の姿があつた
人々はヤミの戦い方を見て驚き、戦慄する

「なんだあれ？デコピンで人が吹っ飛んだぞ？」

「しかも気絶……」

『耐久』が足りないだけじゃないのか？」

「Lv2のやつがLv3のやつにデコピン一発で倒されるなんて聞いたことねーよ」

「つーかなんで【悪魔】じゃなくて【リトル・ルーキー】が大将のとこに行つてんだ？」

「Lv1の時に一人でミノタウロス倒したやつだぞ？となると……」

一方で、酒場では不穏な空気が流れていた

「おいヤベエぞ、このままじゃ……」

「もしかして、もしかすると……」

鏡には一人疾走するベル、数人だけが相手とは言え圧倒的な力で倒していくヤミと
ヴェルフ、今もなお多数を相手に戦い続けるリユーと命

それを見て賭け事をしていた冒険者達は足掻くように『くたばれ!!』と『ヘスティア・ファミリア』に野次を飛ばし、『負けんじゃねえー!!』と『アポロン・ファミリア』に必死の応援をする

「いけー少年ッ、青年ッ、ぶっ飛ばすニヤー!?!」

「こいつ、懲りずにまた賭博を……」

「『アポロン・ファミリア』に賭けてニヤかっただけまだマシニヤ……」

西のメインストリート沿い、酒場『豊穣の女主人』

全席が埋まっている店内で、仕事そつちのけで大声を張るクロエを、ルノアとアニーは白い目で見る

「……」

そんな彼女達の隣で、シルも手を止めながら映る光景を見つめていた

第65話終わり

「いやあ、あつさり終わったな」

ダフネ達を気絶させて胡座をかいているヤミ。そんな俺の姿を見てヴェルフが口を開いた

「ヤミさん。ベルは勝てると思うか？」

「さあ?」

「さあ…つて、確証もなく送り出したのかよ…」

当たり前のように首を傾げる俺にヴェルフが呆れたような目を向ける

『『ベルならなんとかするだろ』つつー信頼的なやつだな。…リリにこれみたいなこと話したら「それは慢心」とか言われたっけ…』

「いや言われたなら尚更ダメだろ?」

「まあそうなんだが、もうベルはあの時と違う。一人でも十分やれるくらいまで成長してるからな」

そこまで話すとヴェルフは少し思った事を口にした

「ヤミさんがヒュアキントスと戦う事になったら勝つ可能性はどれくらいだと思う?」

「それ、本人に聞くやつじゃないだろ？……確実に俺の勝ちだよ」

そらそうだ。ステイタスに多少の差があっても【強奪】で奪えば確実に俺が上になるか同じくらいになるかだし、【闇魔法】で相手は一発でも……いや、一回触れるだけで負けは確定するっていう最悪なクソゲーだし

「…今思えば同Lvのやつじゃ俺に勝つ可能性あるやついなくね？」

「…やっぱアンタが上行った方が良かったよ」

そんな風に話をしているときなりドンツと、城で爆発音が響いた

「まあ今更だ。ベル坊の勝利を祈ってようぜ」

「……まで来て負けたら恨むからな」

城から聞こえる崩壊の音を聞きながら、見ながら、二人でそんな話を話していた

戦いが終わった。勝者は「ヘステイア・ファミリア」

戦いが終わった彼等は壊れた場内で集まっていた

「ハッハッハ！ やっぱベル坊が勝ったか！」

笑うヤミに対してリリの冷たい視線がヤミを指す

「ヤミ様が戦っていれば、ベル様がこんなに傷つく事は無かったはずです!!」

「それはあれだ、ベル坊も自分がやりたいって言ってたし、本人の意見も尊重してだな」
リリに言い訳をするヤミ

そんな二人にベルが近づき口を開いた

「リリ……助けてくれて、ありがとう」

「ベル、様……」

「ヤミさんも、信じてくれてありがとう……」

「無理するな。ポーシヨンどこにある?」

ポロポロになりながらも笑顔で礼を言ってくるベルを止める

「カズヒラさん、クラネルさんをお願いします。そろそろここを発ちましょう。どこかに腰を据えて治療しなければ」

リユーがそう言うのと頷き、しゃがむ。それを見て察したのかすぐに背中にベルが乗ってきた。所謂おんぶというやつだ

「あれは……うん」

「なんだか微笑ましいですね」

「ヤミ様でもあれが似合うとは思いませんでした」

「初めてあの二人の兄弟って感じの瞬間を見た気がします」

後ろから何か言われているが無視して休める場所に足を動かした

巨大な屋敷が建つ、広い庭の中で

ヘステイア様は大いに威張っていた

「じゃーん！どーだ、これが今日からボク達のホームだ！」

「「おお〜っ」」

ヘステイア様が示す屋敷を見て、ベル、リリ、ヴェルフ、命は感嘆する。見上げるほどの、3階建ての大きな邸宅だった。ヘステイア様が言うには中庭と回廊までも備わっているらしい。敷地は背の高い鉄柵に囲まれており、花や庭木が植えられた広い前庭も備わっている

「しかし、本当に【アポロン・ファミリア】のホームを乗っ取ってしまいましたねえ……」
「アポロン様は天界に帰って【アポロン・ファミリア】の金は全て俺達のもんになっちゃまった。ヘステイア様、俺以上に悪魔してないか？」

「ふん、ボク達は理不尽にホームを潰されたんだ、悪魔にもなるさー！」

ヘステイア様は堂々と言つてのける

戦争遊戯の勝者の権利として、「アポロン・ファミリア」のホーム。彼等が所有していた豪邸を手に入れていた

まさかの住居の段階ランクアップ上昇に、ベルはもちろんヴェルフ達も驚きをあらわにしていた

「賠償金もたっぷりとある、趣味の悪い彫像やらの撤去も含めて屋敷全体は改装しよう！何か要望があつたら言ってくれ！」

「へ、ヘステイア様つ、どうかお風呂の導入を!？」

「ヘステイア様——！作業用の炉を造つてくれ——！」

今後、アポロンの趣味全開の館を改装する旨を告げると、命とヴェルフが興奮気味に懇願する。二人に対して「まあ待て待て」とどこか鷹揚に告げた

「ようやく胸を張つて「ファミリア」を名乗れるようになったんだ、先にエンブレムを決めようじゃないか」

『確かに!』

主神の提案に揃つて頷く

屋敷の玄関前の階段に座り込むヘステイア様。あらかじめ書いていたのかスツと絵を出した

「へっへーん、ずつと前から考えていたんだー」

じゃんつ！とヘステイア様は俺達に完成している絵を見せつけた

「これは炎と…」

「なるほど。ヘステイア様の象徴は護り火なのですね」

「そんな事はどうでもいいんですつ、このエンブレム、要はヘステイア様とベル様とヤミ様ということではないですか！

ヴェルフと命が眩く横でぷりぷりと怒るリリ

俺はというとヘステイア様に質問をしていた

「あの……ヘステイア様？なんで俺は手？」

「ほら、ヤミ君はいつだってボク達を支えてくれてるからね。それがこれの意味さ」
紙には炎鐘が重なり合い、その下にそれら二つを支える黒い手が刻まれていた

「俺の部屋はここでもいいか？」

『異議なし!!』

現在多くある部屋の場所を決めていた。俺の選んだ部屋は少し他とは違う豪華な部屋。それなのに俺の決めた部屋の場所に皆異議を唱える者がいないのはなぜか

「食堂に一番近いからね！ヤミ君。今日は祝いの食事を頼んだぜ！」

ヘステイア様が親指をグツと立ててそう言ってくる

そう、ここは台所、食堂が1番近い部屋。朝飯、昼飯、晩飯をここで作るためにここに決めたのを全員察してくれたらしい

「みんなよく察せたな。一人くらいは反対する奴がいると思ってたんだが…」

「みんな美味しいご飯が食べたいんですよ。ベル様とヘステイア様から嫌と言うほどヤミ様の料理の事を聞いていますし、18階層で飲んだものも美味しかったですし」

とリリが言い

「俺はそれもあるが、炉ができる予定の場所に俺の部屋を置きたいしな」

と続いてヴェルフ

「じ、自分は…その、お風呂があれば…」

ともじもじしながら命が言った

「そうか、んじや遠慮なくここを使わせてもらおうとして。期待通り食堂で作ってるから部屋決めてこい」

そう言いながらみんなに背を向けて台所の場所へ向かう

「ヤミさんつてもしかして…」

「ああ、多分台所がどんなのか気になるんだね」

後ろでベルとヘステイア様の声が聞こえる。多分ヘステイア様の顔は今ニヤニヤしてるな

(さて、何作るか…)

鯛は…戦争遊戯する前に酒場で…いや、刺身つてのもいいな…寿司にするか。となる
と、汁物は味噌汁で決定だな…)

〈宴会〉

「よーし。全員集まったなー！」

ヘステイア様がジューズの入ったコップを持って口を開く

「えーと…：…祝いの席だし、言葉は不要だ！かんぱーい!!!」

『かんぱーい!!!』

全員ちゃんと返したけど、言葉を考えてなかったなあの神人

乾杯の合図をした後、みんな箸を持ち、料理を…

『なんだこれ?』

ほとんどがそんな反応を示した。そんな中、他の反応する者が一人

「ヤミ殿！これはまさか寿司と味噌汁では!？」

「おう。ネタは10種類程だ」

極東出身の命だった。過剰に喜ぶ命を見て全員が頭に「？」がついた

「ヤミさん。スシ…って何？」

ベルがしどろもどろに聞いてくる。それに対して俺は普通の感じに答えた

「ああ、極東で食べる奴で生の魚を酢飯に乗せて食べるんだ」

『な、生!?!』

「…まあ、食ってみたらわかる。ああ、醤油をつけるのを忘れずにな」

このあと、寿司を知らないやつがそれを食べると箸が進み、おかわりがなかなか途切れなかったとかなんとか

第66話……………

現在ダンジョンの中層と言われる領域、13階層。耳をすませばヘルハウンドの唸り声が聞こえ、アルミラージが侵入者を見つげるために走る足音が聞こえる

そんな中、俺達は何をしているかと言うと…壁を掘っていた

「リリ、力任せに掘ったら…ダメなんだよな？」

「…これで何回目ですかヤミ様。そんな事したら例の鉱石が傷ついてしまうと何度も言ってるじゃないですか」

俺は鉱石がいつまでたつても出てこない事にイライラが爆発しないように注意しながらリリに小声で聞いたが何度聞いてもそんな返事しか返ってこない

それはヴェルフも同じなのか彼も小声で口を開く

「ていうか、本当にここで採掘できるのか？」

「あつ、リリを疑うんですか？ 下調べはしてきました、上級冒険者達はこのエリアから例の鉱石を沢山持ち帰っていますっ！

わかったら口を動かさずに体を動かしてください！」

リリが持つ携行用の魔石灯のもと、俺とヴェルフがマトックで岩壁を突いては、削り

出していく

「ヴェルフ殿っ、ヤミ殿っ……まだですかっ？」

「モ、モンスターが出てきそうで、ドキドキする……」

そんな中、同じく声を小さくして話しかけるのはベルと命。屈みながら岩壁を掘り起こしている俺とヴェルフの傍で、ベル達はモンスターの警戒に当たっていた

この岩壁を掘る作業を始めてもう十数分が経過している。壁には散々掘り起こした跡があり、足元には無数の破片が転がっている

「あー早く出てこねえかな……どうしたベル坊？」

そろそろもう力技で掘りそうになりながら呟いていると予備のマトックを持ったベルがいた

ベルがそれを持って2度3度掘り始めた場所から壁に打ち付けると壁が崩れボロつと

「あ」

「「あ」」

音を立てて、光沢を帯びた滑らかな鉱石が地面に転がり落ちた

「や、やりました、『ブラッド・オニクス』です!？」

「ええ……俺達が苦勞してたのにこんなあつさり？」

「そんなことは今はいいじゃねえか！」

「そうですね！何がともあれこれで依頼は達成ですよヤミ殿！」

落ち込む俺以外のパーティ一同が歓喜し、すかさず発見した三つの鉱石を収拾、ぱつぱつと荷物をまとめその場から撤退する

正規ルートまで移動し、ようやく一息ついた

「依頼通り、二つ以上の『ブラッド・オニキス』を入手……これで冒険者依頼は完了ですね」

歩みながら血の色にも似た鉱石を袋から取り出し、その美しい輝きにうっとりとしている

「もう一つのクエストの『アルミラージの毛皮』も先程の戦闘で手に入れていきます……」

「ああ、どっちも早く片付いた。……パーティを組んだ時から思っていたが、ベルといるとドロップアイテムといい鉱石といい、なんだってポンポンと出てくるな、運がいいのか？」

ヴェルフがベルにそう聞くが「あ、あははは……」と乾いた笑いがベルから漏れる
すると俺は気分を変えて皆に呼びかける

「んじゃ。クエストも達成したし、さっさと帰ってホームの引越しの仕事をやるぞ」

『おーっ！』

全員が元氣よく返事する。うん、元氣つていいな

そんな事を考えていると命が急に目をキツと鋭くして身構えながら呟いた

「……みなさん、来ます」

前方を見据えた命の声がパーティーの間に響く

言うのが早いか身構える彼女に遅れず、それぞれの武器を構えた。通路の先の暗がりにはギラギラと輝く無数の眼光が浮かんでいた

「正面は任せたぞ！ヤミさん！」

「任された」

ヴェルフとベルと俺が隊列から飛び出し十にも上るモンスターの群れに斬りかかる

『ガアアアッ!!』

「うるさい」

一体のヘルハウンドの口から放たれた火炎放射を「全反撃（物理）」でアルミラージュに向けて弾き返す。火炎を吐いたヘルハウンドは高速で動いて首を切る

「ヴェルフ後ろっ！」

「ッ！そうかッ！」

【領域】で気づいた俺の言葉に反応したヴェルフが振り向きざまに大刀を振るう事で近

づいていたヘルハウンドを切り、灰に変える

「助かった！ありがとうヤミさん!!」

「口動かしてる暇あったら体動かせ!!」

「それはリリスケから聞いたぞ!!」

そんな言葉を口にしながらモンスターを足で押さえて頭に刀を突き刺す。余裕ができたと思えば周りを見ればもう全てのモンスターが倒されていた

ベルとヴェルフが前に出て、複数の武器を使える命が中衛を完璧にこなし、後衛だったりリリスケは……

「うーん、リリスケはすっかり要らない子になってしまいましたねえ」

モンスターがリリスケに到達する前に全滅したのを見て目を細めていた

このパーティーの特攻役の俺に、連携で攻めるベルとヴェルフ、それらのサポートをこなす命。ハッキリ言ってバランスが良かった

さて、リリスケは出番がなくて怒っているのかと思えば……

「13階層ではもう敵なしです!」

とむしろ喜んでいた。鼻歌交じりにモンスターの死骸に近づきサポーターの本業の戦利品であるドロップアイテムや魔石の收拾を行う

ふんふん♪ふ〜…「うわあああああ!?!」

リリの鼻歌の他に野太い声が入り混じった。耳を澄ませば大量の足音が嫌なりズムを奏でている

「これって、悲鳴?」

「こちらに近づいています……ま、まさか」

「ああ、嫌な予感しかない。アッハッハ」

ドドドドドドドドッ、と段々と大きくなる音にベルと命が反応し、俺は自身が感じた「嫌な予感」を誤魔化すために乾いた笑いを口に出す

だがいくら誤魔化した所で現実というものは変わらない

やはりと言うべきか、通路の奥から冒険者のパーティーと大量のモンスターが現れた

「リリ達のもとへ真っ直ぐやって来ます……!?!」

「ちよつと待てつ、前にもこんなことがなかったか!?!」

死に物狂いで走ってくる冒険者達、彼等は先程まで今にも死にそうな顔で走っていたが俺達を見た途端にその顔は歓喜の表情へと変わる

「ごめんなさいごめんなさい……デコピンだけは!?!」

「ちよつ命!?!大丈夫、大丈夫だから!ヴェルフ、トラウマ掘り起こす発言はするなあ!!?!」

『アンタ／＼ヤミミさんがトラウマの元凶ですよだよ』

そんな茶番をしていると走ってくる男が叫ぶ

「てめえ等、「ハスティア・ファミリア」だな!? 喜べ、俺達の獲物をくれてやるぞおお!!」
 「ふざける!! 要るか!?!」

「に、逃げよう!?!」

モンスターのなすり付け、『怪物進呈』バス、バレードにヴェルフの怒号とベルの悲鳴が重なる。三十を軽く超すモンスターを引き連れた同業者に、背を向けて逃げ出した

「ヤミ様! あの、黒い壁を出せませんか!?!」

「無理だ! 後ろのやつ等まで閉じ込めちゃう!!」

「リリ殿、早くバックパックをこちらに!?!」

「出口はどこ?!?!」

「とりあえず逃げろおおおお!!?!」

……今日もオラリオは平和である

都市はざわめいていた

ギルドの本部の掲示板に張り出された、とある知らせを皆が見上げる。そこに書いてあるのは…

ベル・クラネルLv3、所要期間一ヶ月

神や人は最初にそれが目に入りそれに驚く。そして、少し前に出たもう一人の男の名前が浮かび上がった

ヤミ・カズヒラLv3、所要期間半月

「おいおい、どうなってるんだ【ヘステイア・ファミリア】の奴らは……」

「ズルじゃないか？」

「バツカお前！ズルしたとしてもたった数人で【アポロン・ファミリア】を壊滅させられるか？」

【^{デーモン}悪魔】……この張り紙じゃあわからんが、俺は実際に奴を見たことがある……あれはまさしく『悪魔』だった……!!」

張り紙を見て疑いの声、恐怖する声などが上がる

そんな事はつゆ知らず。【ヘステイア・ファミリア】の一行は平和な日を歩んでいるのだった

＼外伝＼ v s 【リトル・ルーキー】 ①

『ガアアアアアアアッ!!!』

「おつとと……危ねえな!!」

ヘルハウンドの火炎放射と嘯みつきを巧みに避けながら前に突き進み、首を跳ねる

今いる場所は中層である15階層、上層とは違いモンスターの出現する数が桁違いに多い。だがLv3になった今、それなりに一人で行けるようになった

「よしつやつと辺りにモンスターが…」

ドスツ

そこまで言おうとすると後ろから何かを指す声が聞こえた。俺はゆっくりと後ろを振り向き呟いた

「いないわけではないよなあ」

そこには頭に刀身が刺さった状態のアルミラージがいた。気配を消して近づいてきたようだが、【領域】により気づいていたため対処できた

……やられたとしても、アイズ&ティオナの二人にしごかれた『耐久』のせいである
まりダメメージにならないんだろうが

「数は……1、2……最低でも五匹か。奥の方にもいる時もあるから怖いんだよなあ……」
 【領域】の外にいる敵はどう頑張っても探知出来ない。命がいれば数まではわからなくとも『敵がいる』とわかるようになるが、彼女がいなかったため【領域】を発動し続けなくてはならない……昔ならば

『見なくても反応出来る訓練』やってみるか」

そうボソリと呟いて【領域】を解いた。目の前には光のない薄暗い世界が広がる

『ツ！』

「……右」

飛んでくるアルミラーズの角を刀で防ぐ。すると硬いもの同士がぶつかる音がする

「なんかじいちゃんとかと稽古してた時を思い出すなあ……まあ

じいちゃんはこんなに弱くはなかったが」

『キャウツ!?!』

く青年狩り殺し&帰宅く

「ただいまくつと」

「あつ、お帰りなさい。ヤミ様！いきなりですがその荷物を持って運んでくれませんか

か？」

新しいホームの扉を開けると大きな荷物の隣で小さな荷物を持つリリの姿があり、俺に声をかける

「おう、本当にいきなりだな。これ持てばいいのか？」

「はい。リリの部屋まで運んでください！」

リリの言葉に「わかった」と返事を返して一緒に歩き出す

「ヤミ殿ー!!」

少し歩くと命がやってきた。彼女は目の前まで来て、「探しましたよ！」と言ってくる

「約束のアレをください！」

「アレ？アレ……ああ。入浴剤？」

「はいー！」

俺は目を輝かせながら肯定する命の前で片手を「購入」の空間倉庫に突っ込み、抜き取る

「ほらよ。もう夕食だから風呂入るなら早めに出とけよ？」

「はい！わっかりましたあ!!」

命は元気すぎる返事を俺に返すと受け取った入浴剤を持ってドドドドツと言ってしまった

それを見たりりは少しの間時が止まったように動かず、やがて動き出し

「ダンジョンの温泉の時といい…命様って変わってますよね？もしかして、極東じゃあアレが普通とか…」

「ないない。一応俺も極東^{異世界の}出身だけど、あんなにはしゃぐやつごく一部でしかいねえよ。

桜花と千草も「あんなはしゃぐのは命だけだ」みたいなこと言ってたし」

「そうですか。よかったです」

そう言つてこの話は終わりにし、リリの部屋へ向かった

『いただきますっ！』

「どうぞ」

今夜は鍋、うん。この季節にはいいな

「やっぱ美味しいな。ヤミさんの飯は…」

「そうかい。そう言つてくれると作つたこつちとしても嬉しいぞ

……ベル坊、どうした？」

隣で本当に嬉しそうに食べるヴェルフを見ながら逆の隣を見るとベルが何やら真剣な顔でこちらを見ている。何をする気なのか首を傾げているとベルが口を開いた

「ヤミさん。僕と、戦って…:くれないかな?」

「…は?」

予想外の言葉に思わず変な声が出た

戦って? 戦ってって言ったのか?

「どうしたんだいベル君?」

「はっ! まさかついにヤミ様に何か嫌なことをされましたか!？」

ヘステイア様とリリが驚きながらベルに詰め寄る。……『ついに』ってなんだ『ついに』って

「…最近思っていたんです。僕はヤミさんの足手纏いじゃないかって」

ベルの告白にその場にいた誰もが驚いた。だがその中で誰よりも驚いたのは多分俺だ

「いや別にそんな「ヤミさんならそうやって否定してくれるけど、僕が納得できないんだ」

俺の言葉を遮ってベルは続けた

「僕がヤミさんに勝てるとは思わない。だけど、ヤミさんと今の僕の力を確かめたいんだ。…:ダメかな?」

……

「わーっただよ。やればいいんだろ？ 良いよな、ヘステイア様？」

ヘステイア様に問いかけるとヘステイア様は「うーん」と少し悩むがすぐに答えが出た

「…ああ、僕も二人の戦いを見てみたいしね」

「よし、そうと決まればさつきと食って庭でやるぞ」

そう言ってまた食べ始めるとベルも納得して席に戻りガツガツ食べ出した

↑↓↑↓A B

夜で暗い中、「ヘステイア・ファミリア」のホームの庭で大きな一つの光が輝く

「最初の距離はこのくらいか？」

「そうだね」

俺とベルはお互いの距離を決めるとそこに立ち、見物人のリリ、ヴェルフ、命、そしてヘステイア様を見た

ヘステイア様は前に出ると俺とベルに聞こえる声で叫んだ

「コホンツ…えーと、なんだっけ？」

全員ズッコケた

ポンコツ女神のヘステイア様を差し置いて代わりにヴェルフが前に出て叫んだ
「あー、えー……これよりヤミ・カズヒラとベル・クラネルの模擬戦を行う

ルールは魔法有り、スキル有り、何でもあり

敗北条件は気絶か負けを認めた時、相手を殺めた時だが異存はないな？」

「うん！」

大きな返事を返すと「では」とヴェルフが右腕を上げ、開始の合図の準備をする
それに従い俺は刀を、ベルは二本のナイフを構えた

「よーい……」

「本気で来いよ？」

「そっちょこそ！」

始まる寸前、二人でそんな言葉を口にし

「始めッ!!」

ガンッ!!

始まった瞬間お互いの最高速で突っ込み、刃と刃がぶつかる

お互いの武器から衝撃が襲い手が痺れる。そのせいか少しの間お互いは動かなくなる……いや、この感覚を楽しんでいるのか？

「【強奪】！フンッ!!」

やがて動けるようになると動いたのは俺、「強奪」で身体能力を奪いベルに蹴りを放つが読まれていたのか最小限の動きで避けられそのままベルの連撃が飛んでくる

俺もそれを避けるが超近距離であるため、刀が触れない

試しに後ろに飛んで脱出を試みるがそうはさせまいとベルがピッタリとくつついてくる

「チッ」

「……」

やがて避けきれなくなり、腕に浅いが傷がついた。浅いとはいえ傷からは血がたらりと落ちる

だが、それでもベルの連撃は止まらずやがて

「……………ん？」

「……………」

連撃は止まった。とりあえず距離を取るがベルは先程とは違いついてこない。というか、動かない

「……………で……………つてよ」

「ん？」

何かぶつぶつ言っているため耳を傾ける。するとベルは思い切り俺に向かって叫ん

だ

「本気でやってよ!!」

「うおっ!?!」

ベルとは思えない怒気の入った声に思わず驚く。だがベルは気にせず続けた
「ヤミさんは本当はもつと強いッ!!こんなものじゃない!!言つたよね!?!ヤミさん自身が
『本気で来い』って言つてたのに!僕は本気を出したのに!!」

「いや、俺は本気で…」「闇魔法」があるじゃん!」はあ!?!」

一瞬ベルの言葉に耳を疑った。「闇魔法」は「神の恩恵」^{フルナ}他の魔法どころかをも無効化する魔法

つまりは手加減間違えばLv3の攻撃が「神の恩恵」を持たない一般人を襲うのと何ら変わらないのだ

「…何で、ベル坊はそんなに俺との戦いを望んだんだ?」

少し考えたが、なぜそんな危険極まりない力を使えと言うのかわからない故にベルに聞いた

「それは…」

するとゆつくりとベルは口を開いた

「他の冒険者からヤミさんの噂を聞きちやつたんだ」

～外伝～ v s 【リトル・ルーキー】②

『豊穡の女主人』でベルはまたシルさんに騙され皿洗いをしていた

「はあ、ヤミさんは今頃は中層かあ…良いなあ…」

手を止めず皿を洗いながらそんな事を呟く

すると洗い場の外、冒険者達が酒を飲む場所から男の冒険者2名の声が聞こえてきた

『前の戦争遊戯見たか？』

『おお、見た見た。凄かったな！特に「リトル・ルーキー」!!』

『お前あのガキの事、毛嫌いしてなかったか？』

『いやあ、あんな戦い見せられたら…：…なあ？』

そんな自分を褒め称える声を聞き、嬉しくなる。心なしか皿洗いの速さが上がった気がする

そのあとの話題は自分にとって兄のような存在の事だった

『それに比べて、【悪魔】^{デーモン}。なんつか地味なんだよなあ』

『え？でも、仲間の魔法受けてもピンピンしてたやつだぞ？』

『ありやあ敵と「認識したやつだけにしか効果ないんじゃないか？」って言う噂だぜ？』

『となると【悪魔】はただ仲間を踏み台にしたようにしか…』
皿洗いの手が遅くなった気がする。いや、実際遅くなった
時間がゆっくりにも感じたが声は続く

『はっ！Lv3とは言ってもどうせズルだろうよ。【リトル・ルーキー】とは大違いだぜ
！』

『ああ、【リトル・ルーキー】のヒュアキントスと戦った時のあの動き、ありやあかなり
洗練されたものだった』

自分が褒められるが自分より遥かに努力し優れているはずの兄が貶される
先程とは違い嬉しいという感情は出てこない

次に聞こえた言葉で代わりにベルは怒りの感情を出した
『所詮【悪魔】は見た目だけ、噂だけの雑魚ってこった』

「んで、何でそれがこの状況模擬戦になるわけ？」

「……あつ」

おい、めちやくちや小さな声だったが見逃さなかつたぞ

「『あつ』てなんだよ『あつ』て……まさかとは思うがなんも考えずに模擬戦って言ったのか?」

「ほ、ホラ! せめて、命とかには認めてもらおうと「少なからず命を含めた18階層にいた奴らに認めてもらったと思っただが?」うぐ」

俺の言葉を聞くとたちまち何も言わなくなつた

………やばいかもしれないこの「ファミリア」

主神も团长もポンコツじゃねーか。しつかり見てないとどつかで借金作つてきそうで怖い。そのうち借金の請求書とかこないだろうか

「…ハア、本気出せばいいわけ?」

「えっ?」

頭をボリボリ掻きながらベルに聞くと間抜けな声が返つてきた

「魔法有りの本気を見せればいいんだろ?」

「そ、そうだけど…いいの?」

「いいぞ、気が乗つた。今のベルの強さを知りたくもなつたし

わかつたらホラ、構えろ

ヴェルフ! もう一回開始の合図を出してくれねえか!」

ヴェルフにそう頼むと彼は「よーい」と言いながら右腕をを上げ、「始め!」と振り下

ろした

【黒渦】

「ッ!？」

最初と同じでベルは前へ走り出そうとしたが左手を突き出して魔法を使おうとするヤミを見た瞬間、体は全く逆、大きく後ろへ飛んだ

そのままベルは右腕を突き出し

【ファイアボルト】!!」

渾身の魔法をヤミに向けて3連射する。狙いは胸、腰、足辺り

だが三つの炎雷はその三箇所が届く事はなく、ヤミが魔法を展開した左腕に吸い込まれる

「フンッ!」

ヤミは飛んでくる炎雷を闇を纏わせた左腕で全て上へ吹き飛ばす

「行くぞ」

それだけを言うのとベルに向かって刀を抜きながら高速で走る。もちろんベルはナイフを構え防御の姿勢を取る

ガンツ…ガガガガガガガガ

息つく暇もない斬撃の嵐、【強奪】で身体能力を奪われているベルは防ぐにしても一歩遅れる

「ほいつ」

「ぐっ…」

そして腹がガラ空きになったところにヤミの蹴りが炸裂する

防ぐことができなかったベルは後ろへ吹き飛び壁に激突することで勢いが収まる

「【アステロイド】」

「ぐうううう…！！」

無数の黒い粒子が出現し、そこから小さな弾丸が一発ずつ放たれる。ベルは避けられるものは全て避け、避けられないものはナイフで弾く

「そつちばかりに気を取られていいののか？」

「ツっ！」

近づいていたヤミが刀を横薙ぎに振る。ベルはナイフでそれをギリギリのところまで防ぐが

「おおおおおツつらああああ!!!」

だがそんな事を気にせずヤミは刀を振り抜いた。もちろんベルは吹き飛びまた壁に

激突する

その場にいた誰もが「ヤミの勝ちだ」と思った。だがその考えはベルから聞こえた鐘の音で掻き消される

「……良いぜ。お前がその気なら俺も全力で答えようか。ベル」

一発逆転のベルの切り札【英雄願望】アルゴット

それを見てヤミは笑い、魔力を刀に集中させる

チャージ時間60秒。そこでベルは右腕を突き出す

それに合わせて待ってましたと刀を上突き上げる

「闇魔法・闇纏——」

「ファイアボルト」オオオオオオ!!!」

溜まりに溜まった巨大な炎雷がヤミに向かって突き進む

ベルとヤミ以外のその場に居たものは息を飲む。「これならば、十分勝機がある」

「——次元斬り」

【悪魔】の理不尽な一撃が振り下ろされた瞬間、ベルは残った力で横に飛びのく

すぐに【英雄願望】による反動が来るが構わずヤミを見た

そこには見事に真つ二つにされ、ヤミを避けるように分かれる魔法があった。地面は焼かれヤミの立つ足場だけが綺麗に残っていた

「まだやるか？ベル」

「…降参」

こうして模擬戦はヤミの勝ちで終わった

「ヤミ様、ベル様。何が言う事はありますか？」

「ありません」

現在俺とベルは二人揃ってリリから説教を受けている

なぜって？そりゃあお前…

ベルは真つ二つになって消えたから良かったのだが、下手すれば大惨事になってたし、俺は下手すればベルが死んでた事に加え、空間ごと斬る【次元斬り】のせいで堀の一部が切れてしまったんだよ？

ベルとお金にうるさいリリが黙っているわけないじゃん

「…ちよつと待て、俺もベルの魔法直撃したら死んでただけど…」

「……うるさいです！反省してください!!」

「あつ！リリお前、鼻屑してないか!?!いやしてるよな!?!」

一瞬の間を俺は見逃さずリリに詰め寄る

二人でわちゃわちゃしていると

「プツ…」

あははは！

ベルが笑った。口を開けて盛大に

「どうしたんだいベル君？いきなり笑い出して」

そんなベルを見てつられてヘステイア様が心配そうに尋ねると

「いやあ、ヤミさんってやっぱりヤミさんだなあって思っただけです」

「いや、それこの状況見て言っただけじゃないよな？怒られるのは俺って定着してるわけじゃ無

いよな？」

そう聞くと「さあ？」と誤魔化してきた。そのあと少しわちゃわちゃし、落ち着く

と

「んじや、夜も遅いし風呂入って寝る」

「そうだね。おやすみ」

「ベル君！君が望むならボクは君と寝るよ！」

「あ！ずるいですヘステイア様！ベル様！ベル様とはリリが!!」

……今日の終わりも「ヘステイア・ファミリア」は平和だ

第67話新団員

「ゆ、夢じゃないよね……?」

ベルが眼前の光景に、喉を鳴らす

正門が解放された事で、屋敷前の庭には大勢の亜^{デミ・ヒューマン}人が溢れていた

館の玄関前にいるベルはその人集りに間抜けな面を晒して立ち尽くしてしまう

「現実さ、ベル君……ここにいる子達は、みんなボク達の「ファミリア」を選んでくれたんだ!!」

呆然とするベルの隣で、ヘステイアが見よとばかりに手を広げる

ヘステイアが提示した「ヘステイア・ファミリア」の宣伝を見聞きして、今日、五十人を超す入団希望者がベル達のホームに集まったのだ

「戦争遊戯に勝利した事で一躍有名になってしまいましたからね。特に、オラリオに來たばかりの新人冒険者の目には魅力的に映ったのでしよう。今、一番勢いがある派閥だと」

ヘステイアとは反対側にいるリリが、こうまで入団希望者が殺到した理由を話しているとググツと扉が開き、ヤミが現れた

くここからヤミ視点く

「おう、お前ら。中は準備出来「うおおおおお!!ヤミのアニキイイ!!」…なんだあ?」

俺の声を遮って聞こえた声を探す。…集まった者達が叫んだ者を見ていたためすぐに見つかった。つーか目立ったやつだった

青色の立派なリーゼントに、上着の前を全開で開けているヒューマンだった。しかも目つき悪い…どこからどー見ても不良だ

「えっと、叫んだのはあの人だよね?」

「そうだね。あつ、めちやくちや手を振ってるよ?知り合い?」

「いや、知らねーよ。あんなやつ」

「ほえ…なんだかヤミ様とつるんでそんな感じですね」

他の三人が気づきそれぞれ呟く

てかりり、つるむってなんだつるむって……

「よし、準備は出来た事だし、今からボクが一人一人面接して、適性を見る!」

「えっ……み、みんな入団させるんじゃないですか?」

ヘステイア様が意気込むとベルが驚きの表情をして問いかける

するとヘステイア様は淡々と答えた

「神にも好みや司る事物があるように、それぞれ〔ファミリー〕には独自の規律、特色つてものがある。反りが合わない子を迎えても、逆に苦痛を与えてしまうだけだぜ、ベル君？」

「それは…」

「それにね、ボクは神だ。向き合えば子供達がどーいう人物なのかはほぼ一目で見抜ける。神には嘘はつけないし、ね。悪人はもとより、〔ファミリー〕の風紀を乱す子はお帰り願おう」

ふむふむと俺は納得したが、ベルを見ればまだ『全員迎え入れたい』といった感じだ
「……それに、サポーター君のような子は嚴重に取り締まらざるをえない。これ以上ベル君に色目を使う泥棒猫やからを増やすわけには……」

「聞こえていますよ、ヘステイア様」

ヘステイア様とリリがギャーギャーしているうちに集まった者達を見るとあることに気づいた

「よく見ると亜人もいるが、ヒューマンが多いな。6対4くらいか？ やつぱベルが団長やつてるからか？」

「そ、それならヤミさんも副団長じゃん」

神様の指名と、『改宗』ではない元々の眷属という事で〔ファミリー〕の団長、副団長

には俺達に白羽の矢が立っていた

派閥別の入団傾向の中で、首領が己と同じ種族だと入りやすいという【ファミリア】の法則が少なからず存在するらしいがそのせいなのだろうか？

「それじゃあ、そろそろ面接を開始するかな！」

考え込んでいるとリリとの喧嘩が終わったヘステイア様が意気揚々と口を開いた

正面玄関の位置から俺、ベル、リリと一緒に前へ進み出る

人集りの視線が集まる中、ヘステイア様は満を持して入団式の刻限を告げようとした

「へ、ヘステイア様あー!？」

そこに二つの重なった叫び声が響いた

振り向くと、屋敷からヴェルフと命が飛び出してくる

玄関が勢いよく開け放たれると大慌てで走ってきた

「に、に、荷物の中からっ……!!」

冷静さを失った表情で息も絶え絶えになりながら命が右手に持っていた用紙を突き出した

「借金『二億ヴァリス』の契約書があー……!？」

瞬間、その場にいた全員の時が止まった

「ぶっ!？」

眼前に突きつけられた高級紙にヘステイア様が嘖き出す

「は？」とリリは固まり、ベルは凍結し、俺は書かれている桁を数えた

一、十、百……………億

何度も数え直すが変わらない。赤い血の色で記される事項の数々は紛れもなく本物の『借金契約書』、丁寧コイネに共通語と【神聖文字ヒエログリフ】で綴られたヘステイア様のサインまである

用紙の片隅を見れば書かれていたのは「ヘファイストス・ファミリア」

それを見た途端に記憶を掘り返す

(いっただあ…一体いつこんな物を…)

考えた末に可能性は一つだけあった

(リリもいなかった時にヘステイア様が一週間開けた時があった。帰ってきた時にヘステイア様は…………)

ちらつとベルがあの時ヘステイア様から受け取ったナイフ、『ヘステイアナ이프』を見た

「ふ、あー」

「ヘステイア様あ…これは一体どーゆー事かなあ？アハハハハハ」

「べ、ベル様!?!ヤミ様!?!」

「おい、嘘だろう……?」

ベルは天を仰いで地面に崩れ落ちながら気絶し、俺は壊れた。それを見たりりが悲鳴を上げ、更にヴェルフの引きつった声が落ちる

そしてそれが契機だったかのように、前庭は瞬く間に阿鼻叫喚の絶叫に包まれた
ザザーツと波のように入団希望者が大移動する音

白日の下に晒され「ファミリア」の借金額に、誰もが俺達の前から姿を消した

たった一人を除いて

「どーいうことですか」

「説明しろ」

俺とりりの声が響く

あれから半日が経ち、既に窓の外は薄暗い。夜が間近に迫っていた

「後始末やベル様の看病で遅れてしまいました。しっかりと聞かせください。例の契約書について」

「あ、あれはボク個人の契約書というか、その、「ファミリア」に直接害があるわけじゃあ……」

「その害のない契約書のおかげで入団希望者はゼロになったんだが？」

「眷属の契りを交わした我々に説明するのは、主神様の義務です」

うぐつ、とヘステイア様が詰まる

我を忘れていたとはいひ公衆の面前で借金を暴く真似をしてしまったヴェルフと命は申し訳なさそうにしているが、やはり説明を待っている

すると観念したのかヘステイア様はぽつぽつと話し始めた

「実は……ベル君のナイフをヘファイストスに作ってもらった時、色々あつて……」

この後ヘステイア様は正直に話してくれた

神友であるヘファイストス様に無理を言つてナイフを作ってもらったこと、世界に一

振りしかないベルのナイフは恐らく鍛冶神様しか作れず……要するに前に超が100

個くらいつくほど貴重つてことだ

そんな武器の代償が途方もない借金ローンらしい

「……なるほどよくわかった。んで、どうする？唯一残った入団希望者」

そう言つて椅子に座つて待つてくれている入団希望者を見る。あの時俺を呼んでたリーゼントがキラキラした目でこちらを見ていた

「……面接。しようか」

「問1」名前と出身地と歳を教えてください

「オガ・アーチスですッ!! 最近西の村からオラリオへ来たっすッ!! 16歳っす!」

「問2」何故オラリオに?

「親父、おふくろ、妹がいるんですが家族の為にお金を稼ぐ為にオラリオへ来ました!!」

「問3」趣味は?

「捨て猫に飯をやる事っす!!」

「問4」何故「ヘステイア・ファミリア」に?」

「戦争遊戯を見たんですが、その時にヤミのアニキの強さに惚れてここへ来ました!!!」

「問5」ヘステイア様をどう思っている?

「可愛い人だと思っっています!!!」

「問6」ベル・クラネルをどう思っている?

「人の良さそうな先輩です!!!」

「問7」借金があるけどいいの?

「大丈夫です!! 自分は望んでここへ来たんですから、曲げるつもりはありません!!」

それを全て聞いたヘステイア様はゆっくりと口を開いた

「……合格だ。ようこそ、「ヘステイア・ファミリア」へ」

第68話追跡

オガを仲間に加え、集まっているとリリが前に出てくる

「では「ファミリア」の現状と、方針の確認です。目下目標は十分な生活費の確保にギルドへの税に備えた貯金、約100万ヴァリス。これ以上の借金を増やさないため、資金集めは必須です」

「今後の派閥の活動も、迷宮探索が主導というわけですね」

「探索の効率を上げるためにも、派閥と団員の強化は急務だな」

「もう難しいかもだけど……団員の勧誘を積極的に行っていく、って事だよな？」

「ワクワクしてきたっすね!! ヤミのアニキ!」

「ワクワクすんな。つーか誰がアニキだ」

リリ、命、ヴェルフ、ベル、オガ、俺と順々に発言して情報を共有していく。結果、とりあえず俺はオガを鍛えて欲しいとの事だ

最後にベルが団長という事で「頑張ろう!」と号令をかける

おーっ!と全員が返事をする

「よし! そうと決まれば今日は精のつくものを一杯食べて、明日に備えようじゃないか

「ヤミ君頼んだぜ!!」

「言ってる側から無駄遣いしようとしなくてください!! 今日から少しでも節約ですつ、ヘステイア様は浪費癖が酷すぎます!」

「おいおい、堅苦しいことを言うなよ! いいだろう、今日くらい!」

「ダメです!! もうヘステイア様は信用できません!! リリがファミリアの資産を管理します!!」

ギヤーギヤー争うヘステイア様とリリをなだめた後、オガという新人が入ってきたというところもあつて今夜はごちそうを作ることになった

【購入】で出した肉や魚の調理を手伝ってもらい、完成した料理を囲む。メニューはテリヤキチキン、刺身、味噌汁、御握り、ジャガ丸くん、そしてそれらに合いそうなお酒

ぐぬぬと唸るリリも命に勧められてテリヤキチキンを食べるとすぐに笑顔となり、ヴェルフは刺身と共にお酒を飲み、ヘステイア様もジャガ丸くんを頬張る。オガは少々戸惑いながらも料理を口にする^と勢いよく食べ出した

「ヤミさん」

「なんだベル坊」

楽しそうに食べる周りを見ていると隣にいたベルに声がかけられた

ベルを見ると俺に向けて笑顔で口を開いた

「オラリオに来て…この「ファミア」に来てよかった」

「……そうか。俺もそう思う」

この賑やかな食卓は夜遅くまで続いた

「引越しを手伝おうか？」と聞くと「今日で終わるから」と返され最初の予定通りオガを鍛える事になった

「ヤミのアニキに鍛えてもらえるなんて…！自分、感激しています!!」

「わかったからさっさと来い」

お互い木刀を構えているがなんかオガは泣いている

俺に言われオガは泣くのをやめると「行きます!」と全力で突っ込んでくる

「うおおおおおおお」隙だらけだ「ギャフン!?!」

いきなり隙だらけの大振りで振ろうとしていたため、まず横腹に一撃くらわせると、

綺麗に飛んだ

「おーい、手加減しといたから大丈夫なはずなんだが…大丈夫か?」

「大丈夫です!どんどん行くっす!!」

そう言うつてすぐにオガは起き上がり、また木刀を構える。そしてまた大振り、今度はカウンターではなくしつかりと木刀で受ける。もちろん受け止められたが

「(Levelにしては…重い。この『力』に技術が入ったらどうなるんだろうな…) オガ、お前実家で鍛えていたのか？」

「はい！前からオラリオへ行くと決めていたので！」

オガの言葉を聞くと「そうか」と返してそのまま続けた

稽古が終わりオガと離れるとオガについて考えてみた

良い点はまず『力』。あれは研ぎ澄ませば相当なものになる

次に自己学習の速さ。あれから大振りが少なくなつて振りの速さが速くなつてた。あれはいい

最後にタフさ。何回打ちのめしても立ち上がってくる

悪い点は…防御を考えてない所だな。攻撃しか考えてない

何故防御しないのか聞くと『だつて、倒れるより先に倒した方が勝ちじゃないですか！』だ。

脳筋つてやつだな。こりゃあ早めに治しかねーと

「きよ、今日は早めに就寝させてもらいまーす」

ホームで夕食を終えた後

5人しかいないリビングで命が開口一番にそう言った

ヘステイア様はバイトの残業に勤しんでいる。今になってやる気を漲らせるヘステイア様は借金返済に燃えていた

空々しく聞こえる少女の言葉に気にする素振りも見せず、俺達は「お休みなさい」と見送った

命はリビングを後にして、階段を登り、三階の自室に向かう……だが途中で進路を変え、音もなく二階の廊下を駆け抜け、窓から飛び降り、裏庭の隅に着地する

リビングの灯りがついていることを確認した後、コソコソと、裏門から出て行った

「よし、追うぞ」

「尾行は盗賊業ひびき以来びきですなー」

「なんか、ワクワクするっすねえ」

「お前いつもワクワクしてんな」

「い、いいのかなあ……」

そんな命の姿を俺達はしつかりと補足していた

あらかじめ戸締りを行い、リビングの灯りをつけたまま屋敷の外に待機していたのだ
「街の様子が気になつていようでしたが……案の定、でしたね」

「あれだけチラチラ窓の外を眺められたら、気づくだろう、普通」

俺とオガは稽古のせいで知らなかったが、今朝に千草と会話をしてから、これ見よがしに挙動不審となつた

夕食の時にも落ち着きなく幾度と街並みを見つめるその姿に、何か行動を起こすと見抜いたヴェルフとリリは、俺達3人を巻き込んで、いつでも尾行できるように備えていたのだ

いくら問いただしてもすつとぼける仲間の不審な行動を、見逃すわけにはいかなかった

「よし追うぞ」

「「おーっ!!」」

「いいのかなあ……?」

そのまま命をつけていく。焦っているのか注意が散漫になつているのかはわからな
いが尾行に気づいていない。物陰に隠れては移動、偶に影に隠れては移動を重ねるうちに

南のメインストリート、繁華街に到着した

大劇場や賭博場、高級酒場。派手な建物が並ぶ大通りは、身なりのいい商人や冒険者、更に神々でこつた返している

そんな都市活況の心臓部を他所に、命は大通りから道を折れ、とある路地裏の店頭にたたずんでいた少女と合流した

「あれは千草様？命様とお二人だけでしようか？」

「あ、移動するみたい……ここからどこへ行くんだろう？」

神妙な顔で頷き合った極東出身の少女達は、その場から離れ出した

建物の陰から目を凝らして観察する。途中中人達から胡散臭い視線を寄せられたが睨み付けるとすぐにそらされた

そうこうしているうちに繁華街から離れていき、二人は薄暗い小径の先へと進んでいく

「……おい、この方向は、まさか」

ヴェルフが唐突に顔を上げた

ターゲットが向かっている、都市南東部の方角を見据え、硬い声を出した。リリも気づいたのか、と体を揺らす。エイナさんからその場所を聞いていた俺もそれを察知

土地勘がないオガや純粋なベルは何もわかっていない表情を浮かべた

「ベルツ、お前はここで帰れっ」

「ベル様っ、帰ってくださいっ」

「オガ、ベルを連れてホームに帰れ」

急いで三人で早く帰るように促すが

「えっ、えっ?なんで、なんでっ?」

「なんでなんすか!?!めちやくちや気になるっす!!」

むしろ二人の興味を引いてしまった

それを見て俺達は必死に説得を試みた

「いいから聞けっ。お前にはまだ早い」

「むしろベル様が来ていい場所じゃありません!」

「頼むから聞いてくれ二人共、お願いだから」

そうこうしているうちに奥へ行く命達を見失いかけてしまう

「あー、くそ。諦めろ二人共、追うぞ」

「うゝゝゝ?!命様、よりにもよってどうしてあんな場所に……!」

「……社会見学って事にしておくから、さっさと来い。逸れるなよ」

そう言つて結局ベルを連れて命達を追うのだった

第69話R18の世界はベルには早い

「ハハ、ハハは……」

「な、なんかんすか?」

道が開けたことで現れた目の前の光景に、ベルとオガは顔を引きつらせた

現在地は都市の第四区画、その南東のメインストリート寄り。そこは『夜の街』、背中や腰を丸出しにしたドレスで着飾る蠱惑的な女性達の街だった

アマゾネスを中心に、ヒューマン、獣人、小人族まで揃った女性達が道を行く男性を呼び止めては魅惑的に、あるいは挑発的に微笑んでいる

「あ、あ、あの人達って……」

「女の人が……女の人が……」

ベルが大赤面しながら情けない声をこぼす。オガはベルと同じで赤面しながらブツブツ呟きながらブーツとしていた

「……この匂いは、どうも慣れないな……」

「うん。なんか吐き気がしてきた。慣れたら治ると思うが……」

あー……エイナさんに歓楽街を教えられた時、『絶っつつ対にベル君には教えないよう

に!!ベル君が興味持たないように、ヤミさんも行かないように!!』つて釘を刺されてるんだよなあ。ついでにヘスティア様にも……ハハハ、死んだな

「オラリオに……こんな場所が、あつたの?」

己の死期を悟っているとベルがまだ赤面しながら聞いてきた

「この区画は大通りも含め、日が出ている内は扉も窓も閉めきつて閑散としています。ベル様がご存知ないのも当然です。ヤミ様は知っていて当然です」

「まるで俺は『ここじゃあ常連』みたいな言い方だが、初めて来たからな?」

そんな会話をし、ベルとオガを連れて、前方にいる命達の追跡を再開した

「カイオス砂漠文化園に、海洋国地方の建築様式……相変わらず、ごった煮だな」

「迷宮都市は『世界の中心』ですからね。娼婦達も大陸中から来ると聞いたことがあります」

「客を呼び込むために必死なんだよ。建物も女も……おいお前ら、いつまで赤面してんだ。置いてくぞ」

そう言つて多種多様な建物が並ぶ街を通つて追跡を続ける

だが流石にベルとオガには刺激が強すぎたのか固まっていたため声をかけながら進んだ

「お兄さん。こつちによつてかな?」

「サービスするよ〜?」

「すまん。野暮用で来てるから無理だ」

所々娼婦達に声をかけられその度に断りながらも進み続ける

……アマゾネスが多いな。なんでだ?

「ヴェ、ヴェルフはここに来たことが……」

「ヘアリストス様の元にいた時、同僚連中に連れられた事はあったが、利用した事はなかったな」

ベルが尋ねると、ヴェルフは「肌に合わなかった」と辟易とした表情をする。彼の元にも娼婦達が甘い笑みと共に集まってくるが、億劫そうに押し返す

オガの元にも来ているが「すみません!また今度!!」ときっぱり断り、ベルの方は……リリが威嚇して遠ざけている

「ううっ……命さん達は、こんなところで何を……」

「こんな場所にうら若き乙女が足を運ぶ理由……まさか、お金のために体を?」

「マジっすか!?!」

「いや、そんな玉じゃないだろ、あいつらは」

「そうだな。ほら、ベル坊と同じように顔真っ赤だ」

途中で体へ手を伸ばそうとする男が現れると、命は「や、やめてください!!」と両

目を瞑ったまま反射的に吹っ飛ばした。それを受けた相手は昏倒してる

千草に至っては半泣きだ

「確かに、うぶ過ぎる命様達が娼婦の真似事などできる筈ありませんしね……しかし、それならどうしてこの歓楽街に？」

リリが疑問を呈していると、命達は移動を続け、南東のメインストリートに出た。人の多い中に入ったため見失いかけてしまう

「不味い、行くぞ」

「う、うん！」

間合いを有して追跡していた俺達は見失なうまいと、ヴェルフを先頭に駆け出した

メインストリートには先程よりも多くの娼婦が集まっており、呼び込みを行う彼女達の壁をかき分ける。四苦八苦しながらもなんとかくぐり抜けた

先程までと比べると明るさが増した街路をしばらく進むとすぐに二人を見つけた。

…ニヤニヤ笑う男神達に絡まれていた

【絶影】 たんに会えるなんて！」

「やっぱり黒髪はいいな」「極東っ娘萌えー」

「あ、あのっ、じっ、自分には重要な使命が……!?!」

壁際で半円状に包围し、自分達と遊ばないか、と誘いかけてくる神々

あわあわとする千草を背にした命も、流石に神相手では強く出れないようだ。神々に対して言葉に窮している

「…仕方ないですね。ヤミ様。出番ですよ！」

「えっ？ちよ……」

様子見をしているとリリにそう言われ「なぜ俺？」と抗議しようとしたがその前に「行つてこい」「お願いしますアニキ！」とヴェルフとオガに背中を押されてそこに出た。ここまでできたなら「仕方ない」と腹をくくって命達の元へ向かった

「おーつす命！どうしたこんな場所で？」

「ヤ、ヤミ殿!？」

偶然通りかかった感じで話しかけるとやはり命達は俺を見て驚く

それにつられて男神達もこちらを見た

「【悪魔】^{デーモン}!？」

「やっべえ、そういえば【ヘスティア・ファミリア】なんだっけ…」

「やっぱ怖ええ…殺されないよな？」

「殺されなくても、デコピン一発でLv2の冒険者吹っ飛ばすやつだぞ？」

「…逃げるか」

男神達は口々にそう言うスタコラサッサとその場を後にした

【冒険者の天敵】（自称）舐めんなよ。

「流石ですね。ヤミ様

神々ですら恐怖させるとは……」

「……泣いていい？」

「大丈夫です。ヤミのアニキ！アニキは良い人だって自分達は知ってますから!!」
落ち込む俺をヴェルフとオガが励ましてくれる

「ど、どうしてここに……」

神々から解放された命は、千草と共に狼狽ながら声を絞り出す
向き直ったリリは嘆息した

「命様のご様子がおかしかったので、失礼ですが付けてきました」

「一連托生の【ファミアリア】になったんだ、隠し事はするな」

リリ、ヴェルフと言葉を告げられ、命は「うっ……」と肩をすぼめる

「あ、あのっ、命は責めないでください……元はと言えば私のせいで……」

揺れる前髪から片方の瞳をのぞかせながら、千草が歩み出る

何故こんなところに？と聞くと説明してくれた

最近、命達の故郷。極東の知り合いと似た人を、歓楽街で見たと千草が交流のある冒

険者から聞き、居ても立っても居られなくなったとか

そしてその人は数年ほど前から行方知れずだったらしい

「確証もない情報というのもそうだが場所が場所だけに俺達を巻き込むわけには行かず、今に至る

「あの大男はどうした？あいつも同郷で、腐れ縁だろう、連れてこなかったのか？」

「そういえば、とヴェルフが桜花の事について聞いてみると今度は千草が赤くなつて、うつむいた

「お、桜花は、歓楽街に、連れてきたくなくて……来てほしく、なくて……」

「あの、千草殿は桜花の事を幼馴染としてではなく、その……異性として」

さらに千草が赤くなり、もつと下へうつむいた

「そういうことかと納得した俺達はわざわざ命を頼った疑問を氷解した

千草の乙女心を見てリリも「仲間が出来た！」という風にウンウンと頷いた

「あの……ヤミのアニキ？オウカって誰なんすか？」

「あ……知り合い……あつ」

後ろにいたオガに適当な説明をしながら振り向くとあることに気づき、額から汗がダラダラで始めた

俺の声を聞いたみんなが「何事？」とこちらを見てくる

「ゆつくりと俺はみんなにそれを伝えた

「……ベル坊が、いない」

それを聞いた瞬間、ヴェルフは声を失い、リリは蒼白となり、オガも「あつ」と声を漏らす

『探すぞ!!?』

「集合場所は朝までに〔ヘステイア・ファミリア〕のホームで!!!」

『了解!!』

集合場所を伝えてから一斉に俺達は歓楽街で散らばった

第70話野生児が現れた!

「すいません。あの…白髪のちっちゃい兔みたいなの見ませんでしたか?俺と真逆の優しそうなやつ」

『アンタと真逆?…ああ、あの子ね。さっき叫びながらそっちに走ってったよ』

周りの人にベルの事を訪ねる事10分、やっとベルを見た人を見つけ情報を手に入れた。しつかり「ありがとうございます」と言って『そっち』に進んだ

(にしてもあれだな、本当に人が多いな。その中にも美人さんがわんさか…つといかんいかん。ベル坊見つけねえと)

そんな事を考えながら走っていると団体のアマゾネスの女性達が目の前を横断して歩いていた

急ブレーキして回り込もうとすると、何か聞き覚えのある声が聞こえてきた
「違うんです違うんです!?!どうか話を!?!」

ベルを見つけたのは良いが、何故女性に引きずられているのか全くわからない

「……ベル坊何してんだ」

「あつーヤミさん、助けて!?!」

俺を見つけたベルが俺に応援を要請した瞬間、アマゾネスの女性達は一斉にこちらを睨みつけてくる

「ヤミサン？」

「黒髪に、その強い男を思わせる顔は」

「間違いない。【悪魔】ね」

20人ほどのアマゾネスの女性達が俺を凝視しながら口々に呟く

「すいません。ベル坊が何やらかしたのかわからんが、放してやってくれないか？」

とりあえず呟きを無視して女性達の中に入りベルを放してもらえるように説得を試みるが…

「こいつは私が見つけた獲物。誰にも渡さないよ。そうだねえ、どうしても返して欲しいってなら…」

力づくで奪いな」

「そうですか。では、遠慮なく……」

言われたなら仕方ないとベルをつかんでいた女性の腕を掴み引き剥がそうとする

だが、外れないそりやそうだ。相手はLv3になったベルを片腕1本で引きずつてた奴だ。多少強くても同じLv3の俺の力が通用するわけがない

【強奪】

小さな声で魔法を発現させ、力を奪う。目の前の人だけではなく他の者からも。引き剥がす力が上がった瞬間、腕を掴まれている女性は不敵に笑った

「へえ、アンタ。強いんだ?」

その瞬間に俺は咄嗟に手を離し、頭を引いた。すると顔面スレスレで足が通り、風圧が飛んできた

「確かに『力づくで』とは言ったけど、抵抗しないなんて言っていないよ?ああ、忘れてた。私の名前はアイシヤね」

笑いながら淡々と自己紹介も含めてそう言う

さて、どうやってベルを取り返すか悩んでいると不意に両腕が誰かに掴まれる

「強い男は大歓迎!!」

「捕まえたもん勝ちだー!!」

アマゾネスの二人だった、すぐに力で振りほどこうとするが

(力強え:Lv3相当か?さっさとおさらばしたいしここは魔法で…っと)

「うわあ!」

気づかれない程度の範囲の闇を発動させ、一気にぶん投げる。しかし彼女達はバランス良く空中で体制を整えると綺麗に着地する

周りに気を配れば全てのアマゾネス達が俺をギラギラ見ている。それを感じながら

警戒してどう打破するか考えていると

プスツと

チクリとも言える首筋の痛みが俺を襲った。その瞬間に体の力が抜けて、立っていられなくなる

「生憎と、私達はさつさとやりたいわけ

安心しなよ。すぐに動けるようになる」

そう言つて俺から抜いた針を見せつけながらアイシヤが話す

(麻痺の針とか、力ずくとか、どこの野生児だよ。いや、相手は野生児か)

そのまま動かない体を持ち上げられ、ズリズリと引きずられていく。「ヤミさん!」と焦るベルの声が俺に届くが、指一本動かせなため何もできない

その内豪華な宮殿に着き。やっと首くらいは動かせるくらいまで回復したため見ると他派閥のエンブレムがあつた

「お、お城……?」

ベルがそのホームを見て驚愕と共に声を漏らす。そうする間にも引つ張られ、開け放たれている大扉から、中へ連れて行かれる

宮殿の中は外観にも負けないほどの光景が広がっていた

今の俺達じゃ絶対に買えなさそうな高級な壺、絨毯などがそこかしこで目に入る

「アンタ達、本当に知らないのかい?」

拿捕している様子を見てアイシヤが笑みを浮かべる

「ここは私達のホーム女王ペーレト・パベリの神娼殿

この建物じゃない、ここらへん一帯は私達の島……イシユタル様の私有地さ」

引つ張りながら説明を聞いているとエイナさんから教えられた有名な「ファミリア」が脳裏に浮かぶ

「なんだ、お前達。ぞろぞろと集まって」

そこで丁度よく上の階から声が投じられる

顔を上げるとそこには絶世の美女とも言える女性が立っていた

美しい……という言葉は使ったことがないためよくわからないがこういったものに対して言うのだろう

ただいまー、と周りから呑気な声上がる中、喉を鳴らしていると

「その二人のヒューマンは……」

その女神の瞳が俺とベルに向けられ、ゾクリと震えた。目を合わせてはいけない気がした。だがそれも「いいんじゃないかな?」と思えてしまっている自分がいる

「イシユタル様は見ちゃ駄目ー!!」

「みんな骨抜きにしてっ、また奪われたら堪ったもんじゃないよー!」

女神の瞳が向けられた瞬間に「イシユタル・ファミリア」の団員達が一斉に殺到する
目を塞がれベルからは「ほわっ!」と奇声が聞こえる

「ふふっ……今度はこれから客が来る。今はそんな青い子供の頃に、構っている暇がない」

イシユタル様は鼻で笑う。興味なさげに歩み始め、青年従者を引き連れながら廊下から視界の外へ姿を消した

（さて、結構麻痺が解けてきたが……今動いた所で周りの数が多い上に、「強奪」の反動が来てる。慣れてるからある程度動けるようになったが鈍くなってるし、今は動かない方がいいな）

そう考えている内に3階まで階段を登ると、すぐ近くの部屋の扉が開け、中にあるソファアームまで突き飛ばされる

二人揃ってソファアームに受け止められ、慌てて身を起こし警戒体制に入る。匂いがキツイ、歓楽街に来た時以上の匂いが立ち込めていた

「麝香の匂いだよ」

アイシヤが対面のソファアームに腰を下ろす。他のアマゾネスも椅子を持ってきて取り囲むように座った

「なあ、なんで俺達は連れてこられた?何かしたか?つか、ホームにこんなろくでなし

と青二才を連れてきて良いわけ？」

「構いやしないよ。冒険者なんて毎晩のようにここへ連れ込んでる

——無理矢理ね」

間髪入れず返事を返してきた

少なくとも俺達は敵であるため、それを招き入れるという事はつまりここで暴れても

……

「文句は言わないよ

戦^やるつてなら、上等だよ。ホームの中だろうと寝台の上だろうと、いくらでも受けて

立ってやる」

ハツハツハ。テイオナと訓練した時に思ったけど、アマゾネスってやっぱ野生児多い

んだな

こりや何言っても無理っぽいわ。主神様も俺達受け入れてるし

「ど、どうすれば、僕達を返してくれますか……?」

半端諦めていると隣のベルが半泣きで、怯えながらも訪ねた

するとアイシヤは溜息一つ吐くと口を開いた

「……イシユタル様のお膝下で、高級娼館、なんて名乗っているがね……お高くとまるつ

もりなんてさらさらないんだよ。私達アマゾネスは」

質問を無視した回答を返してくる。それに対して狼狽しているとアイシヤはニヤリと笑い続けた

「ホームで知りもしないやつを大人しく待つなんて、私達にはできない。強い雄は自分で探す

アマゾネスの習性を知らないのかい？男を攫って……食っちゃうのさ」

アマゾネス

子は女兒しか生まないという亜人

要するに子をもうけるためには、多民族の男が必要なのである

つまり……俺達は今から美味しくただかれるという事だ

「勘弁してください……」

「諦めな」

第71話ガマガエル

逃げたいが周りに女性ケダモノしかいないため逃げられる気がしない。どうにか隙さえあればベルを連れて窓から逃げられるのだが……

そんなことを考えている間にもケモノ達はジリジリと近づいてくる。なんだかデカイ足音も近づいてくる……足音？

「やばい、アイシャ!? フリユネがここに来る!!」

扉から一人のアマゾネスが飛び込んでくる。その顔には焦燥が滲んでいた

だがアイシャ達はその報告を聞いた瞬間に目の色を変えて「こっちに来い」「隠れろ」とソファアールから立たされたが

それが来る方が早かった

轟音を伴って、扉が宙を飛んだ。飛んできた扉は俺の方に飛んできたため右手を差し出してそれを受け止めた

「若い男の匂いがするよぉ〜」

受け止めたドアの向こうでこれをやったであろう女の声が聞こえた……

姿を見るためにドアを下ろすとそこにはあのイシユタル様と真逆の醜いと言える者

がいた

身長は俺を超えて多分2Mはあるんじゃないだろうか

短い手足は太っているのかと思つたがよく見れば筋肉の塊

身の丈もさることながら横幅も太いずんぐりとした体型

おかつぱ頭でギョロギョロと蠢く目玉に横に裂けた口が特徴の大きな顔

「…俺もよく言われる言葉をこの人？に送るわ『人間か？』」

周りのアマゾネスの人達に聴くと「気持ちわかります」と言つた感じの表情で頷いてくる

『ヤミよ、みるんじゃない！仮に人間であっても、あんなものが女ではずあるがないじゃろう!』

なんだか記憶の中で生きるじいちゃんが顔面を蒼白にしながら失礼な事を言つていく気がしたが無視した

…いや俺も失礼な事言つたけどさあ？

「ゲゲゲゲゲッ！男を二人も捕まえてきたんだって、アイシヤア〜」

見た目に合った蛙のような声にアイシヤは舌打ちした

「何しにきたんだ、フリユネ」

「お前達が寄つてたかつてガキを連れてきたって耳に挟んでね、興味が湧いたのさあ〜」

アタイにも見せなよ」

そう言いながらフリユネと呼ばれたガマガエ：違うアマゾネスはのっしのっしと短い足を動かして歩いてきた

テーブルとソファアをまるでないかのように蹴飛ばし、真っ直ぐムって来る

そして隠されている俺達を見つけて、にいゝと不気味すぎる笑みを浮かべた

「ヘステイア・ファミリア」の『兎』と『悪魔』じゃないか！兎はまだまだ青臭いガキだけど：悪魔は食べごろだねえ：」

ゲゲゲゲ!?と笑いながらそう言われて吐き気が来た

散々悪口を「怖い」などの言葉を吐かれてきて中々に耐性がついた筈の俺の精神がたった一つの言葉で崩壊寸前まで追い込まれた。この人、只者ではない

だがまだ拷問のような言葉は続く

「押し倒した体に跨って、その顔をめちやくちやにして……そそられるじゃないかあゝ」意識がなくなりかけた

押し倒される？跨る？冗談じゃない

絶望の表情でめちやくちやにされるわ

絶望に浸っている俺とふらつくベルを背後に押しやり、アイシャ達は前に出た

「チャンスだベル坊。ゆっくり窓に近づいて飛び降りるぞ」

「え？ああ、わかった」

前に出た事で後ろがガラ空きなため、ベルに伝えてからそろそつと後退する。その間にもアマゾネス達の口喧嘩が続く

「アタイ等流で白黒つけようじゃないか……それとも怖いかあ？」

「上等だよ、ヒキガエル」

フリユネから出た提案にアイシャが頷く。その瞬間に蚊帳の外にされていた筈の俺達にアマゾネス達の視線が集中放火された

「飛び降りるぞベル坊!!」

「うん!？」

俺の合図で壁の窓に突っ込みその場から逃げる。空中に身を投げ出し、上を見るとアマゾネス達もその破った窓から降りてきていた

地面が近づいてくるが、ダンツ！と綺麗な着地を決めてベルと共に走り出す

「待ちなあ!!」

すぐに後ろから聞こえてくる着地音と共に怒鳴り声が聞こえてくる

振り返って迎撃したいが振り返れない。つーか、振り返りたくない。怖い

歓楽街に舞い戻ってもまだ後ろから聞こえてくる足音が消えない

「ベル坊！一人で逃げ切れるか!？」

「無理無理無理イイイイ!!? 一人にしないでえ!!」

隣のベルに尋ねると全力で首を振り涙目でそう言ってくる

そもそもの話、ベルを見つけるために探していたのにここで別れたら本末転倒だ。さてどうするか…

「ーゲゲゲゲゲゲッ!!」

俺達の『敏捷』に負けずに距離を縮めてくる人物の音が後ろから聞こえてきた。走る俺達に影が重なる。上から何か落下してくるのがわかった

「逃がしやあしな「オラア!!」ガフツ!!」

落ちてくるフリユネを振り向きざまのハイキックで吹っ飛ばす。もちろん闇を纏わせているため高い『耐久』など無意味だ

傷は…:蹴りだし、壁にぶち当たろうがLv5だ。傷ついたとしても口を切った程度だろう。大丈夫大丈夫

「えっ? フリユネ…が」

「Lv5…でしょ?」

Lv5がLv3に負けた光景を見て背後に続いていた者達は口々に呟くと…視線は俺に注がれる

『絶対にあの男は捕まえる!!』

…メラメラと闘志が燃え上がった

やべえ、アマゾネスの本能に火をつけた感じか？これ

「本当にLv5を一撃で…噂は本当だったんだねえ

今ならフリユネはいない！さっさと捕まえていただくよっ!!」

『おおっ!!』

アイシヤが叫ぶと他のアマゾネス達も全力で追いかけてくる

だが速さに置いてはベルは圧勝とは言えないまでも、勝ち。俺はベルには劣るが勝ちの上、【強奪】がある

「よいしょ〜!」

「おぶ!」「ヤミさん!」

突然ジャラツと足元に鎖が来たかと思うと俺の左足に巻きつき、引つ張られた。当然俺は転び、ベルが動きを止めようとするが

「行けえベルウ!!俺の屍を超えて行けえ!!」

「や、ヤミさん……ごめん……!」

俺を置いてベルは走って行った。頑張れベル。お前だけは生き残るんだ……

「…アイシヤは先回りするために数人連れてここから離れちゃったし、フリユネはこの男が倒した」

「私が捕まえたんだから私から!!」

「あーもう、うっさい!!」

振り返れば6人のアマゾネスがこちらにコツコツと歩いてきていた

その間に足に巻きついていて鎖を刀を抜いて切る事で鎖を解く

最後まで抵抗を見せる姿を見てニヤリと女達が笑う

「イイねえ…さっそく頂いちゃいましょうか♪」

「すみません。逃してくるなんて選択は…」

「「ないよ」」

【領域】を使えば目の前の6人以外にも隠れてこちらを伺っている者が確認できる。逃げられない。刀で下手に傷つけば前みたいに【ファミリア】の問題になりかねない

ああ、終わった。せめて初めては…「アニキイイイイイイイ!!!」

突如として声が聞こえてきたかと思うと何かが降ってきた。それは着地と共に派手な砂煙を上げ、煙が晴れると立派なリーゼントが目立って出てきた

「大丈夫ですか。ヤミのアニキ!?!」

「オガ。なんでこんなトコに……」

武器はまだ買ってないため練習用にあげた木刀を片手に持ったオガが来た

「助けに来「L V I J じゃ無理だ」マジっすか!?!」

「マジだ。つーわけでもいいところに来た。木刀貸せ」

そう言つて手を差し出すとオガは素直に木刀を差し出す。それと同時に心配の声をかける

「…刀は使わないんすか？」

「下手に体に傷残すと『ファミリア』の問題とかになる。それに女の体に傷残すと男としてアレだしな

まあ見とけ、そんで学習しろ。お前が尊敬してるやつが強さはどんなものか…てな？」

木刀を受け取るとそう言いながら向き直り、目の前の女達に突きつけ、ニヤリと笑いながら口を開いた

「来いよ、相手してやる

俺の武器は見ての通り木刀、死ぬ事はないから安心しな」

「『じゃあ遠慮なくっ!!』」

一斉に女達が獲物である俺に向けて飛び込んで来た

第72話腹が減ったby作者

また鎖が飛んで来た。だが2度も同じ手を通じるわけがないためそれを左手で掴む。その隙に他の者が俺に襲いかかってきたが

「よっ」

回転しながら闇を纏わせた木刀でぶっ叩いて気絶させる。その際に持っていた鎖が引っ張る

「うわあああ!?!」

なにぶんいきなりなため、鎖に引っ張られた人がこちらに飛んで来ていた。この人もハイキツクを食らわせて気絶させる

「さあて、さっさと全員来い」

不敵に笑いながらそう言った

「これで良しっつと」

「さすがアニキ!!」

残りのアマゾネス達を倒して闇を付与させた鎖で縛る。数分したら解けるため大丈夫

夫だろう

「さつさとここから逃げるぞ。女はもうこりごりだ」

「でも、俺達のホームって半分くらい女つすよ？それにベル先輩は……」

…あ、やべ。ベル逃げ切れたかな？逃げ切れてなかったら殺される。誰にとは言わな
いが殺される

生きてて？お願いだからベルは生きてて？

オガの言葉を聞きそう心で願いながら空を見る。もうそろそろ朝だ
つまりはみんな約束通り集まる時間である

ホームに帰った。アイシャ達に見つからなかったのは運が良かった。その後がやば
かった

「で？説明してもらおうか？」

俺達の目の前には修羅がいた。ベルもなんとか逃げ切れたようではあるが、朝帰り
というのが問題であつたらしい

「オガ君は良いんだ。ヤミ君を探すために歓楽街で走り回っていたんだから……けど、君

からはいや、君達からはオガ君よりもキツイ甘い匂いがプンプン来てるんだよ」

気づいていなかったが、匂いが染み付いてしまったらしい

「いや、ヘステイア様？俺達女に追われてたんですよ。なあ？」

「そ、そうです」

「オガは俺が戦う瞬間を見ているし……」

そう言っているとヘステイア様が口を開いた

「いや、ヤミ君の朝帰りは問題じゃあないんだよ。まずはこれを見るんだ」

えっ？という顔で俺達が首を傾げているとヘステイア様はリリから小瓶を受け取り見せつけた

「これは、なんだい？」

ヘステイア様が見せるのはチェスの駒によく似た容器、ラベルに書かれていた文字は——『精力剤』

「え……？え？アレ、誰の？」

「その反応……嘘ではないね。てつきりヤミ君からの経由でベル君が手に入れたのかと思っただけど……」

…!?

ベルって言った!?

ベルが持ってたの!?

その薬?!

「ベル坊の心は純粋だと思っていたのに。まさか……」

「ヤミさん違うよ!?! 歓楽街で貰って……」

「じゃあ誰からだ? 言ってくれ。ちよつくらそいつシバいてくる」

「……………」

ベルが無言になり、ガクリと糸のなくなった操り人形のようにうなだれた

「……………どうしますか、ヘステイア様」

そんな中、リリがヘステイア様に裁断を仰いだ

「神の前では嘘をつけない。2人とも嘘は言っていない」

その言葉を聞きベルが復活し、安堵の息を吐く

が、ヘステイア様はすぐに修羅の顔へと戻った

「ただしつ、歓楽街に行ったことは許さない!! ヤミ君にも行くな行かせるなって口を酸っぱくして言ってたのに!! そもそも歓楽街なんぞに興味を持ったことが許せない!!」

「ヘステイア様。俺くらの年頃になると歓楽街くらい興味を持つぞ?」

「うるさいよっ!」

弁明しようとしたがヘステイア様の絶対零度の視線を受けて黙ってしまふ

「今日一日、君達には罰を与える。それで反省すること。いいね？」
「は……」

俺達に科せられた罰は奉仕活動だった

要するに新居移転の挨拶に伴ったご近所の手伝い

「おっさん！この荷物はここで良いんだよな？」

「おう、そうだ！にしても悪いなあ、【リトル・ルーキー】に【悪魔】さんよっ！」

「いい、いえっ！」

路地の清掃、魔石街灯の補填、荷物運搬をこなしていく途中で気立ての良い親父さんやおばさんにも声をかけられる事もあった

「ファミリア」にとつて、こういった社会貢献も大切なんだとヘステイア様も言っていた
な

「『りとる・るーキー』だー!？」

「本物だー!?!『でーもん』もいるぞー!?!」

荷物運搬。材木を運んでいると、路上で遊んでいた男の子と女の子が指差してくる

戦争遊戯の所為なのか小さい子にまで二つ名まで覚えて貰っていることにびつくりしている」と男の子がキラキラした目で俺に口を開いた

「ねえ！アレやってよ！こう、ブワア！ってなるやつ！」

「ブワア？ブワア……ああ、竜巻出すやつか。無理だな今忙しいし」

「ええ〜…」

「…しゃあねえな。ホラ、金やるから兄妹仲良くお菓子でも食ってな」

そう言ってお金を渡すと「ありがとう〜」と2人の子は笑顔で走っていった

「ヤミさん。強そうとか言われてたよ。僕は弱そうってさ…ハハハ…」

「そりやお前、見た目だけの話だ。そんなことよりも、さっさと運ぶぞ。おやっさんに怒られる」

そう言つて2人で材木を運んで行った

「ベル坊、釘をくれ」

「うん。わかった」

手を差し出すとその手の上にベルが釘を手渡してくる。その釘をトンカチで屋根に打ち付ける

「黒髪、ミャー達のために頑張るニヤ！」

「頑張つてーヤミさーん！」

「アンタ等。応援してないで仕事しろ」

アーニャとルノアが声を張り上げて応援してくるため注意したが休憩時間であるため大丈夫であるらしい

ここはいつもの酒場『豊穣の女主人』、ここでの仕事は雨漏りしている屋根の修理だ。それをトントン拍子で直していると下から話し声が聞こえる

「にしても、ヤミ君ってなんでも出来るよねー」

「白髪頭、ホームじゃあの黒髪は何やつてるニャ？」

「……朝昼晩の食事に、ホームの全体掃除……とか家事は大体やつてます……ね」

屋根から降りたベルがそう言うとおおーつと声を上げる。ふむ、褒められて悪い気はしない

「じゃあさ、『ファミリア』内じゃ頭が上がりなかつたり……」

「あ、いえ。ヘスティア様やりり……サポーターの人には……」

ベルがそう言うとき声が小さくなり、ルノアとクロエが呟いた
「上には上がいるもんね……」

「なんか情けない話ニャー……」

「おいコラ聞こえてんかな!?あと終わったぞ!!」

そう言つて梯子を使わず飛び降り、地面に着地すると何かを殴る音が響いた。何事か
と見れば盆を持ったリユーさんと「ぐああ!」と悲鳴を上げる三人

リユーさんの後ろにはシルさんがおり、出迎えてくれた

「お疲れ様でした。クラネルさん、カズヒラさん」

「あ、うん。頑張つてやったから、どうか殴らないでいただきたいです」

「カズヒラさんは私をどう思っているんで……ん?」

リユーさんがそこで言葉を止めると急にすんすんと匂いを嗅いでくる

「カズヒラさん。なんだか甘い匂いが凄いですね。香水でもつけているんですか?」

冷や汗がブワツと出た。歓楽街に行ったなんて知れたら嫌な予感がする。なんだかわからんが嫌な予感がする!!

そんなことを考え、言い訳を考えているとシルさんも「そういえば」と言つてベルに
同じように匂いを嗅いだ

「ベルさんも甘い匂いが……この匂いは……」

「す、すいませんっ、ま、まだやることがあるので僕達はこれで!!」

「そうだったあ!!すまんがまた今度な!!」

瞬間、ベルと俺は走り出した。まだ悶えている三人の横を通り過ぎ、その場を後にし
た

「どうするよベル坊。風呂入って匂いは落としたと思っただらまだ匂いがこびりついてるらしいぞ?」

「う、うん。どうしようか……」

北西のメインストリートでとりあえず足を止めて休む俺達は、そう相談しあう

「そういえばベル坊、お前あれからどこに逃げ込んだんだ?」

「春姫さんって言う狐人ルナールの人のところで匿ってもらったんだ」

そうか。と深くは聞かずに終わろうとするとそこに聞き覚えのありすぎる女性の声
が聞こえてきた

「あれ、ベル君にヤミさん?」

第73話 エイナさん（修羅）

現在の場所はエイナさんと相談するときに使っているボックス内。そこで俺は生死を問う問題にぶち当たっていた

「しようかあくん？」

ボックスに入る時は笑顔でいたエイナさんの顔はベルの相談を聞いて行くと全てを聞く前に険悪な物へと変わり、その視線は俺に向けられる

「ヤミさあん。私言いましたよねえ？『あそこだけは連れて行かないで、ベル君が真似しないようにヤミさんも行かないで』って」

「い、いやエイナさん……こつちにもこつちの事情つてもんがありません……」

「へーえ、じゃあその事情つて何かなあ？」

「そ、それは……」

言葉に詰まるとエイナさんは真つ赤な顔のまま手を顎に添えてぶつぶつと呟き出した

「ヤミさんはもう年頃だし、ベル君だつて男の子だし、そういうことに興味持つ時もあるだろうけど……けど……」

「あ、あの…エイナさん？」

完全に自分の世界っぽい物に入ったエイナさんに声をかけるとエイナさんは両手で俺の肩を掴み、ブンブンと揺さぶりだした

「やつぱり駄目え〜!？」

「何があ!？」

ていうかエイナさんやめて!？」

出る! 中身出ちやうから!!？」

ある程度揺さぶられるとエイナさんは正気を取り戻し、まだ治ってない赤い顔のまま大声でベルに叫んだ

「今後一切、キミは娼館になんか行っちゃダメ! わかった!？」

「え、あ、でも……」

「だーめ!!」

「は、はいいつ!？」

ベルが何かを言おうとしたがエイナさんの剣幕に押されてその言葉はかき消えた
次にエイナさんはキツ! つと俺に視線を移動させ

「ヤミさんは…年頃の男なんだし行ってもいいけど、けどっ!! 今後一切ベル君を連れて行っちゃダメ!! あと、そういうことも教えちゃダメ! わかりましたか!？」

「は、はい……わかりました……」

とりあえず頷くことしかできなかった。下手に反論すると説教コース確定しそうだし、話が進みそうにないし

「……話を戻すぞ?」【イシユタル・ファミリア】について教えてほしいんだが」

「確かに歓楽街に行つてもいいとは言いましたが……」

「いや、違う違うそうじゃない」

なんか勘違いしてそうなため慌てて弁明した

イシユタル派の奴らには追われたりしたから、また絡まれる可能性があるということなど、アイシヤ達とあつた一件を説明した上で頭を下げた

「ちよつと待つてて」

信じてくれたエイナさんは、資料室のファイルを部屋の外に取りに行つた

「【イシユタル・ファミリア】……知つての通り歓楽街を勢力圏に置く、探索系ダンジョンの派閥としても一級品の実力派【ファミリア】だね」

戻つてきたエイナさんは持つてきた資料をパラパラとめくつていく

構成員の多くはアマゾネス、男女比は1対9。歓楽街全体の収入の四割以上を占めるとまで言われている

「中でも戦闘員のアマゾネスは『戦闘娼婦』と呼ばれるほどの冒険者集団で、多くがLv3以上。とりわけ団長の【男殺し】……フリユネ・ジャミールはLv5の第一級冒険者」
 フリユネ……ああ、あの蹴り飛ばしたガマガエルね。確かに周りがLv5とか言ってたわ……えっ、団長？

やばいかも。と内心焦り出すとベルが片手を上げてエイナさんに質問した

「あの……アイシャさんっていうアマゾネスと、春姫さんっていう狐人の情報、わかりますか？」

「ああ、アイシャ・ベルカは有名だよ。Lv3の戦闘娼婦だけど、もうLv4間近つて噂されてる。Lv3の冒険者の中じやあ間違いなく最上位の人だね」

そんな彼女に神々が名付けた二つ名は【麗傑】

続けて春姫って人について何か聞けるかと思っただが

「うーん。後の春姫っていう狐人は聞いたことがないなあ。団員のリストにも……乗ってないみたいだし。非戦闘員なのかも」

パラパラとめくっていた資料は終わるが、ベルの求めていた春姫の名前はなかった。後からベルに聞いたところ、人身売買で流れ着いた人らしいため、迂闊に明るみにしようとはしないだろうとのことだ

【ファミリア】の話に戻すけど、商業の功績も含めて派閥の等級はA。オラリオの中で

も最上級だよ」
トップクラス

「……………」

「規模も戦力も、ベル君達【ヘスティア・ファミリア】とは違いすぎるかな。あのフリユネ・ジャミールに限っては、【劍姫】…………ヴァレンシュタイン 氏も負けかけた事があ
 るらしいし」

「えっ!?」……………」

エイナさんの言葉にベルは衝撃を受け、俺も別の意味で衝撃を受けた

やばい奴に蹴りを入れちゃった……………」

「あつ、いや、何年も前の話だよ？ 当時はまだジャミール氏の方がLvは高かったし……………
 Lv6になって追い抜いた今じゃあ、ヴァレンシュタイン氏が格上であることは間違いないから」

ほつ…良かった。いやよくないけども

ていうか、アイズさんってLvが上の相手と戦って負けてないのかよ。すげえな

→ (同じ相手に不意打ちみたいなのはいえ勝った人)

「大丈夫?」

エイナさんの心配した声が耳に入ったためハッと戻るとベルがブーツとじていた。
 がすぐに戻ってきたため大丈夫だろう

「これは、私担当じゃなかったし、詳しいことは知らないんだけど……【イシュタル・ファミリア】は実力を偽っている、って以前まで言われてたの」

「実力を、偽る……?」

エイナさんの言った言葉にベルが首を傾げるが、エイナさんは続ける

「うん。当時【イシュタル・ファミリア】と敵対していた複数の派閥が糾弾してね、ギルドに報告されている公式のLvより、遥かに団員達の力が上回っている、って」

エイナさんの話を聞き、昨日の事を思い出してみると：

…アイシヤはLv3……の身体能力だったよな？

「見間違いやねえの?」

そう言うエイナさんは首を縦に振りながら話す

「うん。ギルドもそう思ったんだけど、彼女達の訴えに応じないとアレだから、ギルドは調査を入れた。神イシュタルは主だった戦闘娼婦の【ステイタス】を全て見せて、ギルドだけに戦力の実態を開示したの」

「結果は……」

「………白、だったんだ」

「まあそりやそうだろうな」

「不正どころか、【イシュタル・ファミリア】のLvはギルドに報告されているものと一

間違いはなかった。神イシユタルは訴えた派閥とギルドに『言いがかりを押し付けられた』って訴え返して……罰則ペナルティと罰金を要求したんだ」

「ギ、ギルドからお金を持つて行っただんですか……!?」

「うん、しかも相当な額を。『魔法』や『スキル』、沢山の秘匿情報がギルドに流出しちゃったから……それからかな、私達が『イシユタル・ファミリア』に強く出られなくなったのは」

その後、弱体化した派閥を「イシユタル・ファミリア」は全て壊滅させ、その女神様達も天界に送還されたらしいが……

「なあエイナさん。その話、スイスイ行き過ぎじゃねえか？まるで最初からそうなるってわかってるような……」

「うん。展開が鮮やかすぎて……私はあの時、神イシユタルの手の平でみんな踊らされていたような気がするんだ」

うーん。実態より遙かに上だったと思われる戦闘能力に、ギルドが介入してもなお判明しなかった真相……

調べてみるか？ 幸いエイナさんから許可を……

「私は……」
「イシユタル・ファミリア」は凄く怖い派閥だと思う。さっき言った娼館の話
を抜きにしても、金輪際、彼女達には近づかない方がいい

……潜入して調べるなんてもつてのほかですからね。ヤミさん

「なぜバレた!？」

「いつもより悪人の顔をしていましたので」

第74話約束

エイナさんと別れた後、奉仕活動を続けていた俺達はある店の前でヘステイア様達と集まった

リリ、ヴェルフ、命、オガ、最後にジャガ丸くんのバイト帰りのヘステイア様に加えて、古びた書店の中に入った

「やあ、おじいさん！約束通り、手伝いに来たよ！」

「ああ、ヘステイアちゃん。本当に来てくれたんだね」

ヘステイア様はもともこの書店の手伝いをする予定だったらしい

朝の内から言い付けられていた俺達は、集合時間にこの店の前で落ち合う段取りだったのだ

「すっかり有名になっちゃって、儂は驚いとるよ。口だけじゃなかったんだなあ」

「フン、まあね。ボクの勧誘を断った事を後悔しても遅いんだぜ？」

「はっはっはっ、こりや確かに惜しいことをしたかな！」

この書店はまあ、昔色々とヘステイア様が世話になったところらしい。飢えてるヘステイア様にご飯を食べさせてくれていたり…

「じゃあみんな、朝説明した通り、このお店の蔵書整理を手伝ってくれ。これも奉仕の一環だと思っつき、どうか頼むよ」

そのヘスティア様の言葉を皮切りに、俺達は書店の整理を始めた

「ほいほいほい…つと」

闇で10本くらいの伸縮自在の腕を作り高い所の本を整理していく。本当に使いやすいな。想像魔法

効率よく本を整理しているとヘスティア様から声がかけられた

「ヤミ君、この本を高い所に置きたいんだけど届かなくてさ。ちよつと手伝いに来てくれないかい?」

「お安い御用で。…にしても、背が低いつてやつぱり大へ「ウガアアアア!!」ぶっ!」
言いかけたところで怒ったヘスティア様が俺に飛びつき肩車の体制になりながらかじりついてきた

「口を動かす前に体を動かせえええ!!」

「わかったから!痛いから!離れてヘスティア様!」

結局かじるのはやめてくれたが罰として肩車の状態で移動する事になった

「…なあヤミ君」

「…なんだハステイア様？」

肩車のまま本を整理していると急に上のハステイア様に声をかけられた

「君は、急にいなくなったりしない…よね？」

「急にどうした。なんかあつたのか？…今朝あつたな」

そう言うのとハステイア様は「うん」と言つて心配そうな声で続けた

「ヤミ君はベル君とは違つて心も体も大人だし」

そ、そういう事にも興味あるんだらうからベル君が歓楽街を知つた今、自由に歓楽街に行けるんだけど…：イシユタルつて美の女神だから万が一、彼女に『魅了』でもされたら…：」

「ハステイア様」

話を続けるハステイア様の頭を闇の腕一本で撫でる。そうするとハステイア様は口をつぐみ、逆に俺は口を開く

「俺は…：いや、俺とベル坊はハステイア様が勧誘してくれたからこうやつて冒険者になつて、仲間達あいつ等に出会う事が出来た。今更その恩を仇で返すなんて出来ねえよ」

「ほ、本当かい？」

ヘステイア様が心配そうな声で聞いてくる。なので綺麗な笑顔で返す事にした

「本当だ。女神の『魅了』だろうがなんだろうが、曲げるつもりはないぞ。安心してろ、ヘステイア様」

ハツハツハと笑いながらそう答えると同時に丁度本棚の整理を終わらせた

そういう訳だから早く降りて欲しかったのだが、このままベル達の様子を見に行くそ
うだ。肩凝るなあ

「翌日？」

「ぐちそうさまでした……」

「お粗末様でした……って!？」

ほとんど食ってねえじゃん!？」

ホームの食堂で命が元気のない声で食事を終えた。だが皿にはほとんどそのままの
状態の食事が残っており、それを指摘すると命は

「せっかく作ってくださったのに、すいません。食欲がなかったので……せめて自分の
皿は自分が洗います」

と言い、行ってしまった

「なあ、命君、何かあったのかい？」

「昨夜、遅くまで出かけていたようでしたが……」

顔を寄せてくるヘステイア様にリリがそう言う

そう言ってる間に命は皿を洗い終えてそのまま行ってしまった

ベルを見るとヴェルフと視線を交わし頷きあつて、命の後を追っていった

「…オガ、そういうえばお前等書店で何か話してたな」

「な、なんのことっすかね……」

ヒューヒューと下手くそな口笛を吹き誤魔化そうとしたが

「後で詳しく教えろ」

「…はい」

そんなもので誤魔化されるわけがない。とりあえずヘステイア様には内緒という事で離れた場所で話す事になった

「んで？書店で何話してた？」

「は、はい。えーと……」

オガはゆつくりとオガなりにわかりやすく話してくれた

どうやらベルが言っていた春姫は命が探していたと言う友人の名前であったそうなの

彼女と命達は十年前からの友達で、友と、親友とも呼べる中だったらしいが、命達が仕

事で忙しい中、久々に会いに行くと思つていたらしいが……と

「ベル先輩は助けに行きたいと思つていたらしいが……」

「まあ今の現状じゃあ無理だわな。俺達は『アポロン・ファミリア』との対峙直後で疲弊してゐるって感じだし。何よりヘステイア様になあ……」

借金の事もあり、ヘステイア様にはこれ以上負担をかけることが出来ない。さあどうしたもんか……

「ついでに言うとなニキが無茶するかもつてリリ先輩が……」

「え、マジか。お前リリに殺されるぞ？」

「大丈夫つす。リリ先輩はアニキの後ろにいますから」

「え？」

オガにそう言われて振り返つてみると笑顔でこちらを見るリリがいた。俺は驚き後退るとリリが冷ややかな声で話す

「ヤミ様。わかつてますよね？」

「あ、ああ。『間違つても助けに行かないでください』だろ？」

そう言うとりりは「わかつているならいいんです」とそのまま背を向け行つてしまつた

「り、リリ先輩つて怖いんすね……」

「ああ、ここの【ファミリア】じゃイチニ一、二を争うレベルだ」
リリが見えなくなると2人でそう話し合った

『すいません!!【ヘステイア・ファミリア】の方!!誰かいらっしゃいませんか!』

外から声が聞こえる。見れば正門に一台の馬車が来ておりその馬車の前に男が一人いた、玄関からヘステイア様、リリ、ヴェルフが出てきて、話し合いを始めた

「なんなんすかね?」

「えーつと?あの男の服を見るとなんか綺麗だし、冒険者って感じじゃねえな。となると、商業的な何かをしているやつか

紙を渡したところを見ると依頼か?」

そう話しながら歩き、玄関から出ると馬車はもうおらず、代わりにベルと命がそこにいた

「おーつす。何話してんだ?」

「あ、ヤミさんにオガさん」

話しかけるとベルが反応して返してくれた

「ヤミ様。依頼です」

そう言つてリリが俺にピラピラと依頼書を手渡してきた
なになに……

依頼主：アルベラ商会

依頼内容：14階層の食料庫で、石英クオーツを採掘して来てください

報酬：100万ヴアリス

「ひゃ、100万!?!」

「おー、こりやまた……わつかりやすい」

オガは驚き、俺は平然とする態度でそれを見る

『今後とも御鼻屑に』みたいな事だろう。やる事の割にあまりに報酬が釣り合わなすぎる

「んで、この依頼はやるのか？俺はどっちでもいいけど……」

「んー、あまり商人や商会とは繋がりをもちたくないなあ」

俺が聞くとヘステイア様は腕を組んで悩み出す。利益絡みの煩雑な手続きと対応、あるいは利害関係が良しとしないらしい

「先方には悪いけど、この依頼は断つて「やりましょう!?!」「どわあ!?!」

急にベルと命がやる気を出した。いきなりの声でヘステイア様は驚き仰け反る

「借りを作ると言うわけではありませんが、もらつておくのはもらつておくというか

いえ浅ましい事は重々承知なのですがとにかく自分達には一刻も早くお金が必要で
すツ!!」

「ぼ、僕もそう思いますっ!?!」

命がすつごい早口でスラスラと言い。ベルはそれを肯定すると、同時に俺を見た

「ヤミ殿さんもそう思うよね!?!」

なんで俺?と疑問を持ちながらも手を顎に添えて考え：

「まあ、別にいいんじゃないの?金がないのは事実だし…」

第75話襲撃

話し合いの末、正式にアルベラ商会の冒険者依頼クエストを受諾する事になった

ベル達に「何故急に？」と聞いた所、どうやら娼婦であれば『身請け』、つまりは金を払って非戦闘員を引き取る事が出来るらしい

それをするための金額の相場は2、300万らしい。つまりはこの冒険者依頼はベル達にとっていい話であった

ヘステイア様は渋い顔をしていたが、命の想いを聞いて渋々といった感じで許可をした

それから命が「タケミカツチ・ファミア」のもとまで赴き身請け諸々春姫の事を報告し、ベルと命の話に同意した俺はもちろん、リリ、ヴェルフ、オガにも異論はなく、「ヘステイア・ファミア」は100万ヴァリス獲得に乗り出したのだ

「また冒険者依頼絡みで来てしまいましたね」

「まあそろそろオガにもダンジョンで実践を知ってもらいたかったし、丁度いいんじゃないねえの？」

「まあ5階層まで行ったら引き帰させたんだけどな」と付け加えながら歩く。オガは「ア

ニキ達の勇姿を見たいっす!」と帰ろうとしなかったが説得してなんとか帰らせる事が出来た

「さあみなさん。早く行きましょう!」

前を向けば命がパーティの先頭に立ってぶんぶんと子供のように刀を上下に振っていた

「食料庫パントリーに乗り込むので、あまり迂闊な真似はしないで欲しいのですが……」

一方でリリは空腹になったモンスターが階層中から集まる食料庫に対して危機感を覚えていた

「それにしても、『身請け』か……そんなものがあつたんだな」

大刀を担ぐヴェルフが言う。それならば穩便に済むと、納得した表情だった

「うん、お金を集めるのはかなり大変かもしれないけど……これであの人を」

ベルを見れば命と同じくらいのやる気を漲らせていた

「しかし身請けの目安が300万……念のためにも、500万は用意しておきたいですね」

「うっ……気が遠くなりそう」

「稼ぎなら任せろ」

「到達階層を増やすのも視野に入れないとな」

周囲の様子、モンスターの気配に意識を割きつつ、後衛のリリを含めて話す。より深く潜ってより多くの金を…がヴェルフの提案だ

「こつちにはLv3が2人いるんだ、20階層くらいまでは行こうと思えば行けるんだろ？」

リリに振り向きながら、ニヤリとヴェルフ釜笑いかける

だが、ヴェルフの案に対してパーティの参謀役であるリリが首を横に振った

「いくらLv3と言えど、やられるときはあつさりやられます。ダンジョンとは、そういう所です」

あの18階層の事が身に沁みているのか、リリは慎重な意見を崩そうとはしない

確かにほいほいと到達階層を増やしていくのは危険だろう。まあとりあえず今は冒険者依頼に集中だと気を引き締めた

「ー止まってください」

「どうした命……ああ、来たな。数は1匹だ」

命が止まり何があったかを聞く前に「領域」に入ったため納得するすると俺の言った通り横穴から1匹の虎のモンスターが姿を現した

『『ライガーファング』……！』

「どうやら下の階層から上ってきたようですね」

15階層以下に出現するモンスターとの遭遇にベルが驚き、リリが冷静に異常事態だと断定する

他のモンスターか冒険者かはわからないがその虎の牙と爪には真つ赤な血が付いており、こちらを威嚇するように唸り声を上げている

「探知系の『スキル』か。便利だな」

ミノタウロスにも劣らない獰猛な虎を見つめつつ、ヴェルフが感心したように命へ声をやった

「いえ、一度遭遇したモンスターでなければ感知できません。その分ヤミ殿の魔法の方が数も正確に……」

「俺のやつにも欠点はある。まあ命がいたらそれはほぼなくなるんだけどな!!」

お互いの『魔法』や『スキル』の情報は共有してあるため命が謙虚な事を口にしたが励ますように俺が叫ぶ

「ミノタウロスよりも速い！注意してください！」

「はいー」

駆け出した命に続く俺達は咆哮するライガーファング、更に周囲から集まるモンスターの群れと交戦に入った

「ーこれは」

モンスターの群れと何度目かの交戦を経て、ダンジョンの奥へと進んでいると、奥から音が反響しながら響いてきていた

「モンスターの叫び声に……足音」

「おいおい、またか？」

「いやあ、なんか付いてんのかな？俺達は……」

モンスターの群れと思われる鳴き声に、こちらに近づいて来る複数人の走音。これで

3回目の『怪物進呈』バス・パレードの前兆にパーティ全体に緊張が走る

「前方から……食料庫からやってきたのですか？」

リリが疑問を呈しながらバックバックを担ぎ直す。顔が見えない同業者に眉を曲げつつ、逃走の準備を始めた

ここは一本道、このまま棒立ちしていれば間違はなく『怪物進呈』される

「別れ道まで引返そう！」

ベルからの当然の指示に全員が頷く。そのままパーティの向きを回頭させ、元来た道を逆走する。ある程度走ると広い十字路に入った

その瞬間、俺達を囲むかのように左右から別の冒険者と怪物の集団が雪崩込んできた
「二方向!？」

まさかの『怪物進呈』の鉢合わせ

そのまま冒険者とモンスターの鯨波は衝突した

「うおっ!？」

ヘルハウンドが勢いそのままに突っ込んできて噛み付こうとして来る。それを首を切
る事で阻止するが、数えきれない数の追撃が迫る

「クッソ!!離された!!」

周りを見ればもう仲間の姿がモンスターの波によって見えないようになってしまっ
ていた

そうこうしている内に最初の『怪物進呈』が迫り、混乱状態であったこの場に衝突す
る

「ーっ!!おいお前っ!大丈夫か!？」

仲間を探すために周りを見渡せば『怪物進呈』をしようとしたであろう者達の1人で
あろうフードを被った女性の冒険者を見つけ、声をかける

声が届いたのか女性は少しづつ俺に振り返る

「みーつけた♪」

褐色の肌をした冒険者が俺を見るなりニヤリと微笑む

そして武器のナイフを持って飛びかかってきた

「ハアッ!」

突然の事で驚きながらも刀で防ぐ。その際にその女に近づいたため、最近嗅いだ匂いが鼻を襲った

「お前、『イシユタル・ファミリア』のやつか!」

「ピンポーン♪正解!」

「あははー」と無邪気に笑いながら武器を振るう女の攻撃を防ぐかそらすかで耐えているとある考えが浮かんだ

(あれ?こいつが『イシユタル・ファミリア』のやつって事はその仲間も……)

その考えがよぎった瞬間、背後に気配を感じたため前の女を蹴飛ばしそのまま後ろから来ていた攻撃を弾く。流星にこの状況で気絶させたらまずいため魔法は使っていない。そのため、蹴飛ばした女はすぐに起き上がる

「やつぱり強いねえ。オレは好きだぜ?強い男」

「アマゾネスはみんなアンタみたいなやつだと聞いてんだがな!!」

男勝りというやつなのだろうか?そんな奴が乱入し、先程の女と挟み討ちにあつてい

「2対1か「ゲゲゲッ!? みいゝつけたああゝ!!」

言いかけたところでおぞましい声が響いた。声のした方に振り向く前に顔を掴まれそのまま猛スピードで走る

いきなり過ぎたため魔法を使う暇すらなく後頭部から壁に叩きつけられた

『ゲゲゲッ! 安心しなよお、後でアタイの美しい顔に傷をつけた事を後悔させてやるからさあ』

意識が遠のいていく中、最後に見たものは巨大なガマガエルの醜悪な顔だった

第76話誰かああああ!!!

ベル

「……ん」

霞んだ視界がゆっくりと開いていく、完全に意識が戻るとガバツと起き上がり動こうとすると

ガシヤツ

「……ッ!」

壁につながれた鎖が片足に取り付けられていた。何故こんな事になっているのか混乱している

「目が覚めましたか!ベル殿!!」

同じように捕まっていた命が目覚めたベルに声をかけた

「えつと…確か僕達はダンジョンで…まさか、捕らえられた?」

ゆっくりとダンジョンでの出来事を思い出す

(確か、ダンジョンで『怪物進呈』に合つて…アイシャさんと打ち合つて…負けて……) うーん…と考えていると手元に何かが当たる。それに気づき視線をそれに向けると

そこには

「鍵？」

「そ、それはもしや自分達につけられた鎖を外すためのものでは!?」

見つけた物を拾い上げ、見ると鍵束であった。命はそれを見るなり少し興奮気味に話すがすぐに落ち着き眩く

「何故こんなところに……まさか、春姫殿？」

「春姫さん……が？」

2人で鍵束をくれた恩人の事を考えていると上からコンツコンツと誰かが降りて来る足音が聞こえてきた。慌ててベルは鍵束を隠し、命は礼儀正しく待つようにする

「よう。目が覚め……た!?!」

見回りの人らしきアマゾネスが覗き込むようにこちらを見て来るがベルと命を見た瞬間に顔色を変えた

「おいっ! 【悪魔^{デーモン}】はどうした!?!」

「ヤミ殿ですか? 自分が起きた時にはいませんでしたか……」

「え? ヤミさんも捕まっていたんですか?」

キョトンとした感じで逆に尋ねるとアマゾネスは何やらブツブツと眩きだす

「仲間を見捨てた? いや、あの悪人面でも仲間を大切にしていると聴いてる。となると

…まさか!?

おいっ!本っ当に知らないんだよな!?

「知りません……あの、一体何を……」

ベルが尋ねようとしたが次の言葉を聞いた瞬間そこで止まった

「あんのヒキガエルウ……」

今度は言葉ではなく時が止まった

(え…ヒキガエル?ヒキガエルって確か、フリユネさん…で合ってるよね?ヤミさんがいない話の次にフリユネさん…って事は……

………何されるんだろう)

身も心も純粋なベルにはいったいヤミがナニをされるのかはついぞわからなかった
自分の兄が地獄へ連れて行かれたとは知らずに

くヤミイイイイイイイイ!!!?
く

「ふああ…上のやつ…うるっさいなあ…少しくらい寝かせろよ」ゲゲゲツ!やつとお目
覚めかい?」うおっ、ガマガエルウ!?

視点切り替えのアレに文句を言いながら目を覚まして目を開けると目の前にガマガ

エル：もといフリユネが目の前がいた

驚きのあまり飛び引いこうとしたが、ジャラツと音を立てて動きを封じる鎖によつてそれは出来なかつた

「無駄だよお。その鎖は『ミスリル』製、何重にも巻かれれば上級冒険者だろうとすぐには壊せない：『悪魔』と謳われるアンタには念を込めてさらに何重にも重ねてある

魔法を使おうものなら魔力伝導率が高いミスリルが反応して、鎖が巻きついた手首ごと吹き飛ばよお」

ニヤニヤと笑いながらそう語るフリユネ

実際は「闇魔法」ならワンチャンあるかもだが、目の前にLv5がいるため、逃げようとしたところでその力で捕まるだろう。鎖も何重にも巻かれているし：要するにほぼ『詰み』だ

「ああ、美味そうだあ」

「—————」

ペロツと頬を舐められた。それだけ、たったそれだけで罵倒される事で地味に強化された鋼の精神に亀裂が入った

「ベッドへ行くか、それとも道具を使うか……」

「どっちもいやあああああああああああ!!!」

「ゲゲゲッ、やっぱり最初は無理矢理かねえ」

いやだああああああああ!!!

どうせ初めてを奪われるなら普通のアマゾネスの人がいい!!!ガマガエルとなんていやああああ!!!

暴れるもジャラジャラ鳴るだけで微動だにしない鎖

そうこうしているうちにフリユネは覆い被さり、右手を股についでいる棒に……

「……チツ。見た目は男でもこれはガキか。しょうがない、精力剤を持つてくるかあ」

俺の棒が硬くない事に舌打ちしながらフリユネは立ち上がりニタリと笑う

「待ってな、すぐに男にしてやる」

そう言つて、フリユネは呵々大笑しながら部屋の奥に姿を消した。鉄格子の開閉音が生じた事を察するにここは牢屋のようだ

「つて、冷静に分析してる場合じゃねえ!!!」

早く逃げねえと……よし、闇魔法使つても手足は吹き飛ばねえ!!引きちぎ……これねえ!!やべえ話んだ話んだ!!」

ギャーギャーみつともなく喚いているとギィィ……とまた鉄格子の開閉する音が鳴った

「ああ……すまんベル坊、俺はここまでみたいだあ……」

絶望に打ちひしがれているとその人はゆっくりと姿を現した

「ベル坊……って事はやはりクラネルさんの言っていた『ヤミさん』……で合っているのでしょうか？」

視界に移ったのは狐の耳に、金色の尾。和服を見に纏い、見覚えのある刀を手に持った少女だった

「だ、誰だアンタ!？」

「し、しーっ。しーっ、でございます。ヤミ様っ」

疑問の声を上げようとしたが少女の指が口に立てられる

少女はすぐに鎖を確認した後、周りをキョロキョロ見回す。すると何かに気づいたのかそちらに行き、何かを持って帰ってきた

鍵束だった。戻ってきた少女は何重のも鎖に悪戦苦闘しながらも鍵を差し込んでいく

「解けましたっ」

「ああ……ありがとう……ありがとう……」

鎖が解けた瞬間に跪き、泣いて感謝する。男はそんな簡単に泣いたらダメだと考えていたんだが、今は泣いてもいいと思う

「ふう…みつともない姿を見せちゃったな」

「い、いえ」

少しすると落ち着いたため、訪ねたい事を助けし訪ねた

「質問したい事が3つ」

一つ。最初も言ったが、アンタは誰だ？

二つ。何故俺の刀がここに？

三つ。ここはどこだ？」

「では一つずつ…」

一つ目は。春姫と申します

二つ目は。ここに来る途中で落ちていたのですが、何故か『持って行った方が良い』と体が勝手に…

三つ目は。フリユネさんしか知らない秘密の通路…です」

綺麗に全て答えてくれた

春姫…ベルと命が言っていた狐人ルナールの人か

刀は…忘れてだが「妖刀」だったなコレ。離したくても離れない…軽くホラーだな

「そうか、アンタがベル坊の言っていた春姫さんか。この前はベル坊が世話になりました。そしてこの度助けていただき「そんなにかしこまらなくてもいいですよ」あ、そう」

ある程度話すと、とりあえずフリユネから逃げるためその場から離れる事にした
「そういえば、『フリユネしか知らない秘密の通路』って言ってたが、なんで……」

少しした疑問を歩きながら聞くとゆっくりと答えてくれる

「実はたまたまフリユネさんがホームで秘密の通路に出入りする光景を目撃したのですが、喋ったらタダじゃおかない、と言いつけられていて……」

「……ん？それじゃあ春姫……が危ないんじゃないか？」

春姫の言葉を聞き、心配そうな顔をしながらそう言うと言うと春姫はその心配を他所に笑みを浮かべた

「私わたくしはもう、いいのです」

「……………」

なんだかその微笑みにはなんだか悲しさを感じられた。だが、何故そんなに悲しいのかがわからないため何も追求をしないようにし、歩を進めた

「……クラネルさんや命さんも、無事に逃げ切れるでしょうか？」

「えっ？ベル坊達も捕まってたのか？」

第77話ベル達が多い

「ヤ……じゃないベル!!」三人称

「こんな時に言うのもなんですけど、なんだかドキドキしますね」

「……シツ。静かに」

現在ベル達は「イシュタル・ファミア」のホームにて隠れながら移動していた

命が移動をやめ、気配を殺すとドタドタと走る「イシュタル・ファミア」のアマゾネス達がベル達に気づく事なく走っていく

「……そろそろ、使っておきましょう」

上と下につながる階段を発見した命はここで『スキル』を発動した

『八咫ヤタノシロガラス白鳥』

ダンジョンでヴェルフが言及していた敵探知の能力「八咫ヤタノクワロガラス黒鳥」とは真逆の味方探知の能力を発動させる

「……?」

「命さん? どうしました?」

下の階へ通じる階段に移った時、命はベルに振り返る

もちろんベルは確かにそこにいるし、当の本人も何故こちらを見ているのかわからず首を傾げている

(この反応はベル殿?でも目の前にいますし、何より)

あまりにも微細な目の前のベルと似ているベルの反応に困惑する

命は戸惑い一つも気配のする方向へ足を運んだ。何度か階段を利用して下へ向かい、階の隅に位置する一室に辿り着く

「わあ……」

「宝物庫……?」

見張りはおらず、例によって所持している鍵束を使用して扉の中へ滑り込むと、広がったのは数多くの武器やアイテム、そして宝箱だった

壁の左右に何段も取り付けられた棚に保管されており、隅に置いてある大袋の中には光り輝くヴァリス金貨が見える

驚きながら奥へ進むと……

「あっ!」

ベルがある物を見て走りだす。走る先には金の天秤が置かれている卓があり、その上に『ベルに似た反応』を発するそれはあつた

「これ、僕のナイフです!」

ベルが《ヘステイア・ナイフ》を持って喜ぶ、その卓の上にはまだ《牛若丸》と《牛若丸二式》、ベルト、腰巾着、そしてポジションが入ったレッグホルスターもあった。もちろん命の装備一式もある

「後は……じよ、状況が状況ですのぞ」

「う、うん……」

2人は周囲を見回し、言い訳を口にしながら棚に飾られているアイテムを調達する

「うう、これでは盗人と同じです」

「ヤ、ヤミさんなら『向こうが入れてきたんだからこれくらい覚悟の上だろ?』って言いそうだけどね……」

「それもそうなんですが……」

そう言つてベルと命は宝物の中のアイテムを漁つた

くヤミの時になると何故か一人称なんだよな

「……春姫さん」

フリユネの部屋から出て多分20分。薄暗い通路で2人分の足音が響く中、俺達2人は地下を歩き続けていた【イシユタル・ファミリア】のホームとは真逆に向かっているらしいが歩いてばかりでは落ち着かない

「何でしょうか、ヤミ様」

前方でゆらゆらと尻尾を揺らしながら呼びかけられた春姫が顔を向ける

「…本当に逃がして良かったのか？何故かフリユネに捕まっていたとはいえ、元々俺は「イシユタル・ファミリア」に捕まっていた身だぞ？」

俺達を襲ったあの冒険者アマソネスの数から考えると、あれだけの人を動かせるのは多分神様くらいのもんだろう

主神様の意思という事は「ファミリア」の意思と思っても良い。それを裏切つて俺とベルと命を助けたとなれば……

「お気になさらないですださいヤミ様」

俺の考えていることを断つように春姫がまた笑い返す

立ち止まり振り返つた彼女は、金の長髪をさらつ、と揺らした

「私の最後の我儘です。アイシヤさん達も、きつと大目に見てくれます」

『最後の我儘』

その言葉に違和感を持った。なんか近々自分が死ぬとも言うような……

そんな違和感を持つのも不謹慎だと思ひそれ以上追求するのをやめにした

「ああ、そういうえば春姫さん。俺達はアンタを『身請け』しようと考えてる」

少しでも話題を変えようとみんなで最近決めた話を口にした

「えっ……？」

春姫はその言葉を聞きその瞳を一杯に見開く

「命がヘスティア……俺達の主神様に説得したんだよ。まあ、金を貯めんのはまだまだ時間かかるが……」

とりあえず暗い雰囲気から脱出しようと今俺達がやろうとしていることを打ち明けた

「主神様も、他の奴らも身請けする事を許してくれたんだ……まあ、そういう訳だからそんな暗い顔すんな！本気で笑った方が世の中明るく見えるぜ？」

俺自身、笑顔を作り春姫を笑わせようとした。『顔が怖い』と言われている俺の顔で笑顔なんてしたらやばい気がするが……

「うそ……」

春姫は両目を見開きながら涙を流した。二筋の滴が頬に引いていく

喜びの涙も良いが、笑って欲しかったなあ……

「私は……春姫は、幸せです」

唇に、微笑みを浮かべた

「命様に……ベル様に、そこまで思っていただけなんて」

震えながら胸を押さえつけながら。『溶けてしまいそう』と掠れた眩きを口にする

「ありがとうございます……その言葉を聞けて……もう思い残す事はありません」
そう言いながら彼女は俺に笑いかけた

……思い残す事はない？

なんかこれから先、もう会えないみたいな……

「ありがとうございます、ヤミ様。行きましょう」

「え？あ、ああ……」

礼を告げて彼女は前を向き、背を向けた

ハツと戻ってきた俺は何も言わずにただただ追いかける事しか出来なかった

くまたベルだなあ……ああ、一人称頑張るべく

ベルは命と共に通気口を移動してる間に聞こえてきたアマゾネス達の会話が頭から
離れなかった

『春姫が姿を消したらしい』

『殺生石の儀式って今夜だろう……まさか!?』

『逃げ出すため、「リトル・ルーキー」達に縋り付こうって腹かい?』

（『殺生石の儀式』って何だろう？春姫さんと何か関係が？

……下位構成員じゃなかったのかな？）

「ベル殿、通気口から出ます」

考え事をしてしていると命が鉄柵を外しながらそう伝えてくる

わかった。と返事を返し、命が通気口から降りた後に続きベルも降りる

「()は……」

「本棚？」

床に降り立ったベル達を囲むのは、いくつもの本棚だった

収められている蔵書の量を見るに、書庫か資料しつか？と当たりをつける

薄暗い部屋には紙と木の香りが漂っていた

気配を殺し、2人で本棚の迷路を進む中、出口を探す2人の目にある光景が飛び込ん

でくる。机の上に無造作に投げ出された、羊皮紙の巻物の束

多くの物が読み込んだ形跡があり、ベルは一枚の羊皮紙を試しに取る

『……殺生石の儀式について』

「――馬鹿なっ!？」

それだけをベルは口にして読んでいると命が喉が張り裂けんばかりの声で叫んだ

「ベル殿……これ……!？」

命が焦りながらも一枚の羊皮紙を手渡した。それを受け取ったベルはその紙に書いてある文字を読みだした

く殺生石とはく

『殺生石とは狐人の魂を石に封じ込める石である』

『相応の設備も併用する事で魔力を完璧に封じ込めた殺生石は、狐人の『妖術』と謳われる貴重な魔法を第三者に与える物へと変化し、殺生石は砕ける』

『代償として生贄にされた狐人を魂の抜け殻へと変える』

そこまで読んでベルは息を飲んだ。「イシユタル・ファミリア」の狐人と言われてみれば、あの人しか思い浮かばないからだ

そのままベルは続けてそれを読む

『魂を奪われた狐人は殺生石を肉体に注入すれば、魂を奪われた狐人は目を覚ます。肉体さえ無事であるならばそれから先も問題なく生きていけるが、少なくとも廃人へと成り下がる』

そこまで読んでベルはアマゾネス達の言っていた言葉を一つ思い出した

『殺生石の儀式って今夜だろうか？』

「命さん!!」

「ええ、行きましょう!!」

ベルと命は動揺しながらも春姫を探すために、脇目も振らずに走り出した

第78話お礼参りしに行くよ

廃墟の娼館

ギギツと石材の転る音が鳴り、手で押した石板が上方に動く

地下の通路から石造りの扉を押し開けた俺は、とある路地裏の石畳から顔を出し、およそ半日振りの地上の空気に包まれた

「はあく……やつと地上の空気が……ゴホゴツホ!!、やっぱり歓楽街の匂いはキツツイな」
勢いよく外に出て久々に感じられる外の空気を思いつきり吸い込み咳き込む。すぐに振り返り春姫に手を差し出して引つ張り上げると

「フフツ……ありがとうございます」

口元を抑えながらそう言う彼女に「どういたしまして」と返すと雲が晴れたおかげか茜色に染まった空が輝き出した

「時間わからなかつたが夕方か……すまん、ここまで連れてきてもらって……」

頭を下げつつ礼を言う俺に対して春姫は首を横に振る

「私がやりたかつただけでございます。お気になさる必要はございませぬ。それより早くここからお逃げになつてください」

クラネル様と命様のことも、必ず私がなんとかしてみせますので」

「その必要はねえよ。ベル坊達なら勝手に出て行くだろうしな。それより、本当にお前は大丈夫か？」

【ファミリア】に逆らった春姫に待つだろうこれから先の事に俺は心配する。ここに来るまでの言葉もあつてやつぱり不安が拭えないのだ

「…ヤミ様。これを見てください」

そう言つて春姫は俺に対して細い首にはめられた黒い首輪を示す

「これは私の居場所を知らせる魔道具……見えぬ鎖に繋がれた『首輪』でございます」

「へえ……」

「私の行き先は常にイシユタル様達に筒抜けなのです。歓楽街から一步でも出ればこの首輪は音を立てて鳴り響き、首を焼いて身動きを封じ、追っ手の方々が駆け付けてくるでしょう」

「……………」

語られる内容に俺は何も言わない。壊そうとしても直ちに緊急信号を出すのだと春姫は怪しい輝きを放つ黒輪の表面にそつと触れる

闇でどうにかできるかもしれないが、ミスリルの時とは違いその場で緊急信号を発し

ているのかはわからない。それが分かれば今すぐにでも外してやれるのだが……

「気づかれてしまえば、ここにもきつと、すぐに誰かが追ってきます」

だから早く逃げてください。私は、ここまでです」

そう言つて、春姫はまた微笑んだ

「気にくわねえな。その顔」

「えっ?」

俺の呟きに春姫は間抜けな声を発する。それに構わず俺は続けた

「まるで『助けて欲しい』って感じのその顔。見ていて腹が立つ」

「わ、私はそんな事……」

「いや、アンタのその顔はそういった奴の顔だ」

毎度毎度泣きそうな、取り繕った笑顔見せられるこっちの身にもなつて欲しいもんだ」

言い訳をするように話そうとする春姫に冷たく言い放つと春姫は俯いてしまった

「たまにでいい……泣きたい時は泣けばいい。辛いなら辛いとさえいい。助けて欲しいってなら笑つてないで口にしる。じゃねえとお前はいつまでたつても変わらねえぞ

？」

「……………わ、私はッ 「ヤミ殿!!」」

春姫が口を開き何かを伝える前に知ってる2人の声が割り込んできた

声のした方へ振り向くとベルと命が勢いよく降りてきてスタツ…と綺麗に着地を決めた

現れたその2人の姿に春姫も驚く

「命様…クラネル様……」

「春姫さん!! 『殺生石の儀式』 って何ですか!？」

「…………ツ」

ベルは焦りながら春姫に問いかけると春姫の表情が変化した

俺は俺で初めて聞く言葉に首を傾げて聞いている

そんな俺を置き去りにして命は今にも泣きそうな顔をしながら言葉を発した

「嘘だと言つてください!今夜……貴方が犠牲になるなんて!」

(今夜?犠牲?何の話をしてんだ?)

内心で抑えていた嫌な予感が渦巻き出した。『もう思い残すことはありません』…『今

夜』、『犠牲』…

そこまで考えが回り、口を開こうと

ガスツ

すると後頭部に衝撃が走る。意識がなくなりかけける寸前、暗くなる視界の先にはいつぞやのアマゾネス、アイシヤがそこにいた
(ちくしょう……意識……があ……)

『……さ……、ヤ……さ……、ヤ……さん！ヤミさん!!』

意識が戻ってきて耳にキンキンと声が響く。目を開ければ、何故かそこは古い娼館ではなく日差しが刺さない暗い小径であった

ベルに起こされ、ゆっくりと起き上がると後頭部がズキリと痛む

「いつつ……えーと？確か俺は……」

ベル坊、春姫はいねえが……それは後にしておく、命が落ち込んでんのも後に回す。『殺生石の儀式』ってなんだ？」

とりあえずはそれだ。俺だけ置いてかれてどういう訳かもわからずに気絶させられ、ベルに運び込まれたのだからそれくらいは聞いておかないとこの騒動の意味がわからない

ベルは目を赤くしながらもゆっくりと、確かな言葉で一つ一つ教えてくれた

儀式の事、その儀式は狐人……つまり春姫の命を代償にして行われる事、それが今夜である事、ベル達を知る事を全てだ

「なるほど、それで計画を知った俺等を消すために悍婦共が走り回って探していると……」

「……ヤミさん。僕、どうしたらいいかなあ……」

ベルが暗い声で俺に聞く。だが俺はすぐに答えた

「あ？ 知るかんなもん。自分で決めろ」

「……僕は、仲間と春姫さんを天秤にかけた。アイシャさんの言う通り……全てを、投げ出せなかつた……ッ！」

ベルはポタポタと涙を流す

普通に考えみればそれくらい普通だ。 イシュタル、ファミリア 大派閥に標的にされる危険性、それを恐れ

るのは当たり前だ

にもかかわらずベルは泣く

己の情けなさに、不甲斐なさに、格好悪さに。誰よりも優しい少年は心から涙を流す
「はあ……命はどうすんだ？……このまま帰るか？」

「わか……りません……」

溜め息を吐きながら命に聞くと彼女も涙を溜めながら掠れた小さな声で呟くように

言う

『だめだこりや』とまた俺は溜め息をこぼすと言葉を発した

「俺は少なくとも行くぞ」

勘違いすんなよ？これはお礼参りだ。こんな臭え街に閉じ込めた事のな
お前等はホームに帰って今みたいに情けなく泣いてりやいいさ

…その前にお前等一人一人に言っておく事がある」

そう言いつつ立ち上がるとまずは命を見て

「命、春姫ってやつはお前にとってどういう存在だ？」

お前にとってその存在にどうしてやりたいんだ？」

命はそれを聞くと目を見開き固まる

次にベルを見る

「ベル坊、これはじいちゃんから聞いた言葉なんだがな？」

『女一人も救えない男はなんて呼ばれるか、知ってるか？』

そこで俺からは…お前は何になりたい？」

それを聞いたベルも目を見開き固まる

それを伝えた俺はベル達に背を向けて暴れるために突っ走っていった

くまず命く

自分の中で先程言われたヤミ殿の言葉が渦巻く

『お前にとつて春姫はどういう存在なんだ?』

決まっている。友と……知己と呼べる仲だ。だけど自分はその知己に、何も……

『お前にとつてその存在に何をしてやりたいんだ?』

……助けてあげたい。例えばそれが口では望まれていなくとも、顔を見ればそれが嘘である事は普通にわかる

春姫が辛そうにしているのであれば自分は

もう自分の行動は決まった。涙をぬぐい、立ち上がった

く短いけどベルく

ヤミさんに言われた言葉を僕は知っていた。一体いつだったかもわからない記憶。

だが鮮明にそれを思い出していた

『ベルよ……男おのこが女を救えなかった時、ある国ではその者を何というか知つとるか?』

「腰抜け」じゃよ。誰よりも情けなく、英雄とは程遠い存在の事じゃ。じゃからのおベル

……心からその女を救いたい時は、何が何でもそれを貫き通せ』

『腰抜け』、『英雄とは程遠い存在』。その言葉が僕の胸に刺さった気がした
『お前は何になりたい？』

僕の原点を思い出した。そうだ、昔から変わらない。僕は…
「英雄になりたい」

第79話お礼参りするよ～

『て、敵だああああ!!!悪魔が来たぞおおおお!!!』

「ヒヤッハアアア!!!」

俺はベル達と別れた後、宮殿に入ると当然すぐに見つかった。最初はギラギラとしたアマゾネス達が襲いかかってきたが

「今は男も女も関係あるかあ!!!よくも俺等を襲った挙句、あのガマガエルに俺の初めてを喰わそうとしたこの野郎!!!」

適当な理由をつけて怒り心頭状態の俺は近寄ってくるアマゾネス達に対して遠慮なく拳を繰り出す。闇魔法を使ったら死ぬのでそっちは使っていないが

10人ほど倒すと「イシユタル・ファミリア」の者達は自分達の置かれている状況をだんだんと把握してきたのか顔色を変え、本気で襲いかかって来た

「遅いわあ!!!闘技・神……じゃない。【闘技・闇砂嵐】!!!」

手首は回転していないが、闇そのものを回転させ出来た風で吹き飛ばす。【黒縄・大竜巻】とは違いう上ではなく、横に発生させたため後ろに続いていた者達にも逃げる隙すら与えず巻き込んだ

「ヤミさん!!!」

前が風による土煙で覆われている間に不意に後ろから声がかげられた。振り返ってみればベルが飛んで俺の元に着地して来た

「ホームに帰ってろって言ったはずだが？」

「あの人を、春姫さんを……助けるって決めたんだ。それに僕は、『腰抜け』なんかにはなりたくない……ッ！」

ベルの目を見ていればそれは本氣の目だと直感的にわかった。それを知った途端に俺は高らかに笑い出した

「ハッハッハア!!!」

たかだか1人の娼婦のためにこんな地獄に身を投じるかあ!!!「ファミリア」の1人として失格なんじゃねえか!?

……だが、『男』の1人としてなら合格だ。ようこそ、地獄へ」

砂煙の中から「イシユタル・ファミリア」の者達が飛び出した。数は10名、いつもベルであればそれを見た途端にビックリしたり、何かしらの反応を示すのだが

「覚悟を決めた者は強いぞ？」

息するようにベルはそれらを一瞬で気絶させた。多分時間稼ぎでLv1、2くらいの下っ端であったのだろうが10人を全て無力化させたベルは流石と言える

「さて、ベル？まあ大体わかってるつもりだが命はどこに行った？」

ベルの背中を見ながら尋ねるとベルは振り返って作戦の説明のため口を開いた

「命さんは春姫さんを救出しに行った。僕達はその間、最初から狙われていた事を逆手にとって……」

「敵の注意を引きつける……つと。俺はただ単にお礼参りするために来たから、暴れるだけだな」

そう言う「さて」と呟き、宮殿の奥へと足を動かすとベルもそれに続いてついて来た

「行くか」

「うん！」

今この宮殿で最強の兄弟が動き出した

「オラオラアツ!!」「イシユタル・ファミリア」の『戦闘娼婦』^パってのはこの程度かあ!?

現在宮殿30階、途切れる事のない戦闘娼婦達に叫び、暴れ、己を奮い立たせながら宮殿内を走破する

ベルは敵の数に苦戦しながらも俺についてくる。ほぼ意地になって戦い、走り続けて

いるのだろうか、その顔に後悔の色は一つもなかった

「ーどきなあアアッ!!」

宮殿中央、吹き抜け沿いの廊下を駆けていたその時、頭上に影が出来た。見れば高速回転しながら大戦斧が落ちて来ていた

もちろん俺達はそれを簡単に避けたのだが、そのあとに起きた事に驚いた

地面に刺さるかと思った斧は爆音と共にその床を貫いたのだ。そのまま床、壁を破壊し、階下の部屋を4つほど貫通した

「フリユネさん……!」

「久しぶりだな。二度と会いたくなかったぜ」

斧が降って来た上階の位置を見るとそこにはさっきも言ったが二度と会いたくなかった2Mを超す女がいた

その側には黒い長髪の女傑、アイシャがそこに立っていた

「ハツハツハ。月とスツポンが目の前にいるなあ」

「ゲゲゲッ!アタイが月とは【悪魔】も言うねえ

アタイが恋しくて戻って来たのかいッ、感激じゃないかア〜!」

お前じゃねーよ。と気持ち悪く笑うフリユネに突っ込みたかったが、とりあえず今はそれどころじゃないため言わない

「ベル坊、準備はいいか？」

「うん……」

俺達は互いに目を合わせ、互いに頷いた

そしてその足に力を込めて……

「逃げるツツ!!」

『『なァッ?!』』

俺の「ステイタス」は『対人特化型』、『格上殺し』、『多対一特化』などではあるが、最後の多対一が問題なのだ

多対一の『多』とは同レベル又は格下の事、その中に格上のフリユネがいる場合、どうしても戦況は向こうに傾く

だから背中を敵に向けて逃げた

『背中への傷は剣士の恥?』知るか

俺は女に傷つけた。既に男の恥だよ

予想外だったのか後ろの彼女達は悲鳴に似た言葉を発して止まっている。チャンス……

「逃げるなああああ!!」

なんてものは存在しない。後ろに何かが落ちて着地した音がした。フリユネが追い

かけてくる。それでも俺達は足を……

「伏せろお!!!」

「っ!!!」

後ろにヒュンヒュンと空気を切り裂く音がしたためベルと共に伏せた。俺達の頭上を通っていったそれは先程も見た斧

斧はそのまま通路の奥の壁に当たり、その壁に巨大な大穴を開けた

床にへばりつく俺達には戦慄する暇すらなく巨大な影が覆った

「っっ!!」「はっっやあ!!!」

あつという間に近づいたフリユネが残った大戦斧を振り上げ、振り下ろす。それをベルは転がり、俺は腕でジャンプする事で回避した

「ヤミさん!!!」

「わーってるよ【ROOM^ルム】」

ベルが右腕を突き出して俺を呼ぶ。俺はそれに応えるため薄い闇の中に俺、ベル、そしてフリユネを入れた。それを確認するとベルは魔法の引鉄を引いた

「【ファイアボルト】!!」

ベルの咆哮に合わせ炎雷は発射、目の前のフリユネに襲いかかった——だが、フリユネはそれを横に飛び引く事で回避する

「小賢しい魔法」「曲がれ」

フリユネの言葉を遮り放った俺の言葉。【曲がれ】その言葉に反応したのはベルでもフリユネでもなかった

「なあ!？」

ベルの放った魔法、「ファイアボルト」の魔法がそれに応え、まっすぐ突き進んでいたそれはフリユネに向かって曲がり、爆発した

俺の【ROOM】はオベオベの実を食ったあの人のようにはいかないが、この範囲の中は闇であり魔法を引きつける力がある

つまり、この入っている魔法の軌道を範囲攻撃でない限り自由変えられるのだ

「……よくもアタイの美しい顔にいいいい!!!!」

「うおっ!？」

爆炎の中から怒りのフリユネの斧が振り落とされた

それを俺は反射的に刀で受け止めてしまった。するとその落とされた力に俺の両腕両足の筋肉、骨が悲鳴をあげた、床にもヒビが入った

「ゲゲゲッ!流石にやるねえ。Lv3でこのアタイの力を受け止めるなんて……おつと」

「つつ!!」

ベルがナイフ二本を持ってフリユネの背中から攻撃しようとしたが、まるでフリユネはそれがわかっていたかのように振り向き、空いていたもう片方の腕でベルの腕を掴んだ。

「ふんっ!!」

「ぐうっ!!」

そのまま手に持ったベルを俺にぶつけてきた。ぶつかった俺とベルは仲良く転がり、通路の先に繋がる広間まで追いやられた。

転がるのが止まるとまた仲良く急いで立ち上がり、前を見ると視界に入ってきた光景に凍りついた。

「アイシヤさん……!?!」

「こりやあ……また詰みって感じか?」

広間の四方を埋めつくさんばかりの戦闘娼婦が、転がり込んだ俺達を包囲していた。彼女達を誘導したであろう長脚の女傑は、抜き身の大朴刀を担いでこちらを見つめている。

「……よくやったよ、あんた等は」

上階への大階段を背にするアイシヤは淡々と告げた

第80話イシユタル

周りを見れば敵、敵、敵。「領域」を使い調べてみても敵、敵、敵……逃げ場はない。となると、暴れてベルだけでも逃す手もあるかもだが……

「ゲゲゲ……」

遅れてきたフリユネがいるんじやその隙を作ることも難しい。ベルと

戦うのもいいが、やられたら人質にされかねんし……

「下がれ、お前達」

絶望的な状況をどう打破するか考え混んでいると上から声が投じられた

場にいた全ての者が驚きながら振り返ったその先、大階段の奥からゆつくりと、絶世の美貌を誇る褐色の女神が煙管を片手に降りてくる

見る者を惑わせる『美の女神』イシユタルは、紫煙を吐きながら愉快そうに見下ろしてくる

「ど、どういうことだあい、イシユタル様ア!?!いきなりしやしやり出てえ!!」

背後に従者（タンムズだったか？）を連れて現れた主神へ、フリユネが怒声を届かせた

憤怒で顔を真っ赤にするアマゾネスの長を、イシユタルは一瞥する

「聞こえなかったか、フリユネ。下がれと私は言った」

その声音には『逆らうな』という神意が込められていた
フリユネの裂けた口端が引きつる。あのフリユネが、だ

「お前達全員、『殺生石』の儀式へ向かえ。今度こそ必ず成功させろ、失敗は許さん」

歯向かうことの許さない神命に戦闘娼婦達が悪息を呑む。そして場が動き出すのに大して時間はかからなかった

1人、また1人と従順に広間を後にしていく。最後にフリユネが大きな舌打ちを鳴らすのを最後に、完全撤退していくアマゾネス達

「…えーと。イシユタル様？あの状況でこんな事をしてくれたって事は俺達に何か用があるんですよね？」

「…ふん。察しの良い男は嫌いじゃないぞ？」

タンムズに警戒したいのだが、何故か視線はイシユタル様に向けてしまう。これが『美の女神』という神の力なのだろうか

「よく来たな、ヘステイアの眷属よ。囹とは言えたった2人で我らに挑むとは、思った以上に気骨がある」

足を止めたイシユタル様に見つめられると何故か変な気持ちになった。なんかこう

……ふわふわした感じ？そんな感じだ

そんな視線を放つ女神を見て何故あの『欲しい物は力で奪え！』みたいな野生児のアマゾネス達が見逃した理由を大体理解した

普通の男であれば……いや、男女問わずに女神の『美』という物に詰んでしまうのだろうか

「ここに未練を引きずる娼婦おんなでもいたか？」

全てを見透かしているのか、女神はその紫水晶アメジストの瞳を細める。その姿にベルは視線を逸らさず身構え続けているが、『魅了』が聞いているのか顔が赤い

「さて、こうして会うのは二度目になるか。最初に目にした時はあの女神おんなの趣味を疑ったが……なるほど、撤回しよう。いい面構えをしている」

「そりゃ、お褒めに預かり光栄です……つと。イシユタル様の用事を聞く前に一つ。何故、俺達をダンジョンで襲ったのでしょうか？」

気になっていた事をやった派閥の主神に聞くと、あっさりとその神は答えた

「戦争遊戯で名が知れたお前達には、私もそれなりに興味を持っていた。後は……気にくわない女神へのあてつけさ」

……

えーと……

つまり、嫌いな女神に一泡吹かせたいって言うだけ？

そんな風に理解しつつ固まっているとイシユタル様は不敵な笑みを浮かべて言い放った

「喜べ。お前達を『魅了』して、私のモノにしてやる」

イシユタル様が凄むとまだ増す女神の色香。それに狼狽していると隣のベルが口を開いた

「……聞かせて、ください」

「ん？」

「どうして春姫さんを犠牲にするんですか？」

その言葉を聞いた瞬間、目の前の女神は大声で笑いだした

「ははははっ!?!この私を目の前にして他の女の話ができるのか、貴様!」

「こっ、答えてください!?!」

煙管をくわえて笑うイシユタル様に、声を荒げるベル

肩を揺らす女神は益々気に入ったと、機嫌をよくしながら話し始めた

「そうだなあ。まず、春姫は私が買った。汚い男どもの家畜に成り下がるところを救ってやったんだ、むしろこうまで重宝しているのを感じてもらいたい」

たまたま足を運んだ商館にいた、まだ幼い狐人の少女。その美貌と、後はその種族に

一欠片の興味を抱き、愚図る暗然たる面持ちでうつむく彼女を無理矢理買取った

煙管を吸いながら、イシュタル様は春姫との出会いを語る

「私が拾った命だ……親のために子は尽くすものだろうか？」

「そんな……!?!」

「それになあ、ベル・クラネル？ 私は春姫を殺そうなどとは思っていない。あの女神を倒せば、あいつの魂は返してやる」

普通にそう言うイシュタル様に黙って聞いていた俺は呟いた

「……その保証がどこにある？」

知つての通り……多分アンタの敵の「フレイヤ・ファミリア」は最上位の派閥

春姫の妖術とか言われているもんがどんな物なのかは知りはないが、砕けた『殺生石』が戻ってくる可能性は極めて低いだろう？」

イシュタルを睨みながらそう問いただすと聞かれたイシュタル様からは予想外の言葉が出た

「その時はその時だ。仕方あるまい」

「は？」

俺とベルの間抜けな声が重なった。そんな俺達を見てイシュタル様は続けた

「行っておりが……春姫は私が手を下さずとも、他の誰かの手で同じ運命を辿る。あれ

が秘める『力』はそういうものだ」

「……………」

「『恩恵』を与え、あの娘の「ステイタス」を拝んだ時の私の気持ち……わかるか？ 震えたぞ、この『力』をもってすればあの気に食わない女神を引きずり下ろすのも可能だ?!」

春姫の『力』とやらを語ることに熱が入るイシユタル様。その『力』はそれほどまでに協力であり、万人を引きつけてしまう代物だとその熱意の入り方が物語る

あの狐人は神の予想を裏切る『可能性』を持っていたと、目の前の女神はとうとうと語った

「春姫は私の切り札だ！ フレイヤを奈落の底に突き落としてやる!!」

叫ぶイシユタル様にベルが動揺しながらも声を飛ばす

「どうしてそこまで『フレイヤ・ファミリア』を……………?!」

「どうして、だと？ 全てだ、全てが気に食わんからだ?!」

初めてイシユタル様が眈を裂き、怒りの形相を作り上げた

「私を差し置いて男どもはあの女を最も美しいと称えやがる、ふざけるな?! あのメス豚のどろろが私の美貌を上回る?! 男どもの目は節穴か!!」

床に吠えるように、女神は嫉妬を爆発させた

『下界の人間』では到底及ばない激情の発露に、俺は一つこう思った
(本気で怒ると口が悪いとか、そういうところじゃねーの?)

口に出さないそんな事が目の前に届くわけない。ていうか言ったらまたヒステリックに叫ぶと思っただからだ

「……で、でもっ!?それに春姫さんを利用していいわけが……!」

女神の激情を前に思わず屈しそうになる膝をなんとかとどめながら、ベルは訴えた
それはあまりにも酷薄だと言うベルに、イシュタル様は落ち着いたのか薄い笑みを浮かべた

「失敬な。私が血も涙もない神だったら、春姫を『魅了』しつくしてとうに人形にしていくさ。私の命令だけを聞く、忠実な女狐にね」

「それは……」

「私は私なりの慈悲で、あの哀れな娘を可愛がってやってきたぞ?」

くるくると、イシュタル様は手の上で煙管を回す

「窮屈な思いをさせてきたのは仕方がない。だがアレには綺麗な服も、贅をつくした飯も与えてきた。……女の悦びを知る機会も、何度も恵んでやった」

「……ッ!!」

鳥籠に閉じ込めて娼婦を強制してきたことを知るベルがイシュタルに叫んだ。相手

が神出ることとも忘れて、感情を爆発させる

「何でっ、あの人に娼婦をやらせるんですか!？」

「ここは私の『ファミリア』だ。私が是とする行為が派閥の方針となり、掟となる。常識だ」

ベルの癩癩に等しい非難やわ、何を今更、とイシユタルはせせら笑った

第81話

「さて、話し合いはこれくらいにして…始めるとしようか」

そう言つてイシユタルが指をパチンと鳴らす。その瞬間、部屋の背後に回つたタンムズがベルを取り押さえる

女神と話していた事ですつかり気を取られていたベルは何の抵抗もなく捕らえられてしまった

「ふふふつ……」

「つ?! ヤミさん逃げて!!」

イシユタルがヤミの頬に触れる。ベルは逃げるように叫ぶがヤミは一切動かない

それでもなお、もがき叫ぶベルにイシユタルが言った

「無駄だ。この男は私に夢中、お前みたいなやつ言葉なんて入つてこないさ。なあに、すぐにお前もこうなる」

「そんな……つて!?!」

ベルが絶望の眼差しになる寸前、目の前で起きた事に目を見開き速攻で閉じた。イシユタルが服を脱ぎ始めたのだ

「えっ、えっ、ええええっ!」

「うぶなやつめ。ヘスティアは何も教えていないのか……つて、ああ、あいつは処女神だったか」

「なななななっ、何で服をつ!」

ベルは見ていないが僅かにあつた衣料を脱ぎ捨てて全裸になった女神が言った

「言つただらう、私のモノにしてやると……骨の髄が溶けるまで『魅了』してやる」

ああ、頭がふわふわする。これが『魅了』というやつなのか。いつまでもこの感覚を味わっていたい。目の前の全裸の女神を見ながらそんな事を考えていた

女神の手が下半身に伸びる寸前、俺は自分の主神ヘスティア様との約束を思い出した

『俺とベルはヘスティア様が勧誘してくれたからこうやつて冒険者になつて、あいつ等に会う事ができた。今更その恩を仇で返す事なんて出来ねえよ』

『ほ、本当かい?』

『本当だ女神の「魅了」だろうが何だろうが、曲げるつもりはないぞ。安心してろ、ヘスティア様』

これは嘘ではない。嘘にしたくはない

ならばここで俺はどうすれば良いか、簡単だ

「はあっ!!」

「なっ!!?」

体から闇を噴き出させ、気迫で『魅了』を跳ね除けた

「さつきから聞いてりやあ……イシユタル様よお」

「な、なぜ『魅了』が聞いていない!?!」

俺の言葉も聞かずにイシユタルは自分の『魅了』が聞いていない事に慌てふためく

「子が親に尽くすのは当たり前? そりゃあ否定しねえよ

だがな? 親の我儘の為に子が尽くすのは俺は納得いかねえ

……わかってるよ。これは俺とアンタの考えの食い違いだつてな

だから言つてやるよ。お前がさつき使った言葉をな」

ベルを抑えていたタンムズが俺に武器を持つて飛びかかる

俺はすぐに反応し、闇を纏った拳で死なない程度の全力でぶん殴った

そして改めてイシユタルに目を向けると息を吸つて言い放った

「俺は、お前が気に食わない」

だから、俺達は春姫を連れて行く。「フレイヤ・ファミリア」が気に食わないから春姫を利用してしようとしているように、俺はお前が気に食わないからお前という檻から春姫を

連れて行こう」

神に対して『お前』という言葉で、理不尽極まりない理由で喧嘩を売った

「行くぞベル坊」

「へ？あ、うん!!」

拘束が解かれたベルに声を掛け、窓を突き破り外へ逃げ出した

くイシユタルく（書けるかどうかはわからない）

自分の『魅了』が聞かない。そんな者が2人もいた

1人は自分の姿を見たはずなのにいつまでたつてもウブな子供のように喚く白髪の少年

もう1人はもう少しで『魅了』が完了した。するはずだった

にもかかわらずいきなり意識を取り戻し、挙げ句の果てには『魅了』という神の力をも吹き飛ばした黒髪の青年

『俺はお前が気に食わない』

青年の言葉が脳裏をよぎる

「ふ、ふ、ふ、ふ……」

神である自分に対して唾を吐いた男にイシユタルは笑った

「イシユタル様ツ！先程の音は……」

急いで入ってきた従者の言葉はそこで止まる。女神の劍幕に押されたのだ。イシユタルはすぐにその従者を睨み付けると叫んだ

「あの兎と悪魔は逃がすな!?!私の前に引きずり出せ!!」

「は、はいい!?!」

美の女神として己の『美』が通用しない存在が許せない

2人の抹殺も視野に入れるイシユタルの手の中で、煙管が音を立てて真つ二つに折れた

くヤミさんく

いやあ、間抜けな話。完全に忘れてたよ

ここが地上から30階の高さだって……

「ベル坊！手をつかめ!!」

「わかった!!」

ベルに手を差し出すとすぐにその手を掴んできた。しつかり掴んでいるのを手から感じると鞘に収めた状態の刀を壁に突き刺した

ガガガガガツと鞘は壁に数Mの一直線の傷をつけると停止した
「投げるぞベル坊!! しっかり着地しろよ!!」

そう言つて振り子運動を始め、近くにあつた窓にベルを投げ込んだ。投げた瞬間にベルは丸くなり、衝撃に備えるとすぐに窓を割つて中に入り込んだ

『うつ、うわあああああああああああああああ!!』

『す、すいません!?!』

中から逃げ惑う人の声が聞こえる。多分戦力にならない従者達だろう
俺も窓に飛び込み、闇の腕を作り出し中から壁に刺さつた刀を抜く

「ベル坊、体力回復用のポーションをくれ」

「わかつてる……!」

進みながらベルからポーションを渡させるとそれを一気に飲み干す

あちらこちらから悲鳴や叫び声が聞こえる中、駆け抜けているとドンツ!!と爆発音が館に鳴り響いた

「赤色……!!」

「失敗か」

廊下の窓から外を見ると上空に赤い華が咲いていた。赤はベルに聞いていたが、春姫の救出失敗のサイン

「ま、こんな事で諦めはしないんだろ？ベル坊!!」

「当然!!」

『まだ終わっていない』と全力で走り出す。目指す場所は儀式が執り行われる空中庭園。春姫を助けると決めたベルの執念の炎は消えない

「このままじゃ間に合わない。どうすれば……」

窓から月を見ればもう満月が真上近くに来ていた。その事に焦るベルはがむしやりに走る

「……ベル坊、俺を使え」

俺はそういうと窓に鞘を突き出し構える。それを見たベルは少し困惑したがすぐに察知、鞘の出来るだけ橋に乗る

「ぶっ飛べオラアアアア!!」

ベルを乗せた瞬間、バットとボールのように俺はベルを全力の力で上に向かって吹っ飛ばした

「……あとはベル坊がなんとかする」

それを信じて俺は先にベル達が行った空中庭園へ向かった

「あと少し……」

全力で駆け上がり、40階くらいの高さをやっと登りきる直前まで来ていた最後のの上に続く階段には見張りはおらず、上にいるのだとわかる

ガラ空きになった階段を上り、屋上……もとい空中庭園に来た

ドンッ

「うおっ!？」

その瞬間に爆発が起きた。何が起きているのか分からず一瞬だけたじろぐが、その爆発には魔力が流れていた

敵の中にいる誰かの魔法かと思ったがアマゾネスが巻き込まれているあたり違う

「ベル殿おおおおおおお!!！」

「命!!」

爆炎の中から何かが飛んだかと思えばそれは命だった。急いで落ちてくる命を――キヤツチする事はせずに、爆炎の中の隙について走るベルの援護に向かった

くベルく

走った。その命が燃え盛った瞬間、誰よりも早く走った

爆炎の中の命の叫びが届き、誰よりも速く走った

『……ツツツ!?!』

純白の弾丸となったベルにアマゾネス達の反応が振り切れる

追隨を許さない超速の疾走。祭壇に向かって一直線に驀進する白兔に、間を抜かれる戦闘娼婦は目で追うこともできず、アイシヤでさえ振り返ることしかできなかった

「ーゲゲゲゲゲゲゲゲッ!!」

1人を除いて

「やらせないよ「オラア!!」ゲフツ!?!」

神速と共にベルの前に現れた蛙の女王は、【悪魔】の手によっていともたやすくベルの前から姿を消した

それを合図にするようにベルはさらに加速する

「あああああああああああああアツツ!?!」

ベルの目の前にあるのは跪きこちらを見つめる少女、儀式剣を持ったアマゾネス、鮮血の光を放つ石

最後の紅石のみを見据え、ベルは《ヘステイア・ナイフ》を引き抜き、その石に渾身の斬撃を放った

第82話

「よくやったベル坊。無事か？」

「う、ぐ……ヤミ……さん」

擦り傷だらけの体で横たわるベルに声をかけるとベルは手をついて体を起こした

そうしている間にも、何十もの足音が近づいてくる。そこには五十以上の悍婦達が怒気を孕ませながら俺達2人を取り囲んでいた

「やってくれたねえ……!?!」

地響きを鳴らし蹴り飛ばした巨女のアマゾネス、フリユネが起き上がり、歩み出てくる

その腕には、鎖を無理矢理引きちぎられた春姫が捕まっていた

髪を鷲掴みにされている狐人の少女にベルは瞠目して身を乗り出そうとするが、フリユネを筆頭にした戦闘娼婦達の怒りの視線に動きを制される

「よくもお……!?! どう落とし前つけてくれるんだッ、『殺生石』も何もかも壊しやがってえ!?!」

アイシヤが周りとは比べ物にならないほどの怒気が俺達を包む

「また振り出しに戻っちまったじゃないかア……!?」

フリユネから剣呑な眼差しを浴びながらその言葉を聞く

「春姫さんを解放してください」

「…だ、そうだ。お前等の事情なんか知ったこつちやない。用があるのはその汚い手に持った春姫なんだわ。さっさと話してくれねえか?」

そんなフリユネ達の怒気を浴びながらベルは怯えながら、俺は余裕がある笑顔で淡々と語り、要求した。戦闘娼婦から一層の怒気が上がる

そしてフリユネはただ一人、笑い声を上げた

「ゲゲゲゲゲゲゲゲッ!?面白い事を言うじゃないかあ、【リトル・ルーキー】、【悪魔】^{デーモン}!

一泊後、巨大な目玉で射殺すように睨みつけた

「調子に乗るんじゃないよツ、糞ガキがア!?お前は何様のつもりだアア!」

「あうっ……!?!」

掴んでいる春姫を立ち上がらせ、自分の巨顔に引き寄せる

「これはアタイ達の道具だ!?フレイヤの連中を潰すためのねえ!他所の派閥のもんが口を挟むんじゃないツ!!」

鬭争に飢え、迷宮都市の玉座を手に入れんとするアマゾネス達は春姫の『力』を離さない

苦痛に顔を歪める春姫を見てベルが制止するも巨女は聞かなかつた

「…………さて、話は終わりか？ んじゃまあとりあえず…………【強奪】」

『?!?!』

関係ないとばかりに魔法を使い、身体能力を奪った俺にフリユネを含めたアマゾネス達は驚きの表情に変わる

そして次の瞬間にはフリユネの手の中にいた春姫は…………

「よし。ベル坊、こいつ頼んだ」

「へ？ は、春姫さん!？」

俺の腕に抱えられており、ベルに向かって春姫を渡していた

ここにいるアマゾネス達は全員がLv3を超える。そんな怪物達が倒れている者を含めて100人近く俺の前にいる

そんな人数全てから身体能力を奪えばその身体能力は…………

「どうした。そんな不思議そうな顔して？ 欲しいもんは力で無理矢理奪う。それが【悪

魔】だぜ？」

フリユネ
Lv5の力すらも凌駕する

ベルは春姫を抱えてそこから逃げ出した。アマゾネス達が慌ててそれを追おうとするが、ザンツ。と空中庭園の床が切れた事でその足を止める

を防ぎ、踏みとどまった

「さつきまでのアンタとは桁違いに強くなってる。春姫の魔法が発動したのかと思ったが、息の上がり方からして長くは持たないんじゃないかい？」

目の前の巨女は思いの外鋭かった。そしてフリユネの予想通り俺の体力からして動ける時間は1分程度。こんな女敵に構っている暇などない

そんなことを考えているとフリユネがある事に気付いた

「ああ？なんだいこの黒いの？」

刀から斧へ、黒い何かが侵食を始めていた。やがてその黒はフリユネの腕に絡みつく。最初は警戒していたフリユネだが、黒に絡みつかれても何もなかったことに違和感を感じる

「これがなn」

フリユネの言葉は続かない。何故か、気づけば男の膝蹴りが顔にめり込んでいたからだ。それだけならいい。Lv5のフリユネならば何とか耐えられるだろうと思っただが

だが現実はどうだ。軽くフリユネの体は浮き上がり、空中庭園の外へと吹き飛んだではないか

「さよならだ」

最後の男の声を聞きながらフリユネは塔から落下していった

フリユネがない今、ヤミに反応するものはいなくなった。残りが少ないため、辻斬りを続行した

そして最後の1人を残した状態で止まった

「……何で私だけやらないんだい？」

「いやあお前、悪いやつかと思つたが本当はいいやつだからなあ……」

「何でそうなる？」

「お前は一度俺を気絶させた。普通ならこんな儀式の秘密を知ってるやつは殺すもんだが、それをしなかった

それにベル坊も命もあの場にいたのに逃げられたのはお前がなんかしたからだと思つた。違う？」

淡々と語る俺にアイシヤは黙る。そして俺は大の字でその場で倒れた

「お前は待つてんだろ？アイツを。俺は疲れたから寝るぞ。おやすみ」

そういつて瞳を閉じる

〔強奪〕の反動が来たな。あ、やべっ予想以上にこれは死ぬ……

「私、サンジヨウノ・春姫と申します。こつ、この度はヘスティア様の〔ファミリア〕に入団させていただいてっ…」

「ああ、はいどうも。ベッドの上で失礼するがヤミ・カズヒラだ。周りから『ヤミさん』とかで呼ばれてる」

現在俺はベッドの上で横になっている。別に怪我は殆ど無いが、筋肉痛がやばい。指一本動かしただけで激痛が走る

そんな中で春姫と挨拶しているわけだが、絵面が情けなさすぎる。泣きたくなつてきた

「よーしヤミ君！今日は春姫君の歓迎パーティーだ！腕をふるつてくれよ!!」

「や・め・て・く・く・だ・さ・い!?!これ以上散財癖がついたらファミリアは…:…!」

2人の幼女がひよこつと現れ言い争う

「固いこと言うなつて！ベルもパーティーを開くべきだと思っただろ!?!」

「そう、ですね。春姫さんのために…:…やっぱり」

「ベル様あー!?!」

後から続いた2人の男がヘステイア様の言葉に頷いた
そして狐人とその友達は

「よ、よろしいのでしょうか？それにヤミ様は……」

「いいのです、春姫殿！こうなったらタケミカツチ様達もお呼びしましょう！」

最後に俺が口を開いた

「あのーお前等？忘れてるっぽいから言うが、俺は体が……」

…わかったよ！やればいいんだろ!?!わかったからそんな目で見つめんな!!痛え!!!」

館全体に響くように笑い声が響き渡った